

五島神楽

調査報告書

平成三十二年度 文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

五島神楽調査報告書

平成二十二年度文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

玉之浦神楽〔白鳥神社〕 長崎県五島市玉之浦町



入鹿高松



御潮舞の「合立」役（中央）



山狂言



船渡御

岐宿神楽〔巖立神社〕 長崎県五島市岐宿町



二剣舞



伊智舞（右 神子、左 神主）



神図舞

富江神楽〔富江神社〕 長崎県五島市富江町



神通



荒神まつり



神女舞

福江五島神楽〔樫ノ浦 天満神社〕 長崎県五島市平蔵町



座被



島求



剣舞（二剣）



篠曳・獅子舞

有川神楽〔志自岐羽黒神社〕 長崎県南松浦郡新上五島町太田郷



四天王



山之真



五方の舞

上五島神楽〔政彦神社〕 長崎県南松浦郡新上五島町奈摩郷



将軍舞



五方



山賀

上五島神楽〔客人神社〕 長崎県南松浦郡新上五島町網上郷



平舞



獅子舞



神通

上五島神楽〔青方神社〕 長崎県南松浦郡新上五島町青方郷

※口絵写真…平成二十二年度に実施された現地調査において撮影したものである。



四剣



神幸



御膳部祭

序

このところ、地域住民の高齢化や少子化にともなう村社会の伝統芸能・民俗芸能の衰退や変容状況に関する報告が各地から耳に入る。長崎県の五島列島一円に伝承されてきた「五島神楽」もその例外ではない。平成十三年度にこれが文化庁より記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財に選択され、その直後に文化庁からの助成金を得て、消滅した演目の復活などの地元関係者による再興事業が行われた。しかしこれが一定の成果を挙げたものの、現地の人口過疎化の波には歯止めがかららず、神楽の今後が心配である。

このような状況下において、当該「五島神楽」の記録作成・調査報告書作成のねらいを次の二点に絞った。ひとつには、ともかくこれに変容しない以前に現状の姿を出来るだけ詳細に記録資料化して後世にそなえること。ふたつには、「五島神楽」の意義がこれまで全国的な視点から十分に語られてこなかったもので、それを少しでも明らかにするためのデータ収集と整理を行って関係方面に情報発信することである。この観点から、五島列島内の関係神社の宮司や社人、神楽保存会など関係各位のご協力を得て当事業を実施した。

ここに、上記のねらいにもとづいた調査結果を次のようなかたちでとりまとめた。ひとつ目に対応するものとして、八ヶ所の神楽の祭礼時における現地調査をもとにそれぞれの次第内容の全体を克明に記述した（第二章）。また今日宇久島における当神楽が中断・廃絶状況にあるので、その聞き取り調査の報告を含めて五島神楽全般の伝承状況を整理して報告した（第三章）。さらに五島列島全二十二神社宮司への文書形式による調査のそれぞれの回答書を、一覧表に整理し悉皆調査目録として掲載した（第四章）。ふたつ目のねらいの全国的視点からの「五島神楽」の位置付けへの言及は総説（第一章）で行い、さらに第二章の個別伝承の記述のなかでも一部触れた。なお当報告書は動態伝承である神楽のものなので、代表的な伝承の芸態に関するDVDを添付した。

五島神楽調査報告書作成委員会 委員長 星野 紘

例言

□ 本書は、平成二十二年度文化庁事業「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」によって実施した、平成十三年度の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「五島神楽」の調査報告書である。

□ 長崎県五島列島各地で伝承されている「五島神楽」のうち、特色ある伝承地を選び、現地調査を実施して現状等を記録した。また、悉皆的な目録を作成し調査報告書としてまとめたものである。

□ 本書は口絵、第一章「五島神楽」総説、第二章「五島神楽」現地調査報告、第三章「五島神楽」の伝承状況（五島神楽）の現状、中断、廃絶している「五島神楽」調査報告、第四章「五島神楽」悉皆調査目録、第五章「五島神楽」関係資料（関係資料、調査報告書作成委員会、執筆者、現地調査日・調査員、協力者・協力機関等一覧）により構成される。

□ 口絵 本調査で現地調査をした神楽の特色的なものを、カラー写真で紹介した。

□ 第一章「五島神楽」総説

□ 第二章「五島神楽」現地調査報告

□ 現地調査班（調査員一名、記録員一名、計二名）を編成して神楽公開日（例大祭等）に、五島市、新上五島町の八神社の六神楽（福江五島神楽、岐宿神楽、玉之浦神楽、富江神楽、有川神楽、上五島神楽）の現地調査を実施した。

□ 現地調査地図 五島列島全図を示し、地図上に現地調査実施地（神社所在地）を記した。

□ 現地調査日程表 今回実施した現地調査日程を一覧にした。

□ 現地調査報告 掲載内容は次の八項目とし、さらに芸能写真、関連資料等を紹介した。但し一部の項目を統合したり、項目名を変えたものもある。

①項目の内容

見出しには現地調査を実施した神楽の名称と、「」内に調査神社を記した。

一、名称 土地の一般的な通称（日常的に用いられている呼称）と研究者等の呼称が異なる場合は調査報告書作成委員会が定めた名称を用いた。また特記すべき別称がある場合は（ ）内に記した。

二、伝承地 現地調査を実施した神楽が伝承されている地域を記した。なお、市町村名は合併等に伴う変更を取り入れた、平成二十三年一月三十一日時点のものである。

三、期日・場所 平成二十二年度調査が実施された期日と場所及び地図を示した。複数の開催期日、場所がある場合はそのまま示した。なお、開催期日・場所は主催者の事情により変更される場合がある。

四、伝承組織 神楽の実演組織並びに神楽伝承を支える組織や経済を記した。

五、行事（芸能）内容 平成二十二年度調査時の日程次第、上演演目名、芸態、上演された演目の詞章を列記した。

六、由来・信仰 言い伝えや文獻、特殊用語とその解説を記した。

七、変遷 平成十三年記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択され、また『五島神楽の研究』（吉村政徳著）が発行された平成十四年を基点にして、それ以前の様子と以後の変遷等について記した。

八、所見

写真・図表は、執筆者から提供されたもの及び調査報告書作成委員会で挿入したものである。

②表記の統一

・本文中の難読語には適宜ルビを付した。

・主として民俗学の用語等で、項目によって漢字書き、ひらがな書き、カタカナ書き等の相違がある場合があるが、原則として執筆者や地域の慣用などの表記に従った。

・楽器や装束等は基本的に一般用語に従うが、執筆者の意向に沿った。但し、五島神楽で使用する太鼓は「鉦打ち太鼓」が主であるが、土地の一般的な通称として「胴長太鼓」と呼んでいることを特記しておく。

・神楽の演目や役名等はその地の神楽本等に従った。（例）みこまい・神子舞・巫女舞、さおまい・左男舞・佐男舞 等

□ 第三章「五島神楽」の伝承状況

□ 「五島神楽」の現状 本調査で明らかになった五島神楽の現状を報告した。

□ 中断、廃絶している「五島神楽」調査報告 中断・廃絶の危機にある宇久島の神楽について、調査員が現地に赴いて聞き取り調査を実施し、内容を報告した。

□ 第四章「五島神楽」悉皆調査目録

□ 「五島神楽」悉皆調査目録 五島列島において五島神楽を伝承する地域の神社への悉皆調査票の回答を基に、調査報告書作成委員会がまとめ、目録を作成した。

□ 「五島神楽」演目一覧表 平成十四年発行『五島神楽の研究』（吉村政徳著）による神楽演目と、平成二十二年度悉皆調査による神楽演目を一覧表で示した。

□ 「五島神楽」分布図 悉皆調査の回答があった神社を、福江島（五島市）、中通島（新上五島町）、宇久島（佐世保市宇久町）の地図上に示した。

□ 記録・文獻（本文中で使用した資料等）は、第五章にまとめた。

□ 平成二十二年度現地調査を実施した神楽の芸態に関する映像記録（DVD）を添付した。

□ 本報告書作成業務は、文化庁文化財部伝統文化課の指導のもとに、社団法人全日本郷土芸能協会が行った。

目次

口絵写真	1	
序	5	星野 紘
例言	6	
第一章 「五島神楽」総説	9	渡辺 伸夫
第二章 「五島神楽」現地調査報告	19	
現地調査地図	20	
現地調査日程表	21	
現地調査報告		
玉之浦神楽〔白鳥神社〕〈五島市玉之浦町〉	22	星野 紘
岐宿神楽〔巖立神社〕〈五島市岐宿町〉	38	星野 紘
富江神楽〔富江神社〕〈五島市富江町〉	52	久保田裕道
福江五島神楽〔檜ノ浦 天満神社〕〈五島市平蔵町〉	69	吉村 政徳
有川神楽〔志自岐羽黒神社〕〈南松浦郡新上五島町太田郷〉	80	久保田裕道
上五島神楽〔政彦神社〕〈南松浦郡新上五島町奈摩郷〉	94	久保田裕道
上五島神楽〔客人神社〕〈南松浦郡新上五島町網上郷〉	108	久保田裕道
上五島神楽〔青方神社〕〈南松浦郡新上五島町青方郷〉	114	久保田裕道
第三章 「五島神楽」の伝承状況	127	
「五島神楽」の現状	128	吉村 政徳
中断、廃絶している「五島神楽」調査報告		
宇久の神楽〔神島神社・宇久島神社〕〈佐世保市宇久町〉	134	吉村 政徳
第四章 「五島神楽」悉皆調査目録	137	
「五島神楽」悉皆調査目録	142	
「五島神楽」演目一覧表	147	
「五島神楽」分布図	148	
第五章 「五島神楽」関係資料	149	
文献資料	152	
調査報告書作成委員会、執筆者	153	
現地調査実施日・調査班	153	
協力者・協力機関等	154	
五島神楽調査報告書 芸態記録DVD目録	155	

第一章 「五島神楽」 総説

「五島神楽」総説

渡辺 伸夫

一 はじめに

長崎県の神楽は、西海に浮ぶ島々を中心に行われている。対馬の命婦神楽、壱岐島の壱岐神楽、平戸島の平戸神楽、そして五島列島の五島神楽である。まず、対馬・壱岐・平戸の神楽について概観する。

対馬にはミコ（御子・巫女・神子）とミヨウブ又はミヨウム（命婦・妙舞・明舞・宮舞・宮部）とよばれる巫女の神楽があった。命婦家であった島居家文書に、南北朝時代の文中四年（一三七五）の宗澄茂書状があり、「上津八まんの御かくらまい月十五日ことにけたいなく申さるへし」とあるのが初見史料である。藩政時代には神子職と命婦職との区別があった。両部習合神道の法者又は験者（祈祷師・神楽師）を統括していたのは法者頭蔵瀬氏で、府内と田舎の法者と神子を束ねていた。神職や命婦の中には両部兼帯として蔵瀬家の差配を受けるものがいた。神職を差配するのは総宮司職の藤氏で、命婦も神楽師として藤氏の統括下であり、法者も神楽師として藤氏の差配を受けた。このように神子・命婦・法者・神職は錯綜する関係にあったが、両部兼帯という実態を理解しておかなければならない。

対馬の法者神楽については、ほとんど解明されていないのが現状である。万治三年（一六六〇）六月十五日に下津八幡宮（厳原八幡宮）祇園会神事にほっしゃ（法者）共平舞台にて神楽舞を仕り、その前に湯立を仕った（宗家文書、国元表書札『毎日記』）とあり、法者が湯立と神楽舞を掌ったことがわかる。同八幡宮の八月十四日御祭礼は八幡放生会の宵宮で、『対州神社誌』によると、この十四日晚に御神楽と法者舞があった。平山東山の『八幡宮祭会記』によると、法者舞は、まず八幡宮の神楽師棟梁惣太夫である八島氏と上津八幡宮（木坂八幡＝現・海神社）の神楽師棟梁一太夫である井田氏が、順々に進み出て、鈴の本地や鎧の祝言、幣の本地、剣の本地などと呼ばれる誦経を唱え、注連の

舞などを舞った。こうした諸社の祭のほかに、先祖祭として年回忌に行われる霊祭神楽もあり、法者と神子がこれに携わった。新神供養・閑渡し・山入祈禱などと称したが、新神供養の次第書によると、国の祈・迎六道・野返し・送六道など各種の祭文が誦まれた。目連尊者の母淨台女御を主題とする「願物」や、役の行者が鬼界が島にたどり着き、人間に障碍をなす鬼たちをミサキ送りする「役の行者説経」、坂上田村麻呂が鈴鹿の鬼を退治する「田村」など説経風祭文が誦まれたのも、こうした霊祭神楽であった。対馬藩は島民の分限を越えた先祖祭をたびたび禁止したが、明治維新の時に法者が廃止され、法者の舞や霊祭神楽が廃絶し、以後命婦神楽のみが命脈を保ち、今日に至っている。

壱岐神楽は、すでに中世に行われていたが、寛文元年（一六六一）に神仏混淆の神楽を改め、唯一神道（吉田神道）化した。これは壱岐の神職たちが唯一神道の影響を受けて、仏教的要素を排除して、卑俗的な神楽から高尚的な神楽へと改革していったものであった。神楽歌や問答などの詞章や舞の手振りなどが改訂の対象となった。その大きな特色は神楽歌に古歌の引用が著しいことである。『万葉集』『古今和歌集』『宮中神楽歌』『拾遺和歌集』『兼邦百首歌抄』などから神楽歌が採用された。

演じる曲目の多寡により、幣神楽・小神楽・大神楽・大神楽の四種類があるのも壱岐神楽の特色の一つである。そのうち最も普通に演じられるのが大神楽で、二十一番からなり、約五、六時間を要する。

延享元年（一七四四）の『壹岐国統風土記』に、八乙女神楽があったことが散見するが、その記事は「八乙女神楽舞如常」とか「八乙女神楽舞あり」とあるだけで、詳細を知ることにはできない。その中で卷之二十、壹岐郡箱崎邑の貴布禰大明神（在瀬戸浦）の項に

十一月初午日神衣祭あり。大宮司御衣を献し奉るの後、（中略）八乙女神楽男拜殿に祇承して、太鼓をうち、笛をふき、調拍子を合せ、神楽をそうし奉る。又同月五日殿舎及鳥居に忌竹を立て、注連を曳、賢木を十二方に立て、木綿四手をつけ、大野辺を飾り、雲盤を覆ひ、大宮司ハ神前に進み、祝詞をのへ、幣帛を上り、八乙女神楽男ハ神をかさし、幣帛をささけ、末

広をひらき、鈴をふり、夜もすから歌舞、其絲竹の音、鏗鏘にして、六合に満り。

とあり、続いて神楽の曲目が挙げてある（原割注）。

其四本幣、二本幣・注連幣・懸幣・山口礼志、四弓三弓。五方開・神代開・神相撲・八散米などいふ名目あり。

とあるのが、注目されるが、これらは男性の神職舞であり、八乙女の舞ではない。しかし、江戸時代中期に八乙女神楽が行われていたことは明らかであろう。牧山数馬氏の『壹州神楽考』によると、「神遊び」（神楽次第の「太鼓始」「荒塩」の次に行われる曲）について、この神楽は「八乙女舞」ともいい、鈴、扇を採って二人で舞う。本扇の手、末はいわゆる八乙女舞独特の舞であるという。男性の神職によって舞われる「八乙女舞」と八乙女神楽とはどのような関係があるのだろうか。八乙女神楽が「八乙女舞」に変化したのだろうか。壱岐神楽の唯一神道による神楽改革の過程で、本来の八乙女神楽が姿を消し、神職の「八乙女舞」となり、曲目名も「神遊び」と変化した可能性もある。まだ推測の域を出ないが、さらに研究を深めてゆきたい。

平戸島でも古く八少女神楽が存在していたことが、文献上確認することができる。伊藤常足著『太宰管内志』の肥前之六（松浦郡下）志志伎神社（平戸市野古に鎮座）の項に「志々伎神社旧記」が引用され年中行事十三ヶ度之事として次のようにある。

- 一 正月朔日朝拜中宮下宮二所在^レ之、
- 一 御供上件社前備^レ之職掌人列坐酒肴盛^レ之、
- 一 同月中大般若經転読、仁王經転読、
- 一 同月十五日御神楽初^并鼓口開、
- 一 二月初申酉日御祭^并十五番相撲会及八少女神楽又他所ノ巫女^モ参^ヤ勤^ヲ之^ニ御供同前御厨屋願所為祭使参宮、
- 一 二季ノ彼岸御神楽、
- 一 三月三日御節供御供同前、
- 一 五月五日御節供御供同前、

一 六月十五日御節供御供同前、

一 一夏九旬供花念誦、

一 九月九日御節供御供同前祭使同前及八少女ノ神楽又他所ノ巫女等参^ニ勤^ヲ之^ニ

一 十一月四ヶ度ノ御祭相撲御供同前、祭使同前、八少女巫女同前、

此外為^ニ異国降伏^一大般若転読、仁王經講読、一千卷觀音經読誦^ニ之^ニ臨時御神楽百番、笠懸長日八曼陀羅、右云弘長四年二月十日当国庁宣併志
自支見在無^レ実可^レ令^ニ注^一連之^ニ由被^レ下^ニ院宣^一畢可^レ令^ニ注進申^一云

この旧記は蒙古襲来の鎌倉時代中期のものと認められる。当時、正月十五日に御神楽初と鼓の口開けが行われたこと、二月初の申酉日の御祭には八女神楽の外に他所の巫女も参動したこと、二季の彼岸御神楽があったこと、九月九日御節供には八女神楽と他所の巫女が参動したこと、十一月の御祭にも八少女と他所の巫女が参動したことなどが明記されている。いわゆる平戸神楽が成立する以前の中世には八女神楽と巫女舞が行われていたのである。これらの神楽がいつ頃まで伝えられたかは不明であるが、中世において八女神楽が重要な祭祀芸能であったことは間違いないところであろう。

平戸の八女神楽について、もう一つ考えてみたいのは志々伎神社宮司大鳥居家所蔵の『志自岐七社御祭礼帳』に見える「やをとめ」のことである。本史料は表紙に「寛文二甲辰天 六月神吉日」とあるが、年号と干支が一致しない。甲辰が正しいとすれば、寛文四年（一六六四）となる。卷末に嘉永三年（一八五〇）の年号があり、写しであることがわかる。九月沖宮祭の記事に、

同夕地ノ宮より沖ノ宮^江神楽あらしを所堅二本幣やをとめ幣納相勤候事

とある。右の「やをとめ」は八女神楽をさしているのか、それとも男性神職の「八少女」なのか。いづれにしても平戸神楽の「やをとめ」に関しては、これまでほとんど注目されなかったものである。壱岐の八乙女神楽とともに今後の課題にしたい。

平戸神楽は壱岐神楽と同様に神職神楽であり、壱岐の社家が平戸松浦氏の居城の御竈祭^{おかちまつり}に奉仕し、平戸の社家もその祭りに加わるなど両者の関係は深かつ

た。両神楽は相互に交流し影響しあったとみられ、唯一神道化された神楽として、彦岐神楽と平戸神楽はともにその代表的な存在となっている。彦岐神楽が曲目数によって四種類に分けられたように平戸神楽もやはり四種類で、小神楽・中神楽・大神楽・大神楽である。諸社の例大祭で最も多く演じられるのは大神楽で、亀岡神社の例大祭にのみ大神楽が奉納される。

二 五島神楽の市舞（市神楽）

彦岐と平戸がすでに巫女神楽を失ってしまったのに対して、五島では市舞（市神楽）の名で伝えてきた。下五島の福江島の福江・岐宿・玉之浦・富江の四神楽に伝わり、上五島にはない。古文書などでは市神楽の名称が一般的で、歴代の五島藩主が市神楽を奉奏して祈願を行った際の願文なども残されている。

例大祭の神楽奉納では、最初にこの市舞が奉奏されるほか、御神幸の町廻りの時には祈願を申し込んだ家の前に神輿を安置し、岐宿では神輿の前で宮司の祝詞奏上と市舞が、玉之浦では家の座敷で祝詞奏上と市舞がある。これらは市舞が祈禱性の強い神楽であることを示すものである。もとより神楽そのものが祈禱性をもつのであるが、基本的に市神楽のみ奉納される例が多いことから市神楽の祈禱性は強かった。この市神楽の存在が五島神楽の大きな特色のひとつであると言っても過言ではない。この市神楽には神楽歌がうたわれていた。神楽歌の伝承が失われたことは残念であるが、玉之浦神楽の弘化二年（二八四五）の『神楽舞方之本』には市神楽の歌として七首が収録されているので、次に紹介する。

一よき事をはしむる時ハかせふかす

くもの色さへことにめてたき

一さいはいのこへにそくたるあまつ神

いせのいわ戸ハいまひらくかなく

一ちわやふる神のいかきにそてかけて

前まつ開あまの岩戸く

一いりませをきうとしらせばたまゆかに
こたなをかいて神をしよをしようく
一よいのまわなにに心のなくさみて
ふけゆくまゝにねやまさるらぬく
一君かよの久しかるへきためしにハ
かねてそうへしすみよしのまつく
一まいらするちよのミかくらまいらする
いまハしようめんにうけきこしめせく



玉之浦神楽「市舞」（平成22年9月18日 白鳥神社例祭）



富江神楽「神女舞」（平成22年10月16日 富江神社例祭）



岐宿神楽「伊智舞」（平成22年9月19日 巖立神社例祭）

三 五島神楽の宿借り曲「山下舞」

長崎県の島々の神楽には、山の神の宿借りを主題とする曲が伝存している。

(一) 壱岐神楽「山入舞」

(二) 平戸神楽「山神舞」

(三) 五島神楽「山下舞」

壱岐・平戸・五島の神楽にそれぞれ宿借り曲が伝承されてきたことは注目に値する。だが、伝承が断片化したり、内容が変質したりと、その様相を異にする。次にその具体例を示すことにする。

(一) 壱岐神楽「山入舞」(天明本)は、宿借り問答の古態を残すものである。宿借り問答の中で、山の神は氏人の問いに対して次のように答えている。山口辺を通る時に行合った面は九つ、眼は十六、足は九つ持ったるもの(山黒鴉)と、武蔵野辺を通る時に行合った頭もなく裾もなくまん円いもの(野槌はやぶさ)が山の御神の御供をして民草の方へ参りたいと申したが、是こそ悪神と思ひ、七里が外へ退けて参った。さらに田原辺を通る時に行合った年の齢四十ばかり、烏帽子狩衣姿で左手榊と鍵を持ち、右手に米を持った老人は田の天神であり、畑の辺を通る時に行合った年の齢十二、三ばかりの童子は畑の神で、ともに同道したいという。それぞれ民草のためにめでたき神であるから、直垂の左右の肩の上にゆりすへて参った、と。つまり、山の神は悪神を祓い、善神を伴ってやって来たと言っているのである。さらに五天竺の事、九山八海のいわれを語り、柴と榊葉を氏七代の守の神、守護のために持参したと語る。

現行壱岐神楽の基礎となっているのは、弘化二年(一八四五)の改訂本であるが、この改訂本になると「山入舞」の曲名が姿を消す。弘化本の神楽次第によると、

次真坂木 称山之神

採坂木鈴一人立舞、哥七首

次野槌

採篠一人立舞、哥一首

とある。「真坂木」(真榊)が「山之神」と称したことや、「野槌」の詞章検討

によって、右の「真坂木」と「野槌」がもと「山入舞」であったことがわかる。天明本と弘化本を比較すると、内容の上で大きな隔たりがある。次に弘化本の改訂点を示すと次のようになる。

(1) 天明本の宿借り問答や歌などは、弘化本ですべて削除されている。

(2) 天明本では山の神と村人との問答になっていたが、弘化本の「野槌」では山の神と野槌の問答に改められている。天明本の野槌は一種の妖怪の類で、七里が外へ追払われる悪神であった。弘化本の野槌は、野の神として山の神(弘化本では山祇神)の語りを引き出す問答役となっている。

(3) 天明本の山の神は、山口辺と武蔵野辺で行合った悪神を祓い、田原辺と畑辺で行合った善神を伴って来たと語る。弘化本になると、山の神による悪神祓いの件りを欠き、田の辺と畑の辺で行合った童子はそれぞれ穀物(田から生じる穀物)と畑つ物(畑にできる物)の守り神として、真榊を立てて祝いまったと語っている。

(4) 天明本における榊は山の神の持物で、祝福の呪物である榊柴を携えて来訪する山の神の姿が明確である。山の神は「此柴は氏七代の守の神、守護のため我此柴を持て参りて候、今夜こ宵の氏人の乾角に能ねんころに御祝ひ候へ、めて度候」と語る。これに対して弘化本では「此真坂木は諸人を守り幸ひ給ふ皇神等の御霊代とする神籬なれば神處にうえ立て常磐に堅磐に祝ひ奉り、おろかみ給へとかしこみ／＼申」とあり、神道的な表現になっている。

(5) 弘化本の「真坂木」の神楽歌は、古今和歌集・兼邦百首哥抄・拾遺和歌集などの古歌の引用が多い。古歌引用の神楽歌は、弘化改訂本の大きな特色になっている。

現行の「真榊」は、素面の舞人の一人舞で、鈴と榊を持って舞う。榊の本地を唱える本地舞を順逆に巡って舞い、次に春夏秋冬の四季を詠んだ歌をうたつて四方(四隅)を拝しながら巡って舞う。次の「野槌」は二人舞で、先の「真榊」が終らないうちに鈴と笹束の素面の舞人(野槌の神)が出て、真榊の舞人(山祇神)と共に立ったまま一揖し、問答の詞章を唱えながら巡って連舞をする。

壱岐神楽の宿借り曲「山入舞」は、天明本の如く山の神の宿借りを主題とす

るものであったが、弘化の改訂によって換骨奪胎されてしまった。あまりにも大きな変質は、もはや宿借り曲とはいえないほどである。しかし、このような改訂も、神楽の歴史の変遷の過程を示すという観点からは重要であり、注目すべき価値があるといえるのである。

(二) 平戸神楽「山神舞」も、本来宿借り曲であった。現行は「山之神」といい、仮面の一人舞で、次のような語りがある。

さむ候某は、伊勢の国神路山猿田彦の神とは我事也、高天原より天降り、日本を持ち給ふ事三十萬年に及び、夫より此方、我朝は天照大御神の御領地にて齋いっきまします、さあれば伊勢の国百枝の松千枝の杉八百枝の真榊に御影向まうまします其の時御詠歌

榊葉にゆふしてつけて誰か世に神の社といわい初はつけむ

右は、松浦史料博物館所蔵の天保十年本とはほぼ同内容で、小異があるにすぎない。右の詞章からは宿借り曲であったことは到底うかがうことはできない。ところが下條氏所蔵の慶應二年本の「山神舞」は全く内容を異にしている。以下、問答部分の詞章を掲げる。

○田原辺御通の時、共は何事や有つらん

○田原辺通りの時、年の齡は七つ八つ計の小人と相見へ、烏帽子狩衣を召され、左の御手には升と鍵とを持ち、右の御手には米を持て、山の御神は民草の方へ賞遊に座すか、我等も同道と有、是民草の為には目出度田の天神と存じ、弓手の方へ奉招オギタマツル捧

○畠の辺御通の時とは何事や有つらん

○圃の辺の時、年の齡は十二三計の童、裾カサの直垂白打練の綾アヤ蘭笠を召れ、山の御神は民草の方へ賞遊に坐すか、我等も同道とある。是民草の為には目出度き陸田の道祖神と存じ、馬手の方へ招捧奉る

○此榊葉わ民草の守護の為にぞ持来る、乾の隅に能懇に御祝玉へ

平戸神楽「山神舞」は、悪神祓いの件りを欠くものの、全体の形式が壱岐神楽天明本の「山入舞」と規を一にしており、宿借り曲であったことは明らかである。そして「山入舞」が弘化改訂本では「真榊」と「野槌」に大きく改変され

たのに対し、平戸神楽の場合は新たに猿田彦神を主役とする「山之神」を作り上げ、宿借り問答の片鱗を残していた「山神舞」を止めてしまったのである。同じ宿借り曲ながら、壱岐と平戸では宿借り問答を削除するという点で共通するが、両者は、一方が他方を参考にするとか、共同で改訂を進めるなどのことをせず、それぞれ別個に異なる改訂を行ったことは興味深い。それではなぜ両者は宿借り問答部分を削除したのだろうか。あくまで推測の私見であるが、唯一神道の影響を強く受けた神職たちは、高貴な神が村人に宿を乞うという行為に何か違和感を覚えたのではなからうか。『筑波國風土記』にみえる富士と筑波の説話などは古典としては理解しえても、現実に神楽を行うにあたって山の神が村人に宿を乞うなどの局面は許せるものではなかった。そうした共通認識が壱岐と平戸の神職たちにあったのではないか。また悪神祓いを消去し、本来祓われるべき野槌を野の神として昇格させたのも、神楽に悪神は不要とする神楽の高尚化が図られたことによると解したい。

南九州の薩摩・大隅地方の宿借り問答が改革の標的となったのは同じ理由によるものであろう。旧薩摩藩領の宮崎県高原町祓川はらいがわ神楽の宿借り曲「門境」では、山の神の宿借りではなく、主客逆転して山の神に宿を乞う形になっているのはその好例である。

(三) 五島神楽の宿借り曲「山下舞」は、壱岐・平戸・五島の三神楽の中で宿借り問答を伝承している唯一の神楽である。昭和五十七年、五十八年の調査時には、五島市岐宿神楽にのみ行われて、五社神社・住吉神社や新上五島町あおかた青方神社などでは行われなくなっていた。ところが今回の平成二十二年度の調査では上五島神楽「山下舞」が現行曲として行われており、DVDによって確認することができた。また五島市でも「山下舞」は現行曲となっており、復活していることが判明した。今回の調査の大きな成果であり、喜ばしいことである。まず、岐宿神楽「山下舞」について略述する。

はじめに舞子の一人が神前に柴木一本を立てて控える。と、黒シャグマ・櫛たつ・裁着袴に鬼杖をもった荒平あらひら（鬼面）が出て、舞処を順逆に巡ったあと、太鼓の前に神前に向かって坐り、両手をつく。そこに招まねという烏帽子・白張・素面

の者と宿借り問答をかわす。

荒平「宿申さんや、み宿申さんや」

招「(前略) 今最も御宿叶ふまじにて候」

以下、招の間に答える形で荒平は、天神七代の事、天神七代の御代の事、地神五代の事、地神五代の御代の事を次々に語る。さらに奥山辺・中山辺・山口辺・野原の辺・畑原辺・田原辺・大川辺・大戸口辺で荒平が行き合った善神・悪神の神々を、それぞれ桑と白酒でしつかり祭り鎮めてこれまで参ったと語る。このあと、荒平と同じ支度の鬼神(鬼面)が出て、鬼杖を打合せて争った後、次の問答になる。この時、荒平は太鼓の前に坐し、両手をつく。

鬼神「今朝寅卯じさんぎ打て通らせ給ふ御神は何の御神にて坐しますぞや」

荒平「今朝寅卯じさんぎ打て通らせ給ふ御神は登毘の丞、登毘の翁にて坐しますぞや」

以下、種々問答が続く。さらに、

鬼神「荒平が御山は何たる山と御聞きあつて候」

荒平「荒平が御山こそ神山それがしが山にて候」

鬼神「今朝市山人の左の御手には」

荒平「黄金の笏を持たせ」

鬼神「右の御手には」

荒平「白金の鍵を持たせ」

鬼神と荒平が桑の囃子に合わせて次の歌を唱和する。

○他方、端前のを、明けずが黄金のとうそうのもととはたりは人のあけるべし、あくるまいぞや開くべからず

次に、鬼神が柴の枝を手荒に折って柴を散らす、荒平も同様に柴を折る。これを交互に三回繰り返して終る。

現在は招の役を演じる伝承者がなく、招不在のまま荒平が自らの言句を述べるという変則的な形になっている。また中山辺から大戸口辺に至る荒平の言句を省略するなど、演じ方に断片化の傾向がみられる。

一方、上五島神楽の「山下舞」は、詞章本によると、はじめ鬼神と問の問答

があり、後半に荒平が登場し、鬼神と荒平の問答になる。これは岐宿神楽の荒平と鬼神が入れ替った形である。榊葉のいわれ、熊野権現御山、榊の木をいこれを語りつつ舞い納めるが、最後に

荒平「荒平の山は何山と御開やつて候」

鬼「さん候、荒平の山こそひもろぎの山と承りて候」

荒平「御山の御宝物を御語り候へ」

鬼「さらば語て聞せ申し候はん、御山の御宝物に取りては、櫓八丁櫓八

丁真櫓のかつら七まげ、南おもてにかけかぎり、今朝市山人の左の御手には白金の御玉を持たせ、右の御手には小金の御笏を持たせ」

二人「た方他前のこがねのとぼその明津が身とよ、たれやの人よあくるべし、あくるまじとぞ開くまじぞよ」

最後は荒平の山の宝物語りで納めている点が面白い。五島神楽「山下舞」は、壱岐や平戸のような神楽改訂が最小限にとどまって、宿借り問答が伝承されている点に五島神楽の宿借り曲の特色と価値がある。宿借り問答の古態を残しながらも神道的な色彩が強い点に、やはり改訂の形跡が認められる。また壱岐神楽「山入舞」は、山の神が榊柴を携えて来訪して宿を乞うのであるが、五島神楽「山下舞」は、来訪神的な性格が弱まり、宿借りの意図も明確でない。これも改訂後の姿なのであろう。

五島神楽には問答を中心とする曲がある。その中で「神通」または「神図」に登場する鬼が、荒平と名乗り、盗み取られた柴を追って来たと語る。本来は、中国地方や九州地方の荒平系の鬼で、「柴鬼神」「柴荒神」などの系譜に連なるもので、五島神楽独自の展開を示す一変種ということが出来る。



岐宿神楽「山下舞」(平成 11 年 9 月 16 日 吉村政徳氏撮影)

四 五島神楽の「將軍舞」

杵岐神楽や平戸神楽には「二弓」「四弓」など弓を持つての採物舞とりものまわしはあつても「將軍舞」という曲目はない。五島の上五島神楽「將軍舞」は、現行曲として行われている。この舞がきわめて重要なのは、神がかりを伝えていることである。素面の一人舞で、將軍殿の由来を唱えるうちに神がかりするものである。

○さて、それ將軍殿のこうべには月星さんだるあ八重の笠、身にはごとの鎧を召され、えよぎのお馬に御身は横たえて、じんずのつき弓に心かのうの弦を書け、九行紋のえびさねは、五百たらじの矢を並べ、東方に張りやすめ、南方に張りやすめ、西方に張りやすめ、北方に張りやすめ、中央に張りやすめ、たいちが方にも張りやすめ

將軍は左手の弓をつき立て、右手の開扇を高く振りかざしては振り下ろすのを繰り返しながら、右の立言たちごころ（唱文）を唱えるうち、次第に跳びはねる。最後は腰抱きが出て將軍を舞処の外へつれ出して終る。この神がかりには託宣を伴わない。

有川神楽の「將軍舞」も上五島とはほぼ同様の詞章であることから、神がかりの伝承の有無に注目したが、吉村政徳氏の『五島神楽の研究』によると、やはりかつては神がかりがあつた。平成二十二年度の調査では、復活可能曲となっているが、上演は稀であるという。



上五島神楽「將軍舞」
(平成22年10月27日 政彦神社例祭)

広島県から山口県にかけて分布している十二神祇系神楽の「將軍舞」も、將軍が激しく舞っているうちに神がかりになって倒れる。これを「死に入り」という。神がかりしても託宣がない点、上五島神楽・有川神楽の「將軍舞」と共通する。有川の「將軍舞」が現行曲でないのは残念であるが、上五島神楽「將軍舞」は、九州諸神楽の「將軍舞」で、唯一神がかりを伝える現行曲として重要である。

五 富江神楽の釜祓い神事

五島神楽の特色の一つに富江神楽の釜祓い神事をあげておきたい。これは他の五島神楽にはないものである。この神事は夜神楽の翌日、直会なちあひの前に社務所（宮司宅）あるいは神楽宿の竈かまどの前で行われる。昭和六十二年五月、富江町黒島の鴨神社氏子総代、門下秀雄氏宅で行われた神事は、次のようなものであつた。

（1）竈前に敷いた莫座の上に、社人しゃにん一人が座し、井に入れた桑となますを竹箸ではさみとり、膳の四隅にじかにのせる。膳は全部で六膳で、膳に盛っては積み重ねてゆく。終ると今度は六膳の桑となますを元に戻す。以上の間、他の社人たちは左記の唱え言を十二回繰り返す。

○水神宮のうちみの初穂は神ぞ召す、しょうちのむしろは、きねがしく、杵がないたら鈴虫はチューと云う声たむしよなる、粟た、けばつきもむづかし、あれもいる、ひとみにまさるくだもんもなし、まんまるして月に姿は似たれ共、食くて良いものは餅になるかな、あいなます二合半かいそうえ、かいがないならこ、ろざし、めし山かはらの音聞けば流れ久しや、君の御用かな

（2）次に、二つの高足膳にのる木椀二つ、茶碗にそれぞれ赤飯と桑・なますを盛り、盃にお神酒を注ぐ。この時、左記の唱え言を二回繰り返す。

○飯櫃は八つ、かいは九つ、ソレ、盛り盛った、又ちよこそへーよ

（3）次に、二つの高足膳を神楽宿の主婦と主人に渡す。この時の唱え言は、○十二のご酒は誰にゆづらん、宝を添えて母にゆづる、母ばかりたらしきものはよもあらじ（主人に渡す時は、右の「母」を「父」に言いかえる）

（4）次に、手杵（上下の丸太部分に白紙を巻く）を前につき立て、東南北西中央の五方に向つて唱える。この時の唱え言は、

○東方世界悪やら魔やら魔もなし、悪業も善劫もなければ共、今日大しだんなんどの御身の上にて、くぜつ災難やまい事へいようちゆうよう、かたなみの国にてまします候と申す。四方千里が浜に吠える犬ビョウビョウ（以下、南西北中央同断）

(5) 次に、米八合入りの一升斛を左手に持ち、五方に向って、バラバラと米をまく。この時の唱え言は、

○東方にうち向いて、カメカンダオセライタ、今のたいどんの前のたいどんの米の飯や、バラバラ(この時に米をつまんでまく) コツテの牛は、又肥えたいや、ふくれたいや、今年の稲をば、ほだに二升取って世の中良ければ、幸俵を祝ひゆづらん(以下、南西北中央同断)

(6) 次に、箸を六人分十二本のせた丸盆を両手でつかみ、五方に向いて盆を前方に傾けて、箸をゴロゴロゴロゴロとこころがし、次に手前に傾けて同様に箸をこころがす。この時の唱え言は、

○東方に打向いて、ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ(以下、南西北中央同断)
(7) 次に、社人が「タタモヤ、タタモヤ」と言いながら、莫塵で手杵を巻き込み、家人二人に渡す。二人がそれを持って土間から上にあがろうとするのを、他の社人があげまいと押しとどめる。結局、上にあがり納戸に運び、押入れの前に杵を納めて終る。

黒島での富江神楽奉納は、右の昭和六十二年を最後に、以後行われなくなったが、釜祓い神事が現在も行われていることは、平成二十二年度の調査で確認された。釜祓い神事は、ほたけ祭(竈神祭・荒神祭)であったと思われる。五島市玉之浦神楽の弘化二年神楽本に「ほたけ祭」の詞章がみえる。次にその一部を抄出する。

うち日のはつをハ神そめす、しやうしのむしろハさねしる、きねやなれたるす、むしろ、ちよと言こへたへせさる物

一あたたけハつくもむつかしあれもいる、しときにまさるくた者はなし

一くもにうつらうあかごりう、ゆきにう(つ)らうしらしとき、ま、して月にすかたわにたれとも、くてよき者わもろいなる者

一鮎なますにごはんかいそへかいやなれたるつこそすれ

一さかと(の)に 酒ハつくりても、はりやちはらの酒ハ神そめすらん
一めす山川のときけばなかれ久氏の御よかそふ

一さかつきののぼるとみへてくらんハ神のしようこにめせはくらん

一よへにつくりてけさのむ酒ハめ、くりの酒をこはいつみにくみあけそみる
一十式のこからけたれにゆつらうなたからをそへてすぬしにゆつらう(中略)
一是より東方にあたつてひうとうけのいんか福の神ハうちにはへ入、悪の神ハほかにほへ出ひくくひう

ほたけ祭の祭文資料は対馬にもある。対馬市豊玉町仁位の国分家文書の中に「ほたけまつり」の祭文詞章があり、寛永十九歳^{壬申}正月吉日の奥書をもつ「かまの神の本地」の次に記されており、竈神祭としてのほたけ祭の祭文とみてよい。この対馬と玉之浦の詞章には共通する部分があり、同様の祭であったことがわかる。玉之浦のほたけ祭は廃絶しており、実態が不明である。

釜祓い神事の唱え言は、対馬や玉之浦のほたけ祭の詞章と共通しており、同類の祭である可能性はきわめて高い。釜

祓い神事(4)では「ビョウビョウ」と犬の吠声で、口舌(争論)・災難・病事などを四方千里が浜へ駆逐するという。玉之浦のほたけ祭では、犬が福神を内へ吠え入れ、悪神を外へ吠え出す。その吠声は「ひくくひう」である。犬の吠声によって招福攘災するのは寡聞にして他に例を知らない。富江神楽の釜祓い神事は、ほたけ祭の古い姿を今日に伝えるものとして注目すべきであろう。

六 五島神楽歌の特色

五島神楽歌には古歌の引用が多い。吉村政徳氏の『五島神楽の研究』によると、古今和歌集・和漢朗詠集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花集・古事記・天文本伊勢神楽歌・千載和歌集・諏訪神楽歌「諸神勧請段」・玉鉾百首などから採用した歌が多数にのぼるといふ。

これは唯一神道の影響を受けた壱岐神楽や平戸神楽と共通しているが、五島



富江神楽「釜祓い神事」(平成22年10月15日 富江神社例祭)

の場合には唯一神道系の『兼邦百首哥抄』からの引用がほとんどみられない。唯一神道の影響をさして受けなかったようである。吉村氏の指摘するように国学の影響も無視できないであろう。五島神楽歌のもう一つの特色は、今様風四句神歌が歌われていることである。『梁塵秘抄』や『伊勢天文本神楽歌』所収の今様風四句神歌が、様々に変化しながら九州諸神楽の中に散見する。たとえば、本居宣長の『玉勝間』所収の肥後国の神楽歌に「高所」歌として今様風四句神歌四首がみえ、早くから知られているが、現在は歌われていない。現行で歌われているのは宮崎県椎葉神楽や諸塚神楽などにすぎない。その意味でも五島神楽歌は稀少な伝存例である。有川神楽「幣帛」の四句神歌を次に示す。

○とおどお平の笛の竹はんじよに是まで揺られ来る アイヤ揺られ来る 色よき小風に誘われて うつの浪に折られ揺られん

○あの吾が殿を 南の表の広縁に いとげの車をやりかけて アイヤやりかけて 御祝い申せば お手もたばらん お手もたばらん

○鎮南平の木の下に みめ良き妙体おわせます アイヤおわせます 主は誰かと問うたれば 松の浦葉の年男

○吾がちごを学文せよとてあげたれば アイヤあげたれば 梅や桜にたはふれて 五葉の松に花や咲くらん 花や咲くらん

七 結びにかえて

五島神楽について、壱岐神楽や平戸神楽を視野に入れ、それとの関連性を考えながら、特色と価値を述べてみた。まとめると次のようになる。

(一) 五島神楽には市舞・市神楽とよばれる巫女神楽が伝承されていること。

(二) 五島神楽の宿借り曲は、壱岐神楽や平戸神楽のように宿借り問答を削除することなく伝えていること。

(三) 五島神楽の「將軍舞」には、神がかりの伝承があること。

(四) 富江神楽の釜祓い神事は、五島のほたけ祭（竈神祭・荒神祭）の残存例として貴重であること。

(五) 五島神楽歌は、古歌の引用が多いが、一方で、今様風四句神歌が現行曲の中で歌われていること。五島神楽が近世以前の神楽歌を伝えている点で貴重であること。

右の外、本文では言及しなかったが、玉之浦神楽の「入鹿高松」は、イルカが群れて遊泳する様子を舞うもので、五島神楽を含めて他に全く類例がない。きわめて地域的特色をもつ曲目であり、貴重であることを指摘しておきたい。今後、九州諸神楽との比較研究がさらに進展すれば、五島神楽の特色と価値は、より鮮明になるであろう。

参考文献

- 本田安次『本田安次著作集 日本の傳統藝能 第三巻 神楽Ⅲ』平成六年 錦正社
- 吉村政徳『五島神楽の研究』平成十四年 上五島神楽保存会
- 渡辺伸夫「長崎県五島神楽資料(二)」昭和六十三年 早稲田大学演劇博物館発行『演劇研究』第十二号所載
- 渡辺伸夫「対馬の芸能環境」平成十一年 厳原町教育委員会発行『対馬 厳原町の盆踊』所載
- 渡辺伸夫「壱岐神楽の宿借り曲『山入舞』をめぐる―神楽改革の視点から―」平成十一年 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行『民俗芸能における神楽の諸相』所載

第二章

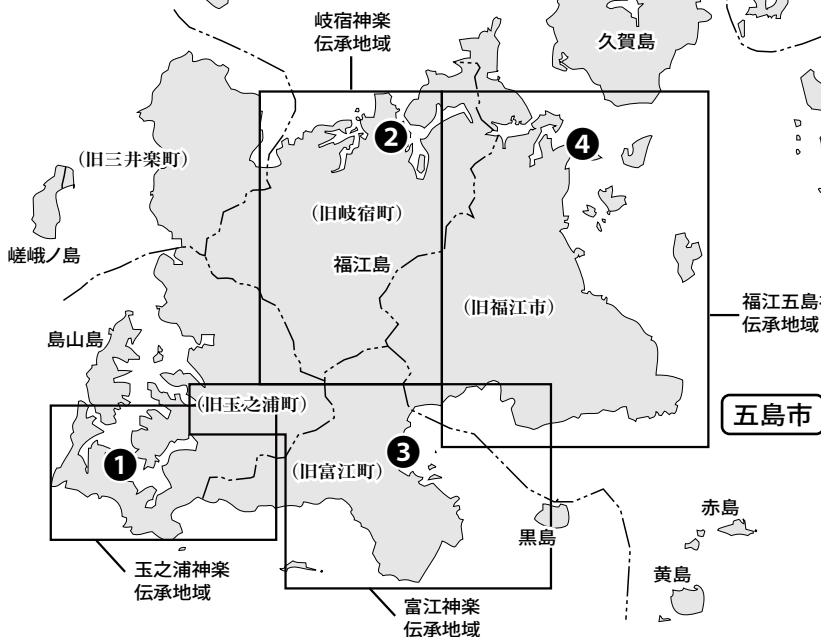
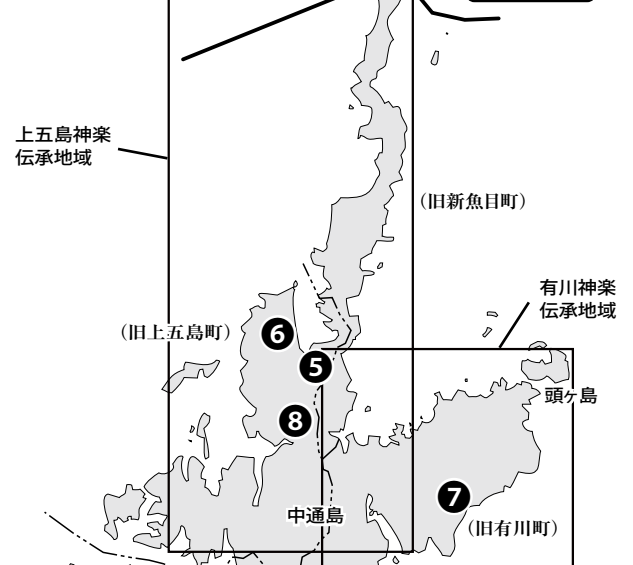
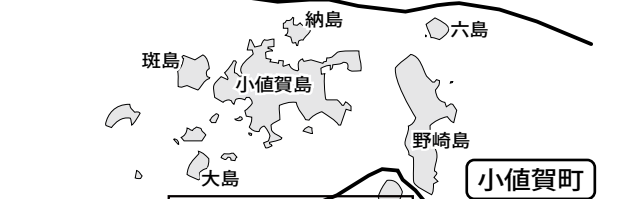
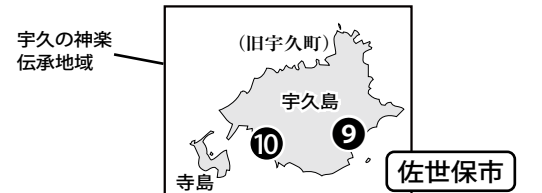
「五島神楽」

現地調査報告

「五島神楽」平成 22 年度現地調査地図



- ① 玉之浦神楽〔白鳥神社〕
- ② 岐宿神楽〔巖立神社〕
- ③ 富江神楽〔富江神社〕
- ④ 福江五島神楽〔櫻ノ浦 天満神社〕
- ⑤ 上五島神楽〔政彦神社〕
- ⑥ 上五島神楽〔客人神社〕
- ⑦ 有川神楽〔志自岐羽黒神社〕
- ⑧ 上五島神楽〔青方神社〕
- ⑨ 宇久の神楽〔神島神社〕
- ⑩ 宇久の神楽〔宇久島神社〕



凡例

地図上の番号は現地調査地を示し、次頁日程表の地図番号の項と対応する。

- は市町名
- () は旧市町名
- は行政区分
- は旧市町の行政区分

現地調査日程表(平成二十二年度実施)

1班 調査員 星野敏、記録員 小岩秀太郎
2班 調査員 久保田裕通、記録員 森下春夫
3班 調査員 吉村政徳、記録員 中村大地
4班 調査員 久保田裕通、記録員 小岩秀太郎

※注 記載内容は本調査時のもの

地図番号	調査地	神楽名(調査神社)	調査期日(平成22年)	時間	内容	場所	調査班
①	五島市玉之浦町玉之浦	玉之浦神楽「白鳥神社」	9月18日(土) 白鳥神社例大祭1日目	12:00	神幸祭(市舞、御雲移)	白鳥神社幣殿	1班
②	五島市岐宿町岐宿	岐宿神楽「厳立神社」	9月19日(日) 厳立神社例大祭1日目	13:00	船渡御(お下り・町巡り)家々で市舞、陸尺踊り、獅子舞など)	白鳥神社↓乗船↓井持、越宮、松の下の各町↓ お旅所(玉之浦町体育館)	
①	五島市玉之浦町玉之浦	玉之浦神楽「白鳥神社」	9月19日(日) 白鳥神社例大祭2日目	18:00	着御祭(市舞あり)	お旅所(玉之浦町体育館)	
				17:00	氏子祈願祭(市舞あり)	お旅所(玉之浦町体育館)	
②	五島市岐宿町岐宿	岐宿神楽「厳立神社」	9月20日(祝) 白鳥神社例大祭3日目	18:30	神幸祭(御神楽、伊智舞、御雲移)	厳立神社幣殿	1班
				13:30	村巡り(各家、辻々で伊智舞)着御祭	厳立神社↓神社前空き地↓町内↓厳立神社	
①	五島市玉之浦町玉之浦	玉之浦神楽「白鳥神社」	9月19日(日) 白鳥神社例大祭2日目	17:00	本祭、お上り・町巡り(家々で市舞)着御祭	お旅所(玉之浦町体育館)	
				18:30	宵祭(神楽上演21番)	お旅所(玉之浦町体育館)特設舞台	
②	五島市岐宿町岐宿	岐宿神楽「厳立神社」	9月20日(祝) 白鳥神社例大祭3日目	19:00	本祭(神楽上演13番)	深浦の各町↓乗船↓白鳥神社	1班
				14:30	宵祭(神楽上演17番)	富江神社拝殿	
③	五島市富江町	富江神楽「富江神社」	10月15日(金) 富江神社例大祭2日目	10:00	例祭祭典(神女舞あり)	富江神社拝殿	
				12:10	荒神まつり(釜殿い、神事)(神女舞あり)	富江神社宮司宅	
④	五島市平蔵町	福江五島神楽「櫻ノ浦(満神社)」	10月16日(土) 富江神社例大祭3日目	20:30	渡御(お下り)	富江神社↓町内↓平代主神社↓港↓	2班
				15:00	神楽上演7番	飯宮(蛭子神社)	
⑤	新上五島町奈摩郷	上五島神楽「政彦神社」	10月17日(日) 富江神社例大祭4日目	9:00	渡御(各巡幸先で神女舞、新潮、獅子上演あり)	飯宮(蛭子神社)↓町内↓飯宮(蛭子神社)	
				15:00	お上り(神輿が富江神社到着後、神女舞)	飯宮(蛭子神社)↓富江神社拝殿	
⑥	新上五島町網上郷	上五島神楽「客人神社」	10月21日(木) 天満神社例大祭	13:00	例祭、神楽上演7番	天満神社拝殿	3班
				16:00	神幸祭・御輿渡御	政彦神社↓奈摩郷内↓政彦神社	
⑦	新上五島町太田郷	有川神楽「志自岐羽黒神社」	10月27日(水) 政彦神社前夜祭	19:00	神楽上演16番	政彦神社拝殿	
				10:00	神幸祭・御輿渡御、天狗・獅子のヤバライ	客人神社↓網上郷内↓客人神社	
⑧	新上五島町青方郷	上五島神楽「青方神社」	10月28日(木) 客人神社前夜祭	16:00	神楽上演13番	客人神社拝殿	4班
				10:00	神楽上演4番	客人神社拝殿	
⑨	佐世保市宇久町平	宇久の神楽「神島神社」	10月29日(金) 客人神社例祭	18:30	祭典、神楽歌が唱えられる	志自岐羽黒神社↓太田郷内↓志自岐羽黒神社	
				10:00	神楽上演11番	志自岐羽黒神社幣殿	
⑩	佐世保市宇久町神浦	宇久の神楽「神島神社」	11月1日(月) 志自岐羽黒神社例祭	19:00	御輿渡御	志自岐羽黒神社幣殿	4班
				13:30	神楽上演5番	志自岐羽黒神社幣殿	
⑪	新上五島町青方郷	上五島神楽「青方神社」	11月2日(火) 青方神社前夜祭	10:00	新嘗祭	太田郷内	
				15:00	神幸祭・御輿渡御(巫女が行列の先頭に立ち海水で浴道を祓う)	青方神社↓青方郷内↓青方神社	
⑫	佐世保市宇久町神浦	宇久の神楽「神島神社」	11月3日(祝) 青方神社例祭	19:00	神楽上演9番	青方神社拝殿	4班
				10:00	神楽上演16番	神島神社	
⑬	佐世保市宇久町神浦	宇久の神楽「神島神社」	12月5日(日)	12:00	宮司への開取り調査	宇久島神社	
				12:50	宮司への開取り調査	神島神社	

たまのうらかぐら しらとりじんじゃ
玉之浦神楽〔白鳥神社〕

星野 紘

一 名称

玉之浦神楽（白鳥神社神楽）

二 伝承地

長崎県五島市玉之浦町
 白鳥神社と兼務社のある地域

*以下に平成二十二年度現地調査を実施した白鳥神社例大祭における玉之浦神楽の報告をする。

三 期日・場所

白鳥神社例大祭 九月の第三日曜日を例祭日としその前後三日間

*平成二十二年度は九月十八日、十九日、二十日

九月十八日 神幸祭（白鳥神社）、神輿の町巡り、前夜祭（玉之浦体育館内のお旅所）

九月十九日 お旅所（神輿）前での祭典、郷民祈願祭及び神楽（舞神楽）
 九月二十日 町巡りとお上り、着御祭（白鳥神社）



白鳥神社



神社本殿より玉之浦湾を望む



白鳥神社（左）と玉之浦中心地（奥）



四 伝承組織

(一) 実演者

平成十四年発行の『五島神楽の研究』（吉村政徳著）によれば、演者組織としては旧来、宮司のほかに八〇十家の社人の家の者、それに神子とが担当していたが、平成十四年当時は、宮司のほかに四家四人の社人と三人の氏子青年、それに神子とで実施していると記されていた。今日ではそれが、宮司（宗邦治氏）のほかに二人の社人、それに白鳥神社神楽保存会会員、さらに小中学生の神子とが担当しているといひ、保存会会員が演技をやらない会長（山口幹夫氏）等を含めて十九名であるという。従来の世襲の家の社人体制から一般人の加わる保存会制へと移行しつつあることが解る。なお保存会会員でかつて郷の青年団長を勤めたことのある小浦喜久重氏（昭和二十七年生まれ）によれば、昭和五十年に青年団内に郷土芸能保存会が結成されていて、平成十三年度に五島神楽が国の記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財に選択された時、その郷土芸能保存会の一部が白鳥神社神楽保存会となったという。

(二) 参加者と祭りの経済

玉之浦郷には約三七〇世帯おおよそ八百人の氏子がいひ（神道以外を信仰している家は除く）、宮総代を選出している（現総代会代表は唐津隆一氏）。祭りの経費は練習時のかかりを除いて約七十万円ほどであり、それを氏子か

らの寄付金、神輿の町巡りの折りに神楽祈願を行った家からの神札料、お初穂料（平成二十二年は当初約百戸から神楽の希望があったが、不祝儀の家やその親戚筋から中止の申し出が多かった由）、それに郷予算から白鳥神社神楽保存会への助成金でまかなっているという。

五 行事（芸能）内容

（一）次第・日程

① 九月十八日 神幸祭（白鳥神社）、町巡りと前夜祭

午後一二時過ぎ、白鳥神社（鎮座地は玉之浦町玉之浦字御嶽）の幣殿にて神主と祭祀補佐役の社人などにより神幸祭の式次第が執り進められ、神子による「市舞」が舞われた。その後神主により神殿から拝殿の神輿への御霊移しがあり、神輿が社殿外に運び出され、神輿への鳳凰の金飾りの取り付けなどの諸準備の後、陸尺と称される若者に担がれた神輿を中心に行列を仕立てて参道石段を下り、鳥居を出て左折して船着き場に行き、そこから船渡御をして対岸の井持へ向かった。昭和初期までは海上に小舟を並べてその上を御輿を担いで渡って行ったという。なお行列は獅子、神主、神子、社人、神輿と担ぎ手の陸尺、鉦打ち太鼓二個の叩き手と担ぎ手、笛役、金幣、神札を入れた箱持ち、櫛持ち、お神酒持ちなどである。

町巡りは井持、越首、松の下の各町で、要望のあった家からの祈願（神楽と称される）の様子は次の通りであった。当該家の門前に神輿が止まると、神主、神子、宮総代などがその家に入り込み、まず神主が家の中より外の神輿に向かって祝詞をあげ、その間、神子が神主の背後で「市舞」を舞う。次いで神主が金幣を手にして当家の者の頭や身体をなでる金幣拝戴の儀がある。また「白鳥神社御神楽大麻」と書かれた神札を家主は戴く。なお当該家では縁側か玄関に、あらかじめ盆に米・塩・酒・肴をそれぞれ小皿にもったものを用意してこの儀に供えた。式次第が済むと家に上がり込んだ者たちに酒、肴の接待があり、門前に待機していた行列の一行に対してもビールやジュースその他の差し入れ

接待があった。未だ残暑の残る時期であって、汗だくの陸尺その他一同は大きいのをうるおしていた。こういったことが祈願の家ごとに続くため、神輿の歩みはのろかった。家の中での主立ち役への接待が長引いている時などには、陸尺たちによる即興の踊りがオートコヨーマイの掛け声とともに踊られた（神輿の金飾りを外してそれを探り物としたりして）。また獅子舞を模したものをも演じていた。夕刻六時過ぎ当日予定の祈願者の家の巡りを終えて、玉之浦体育館内の一隅（お旅所）に神輿を安置して着御祭が執り行なわれ、「市舞」が舞われて当日の行事を終えた。



幣殿での市舞



陸尺・神輿が町巡りに向う



船に乗り込む神幸祭一行



船渡御で神社対岸の集落へ



神主の祈願と背後での市舞



金幣拝戴の儀



陸尺踊り



着御祭

② 九月十九日 お旅所（神輿）前での祭典、郷民祈願祭および舞神楽

午後五時から玉之浦体育館内に安置された神輿の前で氏子祈願祭が開始された。修祓、祝詞奏上などの式次第の後、神子による「市舞」が舞われ、小学生四人による「浦安の舞」が付け加えられ、参列者一同による玉串奉奠があり、神札配りやお神酒戴きがあった。

夕食休憩の後六時半よりまた祭式次第があつて、神輿前の舞座（畳敷）にて二十一番の神楽（舞神楽）の上演があ



お旅所（玉之浦体育館）

った。上演演目は次の項（二）で記す。

③九月二十日 町巡り、お上りと着御祭

この日の町巡りは、お旅所から棧橋にて乗船し、向小浦、小浦、元倉、大之元、深浦の各町巡りした後、再び棧橋から乗船して白鳥神社へ還幸する。神社で着御祭があり、「市舞」が舞われる。



向小浦での金幣拝戴



向小浦へ下船



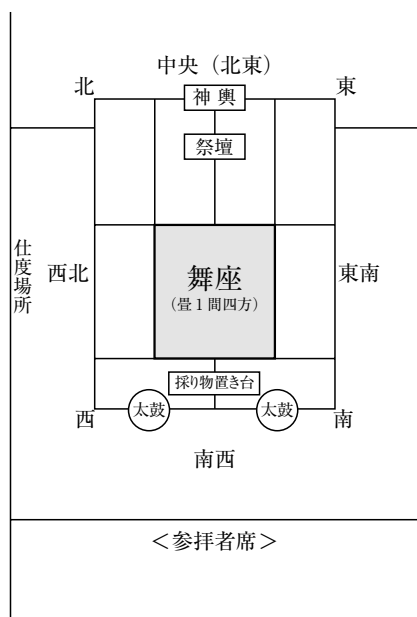
小浦方面への船渡卸



向小浦公民館前での市舞

（二）演目・芸態

九月十九日に演じられた神楽の演目の芸態に関して、神輿前の舞座を中心とした施設の概要図をここに記しておく（以降の神楽演目の芸態がたどる方角に関連する）。



白鳥神社「舞座」図

天井からは約九十センチ四方の錦蓋が吊される。その内側には日形月形雲形をかたどった色紙を貼り、蓋の上部には切麻を載せておき、「幣帛」などの演目の時にこれをゆすって散らす。参拝者側舞台正面（舞台の南西方面）に鉦打ち太鼓二つが置かれ、その間に鈴、扇などの採り物を載せておく八足の案が置いてある。

以下に各神楽演目の名称、衣裳扮装、採り物、芸態などの上演次第を記すが、芸態の記述にあたっては、「市舞」「左男舞」「村直」「祓」「御潮舞」「小弓」「柴取」「三剣」「入鹿高松」「大黒舞」「山狂言」「幣帛」については詳細に記すので、右の舞座の概要図を参考としてほしい。なお、ここで芸態の詳細記述をしていない「四剣」「長刀舞」「荒平」「折敷」「新塩」「山太郎」「二剣」については38頁からの岐宿神楽（厳立神社神楽）のところでそれらと類似の演目について記すので参照していただきたい（両者に差異はあるものの基本的な点で芸態は共通している）。

神楽志賀支

これは神降ろし行事である。太鼓の奏打、笛の吹奏にあわせて神楽歌をうたう。

1. 市舞 (2分)

千早、緋袴の神子が右手に鈴を持って舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回し、立事の唱えがある。また同様に右旋回、左旋回、右旋回を繰り返して退場する。



市舞

2. 左男舞 (2分)

白衣、白袴の少年が右手に鈴、左手に閉じ扇を持って登場し、右手の鈴を振りつつ舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回を行う。神前に立つて立事の唱えがある。続いて左手の閉じ扇を目の上にあげて左旋回一回、右手鈴を目の上にあげて右旋回一回、左手閉じ扇を目の上にあげて左旋回一回し、右手鈴を案の上に置く。



左男舞

次いで右手に開き扇の要を持って右旋回一回、左旋回一回、右手の開き扇の上辺をつまんで右旋回一回、左旋回一回、また右手の要を持って右旋回一回、左旋回一回して退場。

3. 村直 (3分)

これは祈願の舞である。狩衣、烏帽子姿のひとりが右手に鈴、左手に閉じ扇を持って登場し、右手の鈴を振りつつ舞座を右旋回、左旋回、右旋回して、神前に立つ。ここで言句の唱えがある。続いて、



村直

a 北の隅に向かって進んで止まり、両手を左側後方におおるように下がって元の位置にもどり、両手を目の上にあげて東の隅に向かって進んで止まり、両手を右側後方におおるようになって下がって元の位置にもどり、鈴を案の上に置く。続いて開き扇を手に右記aとほぼ同様の一連の所作を二度繰り返して退場。

4. 祓 (3分30秒)

これは座を祓う舞である。白衣、白袴のひとりが右手に鈴、左手に白幣二本を持って登場する。右手の鈴を振りつつ舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回し、ここで立事の唱えがある。次に左手の白幣を目の上にあげて左旋回一回、右手鈴を目の上にあげて右旋回一回、左手鈴を目の上にあげて左旋回して、鈴を案の上に置く。続いて両手に白幣一本ずつ持ち、右手の幣を目の上にあげて右旋回一回、左手幣を目の上にあげて左旋回一回、右手の幣を目の上にあげて右旋回一回を行い、続いて、右手幣を立ててそれに左手の幣をT字型に添えて右旋回一回、左手幣を立ててそれに右手の幣をT字型に添えて左旋回一回、右手幣を立ててそれに左手の幣をT字型に添えて右旋回一回し退場する。



祓

5. 御潮舞 (5分)

これは東南北中央を清める舞である。途中合立(役)から御潮桶を受け取るくだりがある。白衣、白袴のひとりが右手に鈴、左手に閉じ扇を持って登場し、舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回を行う。この者が神前に立つと言句の唱えがある。続いて左手の閉じ扇を目の上にあげて左旋回一回、右手の鈴を目の上にあげて右旋回一回、左手閉じ扇を目の上にあげて左旋回一回する。

続いて採り物二つを案の上に置いて空手となり、何かを受け取るような所作をして右半旋回すると、この者を追っかけるようにして白衣、裁着袴の合立(役)が両手に塩桶を抱えて登場し、舞座を右旋回、左旋回、右旋回した後この両者相対して座す。先に登場した者が合立から塩桶を受け取り、合立は退場する。

先に登場の者、塩桶を右手で目の上にあげて舞座を右旋回一回、左手で塩桶を目の上にあげて左旋回一回、右手で塩桶を目の上にあげて右旋回一回する。次いで、a 舞座の真中から桶を両手に持って東の隅に進み行き、塩を撒くこと三回(言句の唱えがある)、また真中にもどってその場で右旋回して南の隅に面する。このaの一連の所作を南の隅、西の隅、北の隅、中央(北東隅)に繰り返して塩を撒いて退場する。



御潮舞 合立(右)



御潮舞

6. 小弓 (5分)

これは弓矢で東南西北中央の五方を射巡る舞である。白衣に裁着袴、襷掛け、鉢巻き姿のふたりが、それぞれ右手に白幣、左手に弓矢を持って一緒に登場し、舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回する。ここで言句がかかる。次いで左手の弓矢を立てて目の上にあげて左旋回一回、右手鈴を目の上にあげて右旋回一回、左手弓矢を目の上にあげて左旋回一回をし、右手の鈴を案の上に置く。続いて弓矢を両手にささげ持って右旋回一回、左旋回一回、右旋回一回して東の隅に面して立つ。a 左膝をついて両手の弓矢を左後方に振り、右膝をつい

て両手弓矢を右後方に振ってからまた前方へ振りもどし、左膝ついて両手弓矢を左後方に振り、右膝ついて右後方に振ってからまた前方へふりもどし、このaの一連の所作を南の隅、西の隅、北の隅、中央(北東の隅)に繰り返す。

また続いて、b 左手に弓、右手に矢を持って左旋回して東の隅に向かい、矢を射ること二回繰り返す(これ以降東、南、西、北、中央に関わる言句の唱えがある)。このbの所作を南の隅、西の隅、北の隅、中央(北東の隅)と繰り返す。

その後左旋回して中央(北東の隅)に面して先述のaの所作をした後、左旋回、右旋回、左旋回してふたり相対し、それぞれの弓矢をひと束にして持ち合い、それを下方から上方、上方から下方へと円を描くように天地に左回転させ、それを二回繰り返して、退場。

7. 四剣 (5分30秒)

白衣、裁着袴に襷掛けで鉢巻きをして右手に鈴、左手に二本剣を持ったひとりが登場し、例の如く舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回して、立事の唱えがある。続いて先の者と同じ扮装・採り物の合立(役)が登場し、先の者にも



合立(右)



四剣



小弓

う一組の二本剣を手渡しして退場する。先の者は両手にそれぞれ二本剣を持って、さまざまなアクロバティックな所作を、東南西北中央の五方に向かって展開する。
(43頁の岐宿神楽の「四剣舞」の芸態を参照のこと)

8. 長刀舞 (6分)

白衣、裁着袴、鉢巻き姿の者が右手に鈴、左手に櫛を持って登場し、例の如く舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回の後、立事の唱えがあり、櫛を掛け終えると、そこへ先の者と同じ扮装の合立(役)が登場し、先の者に長刀を手渡しして退場する。先の者は長刀を両手に持ち左右に水車の如く回転させてみたりとさまざまな所作をして、東、南、西、北の四方を祓う。
(45頁の岐宿神楽の「薙刀舞」の芸態を参照のこと)



合立 (右)



長刀舞

9. 荒平 (6分30秒)

白衣、裁着袴、櫛掛け、鉢巻き姿の招き役が右手に鈴、左手に扇を持って登場して例の如く舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回して立事の唱えがある。この者が西の隅に行き、右手の扇を開いて、そこにいた赤上衣、裁着袴、着面、シャグマ姿で両手に白幣



荒平

幣を持った荒平を舞台に招き入れる。荒平は両手に白幣を持って右旋回、左旋回をし、東南西北中央の五方に様々に舞った後、南西から北東の締太鼓の方に

前進し、白幣を締太鼓のバチと持ちかえて、締太鼓打たんと何度か逡巡した後、最後には打ち込んで、退場する。

(44頁の岐宿神楽の「荒平舞」の芸態を参照のこと)

10. 折敷 (7分)

白衣、裁着袴、鉢巻き姿で右手に鈴、左手に櫛を持ったひとりが登場し、例の如く舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回の後、立事の唱えがある。次いで鈴を置いて櫛を両手にささげ持ち、旋回したり、五方をとって舞った後、櫛を掛け、折敷(盆)を左右の手に採って、東南西北中央の五方を巡り舞いながら、折敷を落とさないように、右手、左手を回転させたり、両手の掌に盆を載せたまま前転して見せたりなどのアクロバティックな所作を展開する。
(42頁の岐宿神楽の「折敷舞」の芸態を参照のこと)



折敷

11. 新塩 (5分)

これは参詣の諸人を五方に祓い清める舞である。白衣、白袴に狩衣に烏帽子をかぶったひとりが右手に鈴、左手に閉じ扇を持って登場し、例の如く舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回の後、立事の唱えがある。続いて八足の案上から塩の入



新塩

った盆と開き扇をとり上げ（なお「白鳥神社神楽舞方之本」によれば、ここで合立が登場し、彼が塩を手渡すと記してある）、右手に開き扇、左手に盆を持つて東南西北中央の隅に巡り、それぞれにて右手の扇で盆にすくい入れる所作がある。続いて扇を案に置き、また東南西北中央の隅に巡り、それぞれの隅にて左膝つき、右膝つきをして二度塩を撒く（この間ずっと言句の唱えがかけられた）。参拜者に向かつてても大量に塩を撒いて、退場する。

（42頁の岐宿神楽の「新塩舞」の芸態を参照のこと）

郷民祈願祭

なおここで神楽（舞神楽）のプログラムが一端中断されて、再度四人の小学生による「浦安の舞」が舞われ、郷民の祈願祭として神主による神前への祈願が行なわれ、郷民ひとりひとりの名前の読み上げがあった。それを終えてから白鳥神社神楽保存会のメンバー紹介があった。

12. 柴取（4分30秒）

これは、ひとりの招き役が着面のモノに柴を取らせようとするさまを見せる舞である。白衣、裁着袴、襷掛け、鉢巻き姿の招き役が右手に鈴、左手に神葉二本を持って登場し、右手の鈴を振りながら舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回を行う。次いで左手の神葉を目の上にあげて左旋回、右手の鈴を目の上にあげて右旋回、左手の神葉を目の上にあげて左旋回した後、鈴を案の上に置く。次いで二本の神葉を左右の手に持



柴取



白鳥神社神楽保存会メンバー

ち、右手神葉を目の上にあげて右旋回、左手の神葉を目の上にあげて左旋回、右手神葉を目の上にあげて右旋回した後、西の隅に行き、そこに居た面のモノを舞台へ招き出す。先の招き役が神葉を面のモノの上方や下方にちらつかせて取らせようとし、また面のモノを寝転がして覆いかぶさり、そのモノの右側、左側に神葉をちらつかせて取らせようとするが、面のモノは結局取れない。

13. 三剣（7分30秒）

これは、最初ふたりがそれぞれ剣と鈴を持って舞うが、後にもうひとりが登場して先のふたりの者たちの剣の刃の先端を握り、最後には三人して剣を潜り抜けつつ舞うものである。白衣、裁着袴、襷掛け、鉢巻き姿のふたりが、それぞれ右手に鈴、左手に剣を持って登場し、舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回する。ここで立事が唱えられて後、左手の剣を目の上に左旋回、右手の剣を目の上に右旋回、左手の剣を目の上に左旋回して後、東の隅に面する。

続いて、a 東の隅に向かつて鈴と剣を持ったまま右左右と足踏みした後、舞座真中にて右手の鈴を振りつつ左旋回、右旋回三回して南の隅に面する（ここで言句の唱えがかかり、以下も同様に続く）。このaの一連の所作を南の隅、西の隅、北の隅、中央（北東隅）へと繰り返した後、鈴を案の上に置く。

また続いて、b 舞座真中にて右旋回して後東西線上にて止まり、ふたりが東西方向に離れてからまた相寄り対面して、左、右、左と剣の切り合いをし、また右旋回し、次に東南と西北線上に止まり、双方東南、西北方向に離れてからまた相寄り対面して、左、右、左と剣の切り合いをし、左と剣の切り合いをする。このbの一連の所作を南北線上から、西東線上から、



三剣

北南線上から順に繰り返す。

そうこうしているうちに、白衣、裁着袴、襷掛けのもうひとりが右手に開き扇を持って登場し、先のふたりに加わり、ふたりと相対して立って、ふたりの剣の刃先を左右の手で握る。続いてこのふたりとひとりの双方が二本の剣をひと束にして床面から上方、上方から床面へと左廻りに円を描くように天地に回転させ、その間を双方はこの二本剣の下を潜る。

14. 入鹿高松 (5分)

これは漁場の出来舞(豊漁舞)として演じられる。遊泳しているイルカ(入鹿)を高松が追い散らすさまを模したものである。白衣、裁着袴のひとりが登場して案の上から右手に鈴、左手に閉じ扇を取り、右手鈴を振りつつ舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回し、次いで左手閉じ扇を目の上にあげて左旋回一回、右手鈴を目の上にあげて右旋回一回、左手閉じ扇を目の上にあげて左旋回一回して立ち止まる。

次いでこの者が鈴と扇を案の上に置いて、空手で舞座を右旋回、左旋回、右旋回すると、七名が登場してこの者の左側に手をつなぎ合計八名が横一列になる。最初に登場した者が先頭になって、背中を輪の内側に向けて右旋回一回。次いで輪の内側に向いて左旋回一回して、先頭の者が、列の最後尾の者とそのひとつ手前の七番目の者とならずにつないでいる手の下を潜り、一同輪の外へと抜け出て行く。そして今度は、逆に最後尾の者が列の先頭となり、内側に向いて右旋回して列の最後尾の者と七番目の者とならずにつないでいる手の下を潜り、一同輪の外へ抜け出て行く。この蛇行を何度か繰り返して後この一団は退場する。つまりこれは、



高松



イルカ (入鹿)

イルカが遊泳している様を模した所作である。

続いて白衣、裁着袴、襷掛けのふたりが登場するが、ひとりには剣先烏帽子をかぶり、もうひとりには長烏帽子である。ふたりとも閉じ扇を持っている(高松のふたりである)。aふたりは向かいあったり、背中合せになったりを繰り返しつつ跳び上がった後、東の隅に面する。東の隅に向かつてふたりは一緒にとび跳ねながら右手鈴を斜め上に出し(左半身となる)、また左手閉じ扇を斜め上に出し(右半身となる)、この左半身、右半身を二度繰り返す。そうして南の隅に面する。このaの一連の所作を南の隅、西の隅、北の隅、中央(北東の隅)と繰り返す。これはイルカを追いやる様を見せている。

15. 大黒舞 (2分)

これは大黒舞を擬したものである。素襖、裁着袴に剣先烏帽子をかぶったもの(大黒)が、右手に開き扇、左肩にナタ餅(雌竹にナタをかたどった餅をさしたものを)をかたがて微笑みながら登場し、駆けるような足どりで、右手の開き扇を上下させながら舞座を右旋回、左旋回、右旋回して後、東の隅に面して開き扇をひとあおぎする。以上の一連の所作を南の隅、西の隅、北の隅、中央(北東の隅)にも繰り返して退場する。



大黒舞

16. 山太郎 (6分)

山太郎は白衣の者が右手に鈴、左手に帯紐を握って登場し、舞座を例の如く右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回した後、続いて登場してきた白衣、翁面の者に紐の端をもたせ、



媼面



媼面 (左) 翁面 (右)

山を案内する。翁面の者が時に抵抗して紐を引っ張り返したりする。伊邪那岐命、伊邪那美命に擬した舞という。

17・山狂言（5分）

白衣、裁着袴、襷掛けのふたりである。ひとり（音どの）は剣先烏帽子をかぶって、右手に閉じ扇を持ち、左肩にナタ餅（雌竹にナタ形の餅をつけたもの）をかたげ、もうひとり（壱どの）は長烏帽子をかぶり、右手に閉じ扇をもち、左肩にヨキ餅（雌竹に斧の形の餅をつけたもの）をかたげて登場する。ふたりは右旋回、左旋回してから、東山、南山、西山、北山にと順に木を伐りに入るが、それぞれの山には目がまっ白で口もまっ白の神が居ることを発見し、びっくりして腰をぬかす（舞座に壱どの、音どのが交互にへたり込む）が、互いに相手の手を引いて助け起こす（この間両名の山入りの問答が繰り返される）。

続いてふたりは神前（北東隅）に坐し、それぞれのナタ餅、ヨキ餅を床面にたたきつけてから、双方開き扇を杯代わりにして酒を飲み合う（この時言句の唱えがかかる）。次いでふたりは立ち上がり、開き扇の杯を目の上にささげて左旋回して神前に一礼。その後それぞれのナタ餅、ヨキ餅をちぎって参拝者席に投げ込む。



山狂言

18・出来舞（12分）

これは農村部の豊穰舞である。耕作地の植え付けから収穫までの様子を模して見せる。まず白衣、裁着袴、襷掛けで鉢巻き姿の者がザルを持って登場し

て種子を蒔くさまを演じ、次いで同じ扮装で杵を持った者が登場して杵を搗くさまを演ずる。さらに女面女装の者が箕を持って登場し、精米するさまを演じた後、客席の参拝者に餅撒きを行う。



出来舞

19・二剣（19分）

白衣、裁着袴姿で右手に鈴、左手に襷を持った者が登場し、まず例の如く舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回し（この間立事の唱えがある）、次いで襷を掛けると、この者と同じ衣裳の合立（役）が二本の剣を持って登場して、それを先の者に手渡して退場する。先の者は、二本の剣を振りまわしながら東南北中央の五方に舞う。時に膝着きになったりして力強く二本の剣を振りまわしたりなどのさまざまな所作が展開される。この間五方のそれぞれに立事の唱えがかけられる。



二剣

(46頁の岐宿神楽の「二剣舞」の芸態記述を参照のこと)

20・獅子舞ししまい(11分)

まず赤衣、裁着袴、襷掛けで御幣を手にした鼻高面が登場し、獅子(二人立ち)を舞座に招き出し、鼻高面は昼寝する獅子を御幣で脅かしたり居丈高に対応する。この双方は格闘しあい、鼻高面が獅子の背中に乗りまたがる。

なお参拝者には、この獅子に頭を噛んでもらうと御利益があるとの信心が強く、泣き叫ぶわが子を積極的に獅子頭に差し出す親が多かった。



獅子舞

21・幣帛みでん(8分30秒)

これは舞い納め(神あげ)の舞である。狩衣に烏帽子姿の神主が右手に鈴、左手に表が紫色、裏が赤色の幣二本を持って登場し、右手の鈴を振りつつ舞座を右旋回三回、左旋回三回、右旋回三回をする。この間天井の錦蓋を上下させてその上の切麻を散らし落とす。神主は神前に向かい、右手の鈴を目の上にあげて言句を唱える。その後左手幣を目の上にあげて左旋回、右手鈴を目の上にあげて右旋回、左手幣を目の上にあげて左旋回した後右手の鈴を案の上に置く。

続いて幣を一本ず

つ左右の手に持ち、右旋回、左旋回、右旋回して東の隅に面する。次いで、a 東の隅の前で(言句の唱えがかかる)右手の幣を目の上にあげ



幣帛

て足を踏みつつその場を五回右旋回し、左旋回を三回と二回を行う。以上のaの一連の所作を南の隅、西の隅、北の隅、中央(北東の隅)にと繰り返す。

そして右左の幣を腰の前で交差させて振りつつ右旋回一回、左旋回一回、右旋回一回、左旋回をして神前に立ち、右手の幣を前に出しつつ東の隅に進んで一礼してまたもどり、左手の幣を前に出しつつ北の隅に進んで一礼してまたもどり、右手の幣を前に出して中央(北東の隅)に進んで一礼してまたもどり、そして退場する。

(三) 詞章、音楽

右に記した今回演じられた神楽演目の詞章は、「神楽舞方之本」(渡辺伸夫「長崎県五島神楽資料(一)」昭和六十三年発行『演劇研究』第十二号所載)から以下に引用して次頁から掲載する。

舞神楽で使用される主な楽器は鉦打ち太鼓(玉之浦神楽ではこれを「胴長太鼓」とも呼んでいる)を二つと笛(神楽笛)である。太鼓の曲の種類は六種類で、笛が五種類あるという。

*『神楽舞方之本』（弘化二年 白鳥神社所蔵）を渡辺伸夫氏が「長崎県五島神楽資料（一）」（昭和六十三年発行『演劇研究』第十号）に掲載したものを引用した。なお渡辺氏による凡例があるので、参考に記す。

凡例

- 一、適宜に改行し、句読点を施した。
 - 一、難読箇所及び破損箇所は□で示した。
 - 一、筆者の注は右傍に（ ）で示した。
- *なお分かりやすいように番号と見出しを付した。

1. 「市舞」

- 市の舞たちこと
- 一ちわやふる神のいかきに袖かけて前まつ開あまの岩戸
一やあちくまあわそらはとはあしるしいをそすうまへの人のまさことわなり
一まあきやけてとうくまここの神をさいたり白鳥宮の
やかてよるこび
一さあてもしいもおうとうことなしあゝまがわせにすむ
あいのやかてよるこび

2. 「左男舞」

- さを舞たちこと
- 一君かよの久しかるへきためしにわかねてぞうへしすみ
よしの松

3. 「村直」

- 村なをし
- 一抑々只今申てもうさく。今日のござい礼わ。日神月神
ひるこすさのうの命。ごむ類見属。そうじてはく千は
つかい。ごうがのうるくづに。至迄此しめの打にこの
うしうをたりたまへ。目出たやな。所も栄村もたち。
鯛取上て。宮勤しよな。

4. 「被」

- 被立事
- 一ちわやふる天津こやねの神代より。もとよりそめし。
われのわすれぞよ

5. 「御潮舞」

- 一ちわやふる天津こやねの神代より。もとよりそめし。
われのわすれぞよ

6. 「小弓」

- 小弓立事
- 一壺張の弓よりいはい此国の。悪ま鬼も跡にしりぞく
一東弓のうつよさわごにんばり。矢ぐさの長さわ。十三
速にむすんぶし。
一南弓長ゝにやなぐり。さら／＼てにすへたるわ事か
ゆうらあ／＼や
一西弓のうつよさわ五人ばり。矢ぐさの長さわ。十三速
にむすんぶし。
一北弓長ゝにやなぐり。さら／＼てにすへたるわ事
か。ゆうらあ／＼や
一この門にこけさあ。おかれさこけおかばすてん道し
の雲いあらせしや

7. 「四剣」

- 四剣立事
- 一手に取し。かたなわなにとおいふやん
もをんじ。つくして。ふどふくりかな。

8. 「長刀舞」

- 長刀立事
- 一をとにきく鬼にの劔を。ぬいでみたあゝ。みわ白がね
で。つくらさる者や
一東東方でんに悪あろ。悪もなし。廻問もなし。はあ
げどをはろをわ。立かたな。さいなんはろをわ長矢な
り

一南同断

一西同断

一北同断

10. 「折敷」

- をしき舞立事
- 一ふたち帯。たにかむすへしいゝ。ぬいどきのう。まあ
くらとかれん。君にとかせ

11. 「新塩」

- 荒塩舞
- 一抑々それ天大いしやうくんのま□まつらんとする
に。俄かに天下がしんづうす。是わいかなる御事ぞと。
千もんはかせに。はかないたまへば是わにつきふしや
うのしよきやうなりと申。其時きん利のみこきんりの
ほうしやハ遠き塩ちにゆき下り沖の塩おくみあげて式
本のちんしゆおせせていしやう大神へたてまつる。中
の塩おくみあげて六十余しうの大小じんぎびやうど
へ。たてまつる。へたの塩おくみ持て我家ちにかゝり
さんじんをきよめたまゑば天下太平。国土むりをに。
納けり。ちわやふる。此さかしはのもとにこそ。荒塩
神のひやうどなりけり。△たいこうになる
一はあ荒塩わだが打わ染し荒塩の神あかみわのう打わ染
けりや
但五方同断

13. 「三剣」

- みつろぎ
- 一抑々東方の。だいづらが。てんのうわ。すい不ろ神の
つろぎをもつて。甲乙の方よりきいたらんぬる悪まわ。
ふうせがが為なるや。
一南方のひろろくしやてんのうわ。ひむろといふつろ
きをもつて。丙丁の方よりきいたらんぬる。悪まわふ
せがが。為なりや。
一西方のびやくしやてんのうわ。すいふろたらぎのつる

ぎをもつて。かのへかの方より。きいたらんぬる。悪まわふせが^(多聞天王)んが。為なるや。

一 北方のたもんでんのうわ。べつしらしようにとつて。うつうの神いやすがごとく。だいづう天といふ。つろぎをつて。みすのへみつとの方より。きいたらんぬる。悪まわふせが^(主君)んが。為なるや。

一 中王のたいにち大しよ不動明王^(不動明王)を悪まをはらわんが為に。左の手にわびやく。しようはつかの繩を持。右の手にちへのりけんをもつてつゝ、のへつつのの方より。きいたらんぬる悪まわ。ふせが^(利根)んが。為なるや。一をとにきく。鬼のうつろぎを。ぬいでみたあ。みわしろかねでつくらあさあるう者や。

17 「山狂言」

山のきをげん

一 壺どふ殿わこさらぬかい。へいなんとをししやる。今音どののきよい被成そろをわあなたこなたの山に入木を切りませいとのきよいにてそろ。してそれ某わ俄かにハこわ者とぞんしねど神わ壺時の位と申。なにかをそろしをちつけいそぎ山にいうでわござらぬか。中くよござろ。貴所さきそれがさきあなたの能して木のよくして三拾式速くわつわめんした。なんとした。めまつしろ口まつしろ有者がとつてくをうどもうした。ごんごどふだん。東東方でんなこ、のつの命の御神なり。かの御がみのきげんでくさわる。なにがをそろしをちつけ。南山にいうでわないか。中くよござろ。貴所さきにそれさきあなたの能して木のよくして三拾式速くわつわめんした。なんとした。めまつ白口まつ白有者がとつてくをうともうした。ごんごどふだん。南南方でんなこつちの命の御神なり。かの御神のきげんでくさわる。何にがをそろしおつけ。西山にいうでわないか。中くよござろ。貴所さきそれがさきあなたの能して木のよくして三十式速くわつわめんした。何とした。めまつしろ口まつしろ有者がとつてくをうと申した。ごんごどふだん。西西方でん

なはにやす姫の命なり。かの御神のきげんでくさわる。なにがをそろしおちつけ。北山にいうでわござらぬか。中くよござろ。貴所さきそれがさきあなたの能して木のよくして三十二速くわつわめんした。なんとした。めまつしろ口まつしろある者がとつてくをうどもうした。ごんごどふだん。北北方でんな水はなめの命の御神なり。かの御神のきげんでくさわる。なにがをそろし。あなたこなたの山に入木を切ましていこう。たいぎを被成たほどに酒でも壺蓋被下ましくたろうでわ御座らぬか。中くよござろ。どのあたりがよござろうか。此あたりがよござろ。

一 此酒をめす人わ命もながく時もつくう命さいながらばとくさいつく目出度けり
但うたい

19 「二剣」

式劍立事

一をとにきく。をにの劍を。ぬいでみたあ、
みわ白かねで。つくらさる者や

一 東方せかいと申にわ。方もふせば方わこれ。きのへきのと。きをつかさどる御神なり。かの御神を本地として。御たちまします。神めいの御勝わ。六万六千六百六拾六神のしんめい。高きわ大神ひくきわ諸神。諸大明神な。よいのうにつてんにい。四方きつさいしように奉。なびこばなびけ。ひとかあたにや。なびこば神のうむりようなる者や。はあこの門にい。こけさあおかれさ。こけをかば。すてんどふしの。くもい、あ、らあせしや。

一 南方せかいと申にわ。方もうせば方わこれ。ひのへひのと。ひをつかさどる御神なり。かの御神を。本地して。御たちまします。神めいの御勝わ。七万七千七百七拾七神の神めい。高きわ大神。ひくきわ諸神。諸大明神な。よいのうにつてんにい。四方きつさい。しように奉。なびこばなびけ。ひとかあたあにいや。なびこば神のう。むりようなる者やあ。

はあ此もんにい。こけさあ。をかれさこけをかば。すてんどふしの。雲い、あ、らあせしや。

一 西方せかいと申にわ。方もうせばほうわこれ。かのへかのと。かねをつかさどる御かみなり。かの御神を本地として。御たちまします神めいの御勝わ。八万八千八百八拾八神のしんめい。高きわ大じん。ひくきわ諸神。諸大明神な。よいのうにつてんにい。四方きつさい。しようにいたてまつる。はあなびこばなびけ。ひとかあたあにいや。なびこば神のう。むりようなる者やあ。はあ此もんにい。こけさあをかれさ。こけをかば。すてんどふしの。雲いあ、らあさあや。

一 北方せかと申にわ。方もうせば方わこれ。みつへのみつのと。みつをつかさどる御神なり。かの御神を本地として。御たちまします。神めいの御勝わ。九万九千九百九拾九神のしんめい。高きわ大神。ひくきわ諸神。諸大明神な。よいのうにつてんにい。四方きつさい。しようにいたてまつる。なびこばなびけ。ひとかあたあにいや。なびこば神のう。むりようなる者やあ。はあ此もんにい。こけさあをかれさ。こけをかば。すてんどふしの。くもい、あ、らあせしやあ。

一 中王せかいと申にわ。方もうせばほうわこれ。つゝのへつ、のと。つちをつかさどる御神なり。かの御神を本地として。御たちまします。神めいの御勝わ。天にも拾万八千。地にも拾万八千。中にも拾万八千。合て三拾万この。めいの御神。高きわだいじん。ひくきわ諸神。諸大明神な。よいのうにつてんにい。四方きつさい。しようにい奉。はあなびこばなびけ。ひとかあたあにいや。なびこば神のう。むりようなる者やあ。はあ此もんにい。こけさあをかれさ。こけをかば。すてんどふしの。雲い、あ、らあせしやあ。

一 東東方でんに悪あろ。悪もなし。廻ル。問もなし。やあれ芝をれ。芝をきつて。馬を神通が。はへたる。たちを持て。こさんこうさんきる程にい。こがねが大神

きりつくる。こがねがだいじんきりつけられども。ぜんも悪もなし。

一南なんぼふてんに悪ある。悪もなし。廻(あ)間(ま)もなし。やあれ芝おれ。芝きつて。馬を神通かはへたるたちを持て。こさん。こうさん。きる程に。はあこがねのだいじん。きりつくる。こがねの大神きり付たれども。ぜんも。悪もなし。

一西西方でんに悪ある。悪もなし。廻(あ)まもなし。やあれ芝をれ。しばをきつて。馬を神通かはへたる。たちをもちて。こさん。こうさん。きるほどに。こがねのだいじん。きりつくる。こがねの大神。きりつけたれども。ぜんも。悪もなし。

一北北方でんに悪ある。悪もなし。廻(あ)まもなし。やあれ芝をれ。芝おきつて。馬を神通かはへたる。たちを持て。こさん。こうさん。きるほどに。はあこがねのだいじん。きりつくる。こがねの大神。きりつけたれども。ぜんも。悪もなし。

一はいやをとにきく。鬼のうつるぎを。ぬいでみたあ。みわしろかねで。つくらあさある者やあ。
一劔(あ)たつう。もろはの山のう。かげきよいい。はあ惣川の水にい。かげわあさあすう者やあ。

一南同断
一西同断
一北同断
一中王同断
一はいや。悪ならばあ。はあそこのきすざれよつかをさめ。はあ惣川の水にい。かげわあさあすう。者やあ。

21 「幣帛」

みてくらくいゆく八人レマセヨ今日ト知ラセバ玉ヨカニ小御ヲカイ子神モシヨウシンヤ

一東方せかいに方をもうせば方(む)をこれ甲乙木をつかさどる御神なり。かの御神を本地として御立たまわる神めいのう御勝わ六万六千六百六拾六神なり。高木わ大神(き)ひくわ諸神諸大明神のう、はあ今夜ハこよいのたいし

よ大しよとみてくらくいせ御伊勢御神せしめたあまあへばやあ、はなびこばなびけひとかたにい、なびくわ神のうむりようなるものうやあ。

一南方せかいに方をもうせば方(む)をこれ丙丁火をつかさどる神がみなり。かの御神を本地として御立たまわる神めいのう御勝わ七万七千七百七拾七神なり。高木わ大神(き)ひくわ諸しん諸大明神のう、こんやわこよいの大しよとみてくらくいせ御伊勢御神せしめたあまあへばやあ、はあなびこばなびけひとかたにいなびくわ神のうむりようなる者やあ。

一西方せかいに方をもうせば方(む)をこれ庚辛かねをつかさどる御神なり。かの御かみを本地として御立たまわるしんめいのう御勝わ八万八千八百八拾八神なり。高木わ大神(き)ひくわ諸しん諸大明神のう、はあこんやわこよいのだいしよ大しよとみてくらくいせ御伊勢御神せしめたあまあへばやあ、はあなびこばなびけひとかたにいなびくわ神のうむりようなる者やあ。

一北方せかいに方をもうせば方(む)をこれ壬癸水をつかさどる御神なり。かの御神を本地として御立たまわる神めいのう御勝わ九万九千九百九拾九神なり。高木わ大神(き)ひくわ諸神諸大明神のう、はあこんやわこよいの。だいしよとみてくらくいせをいせ御神せしめたあまあへばやあ、はあなびこばなびけひとかたにいなびくわ神のうむりようなる者やあ。

一中王せかいに方をもうせば方(む)をこれ戊己土をつかさどる御神なり。かの御神を本地として御立たまわるしんめいのう御勝わ天にも拾万八千ぎ地にも拾万八千ぎ中にも拾万八千ぎ合て三拾万ごうのうめいのう御神、高木わ大神(き)ひくわ諸しん諸大明神のう、はあこんやわこよいの大しよとみてくらくいせ御伊勢御神せしめたあまあへばや、はあなびこばなびけ人かたにいなびくわ神のうむりようなる者やあ。

○一みてくらくを手に取申てをがむにわ四方の神もなびきせさらん。やよけにもそふく。
一此殿のいぬいのすみ(いぬい)にわかめ七つ八つとゆうかみ風わ

ふかねとさならなみたつ。やよけにもそふく
一さかとのに酒をつくりてもはやりやちはらの酒ハ神(かみ)そめすらん。やよけにもそふく

○一さかづきの登と見へてくだらんハ神のじよごにめせばくだらん。やよけにもそふく

一たいたうたう成笛竹ハ なしように是迄ゆられきたことよきこかせにさそくれて おくのなみにゆられきた やよけにもそふく

一此殿のみなみ表のひろへんに いのちなかへのふてをさす

くこくのとみをまねくふてかな やよけにもそふく
一此殿のミ(ミ)なミ(ミ)をものへのひろゑんに 色よきにようたいをわします おつとわたれかとうたれば まつのうらばのとみをとこ やよけにもそふく

○一かみたなにくわんぢよをまします神がみをもとのやしろにおくりたてまつる

六 由来

白鳥神社は、同社境内の社司碑によれば、永正七年（一五一〇）三月に宗角惣（対馬の宗家十一代）が対馬より当地に渡来し、領主（玉之浦納）より神職を命じられ、同人が第一代神職となった。今日の宗邦治氏は第二十四代目の社司である。

白鳥神社所蔵の文書によると、歴代の五島藩主は白鳥神社に諸種の祈願をして神楽を奏上している。例えば、宝永三年（一七〇三）藩主盛住の祈願成就につき、家老たちが白鳥宮へ一石を寄進し、太鼓手拍子大小鈴等を調べて、毎年正月二十一日に市神楽を奉奏せしめた、享保七年（一七二二）鰯不漁のため、白鳥宮へ一石を寄進し、毎年十一月十五日に市神楽を奉奏せしめた、安永六年（一七七七）の藩主盛運の妹の出府につき海上安穩を祈願した、文化六年（一八二二）の盛運の病氣立などなどの願文が所蔵されている。由緒のある五島神楽である。

なお次項七に記すように、今日下五島方面の神楽の中でも神楽の伝承体制がもつともしつかりとしている。

七 変遷

当玉之浦神楽は、平成十三年度五島神楽が文化庁より記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財に選択された当時に比べて、次のような状況であった。

（一）平成十四年発行の『五島神楽の研究』の記載によれば、弘化二年（一八四五）の「神楽舞方之本」所載の全三十三番中現在二十番程度伝承されているとのことであったが、平成二十二年の例祭では二十一番上演されていたので、おおむね変わっていないと見られる。ただ平成十四年当時に比べて、「神通」と「露払」が、立事、言句が覚えきれないという理由で演ずる機会が少ないとのことである。他方当時は出来ないと言われていた「三剣」「二剣」が上演されていた。

（二）実演者として宮司、社人以外に白鳥神社神楽保存会会員（会員総数十九人）も協力しており、すくなくともあと二十年間は白鳥神社神楽は安泰であろうと当該保存会々長は自負していた。

（三）但し神輿の担ぎ手の陸尺がこのところ年々減少傾向にあり、とても懸念されるとのことであった。また神輿の町巡りの際祈願を申し出る家も減少傾向にあるとのことであった。

八 所見（当神楽の特徴）

五島神楽特有の「合立（あいだち）」の概念

当白鳥神社神楽では、前記五の（二）の「御潮舞」「四剣」「長刀舞」「新塩」「二剣」の記述において言及したように、合立（役）の登場という五島神楽独特の演出方法が現実はまだ可動しており、この点は神楽研究にとって注目すべきことと思われ、その広がりや意味することについて以下に述べたい。なおこの芸態については吉村政徳氏がすでに注目され、次のように説明していた（『五島神楽の研究』）。

「合立」はアイダチと読み、舞人を補佐する役の者をいう。例えば「四剣」の舞の時に、本舞人は短剣二本と鈴を持ち舞い始めるが、途中で補佐役の舞手が残りの短剣二本を持って舞に加わり、しばらく二人の連舞があつて、やがて補佐役の舞人が本舞人にその短剣を渡して退く。

（一）合立の広がり

まず「合立」が当白鳥神社神楽をはじめとして、下五島から上五島に分布する五島神楽全体にわたって伝承されてきたものであることを説明したい。五島神楽各地には合立が次のように伝承されてきた（注「現行」と記す演目は平成十四年発行『五島神楽の研究』の記載により、各神楽詞章本に所載されている）。

る合立の存在する演目の中で、平成十四年当時合立が活躍していた演目。

○玉之浦神楽（白鳥神社神楽）―『白鳥神社神楽舞方之本』所載

新塩、御潮舞（現行）、四剣（現行）、一剣、長刀舞（現行）、八千久万舞、將軍舞、二剣（現行）

○岐宿神楽（厳立神社神楽）―『厳立神楽舞本』所載

新塩舞（現行）、三剣舞（現行）、舞台相伝舞、八千熊舞、四剣舞（現行）、二剣舞（現行）、天神舞、島求舞（現行）、薙刀舞（現行）、宝剣舞（現行）、將軍舞（現行）

○福江五島神楽―『五社神社神楽本』『五島四十八番舞神楽』所載

三剣舞、舞人外道切、島求（現行）、剣舞（二剣）、神図舞（現行）、將軍舞、宝剣舞（現行）、山之狂言、山之下（現行）、長刀舞（現行）、戸隠舞（現行）

○富江神楽―『富江神社舞歌』『七嶽神社御舞歌』所載

三剣（現行）、蒙古裏（現行）、柴取り（現行）

○宇久神島神社神楽―『神楽歌』所載

神頭舞

「合立」は、平成十四年当時に現行と記されていた演目のものが、例えば岐宿神楽のように近年は、一番も実施されていないように段々実演されなくなっている。それは社人実演者の今日の急激な減少に起因しているようである。あるいは合立の簡単な端役機能への軽視なども関わっているのかもしれない。

ところで右に見たように合立は、下五島地域に伝承されているのに対して、上五島地域にはこれまで確認されなかった。しかし次のようなことから、かつては上五島神楽においてもこれは存在していたと推察される。もとより上五島神楽は歴史的に下五島の富江神楽が元になっていたものであり、その富江神楽では右記のように合立の出る演目が三番伝承されているのだ。さらに、現在の上五島神楽の「山下舞」に「トイ」と表記される役の者が登場して、鬼神役と問答をしているが（『上五島神楽』上五島神楽保存会 平成十八年発行）、こ

れは下五島の方の合立の痕跡かと思われる。というのは、この「山下舞」と筋立てがほぼ共通している福江五島神楽の『福江五島神楽本』（福江五島神楽保存協会 平成十五年発行）所載の演目「山之下」では、この上五島のトイに相当する役を「合立」と表記している。ちなみにこの福江の神楽の「山之下」に類似する下五島の岐宿神楽の「山下舞」では、これが荒平を招き出して問答する「招」と表記されている（『五島岐宿神楽の継承』五島岐宿神楽保存会 平成十六年発行）。また上五島神楽の「神図」に「問」と記される役の者が登場して鬼と問答するが、下五島の福江の五島神楽の「神図舞」では、その役は合立が行なっている。

五島神楽のこの「合立」は、他県の神楽にも広がりのある芸態のようである。例えば、この五島神楽の「合立」と全く同じ概念は存在しないようだが、類似の演出法は、宮崎県の椎葉神楽や諸塚神楽あたりには存在している。椎葉村の梶尾神楽での類似すると思われる演出法に次のような例がある。

「鬼神」 鬼神を舞台に招き入れる役が登場する。（直前の演目「稲荷神楽」

の舞い手が担当）

「大神（中）」 最初に唱歌を言い、正式の四人の舞い手に大神幣を配って退場する役の登場がある。

「芝荒神」 芝荒神を舞台に招き入れる役の登場がある。（めくりに演者名

は記されない正式の舞い手でない者が担当）

「綱荒神」 綱荒神を舞台に招き入れる役の登場がある。

また諸塚（戸下）神楽の右と類似の役について渡辺伸夫氏は次のように記している（日本青年館 平成五年発行『民俗芸能』七四号所載の「諸塚（戸下）神楽」。

仮面の舞には必ず面連れ（合舞）という素面の導き役がつく

さらにまた、愛知県の花祭りにも同様の端役の活躍する演出伝承がある。山見鬼、柿鬼、茂吉鬼といった鬼面のモノの登場や、ひの禰宜、巫女、翁といっ

た面のモノの登場の折りには、伴鬼や伴面の登場が本体の先駆けとしてあり、また榊鬼面や翁面登場の場面ではそれらの検め役が出て来て掛け合い問答をし、山見鬼、榊鬼の先導役としての松明持ち役も登場する。これらの役割機能は次項で述べるように五島神楽の合立の機能に通じているように思われる。

(二) 合立の意味は何か

先述のように「合立」の機能は、現在はあたかも歌舞伎舞踊の後見役みたいな舞人への持ち道具の手渡しといったことしかしていないが、かつては演目の主役の舞人（鬼神その他）ともっと関わる働きをしていたらしいことが神楽詞章本の類いから推察される。岐宿巖立神社宮司（阿比留正氏）が同社の長老社人の意見として回答してくれた手紙を紹介すると、「合立とは、舞の途中で舞（舞場）の中に入り、舞人に交じって舞を舞い、言句（言葉）を言う（発する）者をいう」と、舞人とのやりとりの言い回し、問答もなされることを指摘している。この事例としての演目は、岐宿神楽の「將軍舞」、福江五島神楽の「島求」「神図舞」、「山之下」ほかが該当する。また福江五島神楽の天満神社宮司の森彪氏の回答を紹介するが、この合立は能狂言との近づきを感じさせる。『福江五島神楽本』に所載の「山之狂言」の中で、「合立」が舞人と問答をしていて、さらにこれが「能狂言に似る」との注釈がついている。そこで筆者から森氏に、合立は問狂言をも演ずる狂言師のようなものではなかったかと質問すると、「現在では伝承されていない演目であるが、そのように解します」との返事であった。この演目以外にも狂言演目として「將軍の狂言」もあり、あるいは白鳥神社神楽の「神通」では、福江五島神楽の「神図舞」の「合立」役のことをこちらでは「あど」という能狂言のアドに通ずる表記をしている。このように能狂言の影響を思わせる演目や演出法の存在あるいは「合立」の概念の意味がひそんでいるのかもしれない。

他方、愛知県の花祭りの事例では、三種の役の者が登場しそれぞれが機能役割を多少異にしている。伴鬼、伴面は本体の前に登場して先触れの働きをし、本体の登場後は本体のまねをしたり、本体退場後にも居残って所作する。榊鬼

や翁の登場時の検め役は「もどき」と称され、本体の氏素性を尋たりの問答をする。また山見鬼や榊鬼の先頭に立って松明をかざす者たちは、暗がりの中の本体の舞庭への入場の道案内役である。これらを担当する者は、伴鬼、伴面のモノたちの場合は本体の扮装をくずした形で着装し、榊鬼、翁のもどき役は正式の着装のない関係者であり、松明役は当該演目の一番手前の演目にて舞い終えた者があたる。このように端役的存在であることはまさに「合立」と同じである。これらはかつて折口信夫が例えば「能楽における「わき」の意義」において言及していた「もどき」とか「ワキ」の諸相を示しているものではなからうか。

五島神楽全般に、舞人の文句を「立言^{たちごころ}（事）」と言っているが、この「合立」の「立」とはこのことに関連していて、かつそれがバイプレイヤー的な存在だから「合」をくっつけたかたちで言い伝えているのかも知れない。いずれにしても右にみたように神楽、芸能研究にとって注目すべき「合立」であり、この伝承が消失して行かないことが強く望まれる。

岐宿神楽きしくかぐら〔いわたてじんじゃ 巖立神社〕

星野 紘

一 名称

岐宿神楽（巖立神社神楽・五島岐宿神楽）

二 伝承地

長崎県五島市岐宿町

巖立神社と兼務社のある地域

＊以下に平成二十二年度現地調査を実施した巖立神社例大祭における岐宿神楽の報告をする。

三 期日・場所

巖立神社例大祭

＊平成二十二年度は九月十九日、二十日（但し近年までは九月十五日、十六日。かつては旧暦の八月）。

九月十九日（日） 一二時三〇分より巖立神社にて神幸祭が行われ、祭式次第の後、太鼓奏打の「御神楽」があり、「伊智舞」が舞われた。引き続き神主による神輿への御霊移しがあつて、神輿の村巡りが行われた。

九月二十日（月） 十四時過ぎより神社舞殿（幣殿）にて神楽が舞われた。また右の例大祭以外にも春秋の彼岸などの神行事の折りに神楽数番が舞われる。



巖立神社鳥居



巖立神社本殿



巖立神社社叢

四 伝承組織

（一）実演者

旧来巖立神社には宮司（阿比留正氏）のほかに十二戸の世襲の社人（社家）と、ほかに神子（みこ）の家があつて当該神楽を維持伝承してきたのだが、近年は減少している。平成十四年発行の『五島神楽の研究』の記載によれば、神楽実演者は社人の家が六戸で社人九人、それに小中学生の神子と減っており、さらに今日では社人の家五戸七人と神子二人（民間人）となっている。このような状況にかんがみ平成十四年に民間人も実演者に加わる「五島岐宿神楽保存会」が結成されて、三番の演目が復活された。ところがその後、に広域市町村合併の影響で、三名の若手会員が脱退してしまい、さらに結成時の同保存会々長の逝去があつたりして、保存会活動はかすかな活動状況にあるという。

（二）参与者および祭りの経済

岐宿本郷内の氏子は約四百戸（キリシタンの家などは除く）で、郷内が八地区に分かれてそれぞれ宮総代を選出（二年交替）して祭りの氏子側のことを取り仕切っている。神社のお札料と神輿の町巡りの際に祈願を要望した家（本年



は百四戸あり）からのお初穂料等が祭りの収入で、特に寄付金を集めるということとはしていないとのこと。もし経費がそれをオーバーした場合には、各宮総代がそれぞれの地区の区会費からの支援を仰ぐという（現総代長柳田勲氏談）。

五 行事（芸能） 内容

（一）次第・日程

①九月十九日 神幸祭と神輿の町巡り

当日一二時三〇分より厳立神社舞殿（幣殿）にて神幸祭が行われた。神殿に面して神主および祭事補佐役の社人が座し、その背後の舞い舞台の神前に向かって右側に神子、社人などが座し、左側に宮総代などが座して、祭式次第が執り行われた。その終わりに太鼓奏打の「御神楽」が入り、神子による「伊智舞」が舞われた。引き続き神主による神殿から拝殿に置いて



神幸祭での伊智舞



村巡り一行

ある神輿への御霊移し^{みたまうつし}が執り行われた。社殿入口の階から神輿を外へ運び出し、鳳凰などの金飾りを取り付けた後町巡りへの出発となった。担ぎ手は沢山集まっていたが、出



村巡りへの出発前



神輿を採む

立前の宮総代からの挨拶のなかで、村巡りが終了する夕方までは途中でビールなどを飲食せぬようにとの注意があった。おそらく前年の村巡り中に顔を切るといった負傷者が出たことが背景にあったようだ。

神社参道から鳥居をくぐって左折し境内の外へ出て行つた、猿田彦、幣、神社旗、祭り旗、弓矢刀、高張提灯、神輿およびその担ぎ手、神主、神子、社人、宮総代その

他の一行は、平成十二、三年頃までそこに仮宮が架設されていた空き地に至る。一行はここを三周した後、担ぎ手の若者たちが神輿を数度上にあげて採む。そして村巡り開始となる。村巡りの間、祈願を申し出た家の前で次のような執り行ないがある（これを「神楽をあげる」と称している）。神輿が当該家の門前に止まると、当家から米八合、塩八合、酒八合、肴少々とお初穂などを入れた長方形の盆（モロブタ）を持ってきて神輿にお供えする。すると神主が神輿を拝し、祝詞^{のりと}を奏上する。この間神主の背後で神子が「伊智舞」を舞う。終わると総代は金幣を持って家に入り、当家の者の頭や身体を金幣でなでる金幣拝戴の儀が行なわれる。このようにして夕刻まで村巡りをする。その後、厳立神社にもどり、御着祭があつて「伊智舞」が舞われる。



神楽をあげる



町辻での伊智舞



村巡り

②九月二十日 神輿前での祭典

本来なら仮宮の神輿に対しての祭儀であるが、今日では厳立神社の中で執り行われるかたちになっている。九月二十日午後二時過ぎより、神殿前に安置された神輿の面前、舞座近くに五色幣を横一列に立て並べた案が置かれていて、その前で祭典が執り行われる。案上には神前に向かって左より緑幣（東）、赤幣（南）、黄幣（中央）、白幣（西）、紫幣（北）が立て並べられた前に五組の御飾餅、それに紅白十二組の重ね餅や日形月形の餅が供えられる。この五色幣案の拝殿より方一間二畳の広さの板張りの舞座（「舞い舞台」と称している）が造りつけられており、その天井に約七十六センチ四方の赤い錦蓋が吊るされている。錦蓋の中には左右に日と月が描かれており、その中央から二十七センチくらいの赤布が垂れている。また錦蓋の上部には色とりどりの切り紙を載せ

ていて、「^{あめのうずめまい}天受売舞」と「^{みでぐら}御幣帛」の上演の時に錦蓋をゆすってこの切り紙をちらし落とす。なお二つの鉦打ち太鼓が舞座の神前に向かって右側に並べ置かれている（五、六年前までは参拝者の目の前の位置に置かれていて舞が見にくかったために場所を現在の位置にしたという）。なお二つの太鼓の間には鈴二本と米八合が入った一升枡一つを載せてある台箱が置かれている。



舞座



錦蓋



五色幣案

祭典の次第は、まず五色幣案前で神主による祓い詞と大麻での祓い、祝詞奏上、宮総代などによる玉串奉奠が行なわれた。引き続き太鼓奏打の「御神楽」があり、五色幣案の前に採り物置き台が置かれ、この途中で社人が神葉で舞道具を祓う次第が入った。この次第は他の五島神楽の地では行なわれていないとのこと。その後神子による「伊智舞」が舞われた。これら一連の次第の後、神主による唱え詞があつて、社人たちが、拝殿に居並ぶ参拝者に向かって餅まきを行った。



伊智舞



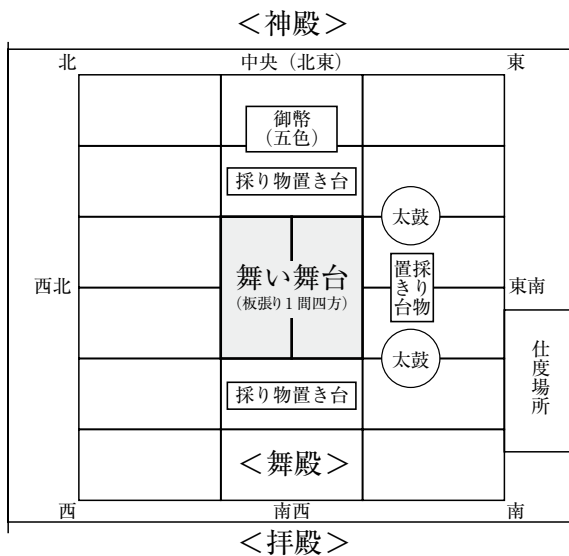
神主の唱え詞



餅まき



御神楽



岐宿神楽「舞い舞台」図

（二）演目・芸態
九月二十日 神楽（舞神楽）の次第内容
以下に当日演じられた神楽（舞神楽）の各演目について、詳細に記述する。
演目名、衣裳扮装、採り物、芸態などの紹介であるが、ことに主たる記述となる芸態が、舞い手は、舞い舞台の東南西北中央の五方角、それに南西、西北、北東、東南、中央の五方面を位置取りながら、右旋回、左旋回したり、十字に所作したり、あるいは対角線に所作したりして様々な図形を踏みまわる。これらの方角、方面の記述が以後の記述の中に繰り返し出てくるので、読み進む上で便利のように、あらかじめここに舞い舞台の方角方面の参考図を掲げておく。

1. 伊智舞（市舞、市神楽とも）（2分）

これはアメノウズメの舞とされている。千早、緋袴（十年位前までは赤色のフンゴミ）の神子が右手に鈴を持って登場し、南西の位置に立つ。舞座を右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回と繰り返す。神前に面して佇んだ後、また前同様の右旋回、左旋回を繰り返して、退場。

※注 この「伊智舞」は右に記した祭典の中で舞われたとともに、祭典に続く舞神楽の次第に入ってから、3の「坐解除舞」の次にも再度舞われた。



伊智舞

2. 天宇受売舞（1分30秒）

これは天照大神が天岩戸にこもった折、岩戸の前で宇受売命が舞った故事にもとづく舞である。この演目が始まる前に舞座の北東隅の五色幣案前に榊葉二本と葛の輪を載せた台が置かれる。最初、社人（宮司）が狩衣、冠姿で登場し、南西隅から北東隅の採り物置き台前に進み、榊葉を両手に採り、葛の輪を左肩に掛けて、舞座を左に半旋回して南西の隅に至り、次にまた台の前に進み出て榊葉で台を三回たたく。今度は右に半旋回して南西の隅に至り、台の前に進み、榊葉で台を三度たたく。続いて社人は榊葉と葛を千早、緋袴の神子に手渡し退く。神子は葛を右肩に掛け、両手に榊葉を持って先の社人の所作と同じことを繰り返す。



社人（宮司）の所作



神子の所作

3. 坐解除舞（7分）

これは舞座の魔を祓い清める舞である。狩衣に袴、烏帽子姿で、右手に鈴、左手に赤幣、黄幣を持ったひとりが登場し南西に立つ。まず右手鈴を振りつつ舞座の右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回を行う。次に足踏みしつつ右旋回一回、左旋回一回、右旋回一回する。さらに右手に赤幣、左手に黄幣を持ち右旋回一回、左旋回一回、右旋回一回を行う。その後、西北に立つて、黄幣を東南の方向へ押しやるように前進し、舞座真中にて右旋回して北東に立つ。次いで今度は赤幣を南西の方向に押しやるようにして前進し、真中で左旋回して東南に立つ。次は黄幣を西北方向に押しやるように同様の所作をした後南西に立つ。また赤幣を北東の方向に押しやるようにして同様の所作をする。最後は赤黄二本の幣を腰の前で交差させる動作を繰り返しつつ右旋回、左旋回、右旋回して退場。



坐解除舞

4. 左男舞（2分30秒）

これは天照大神が岩戸から出てくることを願って、男の左男も下界を舞い清める舞である。右手に鈴、左手に閉じ扇を持ったひとりが登場し南西に立つ。



左男舞

その舞い方は、1の「伊智舞」と同様である。

5. 新塩舞 (5分) あらしおまい

これは東南西北の四方を祓い清める舞である。狩衣、烏帽子姿のひとりが右手に鈴、左手に閉じ扇を持って登場し、南西から舞座を右旋回二回、左旋回二回、右旋回二回を行う。続いてa南西から東南、舞座の真中、南西へと舞座を半分左旋回しその場で左小旋回一回し、次に南西から西北、真中、南西へと舞座を半分右旋回しその場で右小旋回一回、南西から東南、真中、南西と舞座を半分左旋回し、その場で左小旋回する。次に右手の鈴を台の上に置きaの動作を繰り返すが、その際左手の扇を開いてその要の所を持ったり、扇の上辺を持ったりする。続いて扇が変わって塩入りの折敷を持つての所作へと移る。まず舞座を半分右旋回し、次いで半分左旋回する。続いて真中に進み、そこで右旋回して南西方向に面し、b左膝をついて折敷を左側後方へ引き、右膝をついて折敷を右側後方に引き、左膝をついて折敷を左側後方へ引き、このbの一連の所作を西北方向に面し、北東方向に面し、東南方向に面して繰り返す。

さらにこのbの所作のひと流れを、折敷の塩を右手でつまむかたちでもう一度繰り返す。終わりに太鼓の拍子が細かく刻まれて、左手に閉じ扇、右手に折敷を持つて舞座を右旋回、左旋回して退場。

6. 折敷舞 (8分30秒) おしきまい

これは折敷を左右の手に一枚ずつ持ち、転々起伏しながら舞うもので、アメノウズメが岩戸の前で三宝を持って舞ったという故事にもとづくものという。



新塩舞

この舞い方は大変複雑に展開する。白衣、裁着袴姿で右手に鈴、左手に閉じ扇と赤檮を持ったひとりが登場し南西に立つ。まず例のごとく舞座を右旋回、左旋回、右旋回するが、一回目は右手の鈴を振りつつ、二回目は左手の閉じ扇を目の上にあげて、三回目は開き扇を目の上にあげて行なう。続いて檮を両手にささげ持ったまま舞座を右旋回して西北の位置に立ち、aその場から両手の檮を下から上にすくい上げるようにしながら東南方向に進んで舞座真中に至り、そこで左旋回、右旋回、右旋回する。このaの一連の所作を北東から南西の方向に面し、東南から西北の方向に面して繰り返す、その後南西にて檮を両肩に掛ける。

続いては、折敷を左右の手に持つての所作を以下のように幾折りかの変化を見せつつ展開するが、この間両手の折敷を落下させないようにする点が見どころである。左手に二枚の折敷をとつての所作から、両手に一枚ずつ持つての所作へと進み、まず、b西北に立ちその場で右旋回、左旋回、右旋回し、東南の方向に面して、左膝をつき右手の折敷を下から上にあげて左下へ振り降ろし、右膝をついて左手の折敷を下から上にあげて右下へ振り降ろし、左膝をつき右手の折敷を下から上にあげて左下へ振り降ろす。このbの一連の所作を北東から南西方向に面して、東南から西北方向に面して、南西から北東方向に向かって繰り返す。

次にまた、c西北に立ち、両手の折敷を腰の辺りで抱えるように持つてその場で右旋回、左旋回、右旋回し、東南の方向に面して両手の折敷を共に上から右下へ振り降ろし(左右の手の平が裏返る)、上から左下へ振り降ろし、上から右下へ振り降ろし、引き続き右手折敷を上へ上げてから左下へ振り降ろし、左手折敷を上から右下へ振り降ろし、右手折敷を上から左下へ振り降ろす。また右手折敷を上へあげてから左下へ降ろし、左手折敷を上へあげてから右下へ降ろし、右手折敷を上へあげてから左下へ降ろす。以上のcの一連の所作を北東から南西の方向に面しても、東南から西北の方向に面しても、南西から北東の方向に面しても繰り返す。

最後に、南西に立つて、両手の折敷を腰の辺りで抱え持つようにしながらそ

の場で右旋回、左旋回、右旋回し、北東方向に面して右手の折敷を上から右下へ振り降ろし（手の平が裏返る）、左手の折敷を上から左下へ振り降ろし（手の平が裏返る）、続いて右手折敷を右下からすくいあげるようにして上にあげ、左手の折敷を左下からすくいあげるようにして上にあげ、また右手折敷を上から右下へ振り降ろし、左手折敷を左下へ振り降ろし、この右左をもう一度繰り返した後、両手に折敷を持つまま南東から西北方向へ向かって右肩を入れて前へひと転び、南西から北東方向に向かつて同様に右肩を入れて前へひと転びして、退場する。



折敷舞



7. 四剣舞 (6分)

これは剣による祓いの舞である。白衣に裁着袴姿のひとりが右手に鈴、左手に赤櫓を持って登場し、まず南西から右手鈴を振りながら舞座を右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回をする。続いて左手の櫓を目の上にあげて左旋回二回と左小旋回一回、右手の鈴を目の上にあげて右旋回二回と右小旋回一回、左手櫓を目の上にあげて右旋回二回と右小旋回一回する。続いて櫓を両手に捧げ持って舞座の右旋回二回と右小旋回

一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回を行った後櫓を両肩に掛ける。

この後、両手にそれぞれ二本剣を持って幾折りかの変化した所作が行なわれるが、大変複雑なので、おおまかな変容ぶりのみを記しておく。まず南西に立つて北東方向に面して両手の剣を一緒に右下からすくい上げるようにして上から左下へ振り降ろす、左下からすくい上げるようにして上から右下へ振り降ろし、右下からすくい上げるようにして上から左下へ降り降ろす（この所作を、東南から西北の方向に面して、北東から南西方向に面しても繰り返す）。次にa 西北に立つて両手の二本剣を腰の前で何度か交差させる所作から、東南方向に面して踏み込むと同時に左膝つき右立て膝の姿勢となり、右手、左手をそれぞれ前後に振ることを繰り返す、続いて立ちあがり両手の剣を左下から上に振り上げて右下へ降ろし、右下から振り上げて左下へ降ろし、左下から上に振り上げて右下へ降ろす。また、回転させながら前後に振り回す手などがある。このaの一連の所作を北東から南西方向に面して、東南から西北の方向に面して、南西から北東の方向に面しても繰り返す。

最後に南西に立ち、北東の方向に向かつて右手、左手の前後の振りを何度か繰り返した後、両手に二本剣を持ったまま右肩を入れて前にひと転びし、また北東から南西の方へとひと転びして、退場。



四剣舞

8. 荒平舞 (5分30秒)

荒人神の別称をもつ荒平は随時姿を現わして靈威を発揮すると信じられているが、この舞はこの荒平が身をもって国を守る様子をかたどったものとされている。当演目開始前に、五色幣案の手前、舞座神殿より縮太鼓とバチがおかれる。赤い上衣に裁着袴、赤い面にシヤグマをかぶった荒平が左右の手に白幣を持って登場する。a 南西に立って両手の白幣を腰にあてて舞座の右旋回一回と右小旋回一回を行い、その後左旋回して東南に至りその場から舞座を左旋回一回と左小旋回一回し、続いて東南から左右の白幣を前に出して右旋回して西北に至る。そこから東南に向かって白幣を上下に振りつつ踏み込み、舞座真中で左膝つき右膝立てとなって両手の白幣を上下に振ること七回、その後南西に移り行く。このaの一連の所作を、南西から始めて北東に至り、北東から南西方向に面して左膝つき右膝立ての白幣に上下振り、南西から始めて東南に至り、東南から西北方向に面して左膝つき右膝立ての白幣の上下振り、南西から始めて南西にもどり、南西から北東に面して左膝つき右膝立ての白幣の上下振りを繰り返す。

最後に、両手の白幣を腰に差して、空手で舞座の右旋回一回と右小旋回一回、左旋回一回と左小旋回一回を行った後、南西から北東の縮太鼓の所へ行ってバチをとりあげ、そのバチを持って舞座を右旋回一回と小旋回一回、左旋回一回と左小旋回一回

回を行い、太鼓に向かって左バチ右バチと交互に何度かたたき、五色幣案前に置かれていた縮太鼓を取りあげて、退場。



荒平舞

9. 山太郎舞 (5分30秒)

これは伊邪那岐、伊邪那美の二神に擬した舞で、おきな 嬬面、おきな 翁面のふたりが登場し、翁が白幣を五方に投げ献じて山の権現様に奉るものである。まず白の着流しに嬬面、シヤグマの嬬ひとり、右手に鈴、左手に赤櫛を持って登場する。南西に立ち右手鈴を振りつつ舞座を右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回を行う。続いて北東に向かって一礼した後、右手鈴を振りつつ左手の櫛を腰に置いて左旋回二回と左小旋回一回、右手鈴を振りつつ左手櫛を目の上にあげながら右旋回二回と右小旋回一回をする。続いて南西から樂屋の方に向かって櫛を投げる。すると櫛をたよりに、赤の上衣、黒の袴、翁面にシヤグマのモノが白幣五本を腰に差して登場し、北東に向かって一礼し、自らが先頭に立って赤櫛の一方の端の嬬を引っ張るようにしながら舞座を右旋回五回する。この旋回の間に腰の白幣を一本ずつ抜きとりそれぞれ東から西へ、北から南へ、西から東へ、南から北へ、さらに南西から北東(中央)へと投げる。最後に翁はその場で右旋回一回して、嬬をつかまえてその場に転がし、尻をひたたきしてから退場する。嬬もやおら立ちあがり北東に向かって一礼して退場。



山太郎舞

10. 薙刀舞 (6分30秒)
なぎなたまい

これは暗闇にまかり出てきた悪魔を薙刀の威力で追い払った故事にもとづいての舞である。白衣、裁着袴姿で右手に鈴、左手に赤櫓を持ったひとりが登場する。まず南西から右手鈴を振りつつ舞座を右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回をする。続いて左手の櫓を目の上にあげて左旋回二回と左小旋回一回、右手の鈴を目の上にあげて右旋回二回と右小旋回一回、左手櫓を目の上にあげて左旋回二回と左小旋回一回をした後、櫓を両肩に掛ける。そして南西から北東に向かって一礼した後、舞座を右旋回一回と右小旋回一回してから舞座の真中に進み出る。

真中の位置から、a 南西に面して、両手の薙刀を右下から振り上げて、上から左下へ振り降ろす（この間左右の足の位置の前後の入れ替えがなされる）、両手の薙刀を左下から振り上げてから右下へ振り降ろす（この間右左足の位置の前後の入れ替えがある）、両手の薙刀を右下から振り上げてから左下へ振り降ろす（この間左右の足の位置の前後の入れ替えあり）。そしてその場で右旋回、左旋回、右旋回をする。このaの一連の所作を引き続き、真中から西北に面して、真中から北東に面して、真中から東南に面して、真中から南西に面して、さらに真中から北東（中央）に面して繰り返しされる。

続いてはb 西北に立ち、東南方向に面して右記aの所作をしてから東南方向に進み出て、右膝つき左立て膝の姿勢で両手の薙刀を右下から上に振り上げ、次いで左膝つき右膝立ての姿勢に変わって両手の薙刀を上から左下に振り降ろ



薙刀舞

し、右膝つき左膝立ての姿勢から両手の薙刀を左下から上にあげて、右膝つき左立て膝の姿勢に変わって両手の薙刀を右下へ振り降ろし、右膝つき左立て膝の姿勢で両手薙刀を右下から上にあげて、左膝つき右立て膝の姿勢に変わって両手の薙刀を左下へ振りおろす。以下にこのbの一連の所作を、北東に立って南西に面し、東南に立って西北に面し、南西に立って北東に面して同様に繰り返し、退場。

11. 宝剣舞 (6分30秒)
ほうけんまい

これはスサノオの命が八岐於呂智の八尻を割いて得た天叢雲剣を神にささげる故事にもとづく舞である。狩衣に大口袴をはき、着面、鳥兜姿のひとり（宮司）が右手に榊葉を持って登場する。南西に立って北東に向かって一礼し、a 右足を滑らすように斜め前方に出すとともに右肩を入れるようにして一歩前へ進み、左足を滑らすように斜め前方に出すとともに左肩を入れるようにして一歩前に進みと、この右左の動作を繰返しつつ、舞座を右旋回二回した後西の隅に立つ。続いて、西の隅から東の隅に向かって前進して榊葉で東を祓い、このaの一連の所作を、以下北の隅から南の隅に向かって、南の隅から北の隅に向かって繰り返し。続いて南西から北東に向かって前進し手の榊葉を五色幣案前の台の上に置く。

続いてまた西の隅に至り、b 西の隅から東の隅に向かって



宝剣舞

前進して両手をパツと開くようにして前方に出し、また西の隅にもどり、そこから左足の滑り出しと左肩を入れての前進、右足の滑り出しと右肩を入れての前進、この左右の動作を繰り返しつつ左旋回して北の隅に至る。以上のbの所作を北の隅から南の隅に向かって、東の隅から西の隅に向かって、南の隅から北の隅に向かって、さらに南西から北東（中央）に向かってと繰り返す。続いて南西から北東に向かって前進し、台の上の宝剣を手に採り西の隅に至る。

続いてc西の隅から東の隅に向かって進み出て左膝つき、右膝つき、左膝つきを行い、立ち上がって右足滑り出し右肩入れの前進、左足滑り出し左肩入れの前進の右左の所作を繰り返した後南の隅に立つ。以上のcの一連の所作を南の隅から北の隅に向かって、東の隅から西の隅に向かって、北の隅から南の隅に向かって繰り返す。最後に宝剣を神前の台の上に置いて退場。

12. 二剣舞（11分） ふたつのたまい

これは二剣による祓いの舞で、諸大明神の宵の二天に四方世界を招き奉るものである。白衣、裁着袴に右手に鈴、左手に櫛を持ったひとりが登場し、南西から右手の鈴を振りつつ舞座の右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回を行う。続いて左手櫛を目の上にあげ、左旋回二回と左小旋回一回、右手鈴を上目の上にあげて右旋回二回と右小旋回一回、左手櫛を目の上に上げて左旋回二回と左小旋回一回をし、鈴を台（南西の舞台外）の上に置く。次に櫛を両手にささげ持ったまま右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回をした後、櫛を両肩に掛ける。続いて、a両手の剣を立てて持ったまま南西から北東に向かって、両手の剣を右下から上に振り上げて上から左下に振り降ろし（この間左右の足の前後の入れ替えが行なわれる）、左下から上に振り上げて右下へ振り降ろし（この間右左の足の前後の入れ替えがあり）、右下から上に振り上げて左下に振り降ろす（この間左右の足の前後入れ替えがあり）。このaの一連の所作を西北から東南向かって、北東から南西に向かつて、東南から西北に向かつて、南西から北東（中央）に向かつて繰り返す。

続いて、b西北から、両手の剣を抱くようにして刃先を両肩に付けたまま右旋回、左旋回、右旋回、左旋回の後西北にもどり、西北から東南に向かつて前へ出て左膝つきとなり、両手の剣を前方へ倒すこと二度してから身体を後方に倒して尻をつき、そして立ちあがって右旋回して南西に至る。以上のbの一連の所作を、北東から南西に向かつて、東南から西北に向かつて、南西から北東（中央）に向かつて繰り返した後南に至る。

さらに続けて、c左右の手の平でそれぞれ剣の刃のところを握り（剣の柄は演者側）、右旋回、左旋回して西北に至り、西北から東南に向かつて前に進み出て左膝つきとなつて、右手の剣を下から上に振り上げて手首を回転させ、右膝つきとなつて左手の剣を下から上に振り上げて手首を回転させ、左膝つきで右手の剣を下から上に振り上げて剣を手首で回転させ、右膝つきとなつて左手の剣を下から上に振り上げて剣を手首で回転させ、立ち上がって南西に至る。

以上のcの一連の所作を北東から南西に向かつて、東南から西北に向かつて、南西から北東に向かつて繰り返して南西にもどる。

さらにまた続けて、d左右の手の平で剣の刃を握り（剣の刃先は演者側）、左旋回して東南に、逆に右旋回して西北に至る。そこか



二剣舞

ら東南に向かつて進み、左膝つきとなつて、両剣を前方に倒すこと三回、左膝を後方に倒して尻を着き、両剣を下から上に回転させて前方へ振り出す。以上のdの一連の所作を、東南から西北に向かつて、南西から北東（中央）に向かつて繰り返し、神前に一礼して退場。

13・神図舞^{かんづまい}（17分30秒）

これは伊邪那岐、伊邪那美二神の故事より、天照大神岩戸神話の謂われを説く舞である。赤上衣に裁着袴、着面（赤）にシヤグマをかぶり、幣付藁縄襷を入れた折敷を持つて東南西北の四方と中央の五方に回りながら舞うもの。まず神図が南西から舞座の右旋回二回と右小旋回一回、左旋回二回と左小旋回一回、右旋回二回と右小旋回一回を行う。続いて南西から北東（神前）に面して座して言句あり。続いて神図は俵に腰



神図舞

かけて言句を続け、途中から右手の扇を開きそのままの姿勢で足踏みをし、舞杖を床に突いて拍子を取りながら言句を続ける。

それを終わって立ち上がり、舞杖を台の上に置き、米の入った折敷を両手にとり、それをささげ持つて舞座の右旋回二回と右小旋回を行つて西の隅に至る。

続いて、a 西の隅から東の隅に向かつて進み、左膝つきをして手の折敷を東隅に置く。立ち上がつて空の両手を水平に広げて舞座を右旋回。それからまた東隅に踏み込んで、左膝ついて右手で折敷の米をひとつまみつかみ、右膝ついて左手で折敷の米をひとつまみつかみ、また立ちあがつて両手を水平に広げて左旋回二回と左小旋回を一回してから東隅に向かい、両手を上方で左方、右方、左方となびかせながら両足で飛び上がること三回（米を撒く）。両手をまた上方で右方、左方、右方となびかせると同時に右膝、左膝、右膝と交互についてから、両手で相手すること七回。そうして東隅に置いてある折敷を回収して立ち上がり、右旋回一回と右小旋回をして南の隅に至る。このaの一連の所作を南の隅から北の隅に向かつて、東の隅から西の隅に向かつて、北の隅から南の隅に向かつて、南西から北東（中央）に向かつて繰り返し返す。

最後に北東に置いた折敷を取りあげてささげ持ち右廻りに南西に至り、その場で右小旋回一回して北東（神前）に面し、折敷の米を頭越しに自分の背後にぶちまける。そうして右手を目の前にかざし、左手で空の折敷を持ったまま舞座の左旋回二回と左小旋回一回を行つて、退場する。

（三）神楽演目の詞章、音楽など

ア・詞章

右（二）項で記した十二演目の立言、言句の歌や詞の詞章は、『五島岐宿神楽の継承』（平成十六年 五島岐宿神楽保存会発行）所載のものを以下に転載引用する。

＊演目名の上のアラビア数字は、(一)項と対応する。

1. 「伊智舞」

歌

伊勢の宮天津乙女の乱れ髪 さらずけずらず 茅葺の屋根

2. 「天宇受売舞」

神楽歌

千早ふる神の御前に鈴ふりて 舞えばぞ開く神の御戸は

3. 「坐解除舞」

立言

神風や座も清らかに打ち払い 座には穢の雲霧もなし

5. 「新塩舞」

歌

千早ぶるこの神葉の下にこそ 新塩神とあがめたてまつる

新塩の言句

仰も天々々將軍の舞い奉らんとしければ、にわかに天下も霧霞と震動す、天文博士を召しトひ給へば、上るは大州世の流れ、下るはだんぶつだんの、そののくつるいと申しけり

遠き潮居に行き降り、沖の潮居をくみあげて、日本の鎮守には、お伊勢天照大神を清め奉る

中の潮居に行き降り、中の潮井を汲みあげて、今日くみ上し奉る、巖立神社を清め奉る

汀の潮居に行き降り、汀の潮井を汲みあげて、金輪のみ子金輪のほをしゃには、六根在所を清め奉る、天下泰平

国土安全に納めけり、千早振る此の神葉に下にこそ、新塩神と拝み奉る

新塩の言句

新塩やたが打ちそめける新塩や 神我が人の打ぞ初めける

6. 「折敷舞」

折敷の立言

君が代は千代に八千代に さゝれ石の巖となりて苔のむすまで

7. 「四剣舞」

四劍の立言

音に聞く真の劍を抜いて見た み社かねてつくらざるもの

8. 「荒平舞」

荒平の言句

荒平の顔打ち染めて立つとは見へけり
東方荒平八重桜押わけ出る時、神代の月の影ぞのこれる
南方荒平小松押わけ出る時、神代の月の影ぞのこれる
西方荒平月を月わけ出る時、神代の月の影ぞのこれる
北方荒平氷かきわけ出る時、神代の月の影ぞのこれる

9. 「山太郎舞」

山太郎の言句

東方世界の此の山は、権現様の山にて坐しませば、御幣を以て山を奉らん
(南、西、北、中央同じ)

10. 「薙刀舞」

長刀の立言

悪魔をば七つ五つに切り分けて 向ふはさきに悪魔来らん

座中の言句

外道被ふて、立ち刀、災難被ふて、ゆり柳 (四方同じ)

舞人 座中
東方に悪あらん
悪もなし

11. 「宝剣舞」

歌

天つ神紫雲のたちこめて 今やささげん神の御剣

12. 「二劍舞」

二劍の立言

音に聞く真の劍を抜いて見たみ社かねてつくらざるもの

座中の言句

舞人 座中
東方世界と申すには

方申せば方は是れ、きのゑきのとの方其の方国は四方神奉れば、九々迺智命の大神、此の御神を本理として御立ちまします神明の御数は六万六千六百六十六神なり、高きは大神、低きは小神、諸大明神の宵の二天に四方世界招じ奉る

舞人 座中
南方世界と申すには
方申せば方は是れ、ひのゑひのとの方其の方国は四方神奉れば、訶遇突智命の大神、此の御神を本理として御立ちまします神明の御数は七万七千七百七十七神なり、高きは大神、低きは小神、諸大明神の宵の二天に四方世界招じ奉る

舞人 座中
西方世界と申すには

方申せば方は是れ、かのゑかのとの方其の方国は四方神奉れば、金山彦命の大神、此の御神を本理として御立ちまします神明の御数は八万八千八百八十八神なり、高きは大神、低きは小神、諸大明神の宵の二天に四方世界招じ奉る

舞人 座中
北方世界と申すには

方申せば方は是れ、みづのゑみづのとの方其の方国は四方神奉れば、水波売命の大神、此の御神を本理として御立ちまします神明の御数は九万九千九百九十九神なり、高きは大神、低きは小神、諸大明神の宵の二天に四方世界招じ奉る

舞人 座中
東方に悪あらん
悪もなし
・魔あらん
座 魔もなし
・南方に悪あらん
座 魔もなし
・魔あらん
座 魔もなし
・西方に悪あらん
座 魔もなし
・魔あらん
座 魔もなし

13 「神図舞」

・北方に悪あらん 座 悪もなし
 ・魔あらん 座 魔もなし
 座中 はぎ柴、嬉柴、切つん曲る、神通の晴れたる太刀を以て、トサン、コウサン、切る程に、小金の大神切り付けた、小金が大神切り付けたる神間、悪魔（四方同じ）・インヤ、宵の二天に、四方世界招じ奉る（一度ノコト）
 ・悪有らば底抜けすざれ四方さし、ヤンハア宗川に水に影はさすともや（四方同じ）
 ・剣立つ、諸羽の山の影清し、ヤンハア宗川の水に影はさすともや（四方のか、り同じ）
 ・音に聞く神の剣を抜いて見た、み社かねてつくらざるものや（一度）

神図の言句
 人 幸ひた此の御所に御神を舞ひ奉らんとするに、今の災と成りて来るは何者ぞ、初花の繁く開かんなり此の魔王の者のけぞ怪しき
 鬼 魔王が仆で誰か打つべし々々
 人 偕て此の御神事の場に出たる者は、神かと思れば神にもあらず、天狗かと思れば天狗にもあらず、動けば人にも似たり、動かねば若むす岩にも似たり
 組 此の鬼神の様を能く々々見奉れば歌を以て読名付け申すべし
 人 鶯はまだ巢の内に有るやらん春は来れど歌声もせん々々
 鬼 鶯はまだ巢の内に有るやらん春は来れど歌声もせん々々
 鬼 鶯の山門開き里に出でよき初声を君に伝へん々々
 鬼 鶯の山門開き里に出でよき初声を君に伝へん々々
 人 雙六の十五の石を十取りて八目の賽は誰か打つべし々々
 鬼 雙六の十五の石を十取りて八目の賽は誰か打つべし々々
 鬼 雙六の十五の石を十取りて八目の賽は誰か打つべし々々

人 峯は八つ門は九つ戸は一つ我が行く先はあららぎが里々々
 鬼 峯は八つ門は九つ戸は一つ我が行く先はあららぎが里々々
 人 吹風に簾吹上て見てませば簾の内なる君そ見てます々々
 鬼 吹風に簾吹上て見てませば簾の内なる君そ見てます々々
 人 吹風に簾吹上て見てませば簾の内なる君そ見てます々々
 人 やあら汝を見れば金間神通の角生じ八万四千の肉毛をし、眼を見れば、青龍のひさぎをえつてはめたるに異ならず、鼻を見れば大石のごとし、口を見れば諸星の岩屋の火に朱をさしたに異ならず、上の齒下の齒かみ違へたるは剣を抜き違へたるが如し
 其身を見れば若むす岩屋にも似たり、言云ふ声は鳴雷の如し、早々名乗り玉へ、遅く名乗り玉は、神通の白杖を以て打擲せんと道あたへんなり
 鬼 八岐の蛇の變化して八尾八谷に打ち臥したる金形が荒平とは某が事なり、今朝の香見山の御櫛柴を一本ならず二本ならず盗み取られて無念さや、早や早や立て帰らん立て帰らん、金の舞台を敷き給へ
 人 金象 花に乗り玉へ
 鬼 是より天に当て雲一群立ち見玉ふ、此の雲が天地四方へ分立て、東をば東天と申す、南をば南天と申す、西をば西天と申す、北をば北天とこそ承て候へ
 昔初て一代二神にて伊弉諾尊伊弉冊尊は夫婦と成り玉て、日の神月の神、素戔鳴尊其外多数の御子を生み給ふ、然るに蓋鳴は荒く猛き神にて日の神の御為めに為行甚だ味気なし、種々に凌ぎ侮どる時に天照大神天の岩窟に入り岩戸を開て籠ります、故に常闇にぞ成り給ふ時に八十万の神等憂ひ惑ひて、凡そ其諸の事は火を燈して弁ふ、此時に八十万の神深く思ひ、天の岩戸の前に庭火を揚げ俳優をなす、天の香見山の真賢木を根堀にして、上の枝には玉を懸け、中の枝には鏡をかけ、下の枝には青幣白幣をかけ
 天兒屋根命 太玉命は相与に天津祝詞太祝詞ことを以て

称辭を申し給ふ、天鈿女命は天の香見山の竹を取り其の節間に穴をへり、和ける息氣を通はす是れ笛と名付ける類なり、又手に茅纏の矛を持ち立ち戯れ
 真賢木を以て鬘と為し、蘿を以て手纏とし、舞尺、拍子を打て安楽の声を備へ和らげる息氣を通はし、八声を表はす、猿目の君は手を延べ声を揚げ、或は歌ひ或は舞ひ、清く潔きよき妙なる声を顕はし、神樂の調べ奉り給へば此の時天照大神聞食て曰く、我が磐窟に入り岩戸を開け、故に豊葦原の中津国長闇にならん如何、天鈿女命かく樂やと曰て岩戸を細目に開けにけり、八十万神喜び給ひて御目出度と申しけり、時に天の手力男命は岩屋に押入つて、日の神の御手を受け引き出し奉り給へば、其時天地皆な悉く明かにこそ成り給ふ
 仍て目出度と面白と申す事は此時より始まりたる御事なり、故に神の御前に神樂を奏し舞ひ玉へば忽ち神慮に通じ、天照大神天の岩戸を開き日出坐します、其の貴き事深く思へば神樂と舞ひ偏へに徳しなり、是れ誠に天神地祇三國一の御事なり、何に是に若んや何に是に及ばんやハア、御櫛柴を東に取て逃んとすれば、青龍門とて門を立て七五三なる注連を引く木の大神御坐します
 ハア、南に取て逃んとすれば朱雀門とて門を立て七五三なる注連を引く火の大神御坐します
 ハア、西に取て逃んとすれば白虎門とて門を立て七五三なる注連を引く金の大神御坐します
 ハア、北に取て逃んとすれば玄武門とて門を立て七五三なる注連を引く水の大神御坐します
 ハア、天に取て逃んとすれば、天には絹蓋八つ注連を引けたり、地に取て逃んとすれば、地には舞台を敷たりけり、物に能く々々譬ふれば籠の内の鳥とかや網代の内の魚の如くなり、洩れて行くべき方もなし
 天上天下目出度舞樂を奏し奉り、神の御前に供米を散し以て清く舞奉らんなり

イ・音楽

使用楽器は鉦打ち太鼓（岐宿神楽ではこれを「胴長太鼓」とも呼んでいる）二つと笛（龍笛）、それに鈴である。鉦打ち太鼓が舞い芸態の基本になっている（リズムを刻む）。鈴も多用されている。他方笛は、面神楽の時のみ奏されるのと、本年度の上演でも稀にしか奏されなかった。なお太鼓の曲目は四種類、笛は五曲であるという。

ウ・立言、言句、合立あいだちの状況

立言、言句とも詞章本によれば挿入されるべき個所でその実演の無かった箇所があった。また五島神楽特有の概念である「合立」は、昭和四年写の『厳立神社舞本』によれば、全四十八演目中十一演目にこの「合立」が登場しており、本年度上演の新塩舞、四剣舞、二剣舞、薙刀舞、宝剣舞にも「合立」があるはずなのだが、今回はひとつも合立役の登場はなかった。

六 由来

昭和四年写の『岐宿神楽舞本』には、当神楽がいに由緒正しい伝承であるかについて次の様に記している。「当社付属の社家は十二戸ありますが、三百年以上祖先の意志を継承して、今日聊かの変革もないのであります。之に依って神楽四十八番を奉仕するのであります」と。実際にそのように昭和二十年ころまでは四十八番が行なわれていたという。確かに古格を維持してきた五島藩の神楽であることはその来歴をさかのぼってみても知られる。『五島岐宿神楽の継承』（平成十六年 五島岐宿神楽保存会発行）によれば、まず、福江島における五島藩の基となった宇久五島家八代源覚公が、弘治三年（一三八三）に宇久島より最初に福江島の当該鬼宿（岐宿）に居を移したのである。そして当地で岩立三所大権現を建立している（この五年後にさらに福江の辰ノ口に移住）。江戸時代寛永十四年（一六三七）には、当社は五社、八幡、白鳥とともに五島四社として定められて、藩より祭料三十石を下賜されている。このよう

に五島藩主の覚えめでたい神楽であった。そして明治三年（一八七〇）に厳立御社と改称され今日の厳立神社に至っている。

七 変遷

平成十四年発行の『五島神楽の研究』に記載されている当該神楽の状況と比べて以下のように伝承が困難になってきていることが案ぜられる。

平成十四年に上演可能と記されていた二十一演目の内、「戸隠」^{（戸隠）}「願解舞」^{（願解舞）}「御幣舞」の三番が今日上演できなくなつたという。なお本年の祭りでは上演されなかったものの、「三剣舞」「島求」^{（島求）}「於呂智舞」^{（於呂智舞）}「山下舞」の四番は上演可能とのことである。

また、上述の四伝承組織のところでも述べたように、社人、実演者が減少しており今後が心配である。

更に右の実演者の減少が原因と思われるが、前記五（三）のウで述べたように、五島神楽特有の立言、言句、あるいは合立等の芸態が省略されつつある。

八 所見

五島神楽特有の立言などの詞章の概念

神楽の詞章としては従来、東北の山伏神楽ではイイダテとか、シャモンの概念が知られており、九州の神楽ではショウギョウの概念が知られていた。ところがこれらと意味を同じくするものと考えられるが、五島神楽ではそれを、「立言（立事とも）」や「言句（云句とも）」などの概念で用いられている。まず、他地域の概念と五島のこれら概念はどういう関係にあるのか、検討されてしかるべき問題かと思う。また五島の概念の「立言」は他地域の神楽に類例のないものである。どうやらこれは、舞人が立つて所作することに関わっているように、歌、詞と舞の関係を考える上に示唆するところのある伝承資料のように思われる。一体それをどう考えるべきかは今後の課題のひとつかと思う。ともあれ五島神楽各地ではこれについて様々な使われ方がなされている。特にもうひ

とつの「言句」の概念と「立言」との意味とが錯綜した使われ方をしている複雑である。

右のように注目すべき「立言」「言句」の下五島の神楽におけるそれぞれの意味合いを整理すべく、この度の現地調査の過程で面識をいただいた方々二名に質問をし回答をいただいた。それをここに紹介させていただく。

まず、厳立神社の阿比留正宮司が、厳立神社の長老の社人の方と調査検討した結果の回答は次の通りである。

「立言」とは、舞人の歌や詞と理解される。他方「言句」の方は、太鼓をたたく人（座中と称す）と合立の詞である（但し、言句は単なる詞だけではなく歌のように抑揚がある場合もあるのでまったく歌ではないとは言いきれない）。

次に福江五島神楽保存協会専務理事の森彪天満神社宮司からの回答は次のようであった。

「云句」^{いく}は詞だけでなく歌も含むと理解される。また現在は、『福江五島神楽本』（平成十五年 福江五島神楽保存協会発行）に記載されている、「云句」「立言」「立歌」^{たちうた}等の全てを「云句」と称している。

富江神楽「富江神社」

久保田裕道

一 名称

富江神楽

二 伝承地

長崎県五島市富江町

富江神社と兼務社のある地域

＊以下、平成二十二年度現地調査を実施した富江神社例大祭における富江神楽の報告をする。

三 期日・場所

期日 富江神社例大祭 十月十四日～十七日 ＊平成二十二年も同日

場所 富江神社

神楽が演じられる富江神社拝殿は、幅六間、奥行き四間。外縁が正面と左右に幅半間ほど廻らされている。

拝殿内は内陣と外陣とに分かれ、内陣の中央奥に二間幅で本殿へと続く階段と通路がある。このうち、神楽が演じられるのは、内陣の中央一間四方だ



富江神社



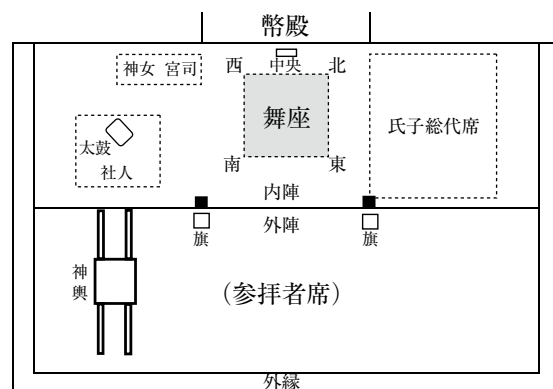
が、特に範囲が区別されているわけではない。その舞座を挟むように向かって左手に神前寄りから宮司以下社人が、向かって右手に神社総代および関係者が向かい合うように座り、宮司の後方（神前に向かつて左）に神女が座る。太鼓は社人の後方（神前に向かつて左）に置かれ、神楽が始まると、太鼓と笛はこの位置で演奏する。さらに左手の横の戸から出た外縁が楽屋的に扱われ、装束の着替えなどをそこで済ませる。

外陣には一般の参拝者が座るほか、向かって左手には神幸に用いられる神輿が置かれている。拝殿は、神前に向かつて右奥が北、左奥が西、神前が中央となる。なお、富江神社では拝殿の四隅に四神旗を立てるのみだが、兼務社では祭礼時に拝殿内五方各々に五色の御幣を立てる。事代主神社と金比羅神社では五色の旗となる。また「五穀俵」を正面に置く場合もある。

四 伝承組織

伝統的に神楽に携わる人々を「社人」と呼んだ。社人は近世期には身分の一つでもあり、富江神社周辺の宮下地区は、社人の集落であった。二十数戸があり、この社人が世襲的に神楽を演じていた。家によって「持ち舞」が決まっていたともいう。富江は富江藩の藩主が住む陣屋を中心に、武士、商人、職人、漁師などの住む地区が区画されており、陣屋（現富江中学校の北東部）より富江神社側に向かつて足軽集落、社人集落と続いていた。社人と足軽とは仲が悪かったなどという話が伝わっている。

やがて明治維新の際にいわゆる「富江騒動」が勃発。富江藩は五島藩に合併



富江神社「舞座」図

という朝廷の取り決めに対し、富江藩の家臣・領民が反対し、五島藩側との武力衝突が懸念された事件である。大きな争乱はなく収束したが、この騒動によって神社は謹慎処分を受け、明治初期には神社として機能しなくなり、社人の規模は縮小してしまう。その後の推移は不明だが、やがて世襲の社人の家以外の者も神楽を演じるようになっていった。そのため、現在でも伝統的な社人集落の出身を問わず、神楽の舞手を指して社人の名称が使われている。

昭和三十年代には六・七名の社人がいたが、現在は四名のみ。昭和七年生まれの月川八榮宮司指導のもと、神楽と神事の補助などをおこなっている。うち一名は笛専門で、あとの三名と宮司とで舞を分担している。社人たちは、富江神社宮司が兼務する周辺神社の祭祀には出向いて神楽を演ずる。ただし、同じ兼務社でも富江町田尾（乙神社）と同町丸子（保尾神社）には、それぞれその地区の社人がいる。また海を渡った黒島にもかつては社人がいたが、過疎化によって絶えた。現在、社人による神楽の稽古は、秋の祭祀シーズンを前にした九月頃に、四・五日おこなっている。練習場所は富江神社の拝殿。また天満宮のみ祭祀が一月であるために、一月にも祭祀前の二・三日は稽古をしている。

このほか、重要な役を担うのが神女である。神女は、現在は氏子である小学生以下の少女から選ばれる。平成二十二年は、それまで務めていた神女が中学生になったため、代わって四歳の妹が担うようになった。この神女が近世期にどのような存在であったのか不明な点が多いが、戦後の農地改革まで神女名義の田が存在しており、格式の高い存在であったことが窺える。神前に着座する場合は、社人頭の次の座に着くことになっているという。

この神女とは別に、「浦安の舞」を舞う巫女がいる。浦安の舞は昭和十六年から奉納されており、現在は富江小学校の六年生の少女がこれを務める。希望制であるため、年によって人数が異なる。平成二十一年には十数名の申し込みがあつてこれを六名に絞ったが、二十二年度は希望者が一人であつたために友人を誘い、二人で舞っている。舞の指導は、宮司が社務所でおこなう。富江神社例祭の前、一週間から十日ほど練習をしている。

こうした伝統的な役とは別に、神楽に関しては十年ほど前に「富江神楽保存

会」が結成された。結成時には半被を百枚制作して分けたが、実際に祭祀に参加するのはその中の二十・三十人だという。保存会には富江神社の神楽だけではなく、田尾（乙神社）と丸子（保尾神社）の神楽関係者も含まれているが、特に交流はない。さらに玉之浦町荒川（七嶽神社）も保存会を異にする富江神楽であるが、保存会同士の往来があるわけではない。もともと福江の「椿祭り」には富江と荒川の神楽が隔年で出演するため、荒川との多少の交流の機会はある。

また祭祀時には神輿渡御がおこなわれ、その担ぎ手を「陸尺」と称する。陸尺はもともと青年団が担っていたが、その後に商工会青年部が担当するようになった。しかし年々参加者の数が減少したため、近年「神輿保存会」を結成し、会員で担ぐようになっていく。

五 行事（芸能）内容

（一）次第・日程

1 準備

例大祭の準備は、十月十一日の「やま迎え」から始まる。祭祀に用いる竹や櫛を山（場所が決まっていらない）から切り出すことで、翌十二日夜には「しめおろし」といって、しめ縄の準備がおこなわれる。ただし、現在ではやま迎えを一日遅らせ、十二日にしめおろしと同日にしている。翌十三日には、用意したしめ縄を神輿渡御の沿道に張る。神社（社人）が担当するのは神社から海際の一の鳥居までであり、そこから舟手町の「仮宮」（蛭子神社※正式には事代主神社）までは各町内の氏子が担当した。

2 十月十四日（宵祭）

十四日は「宵祭」である。朝のうちに清掃をして準備を済ませ、夜に入って



浦安の舞

祭典があり神楽が演じられる。一八時より、神社の石段下にある社務所（宮司宅）に宮司・社人・神女が集まって夕食をとる。祭礼時の食事は、氏子の女性に頼んで調理してもらっている。食事が終わると神社へと上がり、一九時から祭典の開始。最初に、修祓（宮司による祓詞の奏上と社人による祓い）。宮司による開扉、社人による献饌と続き、参列者の玉串奉奠となる。

玉串奉奠が終わって一九時四〇分、神楽が始まる。最初に「しがく」として、太鼓にあわせて立歌を歌う次第が入る。社人らは拝殿の向かって左側に座ったまま歌う。次いで、神女が進み出て神女舞。以下、平成二十二年の演目は次の通り。

- ① 神女舞 ② 左男舞 ③ 左男舞 ④ 素袍 ⑤ 露祓 ⑥ 潮桶舞 ⑦ 長刀
- ⑧ 切目 ⑨ 浦安の舞 ⑩ 三剣 ⑪ 新潮 ⑫ 小弓 ⑬ 折敷 ⑭ 蒙古裏
- ⑮ 神通 ⑯ 獅子頭 ⑰ 舞上げ

終了は二時三〇分。すぐに社人によって撤饌がおこなわれ、閉扉。この年は、例年よりも若干演目を多く演じた。終了後、午後二三時頃より社務所にて宮司、社人、総代らが集まって飲食となる。

3 十月十五日（例祭・渡御）

翌十月十五日は、一〇時三〇分より富江神社にて祭典が執り行われる。修祓、開扉、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠と続く。それが終わると、一時過ぎより神楽が始まる。最初に「しがく」、次いで「神女舞」「浦安の舞」のみで終了。その後、撤饌、閉扉で正午には祭典が終わり、一同は社務所に下りる。

社務所では、総代らは昼食となるが、同時に「荒神まつり」がおこなわれる。一二時一〇分、最初にまず宮司以下、社人、神女、浦安の舞の巫女、その付き添いが二階へ上がる。二階は階段側から奥行き一間半・幅一間の一部屋と、奥行き一間半・幅二間の二部屋とを開放しており、最奥部の部屋に荒神棚が祀られている。その前に宮司・社人・神女が着座。荒神に対する祝詞が奏上され、社人による笛・太鼓で立歌「しがく」が奏上される。祝詞の最後に神前に米を撒き、その後宮司が神前から着座位置に戻ると、やがて「神女舞」が舞われる。

その後、階下の竈がある土間へと移動し、社人のみで荒神まつりの儀礼が執り行われる。土間は入り口（玄関の隣）方向を中央とし、入り口を入って左側にある竈側が南となる。竈の前



しがく

には、ござが二枚敷かれる。竈に向かって右後方の壁（南西の方向）には荒神を祀る神棚が設けられており、社人の一人がそちらを向いてござの上に座る。社人の前には積み重ねられた六枚の折敷、各々三つの蓋付き椀と猪口を載せた折敷が二枚と箸が十四膳、さらにしとぎの皿となますの皿、徳利を載せた折敷一つと飯びつ一つが置かれる。また竈の上には米の入った枡と半紙を巻いた枡が置かれる。



荒神まつりの神女舞

社人は六枚の折敷を順に取って、折敷の四隅にしとぎを箸で少量盛り、さらにしとぎの隣になますを盛ってゆく。この時、残りの社人は周囲に座って唱え言をする。唱え言は次の通り。

水神宮のうちの初穂は神ぞ召す しょうじのむしろはきねがしく

枡がないたら鈴虫はチュウという声たむしよなる

粟たたけばつきもむずかしあれている

ひとみにまさるくだもんもなし

まん丸して月に姿は似たれども 食てよいものは餅になるかな

あいなます二合半かいそう えがえがないたら

ころろざし めし山かはらの音きけば

流れ久しや 君の御用かな

盛った折敷は社人の左側に重ねてゆき、六枚とも盛ってしまったと今度は再び一枚ずつ取って、先ほど盛ったしとぎとなますとを元の皿に戻す。戻したところで唱え言も終わる（文書には十二回と書かれている）。

続いて椀の載った折敷二枚を手元に近づけると、一



折敷にしとぎ・なますを盛る

枚ずつ順に飯びつからご飯を盛り、徳利から猪口に酒を注ぐ。この時は次の唱え言を二回ずつ唱える。「十二のこんごう酒」は、一度目は「母」、二度目は「父」で唱える。

飯びつは八つ かいほ九つ ソレ盛り盛った またチヨコソヘータ

十二のこんごう酒 誰にはゆずらん 宝をそえて 母（父）にゆずる

母（父）ばかりたらしきものは よもあらじ

さらに別の椀になますを盛る。折敷の上は、手前左にご飯、右に猪口、奥左は空、右がなますという配置となる。ここで折敷を取り上げ、家の者に渡す。飯びつとしときなどを載せた折敷もここで下げる。

次に竈の上に置かれていた米の入った枡を取り、五方に向かって次の唱え言をして撒く。



散米

東方世界 悪やら魔やら魔もなし 悪業も善劫もなければ 今日大し
だんなんどの御身の上にて くぜつ災難やまいごと

へいよう ちゅうよう

かたなみの国にてまします候と申す

四方千里が浜に吠える犬ビヨウビヨウ

*以下、南方・西方・北方・中央に繰り返す。

枡を戻すと代わって枡をとり、両手で床に押し立てて、五方に向かって次の唱え言。



枡の唱え言



箸の唱え言

東方に打ち向いてカメカンダオセライタ 今のたいどんの前のたいどんの
米の飯やバラバラ コッテンの牛はまた肥えたつや ふくれたつや

今年の稲をば ほだに二升取って 世の中良ければ
幸い俵を祝いゆずらん

*以下、南方・西方・北方・中央に繰り返す。

枡を戻し、六枚の折敷の一枚を取り、箸十二膳をのせて五方に向かい次の唱え言。

東方に打ち向いてゴロゴロゴロ ゴーロゴロ

*以下、南方・西方・北方・中央に繰り返す。

ゴロゴロのところで、折敷を前後に揺すって箸をごろごろ転がす。最後の中央が終わるとすべての折敷をかたづけ、米の枡も下げる。そしてござ一枚をひろげ、そこに枡を置いてござでくるむように巻いてゆく。この時社人たちは「たたもや たたもや」と唱える。筒状に巻いてしまうと、家人（本来は女性とされる）にその一端を持たせ、社人と引き合う。この時も「たたもや たたもや」と社人らが唱えている。

これで一連の荒神まつりが終了となる。始めの六枚の折敷は、荒神への供物だといひ、最後の枡を引き合う所作は、枡自体を男根のシンボルとする子孫繁栄の呪術だと伝えている。

一二時四五分、荒神まつりが終わると社人たちも昼食をとり、しばらく休憩となる。その間、軽トラックで仮宮（蛭子神社）へと神楽の道具などを運んでおく。

一四時半頃から、富江神社で神輿渡御、通称「お下り」の準備が始まる。最も古いとされる「稚児神輿」と太鼓三台は、神社の石段下で台車に乗せられる。一五時になると、社人や氏子総代らが拝殿から外に向かって餅撒きをおこなう。近年は、個人が餅の費用を負担しているという。社殿内では本殿から拝殿に置かれた神輿への御霊移しがおこなわれるが、この時に神輿の周囲は総代らによって布幕で隠され、見ることができないようになる。御霊移しが終わると、「陸尺」と呼ばれる担ぎ手たちによって神輿が拝殿前に下ろされる。同時に子供神



枡の引き合い

輿二基も収納庫より引き出され、小学生による子供神輿、女子中学生による神輿が先に石段を下りてゆく。

拝殿前の神輿は、陸尺たちによって担がれるが、担ぎ方に富江独自の特徴がある。担ぎ手は前後の担ぎ棒外側と神輿の左右にそれぞれつく他、担ぎ棒の前後に一人ずつ棒を押さえるような形でつく。特に前につく者は両手に体重をかけて神輿が進むのを押さえる。

神輿が進む際には、まず進行方向に対して右斜め四十五度方向に曲げ、また元の向きに戻す。ここでかけ声（「やーっ」「はっ」など）とともに担ぎ手が両手を頭上に伸ばすまで神輿を上を持ち上げる。すぐに下ろしたところで数歩だけ神輿が前進。ここで今度は左斜め四十五度方向に曲げ、また元の位置に戻してからかけ声とともに持ち上げ、数歩前進。これを繰り返して進んでゆ�ため、進行速度は極めて遅い。「日本一遅い神輿」などと称される所以でもある。

石段を下りた後もこの調子で進むため、先をゆく子供神輿等とは徐々に間隔が開いてゆく。さらにこの神輿は、交差点の中央などで「ネブリ」をする。ネブリとは、神輿を左右に大きく揺らせることで、神輿本体の左右についていた担ぎ手が、思い切り相手側に押し倒さんとするように押す。この時のかけ声は「えんやさー」「よいやさー」などが一般的だが、「えんやかさー」や「えんやそいじゃー」と言う者もある。交差点以外に、祝儀を出した店などでもこれをするところがある。かつては陸尺の人数も現在よりも多く、さらに暴れ神輿だったとも言われている。

お下りの行列は、途中から近年老人クラブの踊りなども加わり、かなりの長さになる。行列順は次の通り。この他に、御神酒と飲み物を積んだ台車が付き添う。



陸尺



餅まき



ネブリ



お下り（先頭）



お下り（最後尾）

獅子・天狗 — 旗 — 老人クラブ — 稚児神輿（台車） — 子供神輿 — 笛・太鼓 — 女子中学生神輿 — 笛・太鼓 — 神輿 — 宮司・神女 — 笛・太鼓（社人）

老人クラブや子供神輿は途中のガソリンスタンドや駐車場などで踊りや練りを披露してゆく。特に近年、子供神輿と女子中学生の神輿は各々が商店街を門付け的に回ってご祝儀を集めるようになった。その際、店頭で「商売繁盛」のかけ声で神輿を持ち上げる。それでも一六時三〇分頃には先に仮宮に到着して、解散となる。この時、神社の神輿はなお中途を進んでいる。神輿は時に本道を少し外れて店舗などの前に出向くこともあり、その店に応じた奉納を受ける。商店街の二軒ある洋品店では紅白の布が奉納されるのが習わしで、神輿に巻き付けている。

一八時三〇分頃、仮宮を前に神輿が一旦脇道に入る。かつては行かせまいとする人々ともみあいになったが、現在はネブリのみ。脇道に入ってから、これまでの担ぎ方をやめて早足で進む。その先には事代主神社があり、そこに神輿を下ろして休憩となる。神社には地区の方からの飲食物が用意されている。この事代主神社がある小島地区はもと漁師町であった。富江神社の祭礼は商家の多い富江の五ヶ町の氏子を中心となっているが、かつては担ぎ手に小島地区の者も多くいたため、こうした慣習ができたと言われる。本来、神輿は仮宮に着くまでは降ろしてはならない決まりがあるが、ここでの休憩は宮司が黙認する形だという。したがって、宮司・神女・社人の一行は脇道には入らずに待っている。



事代主神社

一〇分程度休憩すると、再び早足でもとの道に戻り、再びゆっくりとした担ぎ方で進む。やがて仮宮の前を一旦通り過ぎ、一九時一五分頃、港の「潮とり」の場所へ着く。ここには青竹を立てしめ縄が張られている。神輿は



潮とり場



潮とり場での神女舞

この前でネブリをした後に、しめ縄をくぐった先に安置し、宮司が祝詞を奏上。続いて、神輿の前で神女舞が舞われる。「潮とり」という名のように、かつてはここで潮を汲んだと伝えられているが、現在はおこなわない。一〇分ほどで、再び神輿を担ぎ、仮宮（蛭子神社）へと向かう。一九時四五分、漸く四時間四五分に及ぶ神幸が終わり、蛭子神社に神輿が上げられた。神輿はすぐに内陣に納められ、既に到着している稚児神輿と並べられ、前に供物などが並べられる。陸尺の担ぎ手たちは社人から一人一人が金幣による祓いを受けて解散。また神前では宮司によって祝詞が唱えられ、それが終わると社殿内で夕食となる。

二〇時三七分、「しがく」から神樂が始まる。この時の演目は次の通り。

- ① 神女舞 ② 左男舞 ③ 素袍
- ④ 露払 ⑤ 新潮 ⑥ 蒙古裏
- ⑦ 獅子頭

二一時五〇分終了、この日のすべての行事が終わる。これから神輿が富江神社に戻る翌々日まで、夜も社人二人が寝泊まりすることになっており、すでに布団が持ち込まれている。

4 十月十六日（神輿・神樂巡幸）
朝九時に蛭子神社に集合。宮司が祝詞を上げ、社人が左男舞を舞って



新潮



蛭子神社（仮宮）

から、神輿が外に引き出される。ここで幣束を持った祓い役と天狗・獅子とが二組それぞれ家の祈禱をするために出発していった。一方、陸尺の者も祓いを受けて神輿を担ぎ上げる。この日は前日のような担ぎ方をせずに、普通に担いで歩き、訪れた先でかけ声とともに頭上に掲げることが各家最低二回はおこなう。社人一人が御幣を持って先頭を進み、次いで総代の一人が三宝に載せた神酒を掲げて続き、その後ろに笛・太鼓。太鼓は台車に載せられ、宮司・神女と共に神輿の後を進む。また飲み物・つまみを入れた台車も付き添う。五島石油の後は神輿をトラックに載せ、宮司と社人もワゴン車に乗り込む。以降、距離のある巡幸先に移動する際にはこの二台の車を用いることになる。この日の巡幸先は次の通り。

- 1. 漁協 2. 有川総業 3. 馬場住建 4. 一平 5. 保育園 6. 川元建材 7. 田中サンゴ 8. マルキン水産食品 9. さけ市 10. 五島石油（ガソリンスタンド） 11. JA五島 12. Y邸 13. 月見荘（福祉施設） 14. 富江荘（福祉施設） 15. 只狩荘（福祉施設） 16. 浜口水産（工場）

漁村センター（昼食）

- 17. あい調剤 18. 富江病院 19. いなだストア（スーパー） 20. 社協
- 21. ほっとホーム（福祉施設） 22. まごころ（福祉施設） 23. 増田建設
- 24. 近藤歯科 25. 市役所富江支所 26. M邸 27. とんとん（飲食店）
- 28. T邸 29. 温泉センター 30. 富江診療所 31. 山戸海産 32. ゴールドラッシュ（スナック） 33. オリントピア（パチンコ） 34. 十八銀行
- 35. H邸

* 太字は神樂を演ずる場所
廻る先については、十月四～五日頃に係の者が家々を廻って希望を募る。か



左男舞



家祈禱



店先での神輿



神女舞



新潮



獅子舞



つては申し込みが多く、十六日だけで廻りきれなかったために翌十七日の午前中も廻っていたという。現在は、個人住宅よりも店舗や施設が多く、特に養護施設を多く訪れている。また富江病院では入口で神楽を奉納した後に、獅子が病室を一つ一つ回っている。

神楽を申し込んだ先では、訪れるとまず陸尺が玄関先・店先で神輿を二回持ち上げ、そこに置く。すると宮司・社人・神女は玄関から中に入ってゆく。迎える家では、小さな机などに塩と米が皿に載せられて準備がされており、そこに神酒の三宝も置く。宮司は「富江神社御神楽大麻」の神札を置いて祝詞を奏上。社人は幣束で祓いをした後に、すぐに「神女舞」を始める。舞の最中に社人が家人に神酒を注いで回る。この巡幸での演目は訪問先毎に次の通り。

- ① 神女舞 ② 新潮 ③ 獅子頭

三つ舞って一〇分ほどで終える。獅子は神社で舞う時よりかなり短くした舞

い方で、最後に家人の頭をかじって回る。

一二時三〇分頃に、漁村センターでの昼食となり、三〇分ほど休憩をした後に再び回る。こうしてすべての巡幸を終えて蛭子神社に戻ったのが二一時。神輿を前日同様に社殿内に安置すると、陸尺の人々は一人ずつ金幣で祓いを受けて解散。社殿内では最後に神女舞を一舞して終了となった。

5 十月十七日（お上り）

最終日は一五時に蛭子神社を出発する。お下りの時同様の行列で進んでゆく。神社の神輿以外は先に富江神社に到着し、解散となる。

神社の神輿は、お下りよりも若干早く一九時に神社到着。そこから拝殿に引き上げ、幕で周囲を覆って御霊移しをおこない、神前で宮司が祝詞を上げる中、神女舞が始まる。この時の神楽は次の二舞のみ。

- ① 神女舞 ② 浦安の舞

一九時三〇分には、祭典のすべてが終わり、片付けに入る。そして社務所での直会があつて、四日間に渡る祭礼が終了となった。

（二）演目・芸態

神楽の演目は最初に「しがく」「神女舞」「左男舞」「露祓」を舞うのが通例。その後はできる演目を順次演じ、最後に「舞上げ」を舞って終了となる。通常、祭礼で演じる場合には、二時間程度おこなう。

舞はすべて基本的に「畳二枚」の中で舞うとされる。ただし、その場所のみが板の間になっていたり、敷物を敷くことはなく、感覚で舞うことになる。神楽を習う場合には、最初に左男舞から入る。左男舞ができるようになると、二人舞である露払を覚える。なお、舞上げは左男舞と同じ舞だが、立歌が異なっている。立歌というのはタチゴトなどとも称し、登場時の舞が一旦終わり、神



直会



お上り

前に向かって節をつけて唱える神楽歌などを指している。舞の中には、こうした立歌が必ず入るのが特徴と言える。

舞は基本的に素面だが、中にいくつか面を着けるものがある。面はそれほど古いものは残っていない。古面と言えるものが一、二面あったが、現在は福江の博物館に収蔵されているという。楽器は太鼓と笛が一人ずつ。太鼓は鉦打ちの胴長太鼓。笛は七孔の龍笛を用いる。

以下、調査時に実見した演目の芸態を挙げる。これらの中には、本来は五方に繰り返し所作を二方向に省略するなど、本来伝えられている芸態と異なる部分を有している場合もある。しかし、今回は現状としてこれを報告する。また舞手が円を描いて動く場合、これを「巡る」と表記し、時計周りを「順」その逆を「逆」と称しておく。また方向を表す場合、神前に向かって右奥を北、向かって左奥を西、右手前を東、左手前を南とする拝殿の設定にあわせ、隅をこの東西南北で呼ぶこととする。それ以外の角度は、仮に本殿方向を一二時とし、その反対を六時といったように表すことにしたい。

1 神女舞 (3分)

唯一の巫女舞。最も単純な順逆順・逆逆逆に巡る舞。

- ① 神前に進み出て鈴を右手にとり、身体の前で両手を大きく三回回す。
- ② 右手の鈴を前に持ち、左手は下げたまま順方向に三周巡る。神前で両手を一回回す。次いで向きを変え、何も持っていない左手を軽く握り前に差し出し、右手の鈴は下げたまま逆方向に三周巡る。巡り終わって神前で両手を一回回す。そして再び右手の鈴を前に出し、左手は下げたまま順方向に三周巡る。神前で一礼し、①同様に両手を三回回す。
- ③ 太鼓のリズムが変わり、逆方向に三周し、神前で両手を一回回す。次いで順方向に三周し、一回両手を回す。さらに逆方向に三周巡り、一回両手を回し、一礼して退出。



2 左男舞 (3分)

烏帽子に格衣姿。神楽の基本となる舞。閉扇と鈴を持ち順逆順で三周ずつ巡った後に立歌。そして閉扇と鈴を前に出しつつ逆順逆で三周ずつ巡る。最後に鈴を置き、開扇のみで順逆に三周巡る。

① 神前の案より左手に閉扇、右手に鈴を取り、下がって両手を軽く広げ、鈴を振りつつ六順・逆・順方向に三周ずつ巡る。

② 扇と鈴を前に出し、立歌。

③ 立歌終わって東の隅に一回転して移動し、逆・順・逆方向に三周ずつ巡る。逆の時は閉扇を、順の時は鈴を前に掲げる。

④ 鈴を案に置き、右手に開扇を掲げるように持ち、左手も軽く上げて一回転して、そこから順方向に二周半。向きを変えて開扇の端を左手でつまみ、右手も軽く上げて逆方向に二周半し、三周目に案の前に座し、扇を閉じて鈴とともに一度押し頂き、案に置いて退出。



3 素袍 (4分)

烏帽子に格衣姿。左男舞に似ているが、立歌の後は直線的な動きになる舞。

① 右手に鈴、左手に閉扇。一礼して両手を軽く上に上げ、鈴を振りつつ順方向に三周。向きを変えて逆、順に三周ずつ巡る。

② 小さく回転して神前に進み、立歌。

③ 立歌終わって順回りに一回転して東の隅に行き、左手の閉扇を前に掲げて「ハイハイ」で身体を左右に振り、続く「ヤーサンハーハイヤイ」の「ヤー」で左足を大きく踏み込んで北の隅へ直進する。そこで西の隅へ方向を変えて、同



様に「ハイハイ」で身体を左右に振り、続く「ヤーサンハーハイヤイ」の「ヤー」で左足を大きく踏み込んで西の隅へ直進する。ここで「ヤーサンハーハイ、ヤーサンハイ」のかけ声にステップをあわせて六時方向へ移動。ここで逆回りに一回転して南の隅に移動。

④③と逆に、南の隅↓西の隅、西の隅↓北の隅と移動し、さらに六時方向に進んでから一回りして東の隅へ。ただし「ヤー」で踏み込む足は右足となる。

⑤再び③同様に東の隅↓北の隅↓西の隅↓南の隅。

⑥南の隅から逆巡りで一周半して神前へ。逆回りに一回転して座って案に鈴を置き、扇を広げる。

⑦右手に開扇の要を持って左手と共に軽く上げ、逆回りで一回転して南の隅へ。

⑧同様に、南の隅↓西の隅、西の隅↓北の隅と移動し、さらに六時方向に進んでから一回りして東の隅へ。

⑧左手に開扇の端を持って右手と共に軽く上げ、③同様に南の隅へ移動するが、さらにもう一回転して神前へ。そこで座って扇を置き、立って下がって拝礼。

4 露祓（6分30秒） つゆはらい

烏帽子に格衣姿。二人舞の基本となる舞。

①二人が神前に進み出て、右手に鈴、左手に閉扇を取る。下がって中央に四時と十時の位置に互いに内側を見ながら立つ。

②鈴を上げて順方向に二巡り、向きを変えて扇を上げて逆方向に二巡り、さらに向きを変えて鈴を上げて順方向に二巡り。

③二人とも神前に向き直り、立歌。

④東と西の位置に向き合って立ち、扇を上げて逆方向に二巡り、向きを変えて鈴を上げて順方向に二



巡り。横に並んだ状態から回転して、東の隅に揃って進み、身体をかがめて鈴を打ち鳴らす。

⑤④同様に逆・順に巡って南・西・北の順に繰り返す。

⑥④同様に逆・順に巡った後、今度は向き合って外側・内側・外側と鈴を打ち鳴らす。外側の時は高く、内側の時は膝をついて低く鳴らす。その後、位置を入れ替えて外側に打ち鳴らす。

⑦もう一度⑥を繰り返し、最後に向き合い神前に進み、扇と鈴を置いて退出。

5 潮桶舞（12分） しおたぐまい

白衣に白袴姿。潮桶を持ち、その潮で清めるための舞と考えられる。

①右手に鈴、左手に閉扇で、鈴を振りながら順・逆・順に三周ずつ巡る。

②最後に神前に進み立歌。

③逆・順・逆の順に扇・鈴・扇と上げながら二周半ずつ巡り、神前へ。

④ひざまずいて桶を取り、左右左と膝行で下がり、立つ。

⑤順・逆・順の順に二周ずつ巡る。順方向の時には左手、逆方向の時には右手で桶を掲げる。それから東の隅に向かって桶を掲げ、左右左で立ったまま下がる。これを南・西・北に繰り返す。

⑥順・逆・順に二周ずつ巡り、東の隅を向いて右足を前に出しかがみ、右手に持った櫛で桶の中の潮をかける仕草をする。これを南・西・北・中央に繰り返す。

⑦順・逆・順に二周ずつ巡り、最後は神前で一礼して退出。



6 長刀（7分30秒）

白衣に白袴姿、頭に鉢巻。長刀を使った勇壮な舞。

①長刀を持って登場するが、長刀は神前に置き、右手に鈴、左手に閉扇を持って、両手を軽く上げて順・逆・順に五周ずつ巡る。

②一礼して神前で立歌。

③回転して東の隅に移動し、逆・順・逆に三周ずつ巡る。逆方向の時は閉扇、順方向の時は鈴を掲げる。

④神前に座り、鈴・扇を置いて櫛をつけ、長刀を取る。

⑤長刀を持って順・逆・順と三周ずつ巡る。

⑥東の隅に向かって片膝をつき、左右左に長刀を振り下ろす。これを南・西・北と続ける。（途中で巡らない）

⑦長刀を持って順・逆・順と三周ずつ巡り、南の隅に向かって長刀を水平に持ち、回転させる。これを北と中央にも繰り返す。（本来は五方におこなうものと考えられる）

⑧順・逆・順に三周巡って神前にひざまずいて一礼し、退出。



7 切目（7分30秒）

狩衣姿で着面、頭にシャグマ。

①狩衣装束で右手に幣を持って登場。神前から離れた中央位置に立ち、右左と後ろを振り向き、次いで膝を屈伸させ、その後右足から三步半で神前へ。向きを変え、北の隅に向かって右足から三步半で進む。一回転しながら東の隅に移動。

②東の隅で今度は左右と後ろを振り向き、屈伸の後、左足から三步半で北の隅へ。さらに左足から三步半で西の隅へ。そして一回転しながら南の隅へ。

③①同様に東の隅に移動。

④逆方向に一周、順方向に二周し、西の隅に移動。

⑤西の隅で中央を向いて膝の屈伸をして東の隅に向かって足を踏み出すと、そのまま順方向に二周、逆方向に二周、再び順方向に二周して東の隅に中央を向いて立つ。

⑥⑤同様に東の隅から西の隅に向かって足を踏み出し、順・逆・順方向に二周ずつ巡り、北の隅へ。

⑦北の隅に南を向いて立ち、屈伸の後、膝行で右左右と進む。そのまま順・逆・順方向に二周ずつ巡り南の隅に北を向いて立つ。

⑧南の隅に北を向いて立ち、屈伸の後、膝行で右左右と進む。そのまま順・逆・順方向に二周ずつ巡り、神前へ。

⑨神前で扇を開いて右手に持ち、幣は左手に。

三回大きく自分の前で両手を回しながら下がって一礼して退場。

8 三剣（10分）

白衣に白袴姿、頭に鉢巻。前半は露払いと同じ舞い方。後半で刀のアクロバティックな技が入る。

①鉢巻姿の二人が刀を持ち登場。鞘から刀を抜いて神前に進み、櫛をつけ、右手に鈴、左手に刀を取る。下がって両手を軽く上に上げ、順・逆・順方向に二巡りずつ。

②二人とも神前に進み、立歌。

③三時と九時の位置に向き合って立ち、刀を掲げて逆方向に二巡り、向きを変えて刀を肩に背負うようにして鈴を上げて順方向に二巡り。横に並んだ状態から回転して、東の隅に揃って進み、身体をかがめて鈴を打ち鳴らす。

④③同様に逆・順に巡って南・西・北・中央の順に繰り返す。

⑤③同様に逆・順に巡った後、鈴を案に置き、向き合う。



- ⑥ 逆方向に二周巡ってから東西の隅に向き合って立ち、刀で低い位置をすくうように回転しながら南北、東西と動いてゆく。東にいた者は北、西へと進む。続いて逆方向に二周巡ってから南北に向き合い、東西、南北と動いてゆく。



- ⑦ 逆方向に二周巡ってから東西の隅に向き合って立ち、刀を振り下ろす。再び逆方向に二周巡ってから南北に向き合い、刀を振り下ろす所作。
- ⑧ 最後に向かい合って互いの刃先を持ち、二つの刀の下を回転しながら二回くぐる。これを二回おこなって神前に進み、刀を鞘に収めて下がり、退出。

9 新潮 (あらお) (14分30秒)

- 烏帽子に格衣姿。塩による清めの舞。家を回るときには、省略した形で舞う。
- ① 塩を載せた盆を持って神前に進み、盆を案に置いて右手に鈴、左手に閉扇を持つ。下がって順・逆・順に三周ずつ両手を軽く上げて鈴を振りながら巡る。最後の四周目を小さく回り込んで神前へ。

- ② 鈴を前に出して立歌。

- ③ 回って三時の位置から扇を前に出して逆方向に一巡り半、九時の位置から鈴を前に出して順方向に一巡り半、もう一度三時の位置から扇を前に出して逆方向に一巡りし、二巡り目に神前へ。ここで座って鈴を置き、扇を開いて右手に、塩の盆を左手に持つ。

- ④ 順・逆・順に三周ずつ巡る。

- ⑤ 東の隅を向いて「新潮は、誰が舞そめける新潮ぞ」の歌とともに開扇で招くような所



- 作をして、順・逆・順に三周巡る。それぞれの回り始めは身体を左右に振る。
- ⑥ ⑤同様に南・西・北と繰り返す。最後に扇を畳んで腰にさす。
- ⑦ 東の隅を向いて塩を取るような所作をしてしゃがみ、そのままくると反対向きになって片膝をつき、振り返りざまに塩を撒く所作。その後順・逆・順に三周巡る。それぞれの回り始めは身体を左右に振る。
- ⑧ ⑦同様に南・西・北と繰り返す。
- ⑨ 最後に神前に盆を置いて退出。

10 小弓 (こゆみ) (6分30秒)

- 烏帽子に陣羽織、たっつけ袴。弓と名がつくが、後半の刀による曲芸的所作が目される舞。

- ① 弓を持ち、烏帽子・羽織・たっつけ袴姿の二人が登場。神前に並び、右手に鈴、左手に弓を持つ。鈴を振りながら順・逆・順に二周ずつ巡る。

- ② 鈴を前に出して立歌。

- ③ 向かい合って大きなステップで踏みだし、逆・順に二周ずつ巡る。

- ④ 東に向かつて並んで腰をかがめて鈴を打ち鳴らす。その後、逆・順に二周ずつ巡る。その後同様に南・西・北に繰り返す、最後は神前に。

- ⑤ 神前で鈴と弓を置き、刀の鞘をぬいて抜き身で持つ。

- ⑥ 南北の位置に相対し、対角線に動いて二度入れ替わる。

- その後、逆方向に巡ってゆき、二周目に東西の位置で相対。ここでも二度入れ替わる。その後、逆方向に巡る。

- ⑦ 逆方向に巡る中で三時・九時の位置に相対し、互いの切っ先をつまんで二回刀の下をくぐる。その後場所を入れ替えて、さらに二回くぐる。

- ⑧ 神前に向かい、刀を鞘に収めて弓とともに持って退出。



11 折敷舞（6分）

白衣に白袴姿、頭に鉢巻。折敷（盆）を落とさずに曲芸的な技を披露する舞。

①紅白の鉢巻をして重ねた盆（本来は折敷）二枚と櫛を持って登場。盆を案に置き、右手に鈴、左手に櫛を持って、両手を軽く上に上げて鈴を振りつつ、順・逆・順に三周ずつ巡る。

②神前に向き、鈴を前に出して立歌。

③立歌終わって順回りに一回転しつつ三時の位置へ。櫛を前に掲げて逆方向に二周半して九時の位置へ。そこから鈴を前に掲げて順方向に三周、再び向きを変えて逆方向に三周し、そのまま神前に座って鈴を置き、櫛を着ける。

④盆を重ねたまま両手で持ち、順・逆・順に三周ずつ巡る。

⑤盆を両手の平にのせて東の隅を向き、両手を上下に動かす。これを南・西・北にも繰り返す。（途中で巡らない）

⑥次に両手同時にひねって返す所作を東・南・西・北に繰り返す。

⑦次に右手からひねって右膝をつき、左手をひねって左膝をつき、右手を戻して右足を立て、左手を戻して立ち上がる所作を東・南・西・北に繰り返す。

⑧（本来はこのあとでぐり返しなどが入る）

⑨両手の平に盆をつけたまま順・逆に巡って神前へ。一礼して盆を持って退出。



12 蒙古裏（9分30秒）

鬼と争う者のことを、富江の立歌集の中では「相立」と称している。舞の道具などを手渡す補助役としてのアイダチというより、完全な一人の役として演じているが、ここでは「相立」の表記に従っておく。相立は素面で、烏帽子に格衣姿、鬼は鬼面にシヤグマ、狩衣にたっつけ袴。

①烏帽子上衣をつけ、右手に弓、左手に矢を持った「相立」が登場。南の隅から西、北と直線的に進み、順方向に一回転して東の隅へ。同様に東→北→

西と進み、逆方向に一回転して南の隅へ。さらにもう一度南→西→北→東。

②逆・順に二周ずつ巡って神前へ。右手の矢を前に差し出して唱え言。

③両手で輪を描くように三回回しながら下がり、南の隅に動く。

④南から西へ直線、西から北へ直線、順に回って東。東から北へ直線、北から西へ直線、逆に回って南。南から西へ直線、西から北へ直線、順に回って六時方向。

⑤逆・順に二周ずつ巡り、東向きに踏み出す所作三回。これを西にも繰り返す。

⑥三時の方向に内側を向いて立つと、鬼面を着けた者が九時に立って相対する。ここで語りが入る。鬼は語りにあわせて左手の棒を地面に突き鳴らし、右手の開扇を振る。

⑦語りが終わると相立は弓をつがえ、鬼は棒でそれを打とうとし、相対しつつ逆方向に巡りながら争う。

⑧鬼は北の隅に倒れ、弓は南の隅に立って弓から刀に持ち替える。

⑨鬼は立ち上がるが、刀が迫ってくるため、袖で顔を隠しつつ逃げようとする。

⑩鬼は南より退出。相立は刀を両手で持ち、南から西へ直線、西から北へ直線、順に回って東。東から北へ直線、北から西へ直線、逆に回って南。南から西へ直線、西から北へ直線、順に回って六時方向。

⑪逆・順に二周ずつして神前で拝し退出。



13 神通かんず (14分)

富江の神楽本にある「あど」と「きじん」の表記に従う。きじんは、「鬼神」である。アドは前半だけで、後半鬼神が俵の上に腰掛けるのが特徴である。アドは、女面に赤い布を巻き、格衣姿。鬼神は鬼面にシヤグマ、狩衣姿。

①赤い布を頭に巻いた「アド」、御幣二本を持って南の隅から入り、順・逆に二周ずつ巡る。

②「鬼神」は面をつけ、紅白のしま模様の棒を持って南より入り、アドと対しつづ順・逆に二周ずつし、アドは三時、鬼神は九時の位置に相対する。アドは立ち、鬼神は座り、語りが入ると扇を開いて右手に持つ。左手は棒。

③アド南より退出し、鬼神は中央に出された俵の上に神前を向いて腰掛け、開扇と棒を持つ。

④俵がはずされ、正座のまま順方向に回り、棒で床を指しつづ下がる。

⑤立って順に二周巡って東の隅から北、西と直線に進み、逆方向に回転して神前へ。ここで棒を置いて米を持った盆を取る。

⑥順の方向に一周巡って盆を東の隅に置き、順・逆に二周ずつして近づいて米を取り、再び順・逆に二周して盆の前に座し、米を取って投げ、「ヤーサンハーハイ」にあわせて手を打つ。

⑦盆を持って順に一周半巡って西の隅に置き、⑥同様の繰り返し。

⑧盆を持って順・逆に二周ずつ巡り、神前を向く。膝で立って左右に振りつつ、最後に盆を両

手で上方に投げ
るように米
をうち撒く。

⑨立って順・逆

に一周して神
前に盆を置き、
退出。



14 獅子頭ししがしら (5分30秒)

最も人気のある舞。天狗は天狗面に白のシヤグマ、赤の衣にたつつけ袴。家
を回る際には短縮する場合もあり、逆に見物人が多い時には獅子と天狗のから
みや、獅子が舞う部分は長くなる。

①天狗、南より出て棒を持ち、順・逆に二周ずつ巡る。

②獅子が登場し、九時の位置に立って三時の位置の天狗と相対。三回場所を入
れ替え、獅子三時の位置へ。

③獅子、眠くなつて腹ばいに横たわる。天狗はおそろおそろ近づき、またがる。

左右を振り返りつつ両手の棒を獅子の耳に押し当て、三回目に強く振るため、
獅子が起き上がる。

④獅子は九時の位置に行き、天狗は

三時の位置で相対し、棒をカチカ
チ鳴らす。二回場所を入れ替え、
天狗退出。

⑤獅子も続いて退出。



15 舞上げまいあ (3分30秒)

烏帽子に格衣姿。左男舞と同じだが、立歌が異なる舞、最後に演じられる。

①烏帽子・上衣姿で右手に鈴、左手に閉扇を持ち、神前で拝した後に下がって

順方向に五周、逆方向に五周、順方向の四周目に小さく回り込んで神前へ。

②鈴を前に出して立歌。

③順回りに小さく回転して三時の位置へ。そこから逆方向に扇を前に掲げて三
周半、順方向に鈴を前に掲げて三周し、小さく回って神前へ。神前で鈴を置

いて扇を開く。

④逆回りに小さく回転して九時の位置へ。そこか
ら右手に開扇を持って両手を軽く上げて順・逆
に三周巡り、最後は回り込んで神前へ。採り物
を置いて退出。



(三) 詞章

*明治二十九年書写『舞歌』(黒嶋郷、近藤孫次蔵 現
在は富江神社蔵) から引用。

凡例

アラビア数字は、今回上演された演目の順番による。

1 露祓

そもそも舞というは岩戸の前にて
うずめの命 御手にちまきの
御ほこをもつて日影のかずらを
たすきにめされておききと
舞いそめたりや ハイヤイ
神もうれしく思しめすらん
わが宝たれにゆずらん
只今の施主の旦那に祝い
ゆずらん舞なれやハイハイ
東方のくぐぬち神な春三月
守護し給えば如何なる悪魔も
来るまじハイヤイ
神もうれしく思しめすらんわが宝
南方のかぐづち神な夏三月
守護し給えば如何なる悪魔も
来るまじハイヤイ神もうれしく…
西方の金山彦の神な秋三月
守護し給えば如何なる悪魔も
来るまじハイヤイ神も…
北方の水のみたまの神な冬三月
守護し給えば如何なる悪魔も
来るまじハイヤイ神も…
中央のはにやすひめの神な四季の
土用を守護し給えば如何なる
悪魔も来るまじハイヤイ神も…

2 三剣

たてばこそたて、柳姿もよけれ葉もよけれ
そもく舞というは岩戸の前にて
うずめの命 御手に千巻の御ほこを
持つて日影のかずらをたすきにめされて
おききと舞そめたりや ハイヤイ
神もうれしく思召すらんわが宝
たれにゆずらん只今の施主の旦那に
祝いゆずらん舞なれや ハイヤイ
東方の青帝龍王ははかせる八つかめ
剣をもつて、きのえきのとの方より
きかかったる悪魔をふじやいなや
舞いなれば ハイヤイ
神もうれしく…
南方の赤帝龍王ははかせる八つかの
剣をもつて、ひのえひのとの方より
きかかったる悪魔をふじやいなや
舞なれば ハイヤイ 神もうれしく…
西方の白帝龍王ははかせる八つかの
剣をもつて、かのえかのとの方より
きかかったる悪魔をふじやいなや
舞なれば ハイヤイ 神もうれしく…
北方の黒帝龍王ははかせる八つかの
剣をもつて、みずのえみずのとの方より
きかかったる悪魔をふじやいなや
舞いなれば ハイヤイ 神もうれしく…
中央の黄帝龍王ははかせる八つかの
剣をもつて、つちのえつちのとの方より
きかかったる悪魔をふじやいなや
舞なれば ハイヤイ
神もうれしく…

3 新潮

そもく天々々將軍を舞いたてまつ

らんとしけるに、天下もきりかすみと
しんどうするに是非はいかなる事ぞよ
と天文博士を請じはかない給えば
うんだるは王水の流くだるは

だんどくだんのそのの口声と申すには
遠きしおいにゆきくだり、沖の

しおいをくみあげて 先ず
日本鎮守御伊勢天照大神を
きよめ奉る 中のしおいを
くみあげて今日観情し奉る
大神と清め奉る

へたのしほをくみあげて
今日今夜のきんりのみこ

きんりの王じゃを六根ざいしょう

清め申せば天下太平国土は
無上に治りける 千早振る

この榊葉の下にこそ御潮神は
いわいまつらん

御潮は誰が舞いそめける御潮ぞ
天わか彦の舞やそめける

4 蒙古利

伊勢の国々 千本の杉に

住まむより日の御崎なるヤーヨーアー

百枝の松、もも枝のまつ

(立歌) 伊勢の国千本の杉に住むより

日の御崎なるもも枝の松、

悪魔をはらい民を守る日の御崎

大神とはみずからが事なり

たずねゆくくたずねあわねば

よもあらし しるしのもじのヤーヤーヨー

あ、あらんかぎりはく

(相立詞) おお それに見えしは

邪神姿と見えけるが、そも

如何なるものならん

(鬼詞) お、八万四千の鬼神の

大将とは我事なり さて我國の

四万八千の舟をうかべかけのりく

海中にゆられ空を見れば大島の

はがいにおゝなをつゝむまろどもが

乗る船をホーホーとふきしむるは

そも如何なるものならん

(相立詞) オオ、それにきぎなる日の

見崎大神とは自か事なり

汝はじめて神国にうかみきて、

自が教化にしたがへ教化にしたがう

ものに於ては神通のみのりを

得さするものなり

(鬼詞) さかんだちゅうおう とくしやちゅうおう

佛にならんも大事ない まったくがいのそこ

に沈むとも苦しからず 御身を申せば

女人一体の身として八万四千の鬼神

の数くだし給う事何よりもつて

おかしけれ

(相立詞) オー一人してかなわずば八百

万神もろともに神通の弓に方便の

つるをかけ攻めくる蒙古を防ぐべし

(鬼) 鬼海が島となすべし

(この二行くり返し)

(相) 元の都となすべし

(相立詞) あらいたわしや矢一筋にして

しもくしたり

(鬼詞) いや まだしもくは せんぞ

じゅうら我を守護する神等は鹿島

神田に諏訪まつた住吉八幡西宮

いかに守るもかなうまじ 鬼海が島に

なすべし

(相) 元の都となすべし

(鬼) 鬼海が島となすべし

(相) 元の都となすべし

八雲立つく 出雲八重垣妻籠に

八重垣作るやヤーヨ あゝその八重垣をく

5 神通

(あど) 吹く風にみすふき上げて見て

やればみすの内なる君ぞ見てます

(きじん) 吹く風にみすふきあげて見てませば

みすの内なる君ぞ見てます 見てます

(あど) 木戸は八つ峯は九つ戸は一つ

わが行く先はあららぎのさとく

(きじん) 全

(あど) 夜いんの空を動してさいしう

神通の角はえて八万四千のにく

ざおし眼を見れば赤かぢの如し

鼻を見れば大石の如し、口を

見ればもろせいくの岩屋に火え

えんに火をそえたるが如し。

もの言う声はなる雷のごとし

その身を見ればしゆみせんのごとし

早々なり給えや おそく名のらせ

給わば山のあら七郎殿の神通の

白杖をもつて ちようちやくせんと

道を與えん

(鬼神) 我こそは天照神のかしようにて

七つの峯、七つの谷に打ちふしたるきん

じようの荒平とはそれがしが事なり

今朝しまり朝くら山にひるねして

一ツ本ならず二ツ本ならず多くの此の

木をばぬすみとられてむねんさや

はやくたてゝ返さんたてゝもどさん

こがねのふたへをひいたりけり

こがねのぞうかへのり給う

是より東に当って雲ひとむらかけて

見え給うその雲が四方に引わたって東を

ば東天と申す 南をば南天と申す

西をば西天と申す 北をば北天と

申す うけたまわって候 八十一代

二神昔に始まつていざなぎいざなみの

命は夫婦となりて、大八ツの島を作り給う

まつたその後山島川をつくり給う

まつたその後あわじの国に宮を立て

三男一女を生じ給えば 天あきらかに

こそなり給う まつたその後すさのお

の命はみわざ甚だ悪しきによつて

天照す大御神は天の岩戸にとび

こもらせ給うほど数百年此の国は

夜の如くなり

いいや是ではかなうまじとて万の神

等集い給いて神集へにつどい給い

神はからいにはからい給いて天の岩戸の

口には五尺の櫛を立て上の枝には玉を

かけ 中の枝には鏡をかけ 下の枝には

へいはくをかけて玉かけの命はいのり

給えば その時天照大神は

あな面白やとのたまいて天の岩戸の

口をば細めにあけさせ給えば手力

男の大明神 大力なる御神にて

御手をとつてあだへ引出ださせ

給えば天あきらかにこそなり給う

おもて白ややらおもしろや

おもてしろしと申す事

此時より始つたる御事にて候

御神しばを東にとつてにげんと

すれば青青きにぎてを立ならべ

七五三なるしめを引く 南にとつて

にげんとすれば 赤きにぎてを立ならべ

七五三なるしめを引く 西にとつて

にげんとすれば 白きにぎてを立ならべ



裏表紙



明治29年書写『舞歌』



七五三なるしめを引く 北にとつて
にげんとすれば 黒きにぎてを立ならべ
七五三なるしめをひく
天にとつてにげんとすれば天に天がい
うんだんこうの しりくめなわを引い
たりけり 地にとつてにげんとすれば
地にも八方やつぱりとて こがねの
ぶたへを引いたりけり 物によくく
たとすれば かこの肉のとり とさや
あじろの内の魚のごともれて行く可き
方もなや 上々国天四方と舞い
あがる 天上天下ゆいがどくそん
四方とまいあがる

六 由来・信仰

富江神楽の創始についてはよく判っていない。現在残る記録では、弘化二年（一八四五）が最古だが、富江が福江藩から分藩したのが寛文二年（一六六二）であることを考えれば、江戸初期に存在していたとしてもおかしくはない。特に福江の神楽が延宝五年（一六七七）に藩主の病氣平癒を願って奏上されたことを考えれば、富江藩分藩後に富江藩のおかえ神楽として機能していたことは十分に考えられる。因みに富江藩では城は築かれず、藩主が住むのは陣屋であつたが、その富江陣屋は富江神社から極く近い距離にあつた。

幕末の弘化二年の記録（月川家文書）には、その時おこなわれていた演目名が記されていて興味深い。「左男舞」と「役方舞」とに大別され、それぞれ、十二番・四十八番ずつ見える。左男舞というのは、一・二番が巫女、三番以降が子供と隠居によって演じられている。そして役方舞には次の演目名が見られる。



富江陣屋跡

一本剣・長刀・岩戸開・四剣・恵比須・小弓・山構・柁舞・山下舞・山剣・山名付・天大流鏑・八ツ注・山の太郎・宝剣・六將軍・嶋求・二タ剣・天大將軍・狂言・箕舞・幣帛

また、富江神楽は、同じ富江藩内の神楽にも影響を与えているという。上五島神楽がそれに当たるが、しかし、現在ではかなりの差異が生じている。むしろ別系統の福江系とされる有川神楽の方が上五島神楽に近く、歴史的系統よりも環境的影響力の強さが感じられる。

また、玉之浦の七嶽神社は、もともと玉之浦の白鳥神社系の神楽であつた。それが明治初年の富江騒動によって、富江神社宮司（現月川宮司の曾祖父）が宮司として着任し、以来富江神楽を伝承している。

七 変遷

富江神社には、近世期には社殿とは別に舞台があつて、そこで神楽を演じたというが、詳しくは判らない。保尾神社には、昭和四十年代まで組立て式の木製舞台があつた。祭礼の際には、境内にこの舞台を組み立て、そこで舞つた。また同じ保尾神社の神楽がゆく琴石と太田にもそれぞれ木製組み立て舞台があつて、田の中にそれを組み立てて演じていたという。また舞台天井には「錦蓋」が吊られ、途中で紐を引いて揺らせたというが、戦前には途絶えている。

全体的な変遷としては、近世期に富江藩の御用神楽的な存在であつたものが、近代以降は小規模化せざるを得なかつた背景がある。それには、富江藩が福江藩に合併されたことによつて起きたいわゆる「富江騒動」の影響が強いのである。騒動は長く尾を引き、富江神社が神社として機能しなかつた時期もあるという。こうした背景から、近世期の社人組織は解体され、ある程度限られた人数で伝承せざるを得なくなつたと考えられる。それゆえ、諸役や舞台装置の点で変容を余儀なくされた部分があることも確かである。

八 所見

富江神楽は、神楽が単体で存在するわけではなく、神社の祭礼の一部として機能している。このことは、五島いづれの神楽にもあてはまることながら、富江の場合はその祭礼規模が最も大きく、四日間にあつておこなわれる点で、注目できる。特に宵宮などの神社内での神楽上演に加え、神輿渡御時の楽、また神輿巡幸時に訪問先で舞う神楽と、四日間すべてに渡つて神楽が関わっている。特に終日かけて回る訪問先で神楽を三曲ずつ演じるのは富江だけである。こうした祭礼文化の中に組み込まれた神楽という意味でも価値は高いといえよう。

さらに富江神楽は、近世期には富江藩の御用神楽であつたとされる。月川宮司宅には幕末から明治にかけての膨大な日記も残されており、今後解明が進めば近世から近代にかけての神楽の実態が明らかにされよう。

しかし危惧すべき問題点も大きい。現在、神楽を舞う社人が三人しかおら

ず、宮司および笛奏者が高齢であることから後継者育成が急務とされる点である。かつて中学生などに教えたこともあつたというが、すぐに富江を離れてしまい、根付くことはなかつた。ただ、幸いにして富江以外に田尾（乙神社）・丸子（保尾神社）の二地区に同じ富江神楽を伝承する場所があり、一つの保存会という組織でつながっている。さらに荒川（七嶽神社）にも同系統の神楽が伝承されている。これまで相互の交流は特になかつたというが、今後は後継者育成などの観点からも、連携を深めることが必要となろう。それぞれの地域でのこれまでの伝承を疎かにしないことはもちろん重要だが、「富江神楽」という形態がこれ以上崩れないためにも、正確な記録とその伝承を確立させるべきである。

そしてまた地域の人々に今一度、神楽の価値を再認識してもらうことで、地域を挙げての存続への取り組みが望まれる。これも幸いにして、富江は規模の大きな町で各地区毎に多くの氏子があり、総代も数多く決められている。神職と社人だけではできないことに限りがあるが、地域における保存会という組織を活性化させることも急務となろう。ただ一方で、伝承者にとって神楽は信仰の所産だということを強く意識しているところがあり、そうした前提を崩さないような取り組みを考えていく必要がある。



乙神社（田尾）



七嶽神社

福江五島神楽〔樫ノ浦天満神社〕

吉村 政徳

はじめに

現在の福江五島神楽は、何れの神社も神楽を奏すべき実演者が一人乃至二人という現状で、調査に能う神楽が実演できない状況にあることから、今回、特別に「福江五島神楽保存協会」の協力により、伝承者三人を八幡神社平田一實宮司の兼務社である天満神社例大祭に集合願い、神楽を奏していただき調査を実施することができた。しかし、それでも当神楽の全体を正確かつ時系列で報告できないので、まず福江五島神楽の全体像を説明し、その後に現地調査の詳細な報告を72頁以降に記した。

一 名称

福江五島神楽

（註）当地の神楽名を、地元の人々は「五島神楽」と呼んでいるが、他地区や神楽研究者の間では「福江神楽」と呼称したりするので、整理の都合上、本稿では神楽団体の「福江五島神楽保存協会」が新たに名付けた「福江五島神楽」とした。

二 伝承地

長崎県五島市の旧福江市内四十二の神社のうち、八幡神社・五社神社・天満神社・住吉神社とその各兼務社計十六社のある地域

*以下に平成二十二年度現地調査を実施した平蔵町樫ノ浦地区の天満神社例大祭における福江五島神楽の報告をする。なお、当神社は八幡神社宮司の兼務社である。

三 期日・場所

*平成二十二年度調査

期日 天満神社例大祭 平成二十二年十月二十一日（木）

場所 天満神社（長崎県五島市平蔵町樫ノ浦）



現在、神楽が定期的に演じられている神社は左のとおりで、主に例大祭で奏されているが、五社神社、住吉神社では例大祭以外にも数はさほど多くないものの数番が演じられている。※太字は本務社

八幡神社（宮司・平田一實）五島市下大津町

旧暦八月十五日（例大祭）

平蔵神社（宮司・平田一實）五島市平蔵町

旧暦九月十八日（例大祭）

和布崎神社（宮司・平田一實）五島市奥浦町

旧暦九月十二日（例大祭）

天満神社（宮司・平田一實）五島市平蔵町榎ノ浦

旧暦九月十五日（例大祭）

五社神社（宮司・月川敬身）五島市上大津町

旧暦一月二十八日（祈年祭）

新暦五月五日（例大祭）

新暦十一月二十三日（新嘗祭）

塩津神社（宮司・月川敬身）五島市上崎山町

新暦九月十五日（例大祭）

諏訪神社（宮司・月川敬身）五島市堤町

新暦九月九日（例大祭）

水神社（宮司・月川敬身）五島市高田町

新暦六月十二日（例大祭）

天満神社（宮司・森彪）五島市下大津町

新暦一月二十五日（例大祭）

白浜神社（宮司・森彪）五島市向町

新暦二月二日（例大祭）

山神社（通称長手神社）（宮司・森彪）五島市長手町

旧暦九月二十四日（例大祭）

住吉神社（宮司・片山貴史）五島市上大津町

新暦四月二十九日（例大祭）

新暦十一月二十三日（新嘗祭）

戸岐神社（宮司・片山貴史）五島市戸岐町

新暦一月第二日曜日（例大祭）

山祇神社（宮司・片山貴史）五島市大荒町

新暦三月下旬（七年毎の例大祭）

山祇神社（宮司・片山貴史）五島市竈淵町

新暦三月下旬（七年毎の例祭）

樺島神社（宮司・片山貴史）五島市本竈町

新暦十月第三日曜日（例大祭）

神楽を演ずる場所は、何れの神社も伝統的に拝殿や幣殿、あるいは神楽殿・お旅所などの屋内が基本であるが、住吉神社では現宮司の企画で一人でも多くの参拝者が拝観できるようにと境内に薄縁を敷いて行っている（雨天時は本来の殿内で演じる）。

また、各家の座敷が神楽を舞う場所にもなる。神幸祭のおり、家内安全などの祈願を申し込んだ家には巡行中の神輿が一時止まり、縁先に神輿を据えた後、宮司と神子がその家の座敷に入り、宮司が神輿に向かって祝詞をあげた後に「市舞」という神子舞を一番舞う古い伝統がある。

神楽の設備は、演じる場所によって若干の相違があるが、拝殿・幣殿・神楽殿・お旅所のお仮屋等で演じられる場合は、その殿内全体が舞所となり、その中の畳二枚分の広さ、つまり方一間が舞座となる。舞いはその中ですべて舞われるが、舞座は建物の構造によって異なり、畳だったり板張りだったり、ゴザ敷きだったりして定まった形式はない。舞座の中央には、天井から「錦蓋」と呼ばれる約一メートル四方の赤い天蓋が吊るされる。錦蓋の内側には日形月形雲形をかたどった色紙を貼り、蓋の上部には切り紙にした五色の紙ぶき風のものを入れておき、面舞のときにその錦蓋をゆすって切り紙を散らす。また舞座正面（神前）には五色の御幣を横並びに立て、神酒、鏡餅とともに日形月形の餅、それに小餅十二個（閏月の年は十三個）が供えられ舞座が整う。殿内の舞座に注連縄を張り巡らすことはないが屋外では忌竹に注連縄が張られる。

四 伝承組織

1. 神楽伝承の基礎となる組織は、各宮司（現在四人）の本務社ごとに「社人」と呼ばれるそれぞれの神人集団があったが、現在は八幡神社に一人、五社神社に二人、天満神社に二人、住吉神社に一人の計六人の社人と宮司四人、禰宜以下の神職一人の計十一人（神子を除く）だけで伝承されている。そしてその十一人の中にも高齢者など神楽を奉仕出来ない人もいて神楽の実演者（含、太鼓笛演奏者）は実質九人となっている。



社人

社人になる人は、昔から宮司家と何らかの縁戚関係があったり、代々の社人の家柄だったりする人たちが主で、今もそれは変わらない。社人の数も多い頃は現在の三倍はいたが、時代の変遷とともにそれらの家でも後継者がいなくなり現在に至っている。その間、宮司たちは社人の家を中心に後継者養成の努力や地域青年団などにも勧誘してみたが成就していない。一方、平成十三年度に「五島神楽」が国選択文化財となったのを契機に、平成十五年「福江五島神楽保存協会」が設立され、同協会が以後の保存と伝承の母体になっている。そして現在（平成二十二年十二月）、嬉しいことに新たに二人の社人が生れつつある。

2. 住吉神社では、これらの神楽集団とは別に地域の子供たちに神楽を教えて活発にその伝承をはかっている。また、福江の神楽に欠かせない市舞（神子舞）を舞う神社が、現在は五社神社と住吉神社だけになってしまった。



住吉神社の舞番付

3. 神楽を伝統芸能として支えているのは島民の中の氏子組織である。その氏子の中から神社祭典の準備や運営などを奉仕する人が「氏子総代」である。総代は神楽には直接関与はしないが、舞道具の運搬や諸種の世話など下支えを伝統的に担当している。

4. 舞という演舞演奏の維持は、当然ながら稽古であるが、協会が結成され

たところは社人を中心とした「神楽研究会」が作られ運用されたりもしたが今はその活動も停止している。

5. 舞道具（含、笛太鼓などの楽器）は各神社所有のものと保存協会所有のものがあり、協会が舞の道具全てを備品として完備しているわけではない。特に神楽面などは各神社から持ち寄らなければならない。しかし、それらの破損修理などは協会側で経費負担しているものもある。

五 行事（芸能）内容

（一）次第・日程

神楽が演じられる主な祭典は「例大祭」と前述したが、ここでの例大祭とは、二日間あるいは三日間行われる祭祀行事の総称と理解していただきたい。例大祭は概ね、前夜祭、神幸祭、例祭等の各種行事から構成され、神楽舞も各神社によって奏される祭典がそれぞれ異なっている。

八幡神社を例にして例大祭の日程と次第を説明すると、旧暦八月十四日午後六時から社殿で前夜祭が行われる。ここで「十二番神楽」が演じられる。十二番神楽は十二番舞わなくても十二番神楽という。翌十五日午前一〇時から例祭（本祭）があり神子舞の市舞が一番だけ奏される。そして午後一時から神輿巡行の神幸祭となり、神輿が町に繰出す。途中、祈願依頼を受けた家々に神輿が据えられ座敷で市舞が奏される。そして午後六時ころ神輿はお旅所のお飯屋に到着。御着祭で市舞が奏されて終了。翌十六日午前八時三〇分に還幸祭があり、ここでも市舞が奏された後神輿が本社に向けて出発し、途中、前日同様、祈願依頼の家々で市舞が舞われ、やがて本社に神輿が到着し、還御祭で市舞が一番舞われて三日間の例大祭が終了する。他の神社も概ね同様であるが今は神輿渡御が無くなっている。八幡神社も現在は渡御はなく前夜祭と例祭のみの二日間となった。他の神社も二日間の日程で行われており、神楽は例祭時に奏されることが多い。住吉神社では例祭時に二十番ほどの神楽を子供らで演じている。しかし、他の神社の例大祭は、宮司一人に社人も多くて二人という現状から、神楽を奏する最低人数が確保できないことが多くなり、笛の演奏なしで、太鼓

と舞だけという神楽が数番演じられている現状である。

平成二十二年十月二十一日 檜ノ浦・天満神社例大祭現地調査

そこで、今回の現地調査では、神楽保存協会の協力により、別々の神社に奉仕する社人三人に特別に加勢を願って、整った舞神楽を見すべく、平田一實宮司が受持つ天満神社の例大祭を調査対象とすることができた。

天満神社が鎮座する五島市平蔵町檜ノ浦は、全戸数六十三戸で人口は一二五人、そのうち七十五歳以上の高齢者が四十七人で、一本釣り漁の世帯が二十五世帯、遠洋漁業会社一社、マグロ養殖業の船五隻など、七割以上の人が漁業に携わる漁業の村である。(平成二十二年十月二十一日現在)

その氏神「天満神社」の例祭は毎年旧暦九月十五日、平成二十二年は十月二十一日がその祭日になった。祭り当日は、午前七時から氏子総出の祭りの準備が始まる。女性組の社殿内外の清掃作業、男子組の注連縄ないやノボリ立て、鏡餅と投げ餅用の餅つき作業などの準備が行われる。宮司は祭典開始三時間前の午前一〇時ころには神社に到着し、大漁祈願用の御幣作りをはじめ神事の諸準備、社人は舞神楽の準備を行う。昼食を済ませて、午後一時から例祭執行。参列者は例祭の中で大漁豊漁の個人祈願を受ける約三十人が拝殿左側に座し、反対の右側に社人三人が着座して神事が始まる。神事の次第は、①祓いの儀、②献饌、③祝詞奏上、④玉串奉奠と続く。その祭典行事の中で①の祓いの儀と参列者に玉串を渡す役は神職が宮司一人のため社人がその役を務める。

参列者の玉串奉奠が終って、⑤舞神楽奉納となる。その神楽が拝殿で演じられている間に、同時並行して幣



餅まき



舞見物学童



檜ノ浦

殿で個々人の大漁祈願祭が行われる。祈願者は祈願が済むと御幣を受けて、後日、船に飾り大漁の御守とする。この祈願を土地の人は「漁の神楽をあげる」という。

当日の舞神楽は、現在伝承されている二十番の中から七番が奉納された。当初は最後の八番目に「願之神」という舞を予定していたが、餅まき行事の時刻に喰い込んだために、この舞はカットされ、⑥の餅まき行事に移り大祭を締めくくった。

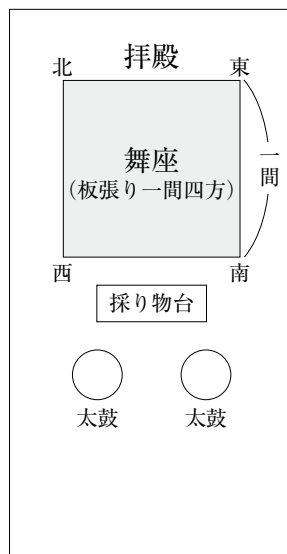
(二) 演目・芸態

天満神社拝殿は板張り敷きのため、その板張り一間四方が舞座となる。神前を正面として、それに相対した処の左右に胴長太鼓が二基据えられているが、今では神楽人減少で二基で叩くことはほとんどない。ただ伝統的形式ゆえに常に二基据えている。当日も宮司と三人の社人の奉仕で太鼓座には一人が座った。



舞座と参列者

《神前側》



天満神社「舞座」図

平成二十二年十月二十一日の天満神社例大祭当日に舞われた演目は左のとおり。

1 佐男舞 (直面一人舞・白衣白袴、格衣、懷中烏帽子)

本来は、神子の市舞であるが、現在、市舞を舞う神子不在のため、近年、市舞に代えて社人が神楽の基本の舞である佐男舞を舞う。舞人は右手に鈴、左手に扇を持って順逆に舞い、前半の舞が終って、正面に向かい止立して立言を唱え、後半でまた順逆に舞う。市舞は神子が緋袴千早で右手に鈴を持って舞う。



佐男舞

2 座祓ざはらい（直面一人舞・白衣白袴、格衣、懷中烏帽子）

神主の舞。舞人は右手に鈴、左手に御幣ごひを持って順逆に回りながら舞う。前半と後半の舞の間で、正面に向かって立ち止り立言を唱え、終って再度順逆に舞う座を祓う舞。



座祓

3 折敷舞おしきまい（直面一人舞・白衣裁着袴）

タスキを肩にかけ、右手に鈴、左手に扇を持って順逆に周り舞う。立言の後、「タスキ掛け」をして折敷を両手に持って東西南北中央の五方にかかって舞う。五穀豊穡感謝の舞。



折敷舞

4 島求しまいも（鬼面と直面の二人舞・白衣裁着袴、陣羽織、白杖）

右手に白杖を持って舞い、米俵に腰掛け鬼と人が問答してわが国の創生を説く舞。



島求

5 剣舞つるぎまい「二剣」ふたつるぎ（直面一人舞、白衣白袴、長剣二本）

右手に鈴、左手にタスキを持ち順逆に回り舞う。立言のあと、合立あいだちから剣を受けて四方にかかって剣を振る。舞人の言句いっくに太鼓役が座中の言句ざちゅうで答える剣祓いの舞。



剣舞

6 長刀舞ながなたまい（直面一人舞、白衣白袴、長刀）

右手に鈴、左手にタスキを持って順逆に舞った後、合立から長刀を受け四方にかかって長刀で悪魔を祓う舞。



長刀舞

7 篠曳さやひき・獅子舞ししまい（天狗面と獅子頭の二人舞、赤衣裁着袴陣羽織、桝柴）

まず天狗がササラ（桝柴）を両手に持って順逆に舞っているところに獅子が出てきて二人舞となる。途中、獅子が昼寝をし天狗がチョツカイを出す。獅子はこれに怒って天狗と合戦になる悪魔祓いの舞。この舞の名前は天狗の舞の「篠曳」と「獅子舞」とにあえて区別されているが、連続舞であって篠曳と獅子舞は一つの舞として構成されている。



篠曳・獅子舞

神楽の演奏楽器は、太鼓が胴長太鼓（一般に言う鉦打ち太鼓）、笛が雅楽用の龍笛である。普通、里神楽は篠笛が主流だが福江のそれは龍笛を使う。そして龍笛で神事の演奏も神楽の演奏も行うのが基本である。したがって神事の開始も太鼓と笛の合奏で始まるものと思っていたが、当日は太鼓だけであった。また祭典開始や神楽開始の太鼓演奏のことを富江神楽や有川神楽では「座揃えざそろえ」、沓岐神楽は「座奏ざそう」というが、その呼び名は福江にはない。玉串奉奠の際も福江五島神楽の音曲が奏されるものと思っていたが、その伝統は無いらし

く音曲も伝わっていないという。だから当日は雅楽の越天楽が龍笛で奏された。太鼓の曲数は基本形が四種類、基本形の応用打ちを入れると二十五種類になるというが、あえて曲数に数えるほどのものではない。笛の曲数は神楽笛、面舞の笛、獅子舞の笛、道行の笛など五種類がある。

舞道具は、採り物の中でも使用頻度の高い御幣・鈴・扇は、舞座の下座に常設される採り物台に常に置かれている。その他の榊葉・折敷・弓矢・剣・長刀・杖・注連縄などの採り物は舞人がその都度持つて出る。

羽織物、被り物、履き物などの衣装衣装の中で、五島の全ての神楽に特徴的なものが裁着袴である。この袴の使用頻度はどの保存会でも非常に高い。福江の神楽でも現在伝承されている神楽の約半分はこの裁着袴を履く。羽織物には神子の千早、神職の狩衣、斎服、社人の格衣のほか陣羽織があり、着物には山之太郎舞の姥用着物、荒平舞の赤衣がある。また被り物には懷中烏帽子と宝剣舞の烏兜があり、面は鬼神面、鼻高面、荒平面、翁面、獅子頭などがある。

天満神社例祭当日の舞道具は、座祓の鈴・白御幣、折敷舞の鈴・扇・赤タスキ・盆、島求の面・陣羽織・白杖、剣舞の長剣、長刀舞の長刀、篠曳の鼻高面・陣羽織・柴、獅子舞の獅子頭であった。

当神楽の独特の芸態として「合立」という役目がある。つまり主になる舞人の補助役のことを言うのであるが、主になる舞人が舞っている途中で、合立役が舞の中に加わり、一緒に舞いながら主の舞人に舞道具を渡すことをいう。

福江の神楽は、史料からは四十八番の神楽が記録されているが、現在伝承されているのは二十三番。その中でも太鼓・笛・舞と完全保存されているものとなると十九番となる。二十三番あるいは十九番の中には復活された露祓、剣舞、荒平、戸隠舞の四番の舞がある。

(三) 詞章

舞を演じている中で唱える詞を長崎県の平戸や壱岐の神楽では唱教というが、福江のそれは立言という。立事とも書く。舞が始まる前に太鼓に合わせて唱える神歌もここでは「たちごと」と言い、春の句を唄うときには「春の立事」

という言い方をする。舞が舞われているとき太鼓役の者が太鼓を打ちながらの唱え詞を「座中の言句（いいく・ゆうく）」という。

ここでは、十月二十一日天満神社の例祭で演じられた神楽舞六番の立言と言句の詞章のみを記すが、舞う人または太鼓役は『五社神社神楽本』に拠った『天満神社神楽本』であつたりするので、立言または言句に違いがある場合は両方を併記して示している。

1 「座祓」

神風や座も清らかに吹き払ひ 心の中も澄み渡りけり
謹請再拜再拜夜の守り日の守りに守り幸はひ給へと恐み申す

(五社神社神楽本)

神風や座も清らかに吹き被い のこる心はたかまりけり

謹請再拜再拜夜の守り日の守りに守り幸はえ給えと恐れみ恐れみ申す

(天満神社神楽本)

2 「折敷舞」

神楽に木綿志手掛けて誰が世にか 神の御前に祝ひ初めけむ

(五社神社神楽本)

3 「島求」

人 何々人かと思れば人にもあらず 神かと思れば神にてもあらず 神跡離して怪
しからん姿して 今此の御神事の処に出来きたるものは何ものぞ 名乗れ 名の
らずば神通の白杖を以て打擲せん

鬼 我が事か

人 中々の事

鬼 我は 地祇神也 今爰に神事に舞楽有るを聞き いさましく思ひ 化身の姿を顕
し参りて候

人 やあら 扱は貴しとも貴く候や 地祇神の化身にしましませば日本我朝立ち初

まりの儀御存じなされ候也

鬼 かななかの事はれ答えねばならず答ふれば神慮恐み候得共あらあ語つて聞かせんこれより静かに聴聞し給へ

鬼 去る程に 日の本我朝立ち始めの事は 往年天地未分陰陽分れさる時混沌として鶏の子の如し溟滓てきざしを含めり其の清陽者は薄靡いて天となり 重く濁れるものは掩滞りて地となるに及んで精妙なるが合えるは博易く故に天先づ成りて地後に定めむる 然而 神聖其の中に生したむ是を国常立尊と申し奉る

人 其の清陽なるものは 薄靡いて天となり 重く濁れるものは掩滞して地となるとはいかなる事にて候也

鬼 夫は元氣圓象にして半ばは天となり半ばは地となる 地凝る故に海となり山となる かくの如くにして天恒左に旋地鎮に定る 天は人の心の無形にして常に天地の中を巡るが如し 地は人定て動かざるが如し 天常に凝るは人寝ると蠡も詠絡止ざるが如し 地鎮に定るとは詠絡止ずして脾轉騰せざるが如し 天恒に地の外を巡る故に天に应じて以て定るものなり 干時国常立尊

是即天神七代の初にして御在天より七代の御代に至りて伊弉諾尊伊弉美尊天の浮橋の上に立たせ給ひて ともに許ふて曰く 底つ下に豊洲なからんやとて廻ち天の瓊矛を下指之たまば滄溟を得々まふ其矛の鋒より滴瀝之潮凝りかたまりて 一つの島と成り給ふ 是を名付て設馭虚嶋と申してけり 伊弉諾尊伊弉美尊彼の島に降りたまひて淡路の嶋を 胞として 大日本豊秋津州を生みたまふ 八州惣して 地のあらんかぎり万の島を生み給ふ於是に神の神請誠あるによつて日の神天照大神を生まし給ひて 是より天が下の万の物を生じ給ふ

是天照大神の初め奉り地神五代の御代に至りわがや膏不合尊の御子の神日本磐余彦尊是人王の初 神武天皇と申し奉る万代の正統にて御在 然而 四姓分士農工商其の外品々の事今以て目前なり 皆本は 国常立尊の一氣にて神在故に天地有り 万物有り 神在故に衆生有り 万法在り故日本我が朝は三国一の神国なり 神の御前に剣を以て国土は豊に舞奉る

(五社神社神楽本)

4 「劔舞（二劔）」

立言

音に聞く真の劔を抜いて見よ 身は白金に作られにけり

舞人 東方世界と申すには

座中 方を申せば方は是甲乙の方 木を主る彼方を委拝奉るは勾勾廻智命の大神此の御神を本地として御立在神明の御数は六万六千六百六十六神なり

はあ高は大神下きは小神諸大明神よいの一てんに四方結界請じ奉る

靡かば靡け一方にや 靡くは神の有狂成る物 此のものにここにおかれずここにせば 四天の虚空も雲あらせずや 打切

舞人 南方世界と申すには

座中 方を申せば方は是丙丁の方 火を主さどる 彼方を委拝奉れば軻遇突智の命の大神 此の御神を本地として御立在神明の御数は七万七千七百七十七神也

はあ高きは大神下きは小神諸大明神よいの一てんに四方結界請じ奉る

靡かば靡け一方にや 靡くは神の有狂成る物よ 此のものにここにおかれずここにせば 四天の虚空も雲あらせずや

舞人 西方世界と申すには

座中 方を申せば方は是庚辛の方 金を主る 彼方を委拝奉るは 金山彦命の大神 此の御神を本地として 御立在神明の御数は 八万八千八百八十八神也

はあ高は大神下は小神諸大明神よいの一てんに四方結界請じ奉る

靡かば靡け一方にや 靡くは神の有狂成る物よ 此のものにここにおかれずここにせば 四天の虚空も雲りあらせずや

舞人 北方世界と申すには

座中 方を申せば方は是任癸の方水を主る 彼方を委拝奉れば罔象女の命の大神 此の御神を本地として御立在神明の御数は 九万九千九百九十九神也 高きは大神下きは小神諸大明神よいの一てんに四方結界請じ奉る

靡かば靡け一方にや 靡くは神の有狂成る物よ 此のものにここにおかれずここにせば 四天の虚空も雲りあらせずや

靡かば靡け一方にや 靡くは神の有狂成る物よ 此のものにここにおかれずここにせば 四天の虚空も雲りあらせずや

靡かば靡け一方にや 靡くは神の有狂成る物よ 此のものにここにおかれずここにせば 四天の虚空も雲りあらせずや

舞人 東方に悪魔あらん

座中 悪もなし
舞人 魔やあらん
座中 魔もなし

有柴打柴きつてん魔王神通はえたる太刀を以てとさんかふさん切る程に 金の
舞台に切り付くる 金の舞台だれとも善はあれども悪はなし

右 四方とも同事也

舞人・座中 よいの一てんに はあ四方結界請じ奉る 靡かば靡け 一方にや靡くは
神の有狂成る物か ヤアサア

悪有らばこそ除けすされや四方去れ ヤアハア そがの水にかけわさすとかや
右、四方共に此如

剣立て諸はの山もかけ清し ヤアサアハア そう河の水にかけはさすとかや
右、四方同事成り

中央の言句

音に聞く真の剣を抜いて見よ ヤアサアハア 身は白金で作らざるものか

(五社神社神楽本)

5 「長刀舞」

合立 千早振る神の御前に長刀を振へば悪魔も影ぞ潜むる

座中 災難祓幅大太刀 悪魔を祓をば弓胡籥 ヤアハア

舞人 東方に悪あらん

座中 悪もなし

舞人 魔やあらん

座中 魔もなし

南方西方北方 右前の通り

(五社神社神楽本)

伝承されている演目について

江戸末期から昭和初期にかけて作られた神楽本あるいは舞本と呼ばれる地元

の史料には四十八番以上の舞名が記録されている。しかし、現在その全ては保存されていない。伝承されている舞は左の十九番と、二つの神社で十九番のほかに四番が伝えられている。

- | | | | |
|-------------------|-----------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1 市舞
いちまい | 2 佐男舞
さおまい | 3 露払(露祓)
つゆはらい | 4 荒塩(新潮)舞
あらいしお まい |
| 5 折敷舞
おしきまい | 6 鳴求
なるもとめ | 7 剣舞(二剣)
つるぎまい ふたつるぎ | 8 神圖舞
かんとずまい |
| 9 四剣
よつるぎ | 10 篠曳・獅子舞
ささらいし まい | 11 座祓
ざはらい | 12 山名付
やまなづけ |
| 13 山之太郎
やまのたろう | 14 山之下・山之荒平
やまのした やまのあつち | 15 長刀舞
ながなたまい | 16 願之神
がんのかみ |
| 17 荒平
あらかひら | 18 戸隠舞
とかくしまい | 19 御幣帛
みてぐら | |

以上は、福江五島神楽保存協会が内外に公にしている保存伝承の舞である。そして次の四番が八幡神社・五社神社に伝承されている舞である。

- 1 注連舞 しめまい 2 恵比須舞 えびすまい 3 宝剣 ほうけん 4 乙子瀬 おしこぜ

六 由来・信仰

福江五島神楽の由来や濫觴(らんそう)ははっきりとは分らない。しかし五島史を解き明かす中で、五島藩と神社との関わり合いを中心に調べて行けばほんやりと神楽の起こりが見えてくる。昭和十八年に出された『五島神社誌』によれば、初代藩主の宇久家盛(平家盛)が健久元年(一一九〇)に京都より五島列島北端の宇久島に下向したおり、守護神として京都の八幡神を祀り神社を創建したと伝えている。その神社が現在の宇久島にある飯良八幡宮という。そして十代藩主基(もと)のとき、飯良八幡宮の分霊を福江島の下大津に勧請して出来た社が現在の八幡神社であるとしている。

その八幡神社所蔵の『五島家系図』(天正七年(一五七九))によれば、「純堯ノ側室、大津ノ市ニ純玄生ル」という件がある。純堯(すみたか)は十九代の藩主で純玄(すみはる)が二十代、その純玄の母が「市」で、八幡宮の巫女であったという。市とは個人の名前ともとれるが、市は「伊智(いち)」とも表し巫女を指す言葉でもある。現在、「大津の市」は八幡宮の巫女とする説が専らであるから、これに従えば室町末期には五島にも「市」すなわち巫女が神楽を奏する役目としてすでに居たことになる。この頃の神楽は舞神楽というより唱言だけの祈祷神楽が主だったようである。

る。次に、舞神楽を記述した早いものの例は、延宝五年（一六七七）に藩主盛勝の病氣平癒祈願として、福江の四社、つまり「八幡・五社ハ神楽、住吉、天神ハ市神楽ヲ奏シ…」〔『五島編年史』〕と命令している。これらの二つの史料から類推すれば一五〇〇年代にはすでに巫女神楽が存在し、現在の舞神楽の粗形も遅くとも江戸前期には完成していたと判断してもよいのではないか。

次に、長い祭祀の歴史の中で脈々と伝承されている興味深い祭り用語がある。神幸祭のとき福江島では神輿を担ぐ若衆を「陸尺ろくしゃく」という。その昔、六尺ろくふく禰ねで担いだことからその名が付いたようだが、福江では陸尺と書く。このロクシヤクの呼び名は福江島内では共通して同じ呼び方をしている。また巡行の途中で個人の家に神輿が据わり、市舞が舞われるのも共通している。この祈願祭のことを五島列島ばかりでなく、長崎県下では「神楽をあげる」という言い方をする。依頼主は「私のうちも神楽をお願いします。」あるいは「神楽をあげてください」と申し込む。したがって神社側も「神楽を受け付ける」と言うし、個人が神前に供える初穂料とか玉串料と呼ぶいわゆる祈願料も、のし袋に「お神楽料」と書く。そして「初穂料」は別に包むといった習慣がある。これは神輿巡行の際ばかりでなく、普段神社で行う車のお祓いと初宮詣など舞神楽の無い個人祈願でも全て「お神楽」という。

のし
御神楽料 氏名

のし
初穂料 氏名

長崎県における祈願料の
のし袋の書き方

神楽用語にも独特の言い方が多くある。舞の練習のことを「舞習まいならい」というのだが、五島弁で舞を「みゃあ」と発音することから舞習いは「みあーならい」と発する。「今晚七時からみゃあならいをします」といった具合になる。神楽

を舞う順番を「番付ばんづけ」という。だから神楽の順番表も「〇〇神社例大祭神楽番付」となる。また舞名の「三剣・四剣・二剣」を「みつるん・よつるん・ふたつるん」といい、「願之神・掛神がのかみ かけがみ」も「がんのかん・かけがん」と訛る。舞神楽が始まる前に「お神楽」と呼ぶ神楽歌が太鼓のリズムに合わせて唱えられるが、この四季の神楽歌を「四楽しがく」という。舞神楽に入り太鼓を打つ役の人が唱える言葉や歌を「座中の云句ざちゅうのうごく」または「ゆうく」という。さらに特徴的なのが舞人の補助役として舞の中に一時加わって道具を相手に渡す役目を「合立あひだち」ということは前述した。

七 変遷と所見

福江五島神楽の変遷については、平成十四年二月十二日（平成十三年度）に国選択無形民俗文化財になった時を基点として、それ以前の様子と文化財選択以後の変容について述べることにする。

まず、当地の神楽が平成十四年に「国の文化財に選ばれる」ことなど、地元の神職や社人など関係者はおしなべて夢想だにしていなかった。だから関係者がこのニュースを知ったのも新聞あるいはテレビの報道からで、「何で、うちの神楽が市の文化財にもなっていないのに国の文化財？」「そんなに高い文化価値があったの？」とキツネにつままれた様な、棚からボタ餅のような不思議な感慨をもったようである。それもそのはず、地元の神社に伝わる貴重な古記録はあまたあるにも拘わらず、研究者が頻繁に来訪して詳しい文献調査や舞神楽の実見調査にあたるということは稀であったからだ。

しかし国選択になったことは、福江五島神楽の伝承関係者にとって、再び神楽活性化につながる好機ととらえられ、その後の活性化活動の契機になったことは間違いない。

選択文化財となる以前の当地の神楽機構は、江戸期から続く伝統のままだに、旧福江市内の八幡・五社・天満・住吉の各神社にそれぞれの神楽人「社人」が数人ずつ居て、地区内の神楽を奏する祭典には、これら社人たちが神職とともに相互に扶助し合う「助勤」という協力態勢があった。神楽を演ずるには、基

本的に太鼓二台、笛最少で一笛、舞人は二人舞もあるから最低二人、次の舞も準備しておかねばならないから、最少人数でも合計六人態勢で望まなければならない。昭和五十年ころにはこの人数は十分満たすだけの陣容であったから神社間で相互助勤態勢がしつかり整っていた。昭和五十年代の神職数は現在の四人の倍、九人の神職がいたし社人も十人以上はいたようだ。

この伝統システムは昭和六十年ころまでは続いていたという。しかしながら、過疎化が進み氏子数の減少とともに、特に宮司が兼務する氏子激減の神社などでは、神楽奉仕者への謝金を始めとする祭典経費が少数氏子世帯を圧迫し出し、重い負担としてのしかかってきた。このことは五島地区の他の保存会でも同様のことであった。

さらに、社人の数も減少し出した。時代の趨勢とはいえ代々続いていた社人の家でも跡継候補は島を離れて都会で働くようになっていく。十人以上いた社人も現在は八十七歳の社人頭を筆頭に五人にまで減った。したがって、昔のような相互の助勤システムが機能しなくなり今や瓦解寸前となっている。

しかし、国の文化財になったのをきっかけに、市の商工会議所会頭が会長に推され、平成十五年に「福江五島神楽保存協会」が設立された。旧福江市における初めての神楽組織の誕生である。設立以降、神職社人を中心としたこの神楽保存団体は頻繁に会議を開き、現在伝承されている神楽の相互確認をはじめ、舞の所作の細かい部分の擦り合わせや手直し、太鼓や笛の奏し方まであらゆる検証を実施して来た。社人を中心とした研究会も出来た。会員の増強には今も力をいれている。

保存協会が出来てから早や七年、努力の成果はあった。まず、史料による四十八番の神楽の中で休眠状態だった露弘、剣舞、荒平、戸隠の四番の舞を復活したこと。これで保存伝承していく舞の数が十九番、舞神楽の開始前の「お神楽」を入れれば二十番、加えて八幡・五社だけで舞われている四番も入れると二十三番、二十四番が伝承可能であることが分かった。これは今後に繋がる成果である。また、森彪天満神社宮司が文化財認定記念として編んだ雄渾の冊子『福江五島神楽本』は、今後の会員研鑽の大事な指導本となり、また研究者

にも有難い資料となるであろう。さらには会員増の努力も稔り、近々数名が保存会に入会して社人を目指そうとする候補者が現われたと仄聞そくぶんしている。大事に育てて貰いたい。

逆に残念なことが三つある。一つは七年ごとの遷宮祭、通称「七年遷宮」が平成十年三月を最後に、現在、休眠状態にあることである。休眠に至る原因は諸種あるが、旧福江市の八幡、五社、天満、住吉の四社の氏子が、拠出する祭りの運営費の負担増に苦しみ重荷になって来たことが最大の原因だという。この遷宮祭は四社からそれぞれに神輿が繰出し、お旅所にその四基が一同に集結する市民総参加型の最大のイベントであった。当然、舞神楽の番付も例年とは比べものにならないほど多くの舞が奏されていた。もし、この祭りが平成十七年に規模や企画を変えてでも伝統の灯を護り続けて実施していたら、現在の氏子や保存会の勢いもまた違っていたかも知れない。

もう一つは、商工会議所が中心となり昭和三十二年から現在に続いているイベント、通称「福江まつり」(正式は「福江みなとまつり」)に参加出演できなくなったことである。福江まつりは毎年十月初めの土日に行われ、花火大会や総踊り、福江版青森ねぶたなどが催されているが、以前はこれに四神社が毎年交替で神輿を一基ずつ繰出し祭りのメインをなしていた。しかし、神輿巡行経費に対する市の補助金がカットされ、やむなく中止となったようだ。

三つ目が、旧市内のすべての神社の例祭に神輿が出なくなったことである。八幡神社は数年前から隔年毎に出すことに変えているが、出すべき年にも出せないことが多くなって来た。五社神社は平成十五年から休止している。住吉、天満の両神社も出なくなつてから既に久しい。神輿の渡御が無いと言うことは、各家に神輿が止まり、座敷で神子の市舞も無くなるという下五島独特の伝統行事が消滅することを意味している。島内の限界集落と言われる所でも知恵を絞る企画を出し合つて少ない経費の中から神輿が繰り出し舞が実施されているところは多い。福江という五島の中心部からこれらの伝統文化行事を消滅させていいのか。関係者の再興努力に切願すること大である。

要望が一つある。舞神楽が伴う場合の祭典には、昔のシステムを復活して、

せめて社人の「助勤」態勢だけでも再構築してほしい。奉仕者への謝金等の経費増を伴うことは重々承知しているが、他地区の例も参照されての検討は必要と思う。現在のままだと舞神楽が消滅する危険を孕んだままだからである。

子供神楽の伝承の有り方についても少し所見を述べておきたい。五島全体の舞神楽の中で、上五島の「四天」や「五方」、下五島の市舞などの神子が舞う子供神楽は別にして、本来、大人が舞う舞の中で、主に子供に舞わせる舞として「佐男舞」や上五島の「長刀舞」などがある。しかし、これらは舞人が子供になったからといって舞い方が変わるというものではない。否、決して変えてはならない。誰かが子供神楽として創作創始するということであれば別だが、地元神楽を変容した形で子供神楽に仕立てることは厳に謹み、慎重の上にも慎重を期さなければならないことである。とかく指導者は子供が舞いやすいように変えたがるのは筆者もかつて経験があるから理解はするが、反省の上に立つて、全てに基本に忠実であってほしい。そして「子供神楽」という言い方も、その土地で昔から子供だけに伝わっている神楽のことを指す言葉であるから、大人の舞を子供が舞うからといって「子供神楽」と言うべきではない。これは五島の神楽団体全体で注意すべき言葉の一つでもある。

ともあれ福江五島神楽は、国選択文化財認定後の活動とその努力は大いに多とするも、五島全体の他の保存会の勢いと活躍に比べれば、まだかなりの温度差があることは否めない。今後、四人の宮司の連帯と指導力の発揮と、保存協会の年間を通じたたゆまぬ活動の中から今以上の活性化を望みたい。幸い福江の神楽本が森彪宮司の努力によって江湖に広まった。これを会員が活用しない手はないし宝の持ち腐れにしてはいけない。また住吉神社では子供の舞を中心に企画して祭りが一層賑やかで華やいでいる。そしてこのことは次世代に伝承する命脈にもなっていることを保存会全員が理解され領導してほしい。

ありかわかぐら
有川神楽「志自岐羽黒神社」

久保田裕道

一 名称

有川神楽

二 伝承地

長崎県南松浦郡新上五島町の旧有川町の有川神社と兼務社のある地域

*以下に平成二十二年現地調査を実施した志自岐羽黒神社例祭における有川神楽の報告をする。なお、当神社は有川神社宮司の兼務社である。

三 期日・場所

期日 志自岐羽黒神社例祭 十月三十一日・十一月一日

*平成二十二年も同日

場所 志自岐羽黒神社（太田郷）

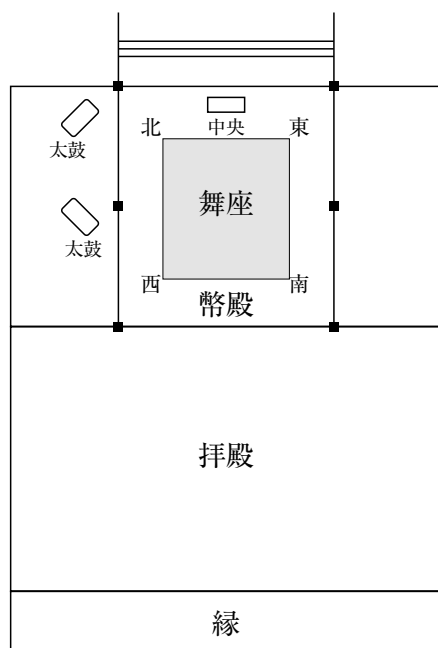


志自岐羽黒神社

志自岐羽黒神社は、拝殿が幅五間、奥行き三間半。神前側に幅二間、奥行き二間の幣殿があり、その中央が一間四方の板敷となっていて、ここが舞座となる。上五島神楽と異なるのは、多くの場合、この幣殿に舞座があること。幣殿の一間四方で舞うことになる。舞座が板敷なのは、志自岐羽黒神社の他には有川神社のみ。それ以外は、畳敷である。なお、有川神社の前身である祖母君神社は幣殿が狭く、拝殿に舞座があった。

太鼓は、神楽上演時には幣殿の向かって左に隣接する脇部屋に二基縦位置で並べられる。叩く際には、双方とも太鼓の右側を叩くことになる。なお、置く位置が向かって左ということに決まりがあるわけではなく、例えばそこに神輿が置かれたような場合には、向かって右に太鼓を配して叩くこともある。その際も右側から叩くのは変わらない。

このように幣殿の脇部屋は楽器を置く場所でもあり、神職・社人の控え場所でもある。舞座が幣殿であるため、脇部屋との間を御簾や幕は覆わずに開けたまま使う。また有川神社では上五島神楽と同様に、四方の隅と神前側それぞれに五色幣を置くが、志自岐羽黒神社を始め、その他の神社ではしていない。ただし方角は決められている。志自岐羽黒神社では右奥を東とする。有川神社



志自岐羽黒神社「舞座」図

は右奥が南となっている。舞は東南北西の順に舞うのが基本とされるが、有川の神職・社人・保存会員は有川神社の方向に慣れているため、太田でも左奥から舞ってしまうという。その点、太田在住の巫女は右奥から舞っている。

幣殿には天蓋もないが、志自岐羽黒神社では、幣殿の天井に四辺と対角線にしめ縄が張られている。これは、志自岐羽黒神社のみの習慣となっている。

四 伝承組織

神楽の伝承者は、有川神社宮司を務める江口一二三氏を中心として、江口氏の家族と、有川に住む社人（江口氏と原氏）とで構成されてきた。また保存会長は社人の江口栄一氏が務める。社人は世襲制というよりも、神葬祭の家であれば誰でも構わないのだが、親が神楽に携わっていると必然的に子供も神楽を習うようになるため、結果的に代々受け継いでいくようになる。

神楽を始めるのは小学校の低学年頃からで「座祓」「左男舞」から始め、中学生の頃には「折敷舞」を演じるようになる。基本的には神楽は男子のものだが、「座祓」「荒塩舞」などは女子でも舞う。

練習は夏の祇園祭（七月後半）前と秋の各地の例祭前におこなっている。およそ三週間前から、週二回程度。一週間前になると更に密に練習をするように



有川神社

なる。かつては、秋の例祭で兼務社を廻るとそこに宿泊したため、宵宮が終わるとそこで反省会と練習をおこなったという。

しかしこうした伝統的な神職と社人だけでは、将来の伝承に不安があることから、国選択無形民俗文化財（平成十三年度）となった平成十四年に、「有川神楽保存会」を結成。氏子の中からメンバーを募集することとなった。あらかじめ声がけをしていた人に加え、広報での呼びかけからも集まり、さらにその人々が声をかけて八名が集まった。

現在は、神職・社人と保存会員が混在して神楽を伝承している。ただし、祭礼の際には、神職・社人は仕事として行くが、保存会は基本的にボランティアでの参加となる。また町のアトラクションなどで神楽を披露する際には、保存会の名で参加することになっている。

一方、太田郷の祭礼では「座祓」「五方」「浦安の舞」は、太田郷の女子中学・高校生によって演じられる。これは、昭和四十八年の志自岐羽黒神社遷宮時に、上五島神楽を伝える榎津神社の神職に依頼して太田に住む小学生女子児童が習得したもの。通常は小学校四年生から始め、舞手は毎年更新されていた。しかし子供の数が減ったために中学生に代わり、現在の五名のメンバーはこの何年間で続いている。内訳は中学校二年生が二人、三年生が二人、高校三年生が一人。稽古は例祭の一ヶ月ほど前からおこなう。平日は二〇時から、週末は一九時三〇分から始める。なお、浦安の舞に限っては太田以外でもその集落の女子が舞う場合がある。

五 行事（芸能）内容

（一）次第・日程

1 準備

土曜日である十月二十三日に、八時より地区毎に例祭の準備がおこなわれる。平成二十二年は、後町の三〇七班がしめ縄づくり。上筋の一〇五班が神社掃除、下筋の一〇六班がやぐら組みおよびしめ縄張り。やぐらとは幟旗を立てるための台組であって、祭礼時には神社の参道から神社前の橋近辺まで色とりどりの幟旗で埋め尽くされて賑やかである。

2 十月三十一日（前夜祭）

一八時三〇分より祭典が始まる。拝殿入り口では、甘酒



幟旗

がふるまわれる。神職・社人と巫女は全員幣殿へと上がり、宮司が幣殿の向かって右奥に着座。笛は向かって左脇の部屋に、その他の神職・社人と巫女は向かって右の脇部屋に座る。幣殿の手前側には太鼓が二つ並べられ、さらに手前に叩き手が座る。向かって右の太鼓は、通常のものが破れたために、神幸用の薄い太鼓である。

修祓に始まって開扉、献饌、祝詞奏上、そして玉串奉奠と続く。玉串奉奠では、拝殿に集まった参拝者のほぼ全員がおこなう。その際、幣殿と拝殿とが用いられるが、自然と幣殿では男性が、

拝殿では女性がおこなうようになっているが、これは決まりではない。



浦安の舞



金幣による祓い

一九時一〇分、太鼓が向かって左の脇部屋に移動され、座祓いから神楽が始まった。この日の演目はやや多く、次の通り。通常の例祭では九番程度を演じる。

- ①座祓(巫女) ②左男舞 ③荒塩舞(巫女) ④五方の舞(巫女) ⑤四天王(保存会)
- ⑥浦安の舞(巫女) ⑦御剣 ⑧折敷(子供) ⑨山之真(宮司) ⑩獅子舞
- ⑪八饌舞

二二時、神楽が終了すると撤饌、閉扉をおこない、最後に宮司が金幣を持って、神職・社人・巫女から参拝者まで全員に対して祓いをおこなった。二二時一八分、宮司からの挨拶があつて、終了後は巫女が参拝者に神酒を注いで回った。

3 十一月一日(例祭)

九時二〇分、御霊移しの済んだ神輿を拝殿から外に出し、神幸が始まる。行列順は次の通り。なお金幣は、途中で沿道の氏子に対して祓いをおこなうため、行列からはみ出る形となる。

獅子・天狗 ― 清め(潮桶) ― 注連縄(笹) ― 旗 ― 金幣 ― 神職 ― 神輿 ― 宮司 ― 巫女 ― 子供神輿 ― 太鼓・笛 ― 氏子
一行は神社を出た後に南西に向かつて進み、橋を渡った先を左に入って南西方向の集落内を回って、再び橋に戻ると、今度は北西方向の集落を回る。太田小学校の手前で川沿いに橋まで戻り、橋を渡って北西方向に集落を回って神社へと戻る。

一〇時一〇分、

還御した神輿を幣殿から本殿に続く間に上げて御霊移しをおこなう。献饌をおこなって祝詞奏上に続き、玉串奉奠。郷長に続き男性が幣殿でおこなった後に、女性が行き拝殿でおこなう。ここまで太鼓は幣殿の手前に横並び、笛は幣殿の向かって左脇部屋にいる。

一〇時四〇分、神楽が始まる。この時、太鼓は笛と同じ左脇部屋にいる。この日の演目は次の通り。

- ①座祓(巫女) ②五方の舞(巫女) ③浦安の舞(巫女) ④獅子舞(氏子)
- ⑤八饌舞



神幸(先頭)



獅子・天狗



神幸(神輿)

この日の獅子は、太田の氏子によって舞われる。宵宮か例祭のどちらかで地元の人が舞うのが恒例となっているという。八饌で餅が撒かれた後、一一時三三分、神楽が終了する。すぐに撤饌をして一一時四三分には例祭が終了。宮司が郷長へ報告をする。宮司から一言あったのち、すぐに神饌を入れ替えて、続いて「新嘗祭」がおこなわれる。新嘗祭は通常の祭典で、神楽は伴わない。最後に餅撒きがあつて終了し、宮司が参拝者に金幣による祓えをおこなう。一二時四〇分、すべての祭典が終了すると、神社前の公民館に場所を移して直会（昼食）が催される。



餅まき



獅子

(二) 演目・芸態

上五島神楽同様に、玉串奉奠時に楽にあわせて神歌が唄われるのが特徴的だといえる。まず笛のみで「千早ふる」で始まる神歌を唄い、「おもしろや」で「君が代」を入れて太鼓が入る。ここから「久々は」から「八雲たつ」までを唄う。その後、四季の神楽歌を適宜選んで唄い、「よろこびに」までいくが、その部分は参拝者の多少によって調整する。

神楽に用いる楽器のうち、笛は篠笛を用い、これは個人持ちとなる。太鼓は鉦打ちの胴長太鼓を基本とするが、短胴のものをを使う場合もある。通常は村持ちで、神社に備えてある。二基用いるが、大小の区別はない。ただし上（本殿寄り）に置いた方が主で、下がそれにあわせる形をとる。このほか「八饌舞」に用いる箕も村持ちである。また獅子頭は有川神楽で所有しているが、太田だけは個人持ちの獅子頭があるため、志自岐羽黒神社の宵宮か例祭のどちらかは、それを使って集落の者が演じる。面や採り物については、基本的に古いものを

もとに複製を作つて使うようにしている。ただし、古い面についてはほとんど残っていない。

舞の実際として、所作は東南北西の順に同じものを繰り返すのが基本だが、省略する際には東南で一所作、西北で一所作というように省いている。また舞い方で上五島神楽と最も異なる点が、巡つて中に入る場合に上五島は横から入るが、有川の場合は舞座手前（神前に遠い側）から入ることである。

なお、今回の上演演目以外に次の舞がある。小幣（現行）・七五三舞（現行）・御潮井桶（現行）・長刀舞（現行）・剣舞（現行）・恵比須（現行）・御幣帛（現行）・將軍舞（舞可能）・神図（舞可能）・山之下（廃絶）・荒平舞（廃絶）・鈴舞（現行）・山之太郎（現行）・末広舞（現行）・梓弓（現行）・四剣（現行）・火神舞（現行）・二本剣舞（廃絶）・宝剣舞（廃絶）。なお恵比須は祭礼の際には上演することが多いが、今回は演者の服喪のためにおこなわれなかった。

以降に舞の所作等について、演目毎に挙げてゆく。本記録は、あくまで本調査時の実見に基づく記録であるため、本来の伝承内容と若干の相違を含んでいる場合がある。また所作の回数等を省略して演じたものも含まれているが、これは実際の上演状況を把握するためにも、そのまま記録している。また舞手が円を描いて移動する場合これを「巡る」と表記し、その場で回転する（あるいは回転しながら移動する）場合には、「回る」と表記する。その際、時計周りを「順」、その逆を「逆」と称しておく。また方向を表す場合、調査地の呼称に倣う。志自岐羽黒神社の場合には、向かつて右奥が東、左奥が北、右手前が南、左手前が西となる。それ以外については、仮に本殿方向を一二時とし、その反対を六時といったように表す。

1 座祓（6分30秒）

「座祓」「左男舞」「荒塩舞」を「清めの三番」と称して、必ず最初に舞う。太田では、太田の巫女が舞う。

①案の前に座して拝礼し、幣二本をまとめて両手で取り上に掲げて立ち、中央へ下がって一礼。

② 左右左と後方へ採り物を振る。左に振る際は左足を、右に振る際には右足を一步下げる。

③ 手前中央から順方向に二巡りし、手前中央から舞座の中央に入って神前に向き、



両膝で屈伸一回。その後、順方向に回転して西隅(左手前)に南向きに立つ(「順巡りの基本」)。この間、左手で幣を掲げ、右手は腰。

④ 西隅から逆方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、逆方向に回転して南隅(右手前)に西向きに立つ(「逆巡りの基本」)。この間、右手で幣を掲げ、左手は腰。

⑤ 二本の幣を両手に取り分け、左手の幣を縦、右手の幣を横にして十字に交わらせ、南隅から「順巡りの基本」で西隅へ。

⑥ 右手を縦に、左手を横に十字に交わらせて持ち、西隅から「逆巡りの基本」で南隅へ。

⑦ 両手の幣をX字に交わらせ、南隅から「順巡りの基本」で西隅へ。

⑧ 次は首の後ろで両手の幣をX字に交わらせ、西隅から「逆巡りの基本」で、最後は南隅に行かず中央に立つ。

⑨ 両手の幣を上に掲げてタチゴト。

⑩ ②同様に左右左と後方へ採り物を振る。

⑪ ③同様に左手で幣を掲げ右手は腰で、「順巡りの基本」で西隅へ。

⑫ ④同様に右手で幣を上げ左手は腰で、「逆巡りの基本」で南隅へ。

⑬ 右手幣を前に出し、左手幣は左肩にあてて「順巡りの基本」で西隅へ。

⑭ 左手幣を前に出し、右手幣を肩にあてて西隅から「逆巡りの基本」で南隅へ。片膝をつく。



⑮ ⑦同様に両手の幣をX字に交差させ、南隅から「順巡りの基本」で西隅へ。片膝をつく。

⑯ ⑧同様に首の後ろで両手の幣をX字に交わらせ、西隅から「逆巡りの基本」で、最後は南隅へ行かず中央に立つ。

⑰ 最後に両手で幣を掲げ、一礼して神前に進み、座して案に幣を置いてから拝して終了。

2 左男舞(7分)

烏帽子に狩衣姿。「清めの三番」の一つ。この舞は、舞手の中に子供がいれば、子供が舞うものとされる。

① 案の前に座して拝礼し、右手に鈴、左手に閉扇を取って立ち、前に掲げて中央へ下がって一礼。

② 左右左と後方へ採り物を振る。左に振る際は左足を、右に振る際には右足を一步下げる。

③ 手前中央から順方向に二巡りし、手前中央から舞座の中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、順方向に回転して西隅(左手前)に南向きに立つ(「順巡りの基本」)。この間、左手の閉扇、右手の鈴を前方に掲げている。

④ 西隅から逆方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、逆方向に回転して南隅(右手前)に西向きに片膝立ち(「逆巡りの基本」)。この間、左手の閉扇、右手の鈴を前方に掲げている。

⑤ 扇を開き左手でかかげ、右手は鈴を振り、南隅から「順巡りの基本」で西隅へ片膝立ち。

⑥ 右手の鈴を上上げて振りつつ、左手の開扇は



腹にあてて西隅から〔逆巡りの基本〕で南隅へ片膝立ち。

⑦開扇の要を前向きに水平に持ち、右手は鈴を振り、南隅から〔順巡りの基本〕で西隅へ片膝立ち。

⑧左手の開扇を後ろ手に持ち、右手は鈴を振り、西隅から〔逆巡りの基本〕で南隅ではなく中央へ。

⑨扇を閉じ、両手を挙げてタチゴト。

⑩②同様に左右左と後方へ採り物を振る。

⑪③同様に左手の開扇、右手の鈴を前方に掲げ、〔順巡りの基本〕で西隅へ。

⑫④同様に左手の開扇、右手の鈴を前方に掲げ、〔逆巡りの基本〕で南隅へ片膝立ち。

⑬一旦、神前に進み案に鈴を置くと南隅に戻る。

⑭扇を開き左手で掲げ、右手は腰にあてて〔順巡りの基本〕で西隅へ片膝立ち。

⑮開扇を右手に掲げて、左手は腰にあてて〔逆巡りの基本〕で南隅へ片膝立ち。

⑯右手開扇を上に掲げ、左手は前に伸ばして〔順巡りの基本〕で西隅へ片膝立ち。

⑰左手を上に掲げ、右手開扇は下にして〔逆巡りの基本〕で南隅ではなく中央へ。

⑱最後に神前に進み、座して一礼して終了。

3 荒塩舞（8分30秒） あらしおまい

塩の載った折敷を持つて舞う。調査時には巫女が舞った。

①案の前に座して拝礼し、右手に鈴、左手に折敷（右手も鈴を持ちながら添える）を取って立ち、前に掲げて中央へ下がって一礼。

②左右左と後方へ採り物を振る。左に振る際は左足を、右に振る際には右足を一歩下げる。

③手前中央から順方向に二巡りし、手前中央から舞座の中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、順方向に回転して西隅（左手前）へ〔順巡りの基本〕。この間、両手は上に掲げている

④西隅から逆方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、逆方向に回転して南隅（右手前）へ〔逆巡りの基本〕。

この間、左手の折敷を上に掲げ、右手の鈴を振っている。

⑤南隅で逆方向に一回転して両膝で屈伸一回。北に向かって左手の折敷を差し出し、右手の鈴を折敷に向けて振る。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。

⑥鈴は右手に持ったまま両手で折敷を捧げ、逆方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後順方向に一回転し、西隅へ。西隅から左手の折敷を上に掲げ、右手の鈴を振りつつ逆方向へ二巡り。

⑦⑤同様の所作を西隅で。（逆方向へ一回転して両膝で屈伸一回。東に向かって左手の折敷を差し出し、右手の鈴を折敷に向けて振る。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。）

⑧鈴は右手に持ったまま両手で折敷を捧げ、順方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後順方向に一回転し、南隅へ。南隅から左手の折敷を上に掲げ、右手の鈴を振りつつ逆方向へ二巡り。

⑨⑤同様の所作を北隅で。（逆方向へ一回転して両膝で屈伸一回。南に向かって左手の折敷を差し出し、右手の鈴を折敷に向けて振る。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。）

⑩鈴は右手に持ったまま両手で折敷を捧げ、順方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後順方向に一回転し、手前中央へ。手前中央から左手の折敷を上に掲げ、右手の鈴を振りつつ逆方向へ二巡り。

⑪⑤同様の所作を東隅で。（逆方向へ一回転して両膝で屈伸一回。西に向かっ



て左手の折敷を差し出し、右手の鈴を折敷に向けて振る。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。

- ⑫鈴は右手に持ったまま両手で折敷を捧げ、順方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後順方向に一回転し、南隅へは行かずに中央から案に鈴を置く。

- ⑬折敷を両手で捧げ持ち、タチゴト。

- ⑭左右左と後方へ採り物を振る。

- ⑮「順巡りの基本」で手前中央へ。そこから左手で折敷を掲げ、右手は腰で逆方向に二巡りして南隅へ。

- ⑯南隅で逆方向に一回転して両膝で屈伸一回。北に向かって左手の折敷を差し出し、右手でつまむ。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。

- ⑰「順巡りの基本」で手前中央へ。そこから左手で折敷を掲げ、右手は腰で逆方向に二巡りして西隅へ。

- ⑱同様の所作を西隅で。西隅で逆方向に一回転して両膝で屈伸一回。東に向かって左手の折敷を差し出し、右手でつまむ。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。

- ⑲「順巡りの基本」で手前中央へ。そこから左手で折敷を掲げ、右手は腰で逆方向に二巡りして北隅へ。

- ⑳同様の所作を北隅で。北隅で逆方向に一回転して両膝で屈伸一回。南に向かって左手の折敷を差し出し、右手でつまむ。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。

- ㉑「順巡りの基本」で手前中央へ。そこから左手で折敷を掲げ、右手は腰で逆方向に二巡りして東隅へ。

- ㉒同様の所作を東隅で。東隅で逆方向に一回転して両膝で屈伸一回。西に向かって左手の折敷を差し出し、右手でつまむ。終わってもう一度両膝で屈伸して逆方向に一回転。

- ㉓「順巡りの基本」で西の隅へ片膝。

- ㉔左手の折敷を前に差し出し、右手は腰。西隅から逆方向に二巡り。手前中央

から舞座の中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、順方向に一回転して手前中央に南向きに片膝。

- ㉕折敷を右手に持って左手は腰。南隅から逆方向に二巡り。手前中央から舞座の中央に入って神前に向き、両膝で屈伸一回。順方向に一回転して中央から案に折敷を置き、座して拝礼。

4 五^ご方^{ほう}の舞^{まい}（11分）

巫女による舞。昭和四十八年の志岐羽黒神社遷宮時に、上五島神楽から習得した舞。榎津神社の神職に依頼をした。ただし現在は「五方の舞」が「四天」と「五方」を混ぜたような形になっており、四人で五方を舞う。タチゴトも四天のものを唱えながら、扮装は五方となっている。これは太田で伝えていくうちに変貌したものらしい。

- ①ひよっとこ（青）、おかめ（白）、鬼（赤）、翁（緑）の面をつけた巫女が順に舞座に入り横に並ぶ。それぞれの色の幣を両手で持つ。

- ②ひよっとこは東隅へ、おかめは西隅、鬼は南隅、翁は北隅に移動し、内側を向く。

- ③歌にあわせて翁（東）、幣を回しながら中央へ進み出て、向きを変えてもとに戻る。これをおかめ（西）、鬼（南）、ひよっとこ（北）の順に繰り返す。

- ④御幣を前後に振りつつ全員が順方向に一巡り。

- ⑤全員で東方を向いて幣を前に出し、身体を左右に動かし、一礼して「ヤーサンハーハイ」の歌のところで御幣を振る。終わって全員順方向に一巡り。

- ⑥全員で南方を向いて幣を前に出し、身体を



左右に動かし、一礼して「ヤーサンハーハイ」の歌のところで御幣を振る。終わって全員中を向く。

⑦翁（東）が幣を両手で回しつつ片膝をついて中央に進み出て、また向きを変えて戻る。これを、おかめ（西）、鬼（南）、ひょっとこ（北）の順に繰り返す。終わって全員順方向に一巡り。

⑧全員で西方を向いて幣を前に出し、身体を左右に動かし、一礼して「ヤーサンハーハイ」の歌のところで御幣を振る。終わって全員順方向に一巡り。

⑨全員で北方を向いて幣を前に出し、身体を左右に動かし、一礼して「ヤーサンハーハイ」の歌のところで御幣を振る。終わって全員中を向く。

⑩東西から翁とおかめが中央に進み出て場所を入れ替わる。次いで南北から鬼とひょっとこが進み出て場所を入れ替え。再び東西から翁とおかめ出て入れ替わる。南北からも同様に進み出て入れ替え。終わって全員順方向に一巡り。

⑪全員で神前（中央）を向いて幣を前に出し、身体を左右に動かし、一礼して「ヤーサンハーハイ」の歌のところで御幣を振る。

⑫軽く跳躍しながら順方向に二巡り。そのまま最初のように横一列に。神前に進み座して幣と着けていた面をはずして置き、拝礼。幣と面を持って退出。

5 四天王（9分）

白衣・袴に陣羽織。頭に陣笠を被る。四人舞であるためなかなか舞えず中断していたが、昭和六十一年に有川神社ができた際に復活させた。笠を被り、弓を持つが、最初は道具がなかったので竹で弓を、紙で笠を作った。後に補助金で陣笠を購入したが、以前陣笠を用いたかどうかは判らない。

①東に星形、南に月形、西に白幣、北に日形の採り物を持った者が立つ。一度しゃがんで、立って一礼。内側を向き合って左手の採り物と右手の鈴を大きく振って順・逆・順・逆に一周ずつ巡り、その後外側を向いて立つ。

②外側を向いてタチゴト。最後に採り物を押し頂く所作。

③左手で採り物を前に出し、右手で鈴を振って順方向に二巡り。一度両足を屈

伸させてから背中合わせに中央に集まって採り物を押し頂き、左手の採り物を中央に出し、右手で鈴を振って逆方向に二巡り。

④両足を屈伸して外側に鈴を振り、もう一度屈伸してから逆方向に一回転。

⑤③同様順・逆に二巡りずつ。

⑥採り物を置き、弓を持つ。

⑦中央に弓を押しつけ、左右左のように足を引く。

⑧弓を上に向けてはじく。

⑨③同様順・逆に二巡りずつ。

⑩逆方向に回転して外を向き、再び回転して内側を向き、中央床に弓を押しつけた後に弓をはじく。

⑪③同様順・逆に二巡りずつ。

⑫中央に弓を押しつけた後に、東西が入れ替わり、次いで南北が入れ替わる。その後再び中央に弓を押しつけ、そのあと弓をはじく。

⑬③同様順・逆に二巡りずつ。

⑭神前に横並びに座り、拝礼。



6 御剣（7分）

白衣に白袴、陣羽織姿。頭に黒い紙笠をつける。語られる詞章から通称「ハルサンゲツ（春三月）」ともいう。

①黒笠に陣羽織姿の二人、右手に鈴、左手に太刀。神前にしゃがんだ後に立って拝礼しタチゴト。

②順方向に巡って西隅から東を向いてタチゴトがあつて太刀を振る。同様に北隅から南へ、東隅から西へ、南隅から北へおこなう。

③左手の太刀を前に出し、右手で鈴を振りつつ順方向へ二巡り。南北方向で止まって両手を広げて両足を屈伸させ、両手で太刀を上へ奉じる。

④逆方向に二巡り。南北方向に背中をあわせて両足で屈伸させ、隅に向かつて鈴を振り、もう一度屈伸して逆方向の回転で向き合い、太刀を上へ奉じる。

⑤③同様のことを東西で。

⑥④同様のことを東西で。

⑦③同様のことを南北で。

⑧逆方向に二巡り。その後南北方向から向かい合つて互いに太刀で切るようにして踏み込んで互いの場所を入れ替える。

⑨③同様のことを東西で。

⑩⑧同様のことを東西で。

⑪③同様のことを南北で。

⑫逆方向に二巡りの後、神前に横に並んで座り、採り物を置いて拝礼。



7 折敷（9分）

白衣に白袴姿。調査時には子供が舞っている。

①右手に鈴、左手に赤櫓を持ち、中央に立つ。

②左右左と後方へ採り物を振る。

③手前中央から順方向に二巡りし、手前中央から舞座の中央に入つて神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、順方向に回転して西隅（左手前）へ「順巡りの基本」。この間、両手は前。

④西隅から逆方向に二巡りし、手前中央から舞座中央に入つて神前に向き、両膝で屈伸一回。その後、逆方向に回転して南隅（右手前）に片膝「逆巡りの基本」。この間、両手は前。

⑤鈴を置き、櫓を伸ばして右手を上へ櫓を長く持つて「順巡りの基本」。

⑥櫓を左手を上へ持ち替え、「逆巡りの基本」。

⑦中央から北方を向いて両手で櫓を張つたまま左右左。

⑧「順の基本」「逆の基本」

⑨中央から東方に向かつて立って左右、片膝で左右、立って左と櫓を振る。その後逆方向に回つて手前中央へ。

⑩「順の基本」で最後は中央へ。

⑪左へ舞座をはずれて櫓をつける。

⑫ここからリズムが早くなる。盆を両手で持ち「順の基本」。

⑬盆を左右の手に一枚ずつ持つて「逆の基本」。

⑭南の隅で盆を両手に持つて逆・順・逆（左右左）に回転、盆を上下に振る、それをひねると進み、一度返してから、今度はひねりつつ順方向に一巡り。再び両手をひねって最後は手を返す。両手で盆を持ち「順の基本」、盆を左



右の手に一枚ずつ持って〔逆の基本〕。

⑮⑭同様に西・北・東に繰り返す。

⑯北隅から両手に盆をつけたまま、後方でぐりがえしで一回転。終わって〔順の基本〕〔逆の基本〕。

⑰⑯同様に東隅へ。

⑱盆を置き、下がって拝礼し退場。

8 山之真やまのしん（9分）

宮司による舞。冠をつけ、狩衣姿。

①座して拝礼の後、両手で幣を二本まとめて持ち、中央へ。

②左右左と後方へ採り物を振る。

③手前中央から順方向に二巡りし、手前中央から舞座の中央に入って、両膝で屈伸一回。順方向に回転してそのまま中央に〔順巡りの基本〕。逆方向に二巡りし、西隅で逆方向に一回転。一度両膝の屈伸をして、東方へ踏み込み、戻って屈伸一回。そして逆方向に一回転。

④〔順巡りの基本〕の後、中央から西隅に移動。中央を向いて立つ。

⑤タチゴト。右手で幣をゆっくり上げ、次いで左手に持ち替えて掲げ、順方向に小さく一巡り。両手に一本ずつ幣を持って三回しながら左右左と大きく踏み出し、三歩目で片膝をつき、幣を左右左右と振る。左手に持って掲げ、次の隅へ移動。

⑥北隅、東隅、南隅に同様に繰り返す、最後は手前中央から神前に向けて同様にこなう。

⑦中央が終わるとそのまま順方向に一巡り半回って手前から中央へ進み、屈伸を一



回して順に一回転。

⑧逆方向に二巡りし、東隅で逆方向に一回転、屈伸して幣を持って西方へ大きく踏み出し、戻ってもう一度屈伸して逆方向に一回転。

⑨〔順巡りの基本〕

⑩逆方向に二巡りし、南隅で⑧と同様に。

⑪〔順巡りの基本〕の後、座して幣を案に戻し拝礼。

9 獅子舞ししまい（12分30秒）

天狗は赤い衣に赤のたつかけ袴。顔に天狗面を着け、頭には白毛のシャグマ。

①天狗、両手に榊を持って登場。榊を振りつつ舞う。

②獅子登場し、獅子の後ろで天狗が舞う。

③獅子眠るので、天狗頭を榊ではなく。獅子目覚めるが、しばらくしてまた眠る。

④何度か繰り返した後に、獅子と天狗の争いのようなになる。天狗は榊の葉が散るほどに獅子を打つ。

⑤獅子と天狗、観客の中に入って榊はたいたり、頭をかじる所作をする。

⑥天狗が先に退場し、獅子は少し舞ってから退場。



10 八饌舞 (7分)

白衣・白袴に陣羽織姿、頭に黒い紙の笠を被っている。舞を記した本には「八千花米舞」と書かれているが、通常は「八饌」を用いる。また「箕舞」という言い方もある。昭和六十二年の遷座祭時に女性の衣装を着て舞ったことがある。現在、上五島神楽の箕舞が女装をするのは、そこに由来するのだろうと有川では伝えている。

①「二剣の舞」と同じ黒の笠に陣羽織。餅を入れた箕と杵を用意する。拝礼の後には杵を持って中央に立つ。

②両手で杵を持って左右左。

③左手に杵を持ち、右手は腰で「順巡りの基本」。

④右手に杵を持ち替え、左手は腰で逆方向に二巡り。南隅でそのまま逆方向に一回転し、中央を向いて左右左の所作。

⑤③同様に「順巡りの基本」。

⑥西隅で④同様。

⑦③同様に「順巡りの基本」。

⑧右手に杵を持ち替え、左手は腰で逆方向に二巡り。手前中央でそのまま逆方向に一回転し、杵を振って神前の箕に向かって踏み込み、箕の中の餅を搗く所作。箕を持って南隅に置く。

⑨③同様に「順巡りの基本」。

⑩⑧同様に北隅から南隅の箕を搗く所作。最後は箕を西隅に置く。

⑪③同様に「順巡りの基本」。

⑫⑧同様に東隅から西隅の箕を搗く所作。最後は箕を神前に。



⑬杵を神前に置き、箕を両手で持って左右左。

⑭③同様に「順巡りの基本」。

⑮逆方向に二巡りし、中央で逆方向に一回転。神前に捧げるようにしてから、観客に向かって餅を投げる。

⑯撒き終わると、箕を持って順に一回転して神前に納める。そして下がつて拝礼。



古面



有川神社蔵神楽面

(三) 詞章

神楽の中の詞章は基本的にすべてタチコトバという。タチコトバは、他に「タツゴン」「タツゴト」「タツコト」などと呼んでいる。五方の中で舞手が唱えるものや、宮司舞で舞いながら唱える詞章もタチコトバである。また「神通」の詞章のことは「トイハ（問葉）」と呼んだと言われる。なお、タチコトバなどを書き写した古本があり、現在はそれを活字化して使っている。

*『舞立言集（抄）』（有川神社蔵）から引用。

凡例

- 一、アラビア数字は、今回上演された演目の順番を示す。
- 一、ルビは引用原典に基づき、適宜施した。

1. 「座祓」

- 一、座祓い
白妙の豊幣帛をとり持ちて祝ぞそむる神の御前に

2. 「左男舞」

- 一、棹舞
君が代の久しかるべき例にはかねてぞ生いし住吉の松

3. 「荒塩舞」

- 一、荒塩舞
この荒塩はたが打ち初めし阿ら塩ぞ天や神子の打や初めけむ

4. 「五方の舞」

- 一、五方舞
※東方のく 勾々奴知神は 青き幣を立てかざし
神は降り おわします
ヤーサン ハーハイ く
※南方のく 軻具土神は 赤き幣を

5. 「四天王」

一、四天王舞

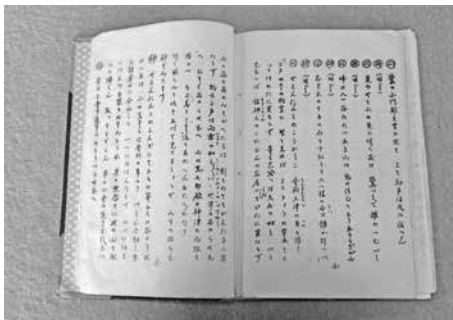
東方世界と申すにはヤー 方を申さば方は是レエ
木のえきのとの御方なり 神道くわしく拝み
奉るヤー
南方世界と申すにはヤー 方を申さば方は是
火のえひのとの御方なり 神道くわしく拝み
奉るヤー
西方世界と申すにはヤー 方を申さば方は是レエ
かのえかのとの御方なり 神道くわしく拝み
奉るヤー
北方世界と申すにはヤー 方を申さば方は是レ
水のえみずのとの御方なり 神道くわしく拝み
奉るヤー
（東）夏山の木々の梢に高ければ、空にぞ蟬の
うた声ぞせむ
（南）秋の田の穂の上照らす稲妻の、光のま、に
神やよします
（西）冬来ぬと誰かわ告げし薄氷、しぐれぞ告し
山廻りせむ
（北）春くればこすげの笠をおもむして、待たれしもの
は鶯の声

6. 「山之真」

一、山の真舞

アノ山は アノせいある山か せいなくばアイヤ
せいなくば 小守をそえて 我が山にせん
アノ神棚を アノ見登し拝めば 神下る アイヤ
神下る いかに氏人たつとかるらん

アノ立沢のアノ生る、国は いづくなるアイヤ
いづくなる とうとうこうりの柳葉の関
アノ金蓋をアノ見上げし拝めば神下るアイヤ
神下る いかに氏人 たつとかるらん
アノ三日月のアノこの葉を廻る 三日月のアイヤ
三日月の 影澄みわたる夜神楽のせき



ガリ版刷旧本



『舞立言集（抄）』

六 由来・信仰

有川神楽の創始については不明である。しかし、吉村政徳氏の研究にあるように、天和元年（一六八一）に、旧有川町の鯛ノ浦郷にある鯛之浦神社が再建された時に、「長刀舞」を舞ったという記録が残されている。これが現在の神楽にある長刀舞に共通するものかどうか不明ながら、延宝五年（一六七七）には福江で神楽がおこなわれていたことを考えれば、何らかの神楽であると考えてもおかしくはない。

神楽を伝承する有川神社は、有川の天満神社・八幡神社・祖母君神社を合祀した神社である。昭和六十年に合祀することが当時の有川町で決定し、天満神社の地に社殿を建設。昭和六十二年に遷座祭をおこなった。もともと有川には八ヶ郷があるが、そのうち天満神社が上有川、八幡神社が浜、そして祖母君神社が残る六ヶ郷を氏子範圍としていた。もとはそれぞれに宮司がいたが、現江口宮司の先々代の時代に、祖母君神社宮司が兼ねるようになった。

太田郷の志目岐羽黒神社は、戦前までは岩瀬浦郷からの神職が来る地域であった。太田から中通島の南端の奈良尾までは岩瀬浦のテリトリとなっており、海伝いに舟で来ていたという。したがって、有川神社の神職が廻るのは、有川から東は、小河原・赤尾・友住そして江ノ浜まで。西は隣の七目。南側の阿瀬津・鯛ノ浦は旧有川町ながら、寺の方で旧新魚目町の浦桑の檀家になっているため、浦桑との結びつきが強く、神職も浦桑の祖父君神社の神職が訪れている。その南の神ノ浦（現東神ノ浦）は岩瀬浦のテリトリとなる。

また近年、友住から舟で渡る平島（西海市崎戸町）の豊姫神社の祭礼にも渡るようになった。もともと江島の宮司が兼務していたが、昭和末期に亡くなったからは有川神社宮司が兼務するようになった。最初は神楽を演じていたものの、途中で行かなくなってしまった。それを平成二十一年に保存会の希望で三番ほど舞ったところ好評だったために、翌二十二年にも五番ほどを舞ったという。なお、巡幸時には平島の長刀踊りもつく。

ところで、神楽に関わる行事に、ヤバライ（家祓い）がある。下五島では神楽がヤバライをする例が見られるが、上五島ではそれはない。上五島神楽の場



潮目天満神社（七目）



八坂神社（友住）



乙宮神社（小河原）



江ノ濱神社（江ノ浜）



孕神社（赤尾）



ヤバライ



ヤバライの供物

合には、祭礼の神幸行列の折に獅子・天狗が家々を廻る例が見られる程度であるが、有川神楽では、太田でのみ神職がヤバライをおこなっている。神楽は伴わないものの、太鼓が同行し、祝詞の際には打ち鳴らされるため、かつて神楽をおこなったことの名残なのかもしれない。

ヤバライは、例祭が終了した後に廻るため、かつては五十〜六十戸を夜までかけて廻っていた。現在は宮司と権禰宜を務めるその弟とで分担して、二十戸程度ずつを廻る。ヤバライでは、家に入ると家人が用意した米、塩、神酒などが上げられた机の前で神職と太鼓役が座る。太鼓が打ち鳴らされると、神職は祝詞を唱える。祝詞が終わると太鼓が止み、拍手の後に神職は米・塩を撒き、家人に神酒を勧めて終了となる。一軒およそ五〜六分程度を要する。

このようなヤバライは太田のみの風習ながら、天狗と獅子が廻るヤバライは有川でも祭礼時におこなっている。有川の旧祖母君神社氏子地域である六ヶ郷は夏の祇園祭の際に、旧天満神社氏子地域の上有川と旧八幡神社氏子地域の浜は秋祭りの際に廻る。その際には、社人が笛・太鼓を奏し、獅子・天狗は地区の氏子が扮する。

七 変遷

上五島では、現在伝承される神楽は上五島神楽と、この有川神楽だけになっている。近世期には、上五島神楽が富江藩に属していたのに対し、有川神楽は五島藩に属していた。そのため吉村政徳氏の分類でいうところの、福江五島神楽などと同じ五島藩系の神楽に含まれると思いきや、同氏の指摘によれば、富江神楽などと同じ系統に近いという。それが近世期からのことなのか、近代以降に変容したのかについては判らない。ただ、有川神楽が、近接する上五島神

楽と類似していることは、芸能が歴史的経緯よりも環境によって変容しやすいことを物語っているようで興味深い。もともと、伝承形態には差異があり、上五島神楽が神職集団によって形成されているのに対し、有川神楽はあくまで有川の神職と社人で組織される。

有川神楽には、基本的には巫女の舞が存在しない。現在、太田郷の志自岐羽黒神社にのみ巫女の舞が伝承されているが、これは昭和四十八年に鎮座四百年で御遷宮大祭を営み、その際に上五島神楽から習得したもの。それ以前は、巫女舞は存在しなかった。その際、「四天」と「五方」とを習得したというが、いつしか両者が混じり合い、四人で「五方」を舞う現在のスタイルになったという。上五島神楽でもまた、青方のように両演目が混在している所がある。

「浦安の舞」は、昭和六十二年に有川の三社が合祀されて有川神社の遷座祭をした折に導入している。そのときに上有川地区の女子中高生が習得した。

八 所見

近年の有川神楽は、保存会を結成し一般の舞手を募集したことから伝承者が大きく増加した。ベテランから若手、あるいは子供まで幅広く伝承されているのは非常によい状態だと考えられる。神職・社人という職能的な伝承者と、神楽が好きで加わっている保存会の伝承者という二面的な組織は、ともすると維持が難しくなることもあるはずだが、現在の有川神楽では両者ともに意気が高い。また平成十六年の映像記録作成時に十種類の舞を復活させ、現在も多くの演目が上演可能となっている。

さらに太田地区では地区在住者が巫女として舞を習得しており、その他に獅子舞も青年が舞っている。ヤバライなどを通じて、信仰的な結びつきも強い。ただ、その太田も小学校が平成二十二年度を最後に廃校となり、加えて集落自体六百戸あったのが、現在は二百二十〜三十戸に減少しているという。また太田ほど大きくない集落では、祭りも寂しい状態の所があるとも聞く。神楽の伝承が、伝承者組織だけでなく、享受する地域によっても支えられていることを考えると、こうした地域の過疎化・少子化は、深刻な問題と言えよう。

かみごとう かぐら まさひこじんじゃ
上五島神楽〔政彦神社〕

久保田裕道

一 名称

上五島神楽

二 伝承地

長崎県南松浦郡新上五島町の旧上五島町・旧新魚目町の青方神社・政彦神社・榎津神社・祖父君神社・小串神社と、各兼務社のある地域

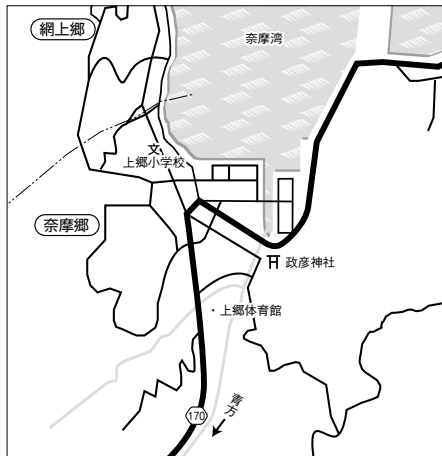
* 以下に平成二十二年度現地調査を実施した政彦神社例祭での上五島神楽を報告する。

三 期日・場所

期日 政彦神社例祭 十月二十七日（前夜祭）・二十八日（例大祭）

* 平成二十二年度も同日

場所 政彦神社（奈摩郷）



政彦神社

拜殿は横幅六間、奥行き三間半で、前面にのみ半間幅の縁がある。

拜殿内も左右の半間ずつは、廊下のように使われており、実質的な拜殿は幅五間。拜殿に続いて幅二間、奥行き二間の幣殿があり、その奥が階段で本殿へとつながっている。また幣殿の左右は神饌などを置く部屋となっている。神楽が演じられるのは、中央の幣殿との境から半畳下がった一間四方で、

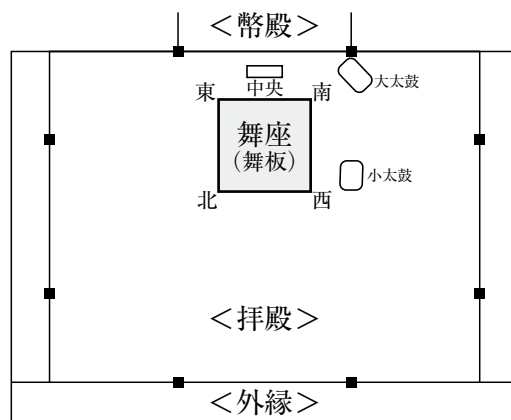
そこだけ畳の代わりにマイイタ（舞板）と呼ばれる板がはめられている。ここがいわゆる舞座となる。この舞板は、

神楽の時だけでなく、常にこの場所に敷かれている。神楽の上演時には、幣殿の向かって右側に隣接する部屋が楽屋となっており、そこから出て幣殿を通って舞座に至る。



五色幣（東）

紺（北）となっており、それぞれの幣の前には各方向の守護神と季節・色・神獣を書いた紙が貼られている。なお、東は青、北は黒という名目となっている。また富江神楽では、かつて天井から天蓋（てんがい）が下がっていたというが、上五島では天蓋は最初から存在していない。



政彦神社「舞座」図

四 伝承組織

上五島神楽は、基本的に青方（青方神社）、奈摩（政彦神社）、榎津（榎津神社）、浦桑（祖父君神社）、小串（小串神社）の神職によって演じられる。中には親子共に参加しているところもある。また立串や曾根には、権禰宜などの立場で携わる者も数名ずついる。神職は、かつては十四～五名いたが、平成二十二年現在では九名になった。これらの神職は、本務社以外に兼務社があり、それらの祭礼にも各神職が集まって神楽を演じることになる。青方神社宮司の兼務社として相河の姫神社、船崎の山神社、曾根の正彦神社。奈摩の政彦神社宮司の兼務社として網上の客人神社、統浜ノ浦の天満神社、道土井の大山祇神社、立串の乙宮神社。榎津神社宮司の兼務社として、丸尾の丸尾神社。浦桑の祖父君神社宮司の兼務社として似首の事代主神社、奥浦の奥浦神社、阿瀬津の熊野神社、鯛ノ浦の鯛之浦神社。小串の小串神社宮司の兼務社として津和崎の本山神社がある。

神職以外に、下五島同様に「社人」と呼ばれる存在がある。かつてはそれぞれの神社に社人がいたといい、奈摩にも二～三人存在したという。ただし現在でも社人の名で残っているのは、青方のみとなっている。神楽を演じる上での神職と社人との相違点は、社人は舞と笛ができるが、神職はそれに加えて太鼓もできないといけないことにある。ただし、笛・太鼓・舞のいわゆる「三拍子そろった」ことのできる神職は、現在は数人しかいない。

なお神職・社人以外にも奈摩・網上だけには「伝習社」という組織があつて、神楽に携わっている。平成二十二年現在、八名がこれに参加している。伝習社とは、氏子青年会のような存在で、あくまでも奈摩・網上の祭礼にのみ参加して神楽を演じるが、他の集落の祭礼に向向くことはない。

そして昭和五十五年より、これら神職・社人をはじめ有志を含め三十数名で「上五島神楽保存会」を結成している。神楽の稽古をする際には、長年にわたって伝承してきた長老格の神職らが中心となって指導をする。練習は、一月（四月の中の七週間、週二回（平成二十二年は火・金曜日）、一九時三〇分より二〇時三〇分の間）におこなっている。かつては、秋の祭礼シーズンの間は泊

まり込みで移動していたため、夜が練習の場でもあった。

近年では青方で公民館講座として「神楽を楽しむ会」が始められ、これも練習の場となっている。また、祭礼以外に旅行会社とタイアップして、いわゆる「観光神楽」として観光客相手に演じるようになった。年間二十回程度はおこなわれるという。そのため、神楽を演じる機会が一年を通してできるようになった。

ところで、五島の神楽は伝統的に子供も大きな役割を果たしている。基本的な舞など小学生程度の男子が舞うことが多い。特に神職・社人の子弟は、幼少の頃から習得する例が多く見られ、また一般の小学生でも参加する者がいる。上五島では、「座祓」「長刀」の舞を担うことが多い。また、「五方」や「四天」、あるいは「浦安の舞」などを担当する巫女は、祭礼のある集落に住む氏子の中から希望者を募る。祭礼時の神幸に加わる諸役なども同様である。

五 行事（芸能）内容

（一）次第

1 準備

十月十日、奈摩郷の氏子全員で祭礼の準備に当たる。神輿巡幸場所の清掃をおこない、男性は注連縄を作る。注連縄につけるサガリ（紙垂）は、現在は小学生在が切っている。また境内に吊るされた絵灯籠の絵も、小学生が描いている。

2 宵宮（前夜祭）（十月二十七日）



神幸行列

十月二十七日、一六時三〇分より祭典。最初に太鼓が打ち鳴らされ、修祓に始まり、開扉、献饌、祝詞奏上に次いで神輿への御霊移し。神輿は拝殿中央神前よりの場所に子供神輿とともに置かれ、この時、幕で神輿より奥が隠れるように覆う。照明も消され、御霊移しが終わると神輿は外に出される。獅子役二名と天狗役二名は、社殿に向かって左側に建つ事代主神社で支度をして外で

待ち、神輿が出ると行列の先頭に立つ。

やがて神幸行列が、参道から神社前の橋のあたりにかけて整列する。一六時五〇分には神輿が拝殿から下ろされ、神幸が始まった。行列順序は次の通り。

獅子二人・天狗二人 ― 注連縄(笹) ― 神職 ― 旗 ― 稚児
― 子供の舞手 ― 巫女 ― 御賽銭箱 ― 子供神輿 ― 旗 ― 御賽
銭箱 ― 金幣 ― 榊 ― 金幣 ― 宮司 ― 神輿 ― 太鼓(三基)・
笛 ― 氏子 ― 保育園児(創作獅子・山車)



太鼓



獅子



天狗

なお、太鼓を担いで叩くのは、上五島でも奈摩と網上
だけとされる。また網上だけは婦人会が担いでいる。担
ぎ手は、現在は担ぎ棒で吊してその前後を担ぐが、かつ
ては一人が背負って歩いたという。

沿道に出ている人々に対して、天狗は手にした葉で頭
を被い、獅子はその歯で噛む所作をして回る。また天狗
は時として子供たちを追いかけ回すため、子供もおもし
ろがって先頭を歩いている。こうして政彦神社から前の
橋を渡って北西方向に町の中を進み、海沿いの道を北上
する。やがて網上との境で西に曲がり、集落内の道を南
下。このあたりで末尾を進んでいた保育園児たちの手作
りの山車や獅子たちは保育園へと戻る。それ以外の行列
はそのまま青方へ向かう道路を進み、集落のはずれで引
き返し、川沿いに北東方向に下りて集落内を通って神社
へと戻る。ここまで約三〇分程度。最後に鳥居前で右回
りに三周し、そこで神幸行列は解散となる。一七時三〇
分、神輿が拝殿に上げられ、本殿へと御霊を戻す。この
時も始まりと同様に幕で覆って見えないようにする。こ
うして前夜祭の神輿渡御行事は終了となった。この後、
宮司以下神職や神楽従事者たちは社務所で夕食をとる。



玉串奉奠

一九時になると、前夜祭の神楽が始まる。幣殿に
宮司以下神職が着座。拝殿の幣殿手前左右に太鼓が
二台置かれ、各々叩き手がつく。向かって右の太鼓
手前には笛奏者二名と郷長、そして白丁姿の氏子総
代三名が座る。こうしてまず祭典から始まる。最初
に太鼓が打ち鳴らされ、続いて笛が入る。太鼓・笛
の楽を奏しつつ、修祓、開扉、献饌と進み、宮司に
よる祝詞奏上で楽が一旦止む。祝詞奏上が終わると、
再び楽が入って玉串奉奠となる。最初に神職がおこ
なう際には笛のみだが、氏子の番になると笛・太鼓が打ち鳴らされ、軽快なり
ズムにのせて神楽歌が歌われる。氏子の玉串奉奠は、幣殿と拝殿との双方でお
こなわれる。訪れた拝殿いっばいの氏子が、老若男女ほぼ全員おこなう点が特
徴的であると言えよう。こうして玉串奉奠が終わり、この日は前氏子総代長へ
の表彰があった後、一九時四五分に神楽が始まった。演目は次の通り。

- ① 稚児の舞(稚児) ② 浦安の舞(巫女) ③ 鎮守の里(巫女) ④ 座祓(子供)
- ⑤ 長刀(子供) ⑥ 五方(巫女) ⑦ 子供獅子(子供) ⑧ 柴取(子供) ⑨ 四天(巫女)
- ⑩ 折敷 ⑪ 箕舞 ⑫ 將軍舞 ⑬ 山賀 ⑭ 恵比寿 ⑮ 注連舞 ⑯ 獅子舞

二時四五分、最後の獅子舞が終わる。すべての演目が終了すると、笛は止
めずに、そのまま撤饌に移る。撤饌の後に閉扉となつてすべてが終了したのが
二時五五分。最後には、宮司から郷長への報告がある。かつてはなかったが、
祭りは郷長から宮司が命を受けて開催するという理由から、祭りの開始と終了
時には必ず挨拶をするようになった。

3 例大祭(十月二十八日)

一〇時から政彦神社において祭典が営まれる。拝殿には幣殿寄り左右に太鼓
が置かれ、太鼓役の神職がつく。向かって右の太鼓手前には笛役が並び、その



獅子舞

手前に神社総代。向かって左には郷長が座り、その手前に「稚児の舞」に参加する稚児。さらに拝殿手前側に氏子入りの乳児を抱えた父母が並ぶ。前夜同様に最初に笛・太鼓が鳴って修祓をした後に開扉、献饌と進み、一旦笛・太鼓が止んで宮司による祝詞奏上。そして拝殿にいる氏子のほぼ全員による玉串奉奠。やはり軽快な楽にあわせて神楽歌が唱えられる。

この後、前もって申し込みのあった氏子入りと大漁祈願の祈祷がある。最初に氏子入りの親子が幣殿に上がり、宮司による祝詞奏上に続いて金幣による祓いを受ける。続けて大漁祈願者が同様に祝詞の後に金幣の祓いを受けた。

一〇時四三分、この日の神楽が始まる。この日の演目は次の通り。

- ①稚児の舞 ②浦安の舞 ③座祓 ④長刀 ⑤五方 ⑥子供獅子 ⑦柴取 ⑧四天 ⑨神幣 ⑩獅子舞

約一時間舞った後、一一時四五分に神楽が終了。太鼓が止むが笛はそのまま吹き続けられ、撤饌、閉扉をした後に宮司が郷長に祭りの終了の挨拶をして一一時五五分には例大祭が終了となった。なお、この日は一七時から片付けとなっている。

(二) 演目・芸態

上五島神楽では、もともとは演目順に決まりはなく、最初に「座祓」を舞って、最後に「獅子舞」で終わるほかは自由であった。ただ、国選択無形民俗文化財になるに及び、演目順を決めた方がよいのではないかという話になって、「上五島神楽三十番」として決めている。その順は次の通り。

- ①座祓 ②佐男舞 ③長刀 ④露払 ⑤荒塩 ⑥五方 ⑦潮担桶舞
- ⑧一本剣 ⑨四天 ⑩神相撲 ⑪箕舞 ⑫恵比須舞 ⑬折敷舞
- ⑭潔戒 ⑮柴取 ⑯神通 ⑰六將軍 ⑱山の進 ⑲山賀 ⑳山の太郎
- ㉑山下舞 ㉒四剣 ㉓將軍舞 ㉔平舞 ㉕鈴舞 ㉖神幣 ㉗岩戸開
- ㉘注連舞 ㉙幣帛 ㉚獅子舞

このうち、舞を習得する際に基本となるのが、最初の「座祓」と㉔の「平舞」である。「座祓」の方は所作の基本とされ、最初に覚えなければならない。下五島の場合は基本が「佐男舞」で「タチゴトまで佐男舞が基本」と言うが、上五島ではそれが該当しない。それに代わるのが「座祓」ということになる。一方、大技を使う派手な舞のことを「大舞」と称し、その基本となるのが「平舞」である。

所作単位の名称については、特に意識されていない。ただ師匠格の中に、両足を膝で屈伸させるような動きを「ヤンチャンして」と言ったり、舞座を巡る所作を「エンばして」などと称することがある。

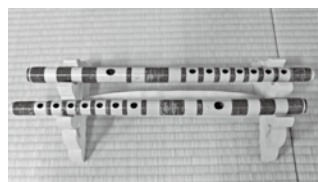
舞の基本的な所作は、順・逆の巡りにある。多くの演目の場合、まず舞座の手前にしゃがみ、楽の演奏と共に立ち上がって神前へ進み、採り物を持って左右左へ振る。その後、順方向（右回り）に（エンに）巡ってゆき、二周目の九時（神前を一二時とした場合）の方向で、両足で大きく屈伸（ヤンチャン）をしてから、中央に向かって順方向の回転をしながら入ってゆく。続いて逆方向に二周巡って、今度は三時の方向で屈伸をしてから逆方向に回転しつつ中央に入ってゆく。そしてもう一度さきほど同様に順方向に巡って中央に戻り、タチゴトになる。

タチゴトの後には舞によって異なるが、基本的には同じ所作を東南西北と中央の五方に向かって繰り返し返すことになる。ただし時間の関係もあって、実際には二方向と中央で済ませてしまう場合も多い。また二人舞の場合にも、二人が対峙する位置に立ちながらも動きとしては、いま述べたようなものとなっている。

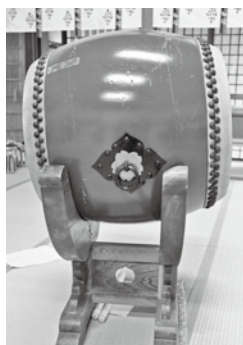
演目順で特に決められているのは、㉔の平舞を舞う前に「これより岩戸神楽三番」と称して、「平舞」「鈴舞」「神幣」の舞手四人が舞板の四隅に着し、中央で宮司が岩戸開きの祈祷をおこなう点である。また㉗の岩戸開は、同様の

形態で着座し、拝礼とともに岩戸（幕など）を開き、神楽歌五首を唄う。そして岩戸が開かれた後に⑳の注連舞で注連を張り、最後に㉑で幣帛を献上するという一連のストーリーが完成している。なお、その後にくる獅子舞はいわばアンコールのような役割であると考えられている。ただし、神楽大祭以外にはこの順ですべて演じることはなく、演者が集中しないように演目を配する。

一方、神楽に先立って祭典の中でおこなわれる玉串奉奠は、上五島ならではの特色がある。最初に五・七・五を太鼓の奏者が歌うと、それを受けて幣殿にいる全員で七・七を合唱する。そのようにして太鼓の軽快なリズムにのせて、拝殿にいるほぼ全員が順に玉串奉奠をおこなってゆくのである。



上五島神楽で使用する楽器は、七孔の篠笛と鉦打ちの胴長太鼓二基。太鼓は、神事の際には拝殿の左右に配置される。奏者はどちらも太鼓の内側に座するため、向かって右の奏者は、返し手で打たねばならないので難しい。なお、この場合には向かって左の太鼓を「上」、右側を「次」とする。



神楽上演時には、太鼓は神前に向かって右側に縦位置に並べられる。二つの太鼓は同じ大きさだが、神前に近い方を「大太鼓」、手前側を「小太鼓」と呼ぶ。基本的には同じ旋律を刻むのだが、時に掛け合いになることもある。縦に配置する際には、大太鼓を叩く者は、幣殿に座って拝殿側を向いて叩き、小太鼓は舞座の向かって右横に、舞座を向いて座る。どちらも太鼓を左側に置いて叩くことになる。

神楽を演じる者の衣装は、基本的には白衣に袴が基本で、演目によっては神職の狩衣で舞う場合もある。加えて多いのが、白衣にたつつけ袴。上五島だけではないが、五島神楽の特徴として、このたつつけ袴の着用を挙げることができる。平戸や壱岐の神楽では使うことのない衣装で、五島の神楽を特徴づけている。

以降に舞の所作等について、演目毎に挙げてゆく。本記録は、あくまで本調

査時の実見に基づく記録であるため、本来の伝承内容と若干の相違を含んでいる場合がある。また所作の回数等を省略して演じたものも含まれているが、これは実際の上演状況を把握するために、そのまま記録している。また舞手が円を描いて移動する場合これを「巡る」と表記し、その場で回転する（あるいは回転しながら移動する場合）場合には、「回る」と表記する。その際、時計周りを「順」その逆を「逆」と称しておく。また方向を表す場合、調査地の呼称に倣う。奈摩の政彦神社の場合には、向かって右奥が南、左奥が東、右手前が西、左手前が北となる。それ以外については、仮に本殿方向を



稚児の舞

一二時とし、その反対を六時といったように表す。

1 稚児の舞（2分）

神職に続いて、稚児たちが神を手に舞座を横8の字に三周巡る。稚児は来年少小学校へと入学する男女児。先代宮司の頃からおこなっている。

2 鎮守の里（3分）

巫女舞。第六十二回神宮式年遷宮の奉賛曲として藤井フミヤが作詞・作曲した「鎮守の里」の歌に、吉村政徳宮司が依頼して振りをつけてもらった舞。平成二十一年から取り入れている。



鎮守の里

3 座祓（5分）

白衣・白袴姿。本来は一人舞であるが、この時は二人舞で舞っている。そのため一人舞「座祓」の芸態については青方神社での記録（116頁）を参照。なお、二人舞は、基本的に一人舞の舞手に対峙する位置でもう一人が舞うため、基本的な動きは同じである。



座祓

4 長刀（4分） ながなた

白衣・白袴姿。長刀を持って舞う曲芸的な要素を含む舞。

①両手で長刀を捧げ持ち、舞座手前にしゃがむ。立って神前に進む。

②左右左に長刀を後方へ振る。



③長刀は左肩に担ぎ、右手は腰にあて、神前から順方向に巡って二種目の九時の方向で止まって両足で屈伸をしてから順方向に一回転しながら中央へ「順巡りの基本」。ここで長刀を右肩に移し、左手は腰。神前から逆方向に巡り、三時の方向で止まって両足屈伸をしてから逆方向に一回転しながら中央へ「逆巡りの基本」。もう一度長刀を左肩に移し、「順巡りの基本」。最後は中央ではなく神前に向かう。

④タチゴトに長刀を後方へ振る。

⑤左右左。

⑥左手で長刀を下向きに抱え、右手の平を上に掲げて「順巡りの基本」、長刀を右手に持ち替え、左手の平を上に掲げて「逆巡りの基本」。



⑦南隅に北方を向いて立ち、長刀を左右左右左と払う。最初の二回は立って、あとの三回は片膝をつきながら払う。その後、長刀をぐるぐると回転させる。

⑧⑥同様に「順巡りの基本」「逆巡りの基本」。

⑨東隅から西方を向いて立ち、⑦同様。

⑩⑥同様に「順巡りの基本」「逆巡りの基本」。

⑪舞座手前から神前を向いて立ち、⑦同様。

⑫左手で長刀を下向きに抱え、右手の平を上に掲げて「順巡りの基本」。最後は中央ではなく神前に立ち、長刀を置いて拝礼。

5 五方（7分30秒） ごほう

五人の巫女が登場。緑・赤・白・青・黄の御幣を持って登場。それぞれ、東・南・西・北・中央を表す。

①舞座手前に左から緑・赤・白・青・黄の順に並ぶ。次いで御幣を振りつつ、順巡りに輪をつくり回る。

②緑の御幣を持つ巫女を先頭に全員が東方を向き、その場で順方向に一回転した後で「東方の」で始まる舞歌。幣を振りつつ節をつけて唱え、「神は留まりおわします」のところで、幣を大きく回し、一礼する。その後の「ヤーサンハーハイ」で大きく振って、また順方向に巡ってゆく。

③同様のことを南・西・北・中央に繰り返す。

④最後は大きく跳ぶように巡っていつて舞座手前に横並び。神前に進み座り、幣を置いて拝礼。



6 柴取（4分） しばと

素面の神役は白衣・白袴。鬼神は白衣に緑のたつつけ袴、鬼面に黒のシヤゲマ。上五島神楽では、獅子舞以外ではこの「柴取」のみがタチゴト等の詞章が一切入らない舞とされる。素面の舞手（神役とも）、鬼面をつけた鬼神とが登場する。神に献上する柴が欲しい鬼神は、柴を持った人間に出会い、争った後にこれを受け取るというストーリーではないかと伝えられる。

①神役、神前より登場し、順に巡る。続いて鬼神も登場し、神の対角線上に来るように対峙しつつ双方が順・逆に巡っていく。



- ② 順逆に巡った後に南北に中央で対峙し、両手を振る。その後に東西でも対峙。
- ③ 神前側中央に素面、その反対側に鬼神で対峙し、鬼神は櫛を奪う。
- ④ 櫛を奪われた素面の舞手はすぐに退出。櫛を手にした鬼面がしばらく舞つて退出。

7 四天 (4分30秒)

巫女四人による素面の舞。

- ① 向かって左から緑・青・黄・赤の順に横並びに舞座手前に立つ。手には同色の幣を二本持つ。
- ② 「けんみよう、けんみよう」の歌にあわせて緑・青・黄・赤が各々東・北・南・西隅に立ち、内側を向く。
- ③ 東から順に、両手に持った幣を大きく回しながら中央に進み出て、また向きを戻して元の位置に戻る。以下、西・北・南の順に繰り返す。
- ④ 順方向に一巡り。一周した元の位置で順方向に一回転。その後、今度は逆方向に一巡り。元の位置に戻る。
- ⑤ 東西から舞手が進み出て背中合わせにすれ違い、対角の位置に立つ。続いて南北も同様。さらに東西、南北ともう一度同じことを繰り返す。
- ⑥ 全員で「ヤーア」のかけ声で幣を中央であわせ、そ

の後左右に振る。

- ⑦ ④同様に順方向に一巡り。一周した元の位置で順方向に一回転。その後、今度は逆方向に一巡り。元の位置に戻る。
- ⑧ 東から順に、二本の幣を左右の手に分けて持ち大きく回しながら中央に進み出て、また向きを戻して元の位置に戻る。以下、西・北・南の順に繰り返す。
- ③と異なつて一歩進むたびに片膝をつく。なお進み方は、右左と出て向きを変えて右左と戻る。
- ⑨ 向き合つて左右左右に振った後に順方向に巡る。そのまま最初のように舞座手前に横一列に並び、神前に進み座して幣を置き、拝礼。

8 折敷 (10分)

白衣に青のたつつけ袴姿。

- ① 左手に赤襷、右手に鈴を持ち、舞座手前に座る。
- ② 両手を挙げて順方向に一巡りし、西から北にかけては「ヤーサンハーハイ」のかけ



- け声で足を大きく踏み、北から順方向に一回りして三時の位置へ。
- ③ 三時の位置から逆方向に一巡りし、西から南にかけては「ヤーサンハーハイ」のかけ声で足を大きく踏み、南から逆方向に一回りして手前中央へ。
- ④ 手前中央から順方向に一巡りし、西から北にかけては「ヤーサンハーハイ」のかけ声で足を大きく踏み、北から順方向に一回りして神前へ。
- ⑤ 赤襷を掲げ、タチゴト。
- ⑥ 逆方向に一回りして中央へ。
- ⑦ 右手鈴を上に掲げ、順方向に巡り、西から北にかけては「ヤーサンハーハイ」のかけ声で足を大きく踏み、北から順方向に一回りして三時の位置へ。
- ⑧ 三時の位置から逆方向に一巡りし、「ヤーサンハーハイ」のかけ声で足を大きく踏み、西から逆方向に一回りして神前へ。
- ⑨ 鈴を上にして神前より順方向に一巡りし、「ヤーサンハーハイ」のかけ声で

足を大きく踏み、西隅から順方向に一回りして神前へ。ここで鈴を案に置く。

⑩ 赤櫛を持って左右左。

⑪ 両手で櫛を持ち、手前中央から順方向に一巡りし、北隅から順方向に一回りして西隅へ片膝をつく。

⑫ 西隅から逆方向に一巡りして東隅で中央を向いて左右左右と櫛を振る。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつく。

⑬ 順方向に一巡りして、北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。西隅から逆方向に一巡りして、西隅から逆方向に一回りして北隅に片膝。もう一度順方向に一巡りして、北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。ここまでの所作で櫛を結んでいる。

⑭ 結ばれた櫛を持って逆方向に一周半巡って東隅に。東隅からでんぐり返しをして西隅に至り、中央を向いて櫛を着装。

⑮ 神前に立ち盆二枚を取る。

⑯ 神前で左右左。右手を上順方向に一巡り。北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。



⑰ 左手を上逆方向に一巡り。東隅で盆の所作を見せ、逆方向に一回りして西隅に片膝。

⑱ 右手を上順方向に一巡り。北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。

⑲ 左手を上逆方向に一巡り。西隅で中央を向いて所作。左右左右と盆を振る。最初

の左右は立って、続く左右左は片膝をしておこなう。西隅から逆方向に一回りして北隅に片膝。

⑳ 右手を上順方向に一巡り。北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。

㉑ 左手を上逆方向に一巡り。東隅で中央を向いて所作。そのまま両手に盆をはりつけ



て西へ進み、後ろでんぐり返しで東隅へ戻る。

㉒ 右手を上順方向に一巡り。北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。

㉓ 左手を上逆方向に一巡り。南隅で中央を向いて所作。そのまま両手に盆をはりつけて北へ進み、後ろでんぐり返しで南隅へ戻る。

㉔ 右手を上順方向に一巡り。北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。

㉕ 左手を上逆方向に一巡り。舞座手前で中央を向いて所作。そのまま両手に盆をはりつけて神前へ進み、後ろでんぐり返しで手前中央へ戻る。

㉖ 右手を上順方向に一巡り。北隅から順方向に一回りして西隅に片膝。

㉗ 左手を上逆方向に一巡り。中央で両膝を屈伸させ、ひざまずいて盆を置き、拝礼。

9 箕舞 (9分30秒)

この演目は絶えていたが、曾根の正彦神社で「箕舞」を記憶している人がいた。その話をもとに、立申の神職が福江や有川に伝わる箕舞を参考に創作復活させたもの。女性の長着を着て頭に手拭いを被り、女装して舞う。

① 餅の入った箕を神前に用意し、舞手は杵を持って舞座手前にしゃがみ、楽が始まると立って神前へ。

② 左右左と後ろに杵を振る。

③ 左手に杵を持って神前より順方向に巡る。二周目の九時の方向で両足を屈伸させ、順方向に一回りしながら三時の方向へ「順巡りの基本」。

④ 右手に杵を持って三時の方向より逆方向に巡る。二周した三時の方向で両足を屈伸させ、逆方向に一回りしながら九時の方向へ「逆巡りの基本」。

⑤ 「順巡りの基本」で、最後は西隅へ。そこ



から逆方向に巡って二周目の南隅から中央へ向き、南隅と中央で杵を振る所作。終わって逆方向に一回りして西隅へ。

- ⑨〔順巡りの基本〕で、最後は西隅へ。そこから逆方向に巡って二周目の東隅から中央へ向き、東隅と中央で杵を振る所作。終わって逆方向に一回りして西隅へ。

- ⑩〔順巡りの基本〕で、最後は西隅へ。そこから逆方向に巡って手前中央から中央へ向き、手前と中央で杵を振る所作。終わって逆方向に一回りして東隅へ。

- ⑪〔順巡りの基本〕で、最後は神前へ。箕を南隅へ移動。

- ⑫〔順巡りの基本〕で、最後は西隅へ。そこから逆方向に巡って北隅から中央を向き、両足の屈伸一回。ここで歌が入り、歌にあわせて杵を振りながら南隅にある箕に近づき、しゃがんで箕の中の餅を搗く所作。歌の最後の「どこいどっこい」で立って箕を揺らし、西隅へ移動。

- ⑬同様に西隅の箕を搗く所作。次は北隅に移動。

- ⑭同様に北隅の箕を搗く所作。次は東隅に移動。

- ⑮同様に東隅の箕を搗く所作。次は神前に移動。

- ⑯同様に神前の箕を搗く所作。

- ⑰箕を両手で持って順方向に回りながら中央へ移動し、左右左。順方向に半周して神前に進み餅を撒く。同時に巫女たちも出てきて餅を撒いた。

- ⑱撒き終わると〔順巡りの基本〕で中央へ。空になった箕を捧げ持ち、座して置き拝礼。

10 將軍舞しょうぐんまい（6分30秒）

白衣に、陣羽織、緑のたつつけ袴。素面ながら黒のシャグマをつける。舞手がトランス状態になる舞。舞っていると足がギーギー鳴り出す気がしてくるという。途中で飛び上がるため、控えている者がそれを押さえる。突然飛び上がるため、観客にも印象が強く、子供の頃に見た人が、「天井まで飛んだ」「天まで上がった」などと記憶しているという。

- ①先に神前に

弓を準備し

ておく。左

手に幣、右

手に鈴を持

ち、舞座手

前にしゃが

み、楽が始

まると立つ

て両手を拳

げて神前

へ。

- ②神前で左右左。

- ③順方向に巡り、二周目の九時の位置で両足屈伸をしてから順方向に回って西隅へ〔順巡りの基本〕。次に逆方向に巡り、二周目の東隅で西隅に向き、西に向かって鈴を振り、中央で屈伸をしつつ北向きで上下に鈴・幣を振り、戻って東隅に鈴・幣を振る。それから逆方向に一回りしつつ南隅へ。

- ④同様に北隅から南へ鈴を振り、最後は東隅へ。

- ⑤同様に舞座手前から神前へ鈴を振り、最後は東隅へ。

- ⑥〔順巡りの基本〕から逆方向に巡り、二周目の東隅で神前へ。

- ⑦神前で扇を置き、左手に弓を。

- ⑧〔順巡りの基本〕から逆方向に巡り、二周目の東隅で西隅に向き、西に向かって踏み込み、戻って上に向かって弓の弦を弾く。

- ⑨同様に北隅から南に向かって踏み込み、戻って上に向かって弓の弦を弾く。

- ⑩同様に舞座手前から神前に向かって踏み込み、戻って上に向かって弓の弦を弾く。

- ⑪〔順巡りの基本〕から神前へ。

- ⑫神前で鈴を置き、左手で弓をつき、右手に開扇。タチゴト（歌）にあわせて



体を左右にゆっくりひねりながら、扇を上下左右に大きく振る。やがて両足のかかとを上げてドンと床を打つ。ある時点で太鼓が早打ちをし始めると、身体の動きも早くなる。ここで西隅近くに介添え役が座る。舞手は左右に激しく身体をひねっていたかと思うと、中央に移動するや大きく跳び跳ね出す。これを介添えが押さえ、そのまま幣殿へ退場。

11 山賀 (9分)

翁は白衣に陣羽織、青のたつつけ袴、翁面に白髪のかつら。媼は白衣に陣羽織、巫女同様の赤い袴を着け、媼面に白髪のかつら姿。

- ① 媼、両手に鈴を持って幣殿より登場し、南隅から順方向に巡る。続いて翁、小さな荷を背負って杖をつきつつ登場し、媼と対峙する位置で順方向に巡る。媼が一周したところで、逆方向に巡り、舞座手前から二人揃って神前へ進む。
- ② 神前に向かって左に媼、右に翁が座り、二礼二拍手一礼で拝んだ後に向かい合って、翁の荷を解く。
- ③ 神職が神前より進み出て、三宝に載った瓶子と盃を用意。二人は盃を取って神職がこれに酒を注ぐまねをする。神職が「この神酒は」の歌をうたい、終わると二人は飲む所作をする。二杯目は面をあげて本当に飲み、更にもう一杯所望するなどして笑わせる。



- ④ 神職が戻ると、二人は向かい合って翁の荷を背に結び、立ち上がって順逆に巡る。時折よろけたり、観客の中に入って笑わせる。やがて、揃って幣殿へと退場。

12 恵比須 (8分)

恵比須面に烏帽子、青の狩衣姿。順・逆に巡る基本所作で創作復活させた舞。

舞があったことは確かだが、舞い方については不明であった。また恵比須面をつけるが、もともと面があったかどうか不明。

- ① 恵比須面をつけ、左手に釣竿、右手に鈴を持って登場。舞座手前にしゃがみ、楽とともに立って神前へ。
- ② 左右左に採り物を振る。
- ③ 順方向に巡り、二周目の九時の方向で両足屈伸をして順方向に回りながら三時の方向へ「順巡りの基本」。
- ④ 逆方向に巡り、二周目の三時の方向で両足屈伸をして逆方向に回りながら九時の方向へ「逆巡りの基本」。
- ⑤ 順方向に巡り、二周目の舞座手前から中央に進み両足屈伸。
- ⑥ 中央から順方向に一回りして神前へ向きタチゴト。
- ⑦ 神前より「順巡りの基本」で最後は神前へ行き、鈴を置く。
- ⑧ 左手で釣竿を持って「順巡りの基本」で、最後は西隅へ。
- ⑨ 右手で釣竿を持って「逆巡りの基本」で、最後は南から北に向かって釣竿を振る。釣竿は、まず糸を投げるように振って、釣り上げるように右足を引く。次いでもう一度投げ、今度は左足を引き、三度目に投げるとまた右足を引く。それから両手で釣竿を持って逆方向に回りつつ北隅に移動。
- ⑩ 左手で釣竿を持って「順巡りの基本」。
- ⑪ 続いて⑨同様に「逆巡りの基本」で東から西に向かって釣竿を振り、最後は逆方向に回って西隅へ。
- ⑫ 「順巡りの基本」で西隅へ。
- ⑬ ⑨同様に「逆巡りの基本」で舞座手前から中央に入り神前に向かって釣竿を振り、最後は逆方向に回って東隅へ。
- ⑭ 「順巡りの基本」のように巡って最後の九時の位置で左、右と足を踏んで、順方向に回って神前に向かい、一礼して終了。



13 注連舞（しめまい）（7分）

注連縄を持って舞う。冠をつけ、白の狩衣姿。

①右手に鈴を持ちつつ両手でしめ縄を捧げ持ち、舞座手前にしゃがみ、楽とともに立って神前へ。

②左右左に採り物を振る。

③順方向に巡り、二周目の九時の方向で両足屈伸をして順方向に回りながら舞座手前へ〔順巡りの基本〕。

④逆方向に巡り、二周して三時の位置で両足屈伸をして逆方向に回りながら舞座手前へ〔逆巡りの基本〕。

⑤〔順巡りの基本〕で最後は神前へ。

⑥タチゴト。

⑦左右左に両手で採り物を振る。

⑧順方向に巡って九時の位置から順方向に回って西隅へ片膝をつく。

⑨逆方向に一周巡って西隅から東隅に向かって両手でしめ縄・鈴を振り、戻す所作。戻す際に左右左右左に身体を引く。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつきつつおこなう。もう一度東に向かって振って戻しながら逆方向に回って西隅に片膝をつく。

⑩順方向に巡って九時の位置から、順方向に回って西隅に片膝。

⑪⑨同様に逆方向に巡って北隅から南隅に向かって同様の所作で最後は北隅へ。

⑫九時の位置から、順方向に回って西隅に片膝。

⑬逆方向に巡って東隅から西隅に向かってしめ縄と鈴を振り、戻しながら逆方向に回って西隅へ片膝をつく。

⑭順方向に巡って九時の位置から順方向に回って西隅へ片膝をつく。



⑮⑬同様に逆方向に巡って南隅から北隅に向かってしめ縄と鈴を振り、戻しながら逆方向に回って北隅へ片膝をつく。

⑯九時の位置から順方向に回って西隅へ片膝をつく。

⑰⑨同様に逆方向に一周巡って舞座手前から神前に向かって両手でしめ縄・鈴を振り、戻す所作。戻す際に左右左右左に身体を引く。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつきつつおこなう。もう一度神前に向かって振って戻しながら逆方向に回って西隅に片膝をつく。

⑱九時の位置から順方向に回って西隅へ片膝をつく。

⑲逆方向に巡っていき、舞座手前からもう一度神前に向かい、⑬同様に神前に向かってしめ縄と鈴を振り、逆方向に回って北隅に片膝をつく。

⑳九時の位置から順方向に回って西隅へ片膝をつく。

㉑左手でしめ縄を肩に背負い、右手の鈴を振りながら逆方向に巡り、三時の位置で屈伸して逆方向に回って神前へ。鈴としめ縄を置いて一礼し終了。

14 獅子舞（ししま）（10分）

天狗は赤い衣に緑のたつつけ袴。天狗面に黒のシャグマ。

①天狗、両手に櫛を持って勢いよく幣殿より登場。順方向に一周巡った後、神前で櫛を置いて餅の載った三宝を持ち、順方向に一周し、九時の方向から順方向に一回りして神前へ。

②タチゴト。タチゴトにあわせてつま先を片方ずつ後ろに踏み出す。

③餅撒き。終わって空の三宝を持って順方向に一周し、九時の方向から順方向に一回りして神前へ。

④再び櫛を両手に順方向へ巡ると、幣殿より獅子登場。天狗は獅子の後方へ。

⑤順・逆に巡ると獅子は中央で寝てしまい、天



狗は櫛でこれを打つ。これを繰り返して、三度目に天狗は獅子に馬乗りになって叩き、獅子気付いて争いになる。やがて獅子・天狗ともに観客の中に入っていく、天狗は櫛で観客を叩き、獅子は鹵打ちをして回り、退場。

15 神幣（7分）

素面に烏帽子、狩衣姿。岩戸神樂三番の一つとされる。また、詞章に「釣り船」が登場することから、豊漁祈願の舞ともされている。

①左手に幣、右手に鈴を持ち、舞手二人が舞座手前にしゃがみ、笛とともに立つて一度両足屈伸をして神前へ。

②タチゴト。

③屈伸してから順方向に巡り、南北の位置で屈伸して両手を顔の前に挙げて押し頂く所作。そこから逆方向に半回転して向きを変え、逆方向に巡る。東西の位置に来たところで屈伸をして逆方向に回り南西の辺に外を向いて並ぶ。

④南西の辺から「ヤーハーハーハー」の声で後ろ向きに幣と鈴とを振りつつ下がり、北東の辺に及ぶと逆方向に半回転し、同じく「ヤーハーハーハー」の声で幣と鈴を振りつつ下がる。それぞれ南と北で外を向いて踏み出すと幣を差し出し、振り返って互いが入れ替わる。入れ替わる際に軽くぴょんと跳ぶ。入れ替わった位置でも外を向いて踏み出して幣を差し出し、振り返りながら逆方向に回って南隅から西隅へ、北隅から東隅へと移動。

⑤③同様に屈伸してから順方向に巡り、南北の位置で屈伸して両手を顔の前に挙げて押し頂く所作。そこから逆方向に半回転して向きを変え、逆方向に巡る。今度は南北の位置にきたところで屈伸をして逆方向に回って神前に並ぶ。

⑥④同様に南東の辺（神前）から「ヤーハーハーハー」の声で後ろ向きに幣と鈴とを振りつつ下がり、北西の辺（舞座手前）に及ぶと逆方向に半回転し、同じく「ヤーハーハーハー」の声で幣と鈴を振りつつ下がる。それぞれ西と東で外を向いて踏み出すと幣を差し出し、振り返って互いが入れ替わる。

入れ替わる際に軽くぴょんと跳ぶ。入れ替わった位置でも外を向いて踏み出して幣を差し出し、振り返りながら逆方向に回って西隅から北隅へ、東隅



ところで屈伸をして逆方向に回って神前に並ぶ。

⑧タチゴト。

⑨③同様に屈伸してから順方向に巡り、南北の位置で屈伸して両手を顔の前に挙げて押し頂く所作。そこから逆方向に半回転して向きを変え、逆方向に巡る。南北の位置に来たところで屈伸をして逆方向にその場で回転。

⑩南北の位置で左右左右と採り物を引く。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつく。それから外側に向かって幣を差し出し、振り返って互いが小さく跳んで入れ替わる。その位置でも外を向いて踏み出して幣を差し出し、振り返りながら逆方向に回って南隅から西隅へ、北隅から東隅へと移動。

⑪③同様に屈伸してから順方向に巡り、東西の位置で屈伸して両手を顔の前に挙げて押し頂く所作。そこから逆方向に半回転して向きを変え、逆方向に巡る。東西の位置に来たところで屈伸をして逆方向にその場で回転。

⑫⑩同様に東西の位置で左右左右と採り物を引く。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつく。それから外側に向かって幣を差し出し、振り返って互いが小さく跳んで入れ替わる。その位置でも外を向いて踏み出して幣を差し出し、振り返りながら逆方向に回って西隅から北隅へ、東隅から南隅へと移動。

⑬③同様に屈伸してから順方向に巡り、六時と一二時の位置で屈伸して両手を顔の前に挙げて押し頂く。そこから逆方向に半回転して、逆方向に巡る。三時と九時の位置で屈伸をして神前へ。座して採り物を置き、一礼して終了。

から南隅へと移動。

⑦③同様に屈伸してから順方向に巡り、南北の位置で屈伸して両手を顔の前に挙げて押し頂く所作。そこから逆方向に半回転して向きを変え、逆方向に巡る。東西の位置に来た

(三) 詞章

神楽の中で、前半の登場して一舞すると、神前に向かって立ち唱え言を発する。これを「タチゴト」「タチコトバ」あるいは「タツコト」などと言う。富江ではタチゴトの他に「イイク」(ユウク)、また「タチウタ」というものがあるが、上五島ではそのように言うことがない。例えば「五方」「四天」、あるいは「箕舞」でメロディのついた歌が唄われ、意味的には「神歌」、あるいは下五島であれば「タチウタ」あるいは「マイウタ」などと称すべきものであるが、それを指し示す言葉が存在していないのである。なお、タチゴトは舞手が唱えることがないが、タチウタに相当すべき歌だけは、舞手自らが唄う。この他に「神通」などでは、舞の中に問答がある。これを「トイ」と「ハイ」だと称している。ただし各々で使うことはなく、「トイハイば、してみろ」というように、組み合わせて使う。

*平成十四年刊『上五島神楽本』(上五島神楽保存会発行)から引用。

凡例

- 一、アラビア数字は、今回上演された演目の順番による。
- 一、ルビは引用原典に基づき、適宜施した。

1 座藏

千早振る ここも高天の原なれば 集まり給へ 四方の神々

2 長刀

音に聞く 鬼の剣を抜いて見た 身は白銀で 造らせしもの

3 五方

東方の東方の 久々能智神は 青き御幣を立てかざし
神は留まり おはし坐す
ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ(繰り返し)
南方の南方の 迦具土神は 赤き御幣を立てかざし
神は留まり おはし坐す
西方の西方の 金山神は 白き御幣を立てかざし
神は留まり おはし坐す
北方の北方の 水波売神は 黒き御幣を立てかざし
神は留まり おはし坐す
中央の中央の 埴安神は 黄き御幣を立てかざし
神は留まり おはし坐す

4 四天

けんみょう けんみょう みょうけんみょう
神の父 神の父 ヤーア 出雲に参る神の父
神の母 神の母 ヤーア 出雲に参る神の母
御供米持ち 御供米持ち ヤーア 出雲に参る御供米持ち
御幣持ち 御幣持ち ヤーア 出雲に参る御幣持ち

5 折敷

立言
君が代の 久しかるべし エー ためしには かねてぞ
植えし 住吉の松 エーエ
舞歌
一、君が代の君が代の 久しかるべしためしには
ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ
かねてぞ植えし 住吉の松
ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ(以下、繰り返し)
二、秋鹿の秋鹿の 峰の小草をさらへなば
ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ
声する鹿は え知らざるもの(季節の歌挿入)
三、神の坐す神の坐す 鳥居に入ればこの宮は
ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ
ひつぎの宮と やすらかに住む

6 箕舞(豊年舞)

今年しや豊年だよ 穂に穂が咲いた 道の小草も米がなる
そろたそろたよ 稲穂がそろた 白穂見せずに実り穂が
取れた取れたよ お米が取れた 反のあたりに五六石
取れて喜ぶ 国と民
つけよつけつけ やれつけつけよ ドスコイドスコイ
ついて志ろめて 国納め

7 將軍舞

天無くしては雨降らず 地無くして そう無ければ草生えず
由来無うては語られず 將軍装束 尊かりけり
さて將軍殿の生まれさせ給ふ そのいがの初声に
「天下泰平国土安穩に納め給ふ」と申す 丈の高さが八尺二分
神体を拝し申せば建速素戔鳴尊の神体におはし坐す
さて將軍殿の由来を語るには 人皇十代の帝 崇神天皇の御代に
帝の守護神として 四方のえびすを平らげて
天の下を太平に治め給はんと 北陸道には大彦命
東海道には建沼河別命 西海道には吉備津彦命
山陰道には丹波道主命を立て
四道將軍と名付け給ふ これぞ即ちわが日本の將軍職のはじめなり
さて それ將軍殿の頭には 月星こんだる ああ八重の笠
身には五徳の鎧をめされ ゆいぎよの馬に御身は横たへて
神通の月弓に心叶ふの弦を掛け きゅうぎようきゅうのえびざねは
八百萬の矢を並べ 東方に はりやすめ 南方に はりやすめ
西方に はりやすめ 北方に はりやすめ 中央に はりやすめ
大地が方にも はりやすめ

8 山賀

この神酒は 吾が神酒ならず神の神酒
大物主の醸し神酒 醸し神酒 幾久 幾久
この神酒は 吾が神酒ならず神の神酒
少彦名の醸し神酒 醸し神酒 幾久 幾久

9 恵比寿舞

抑／＼恵比寿の大神と申すは 事代主命にて 古へ
神の御代に
皇御孫の命 豊葦原の水穂の国を知ろしめさんと
神問し給ふ時 恵比寿の神は出雲の国美穂の崎に遊び行
坐して
鳥狩り魚取り楽しみ在り給ひしが 直に父の神大國主
命を和め奉りて
立ち処にこの豊葦原を天の皇御孫に譲らしめんと 自ら
平手を打ちて
船の辺を踏み海中に八重葦柴籬を造り避け給ふ これぞ
打ち手柏手の初めなり
斯くさり給ふ事代主命は 親に孝行君に忠なる道を
呉竹の世に垂れ給ひ いみじき功績を朝廷も尊みまつり
八柱神の中に斎奉らせ給ふはこの時依りぞ
誠に大神の畏き御稜威は 天の事知る 地の事知る
世の中の万の事知る潔き事代主の御業にて
常に恵良恵良笑顔に坐すが故に恵比寿の神とは申すなり
漁りの人や商の人の御祖神に坐し坐せば 海の幸福を
祈り奉れば
鰭の広物 鰭の狭物 数多網引き 鯛釣りすれば釣り満
足し
亦 商人は諸々品物の売買の業に許々多くの幸福を得る事
皆 大神の恩頼に依ることなれば 世の人草は睦ひつどひて
恵比寿の祭りを祝ひ祭りて賑はしく
いつも恵良恵良 笑ふ門には 東は目出度い西よき北の
風 南に福德の神

10 注連舞

千早振る ここも高天の原なれば 集まり給へ 四方の
神々
さて注連の謂は 尊さや 七五三とぞ引かれたる
七つさがつて候は 天神七代のひそそうなり
五つさがつて候は 地神五代のひそそうなり
三つさがつて候は 天地人三才のひそそうなり
合わせて十五は 天道の巡る形や 左縄 引いて風に吹
かすれば
四方千里が内に 悪魔来たらじ 諸々けがれ除かると
注連の謂は 尊かりけり

11 神幣(神部)

立つまに かすみの千早重ね着て 華の緒わ紐
今や解くらむ
千早振る 我が身は神のおおやしろにて お降りさせ給
へ 庭の里より
ヤー 千代の お神楽
高根より 雪ふり下る追ひ風に 片帆は白し 田子の浦船
田子の浦 波間に船の帆影見えて 波の上こぐ 天の釣船
ヤー 千代の お祭り

*「六由來・信仰」以降は123頁。

かみごとう かぐら まろうどじんじや
上五島神楽「客人神社」

久保田裕道

一 名称

上五島神楽

二 伝承地

長崎県南松浦郡新上五島町の旧上五島町・旧新魚目町の青方神社・政彦神社・榎津神社・祖父君神社・小串神社と、各兼務社のある地域

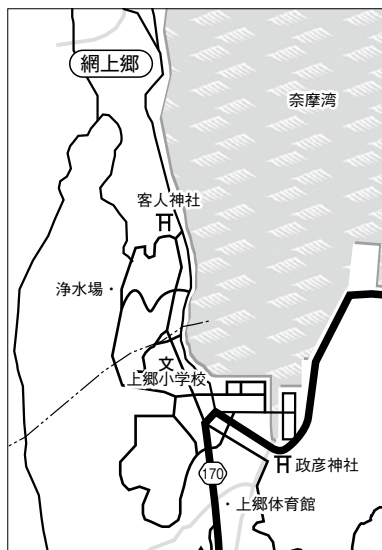
*以下に平成二十二年度現地調査を実施した客人神社例祭での上五島神楽を報告する。なお客人神社は政彦神社の兼務社である。

三 期日・場所

期日 客人神社例祭 十月二十八日（前夜祭）・二十九日（例大祭）

*平成二十二年度も同日

場所 客人神社（網上郷）
あみあげこう



客人神社

客人神社の拝殿は、幅三間、奥行三間半。畳が敷かれ周囲に半間幅の回廊がついている。中央二間幅で幣殿が続いている。舞座となるのは、その幣殿と

の境から半間下がつた中央の一間四方で政彦神社と同様にマイイタ（舞板）が敷かれている。

四 伝承組織

95頁参照。

五 行事（芸能）内容

（一）次第・日程

1 十月二十八日（前夜祭）

この日、まず一四時三〇分頃よりヤバライ（屋祓い）がおこなわれる。網上郷には約百戸があるが、そのうちの希望のあった八十戸ほどを廻る。なお隣接する冷水の集落も網上郷だが、キリスト教の集落であるために廻ることはない。ヤバライは獅子と天狗が二組出て、集落内の上と下とを分担して廻る。ただし平成二十二年は雨模様様の天候であったため、獅子は出ずに天狗だけが若干早めに一四時頃より約一時間かけて廻った。平成二十年頃までは神輿の巡幸と一緒に廻っていたが、近年は先にヤバライが廻って夕方になって神輿が巡幸するようにになっている。ヤバライに行くこと



神輿



御霊移し



ヤバライ



ヤバライ



神幸（神輿）

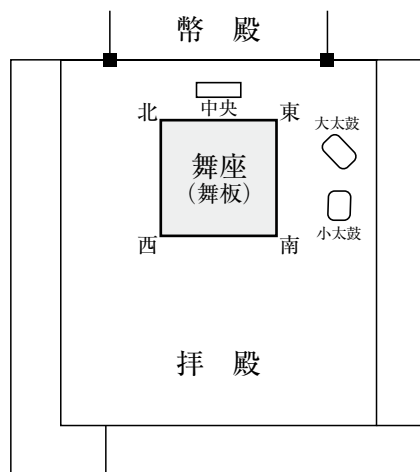


神幸（先頭）

獅子二人・天狗二人 ― 注連縄（笹）
 ― 神職 ― 稚児 ― 巫女 ― 榊
 ― 金幣 ― 宮司 ― 神輿 ―
 太鼓（二基）・笛 ― 保育園児（創作
 獅子・山車）

行列は神社を出てそのまますすぐに
 集落の中を南下し、奈摩との境（小学校の
 手前）で西に曲がりそのまま道なりに回り
 込んでもとの道に戻る。途中、神輿が入れ
 ない路地に注連縄（笹）、神職、太鼓（一基）・
 笛のみが入ってゆく。神社の前に戻ると、

縁側などに初穂料と塩・
 米が置かれており、天狗
 は塩か米をそこに撒いて
 くる。以前は塩だけであ
 ったが、塩を撒くと後処
 理が大変であるために米
 になったという。
 一五時五五分、マイイ
 タの上に神輿を置き、祭
 典が始まる。幣殿との境
 の両脇に太鼓と太鼓役が
 つき、向かって右の太鼓手前に笛。その手前に巫女と氏子総代が内側を向いて
 座る。修祓に続いて開扉し、献饌して祝詞奏上。ここで神輿を幣殿まで入れて
 拝殿との境を幕で隠して御霊移しをおこなう。一六時一〇分、神幸行列が出発。



客人神社「舞座」図

一旦北東方向に進み、
 すぐに集落のはずれ
 となるためＵターン
 して神社に上がる。

一六時四〇分、神
 輿を拝殿に上げると、
 そのまま幣殿に入れ、
 再び幕で隠して御霊
 移し。祝詞を唱え、撤
 饌、閉扉。一六時五〇分に郷長への挨拶を済ませ、神輿の片付けとなった。

一九時より、前夜祭の神楽奉納が始まる。神輿渡御の後、一旦帰宅した氏子
 たちは一八時三〇分頃より拝殿に集まりだし、やがて部屋いっぱいになる。神
 職・巫女・氏子総代らの着座位置は日中と同じ。太鼓は拝殿の幣殿手前左右に
 二台置かれ、各々叩き手がつく。向かって右の太鼓手
 前に笛奏者が座し、奈摩とはほぼ同じ配置を取る。



玉串奉奠

やがて太鼓・笛が奏され、修祓、開扉、献饌、祝詞奏上、
 そして玉串奉奠となる。玉串奉奠も奈摩同様に集まっ
 ている者ほぼ全員がおこない、その間は軽快な神楽歌
 が唱えられる。終わって一九時三〇分、宮司より説明
 があつて神楽が始められる。この日の演目は次の通り。

- ① 稚児舞
- ② 浦安の舞
- ③ 鎮守の里（創作）
- ④ 子供獅子
- ⑤ 座祓（子供）
- ⑥ 佐男舞
- ⑦ 恵比寿
- ⑧ 六將軍
- ⑨ 山賀
- ⑩ 神通
- ⑪ 箕舞
- ⑫ 平舞
- ⑬ 獅子舞

最後の獅子舞は、最後に獅子二頭が乱入してきて、最初から舞っていた一頭
 と一緒になって暴れながら参拝者の頭をかじる。そうして二時二五分にはす
 べての舞が終了。笛が鳴り続ける中、撤饌・幣扉がおこなわれる。二時三〇



神幸（太鼓）



神幸（創作獅子）



子供獅子

分、宮司が郷長に終了の挨拶をしてこの日の予定をすべて終えた。

2 十月二十九日（例大祭）

一〇時に祭典の開始。修祓から開扉、献饌と進み、玉串奉奠は前夜と同じように皆がおこなう。この日は、その後で氏子入りがおこなわれた。乳児を連れた親子が幣殿に上がり、祝詞奏上の

後に金幣による祓いを受け、神札を受けて神酒を頂くというもの。氏子入りに続いて七五三の参拝も同様におこなった。

一〇時四〇分、この日の神楽が始まった。演目は次の通り。

- ①稚児舞 ②浦安の舞 ③座祓（子供） ④荒塩
- ⑤神幣 ⑥獅子

終了後、すぐに撤饌、閉扉をおこなう。最後に宮司が郷長に報告をして例大祭が終了となった。この後、集落内にある公民館へ移動して直会となる。祭典と神楽に関わった神職・氏子総代らが昼食をとった。

（二）演目・芸態

以降に舞の所作等について、演目毎に挙げてゆく。記述の前提については政彦神社同様である。ただし、舞台の方角については、奈摩の政彦神社と異なり、向かって右奥が東、左奥が北、右手前が南、左手前が西となる。それ以外については、仮に本殿方向を一二時とし、その反対を六時といったように表す。



直会



1 佐男舞（4分）

素面に烏帽子、狩衣姿。佐男は若い男性を指すとされている。下五島では基本とされる舞だが、上五島では言わない。

①両手で閉扇を持ち、舞座手前にしゃがみ、楽とともに立って神前へ。

②閉扇を両手で持って左右左と後方へ払う。

③左手で閉扇を持って順方向に巡り、二周目の九時の方向で屈伸して、順方向に回って三時の方向へ（「順巡りの基本」）。

④右手で閉扇を持って逆方向に巡り、二周目の三時の方向で屈伸して、逆方向に回って神前へ（「逆巡りの基本」）。神前に向かうところで扇を開き、左手に持って右手に神前より鈴を取る。

⑤左手で開扇を持って「順巡りの基本」。

⑥右手で開扇を持って「逆巡りの基本」で、最後は九時の方向へ。

⑦左手で開扇を持って「順巡りの基本」で、最後は神前へ。

⑧神前で扇を閉じてタチゴト。

⑨左右左。

⑩右手で鈴を鳴らしつつ「順巡りの基本」で神前へ。鈴を置く。

⑪神前で左手で閉扇を持ち、一度両手を開いて後方にのけぞる。

⑫神前から「逆巡りの基本」で最後は九時の方向へ。九時の方向に向かうところで、扇を開く。

⑬左手に開扇を持って「順巡りの基本」。

⑭右手に開扇を持って「逆巡りの基本」で九時の方向へ。

⑮両手で開扇を頭上に掲げ、「順巡りの基本」で神前へ。扇を閉じて座し、採り物を置くと一礼して退場。

2 六將軍 (7分)

白衣に緑のたつつけ袴。陣笠や陣羽織をつける場合もある。

- ① 舞手二人、各左手に矢、右手に鈴を持って舞座手前にしゃがみ、笛とともに立ち上がって両手を挙げ、そのまま対峙する形で順方向に巡る。半周ほどして「ヤーサンハーハイ」の声で大きく踏み込み、南北の隅で向きを変える。
- ② 逆方向に巡り、半周ほどして「ヤーサンハーハイ」の声で大きく踏み込み、東西の隅で向きを変える。



- ③ 順方向に巡り、半周ほどして「ヤーサンハーハイ」の声で大きく踏み込み、そのまま回り込んで神前へ。
- ④ タチゴト
- ⑤ 採り物を左に振り、跳ぶように鈴を振りながら順方向に一巡りして南北で向きを変え、逆方向に巡って南北で向き合い、「ヤーサンハーハイ」にあわせて採り物を振って、左右左に回るように片足で跳ぶ。
- ⑥ 順方向に一巡りして南北で向きを変え、逆方向に巡って東西で向き合い、「ヤーサンハーハイ」にあわせて採り物を振り、左右左に回るように片足で跳ぶ。
- ⑦ 順方向に一巡りして南北で向きを変え、逆方向に巡った後に逆方向に回って神前へ。ここで矢を置き、弓を手にする。
- ⑧ 中央から東向きに「ヤーサンハーハイ」の声で足踏み、採り物を大きく左へ振ってから順方向に回ってそのまま順方向に巡る。
- ⑨ 順方向に一巡りして南北で向きを変え、逆方向に巡って西隅へ。東を向いて「ヤーサンハーハイ」で踏み込み、「ハーハーハー」で鈴を振ってゆつくりと戻る。そしてもう一度「ヤーサンハーハイ」で踏み込み、今度は採り物を大きく左へ振ってから順方向に回ってそのまま順方向に巡る。
- ⑩ 同様に順逆に巡って舞座手前から神前に向かつての同様の所作。
- ⑪ 同様に順逆に巡ってから南北で向き合い、「ヤーサンハーハイ」で両手で

持つ弓を上下に振った後で、外、内と大きく振り、内側に振った勢いでそのまま進んで互いの場を入れ替える。更にもう一度外、内と振って再び入れ替わり、外に振る。そこから順方向へ巡る。

- ⑫ ⑪ 同様に順逆に巡って東西で向き合い同様の所作。



- ⑬ 順・逆に巡ってから三時・六時の位置に立ち、逆方向に回って神前へ。採り物を置いて拝礼し退場。

3 神通 (13分)

問と鬼が登場。問は、烏帽子に素面、狩衣姿。鬼は鬼面に黒のシャグマ。白衣に陣羽織、たつつけ袴。神楽の由来を説く舞と説明されるが、むしろ鬼神が高位の神に服従するという内容が元来の意味と思われる。九州・中国地方に多い柴鬼神との共通性が見られる。

- ① 神職姿の問、右手に幣を振りつつ幣殿より登場し、東隅より順に巡る。続いて鬼面を着けた鬼が白杖をついて登場し、周囲を睨むように首を回しつつ神職と対峙しながら順に巡る。
- ② 途中で逆方向へ巡り、問が西、鬼が東に来たところで問は鬼が持つ白杖の端を握り、両者が握った状態で順方向へ一周巡る。

③ 再び問が西、鬼が東の位置に来たときに杖を大きく揺する。鬼は杖を取ってその場にひざまずく。問は幣を振りつつ鬼に向かつて語り、鬼はひざまずいたまま時折白杖で床を打ちつつ答える。

- ④ 問答終わって、問は退場。鬼は東隅に置かれた俵の上に西方を向いて腰掛ける。左手では白杖を、右手には懐から





出して広げた扇を大きく振りながら、神楽の由来としての天岩戸の話を語る。

⑤ 語りが終わると扇をうち捨て、立って中央から東南西北と天地それぞれに白杖を振りつつ舞う。俵は片付けられている。

⑥ 舞座手前で「あの山の」の歌で横に舞った後、神前に進み、白杖を置く。

⑦ 順方向に巡って九時の方向から順方向に回り南隅へ行き、逆方向に巡って舞座手前から神前に進む。この時、両手は何か掴みかかるように広げている。

⑧ 神前で餅の入った三宝を持ち、順方向に一回りして「この米は」の歌にあわせて左右の足を交互に踏むステップ。それが終わると一旦神前に三宝を置く。

⑨ ⑦同様に順・逆に巡って再び三宝を取り、餅を撒く。神前に撒いてから観客へ向いて撒き、最後は神前を向いたまま両手で三宝を持って、後方に反り返るようにして投げる。この時、巫女なども出てきて餅撒きに加わる。

⑩ 餅撒きが終わるのを待って、東隅より幣二本を持って⑦同様に順・逆に巡り、最後は中央で内外に幣を振る。

⑪ 中央から逆方向に回って北隅に行き、順に巡って九時の位置で両手に幣を分け持ち、両足屈伸をした後に順方向に回って神前へ向かい、そのまま退場。

4 平舞^{ひらまい} (5分)

烏帽子に素面、狩衣姿。岩戸神楽三番の一つとされる。二つの扇を組み合わせて天の岩戸を表現しているという。

① 二本の閉扇をあわせ持ち、舞座手前にしゃがみ、笛とともに立って神前へ。

② 左右左にあわせ持った閉扇を振る。

③ 順方向に巡り、二周目の九時の方向で両足屈伸をして順方向に回りつつ南隅へ〔順巡りの基本〕。



この間、左右の手に一本ずつ持った閉扇はハの字に掲げる。

④ 逆方向に巡り、二周目の三時の方向から方向に回って西隅へ〔逆巡りの基本〕。この間、閉扇はVの字に掲げる。

⑤ 再び〔順巡りの基本〕で、最後は神前へ。

⑥ 扇を開いてタチゴト。開扇は、要の部分を見せて丸くなるように持つ。この扇を天岩戸と見立てるといふ。

⑦ 左右左に開扇を振る。

⑧ 右手の開扇を前に掲げ、左手の開扇は後ろ手に。〔順巡りの基本〕で、最後は南隅に片膝をつく。

⑨ 左手の開扇を前に掲げ、右手の開扇は後ろ手に、逆方向に巡って一周した三時の方向から逆方向に回って中央へ。

⑩ 中央から西方に開扇を左右左右と振る。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつきながら。さらに外・内と振ってから逆方向に回って東隅に片膝。

⑪ 右手の開扇を前に掲げ、左手の開扇は後ろ手に、順方向に巡って九時方向から順方向に回って南隅に片膝。

⑫ 左手の開扇を前に掲げ、右手の開扇は後ろ手に、逆方向に巡って舞座手前から中央に出て開扇を左右左右と振る。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつきながら。さらに外・内と振ってから逆方向に回って南隅に片膝。

⑬ ⑪同様に巡って南隅へ片膝。

⑭ 逆方向に巡って二周目の北隅から中央を向いて内・外に扇を振る。それから逆方向に回って南隅へ片膝。

⑮ ⑪同様に巡って南隅へ片膝。

⑯ 逆方向に巡って舞座手前から中央に進み、内・外に扇を振る。それから逆方向に回って西隅へ片膝。

⑰ 〔順巡りの基本〕で、最後は神前に座して扇を置き拝礼。

(三) 詞章

*平成十四年刊『上五島神楽本』(宮田紀久編 上五島神楽保存会発行) から引用。

凡例

一、アラビア数字は、今回上演された演目の順番による。
一、ルビは引用原典に基づき、適宜施した。

1 佐男舞

椰櫛 育て栄えよ 宮の内 なほ栄え増す 氏人のため
舞まをば まずは所の舞を舞へ
いざさら舞ふよ 氏人のため

2 六將軍

この竹は 高天の原に エー 植えし竹
矢になしたるは 八幡なりけり

3 神通

問 再拝再拜 この御所に御神をまい奉らんが為に
しばのさいまつに成り給ふは何者ぞ

咲く花のしげきひらけんなりひらけんなり
扱て 後に魔おうなものが伏すがあやしき給ふ

鬼 まをば誰か ふさでつくべし

問 扱て ただ今 この庭に出で来立つたるものは 神かと
見れば神にてもあらず 天狗かと思れば天狗にてもあ
らず 動けば人にも似たり 動かねば苔ふす岩にも似
たり もの言ふ声は鳴る雷の如し いんやこの鬼神の
色をよくよく見奉れば 歌ぶらを以てこそ ゆみのつ
きしを存じ候

問 鶯は まだ巢の内にいるやらん

春は来たれど歌声もせん

鬼 へ(繰り返し) 歌声もせん

問 鶯の 山門ひらき 里に出て

よき初声を 氏に伝へん

鬼 へ(繰り返し) 氏に伝へん

問 へ奥山や 遠山の奥に 咲く花は

鶯つまで 誰かつむべし

鬼 へ(繰り返し) 誰かつむべし

問 へ四五六の 十五の石を十取りて

八ツ目のさいを 誰か打つべし

鬼 へ(途中まで繰り返し) 我らこそ打つ

問 へ谷は八つ 峯は九つ 門はひとつ

鬼 へ(繰り返し) あららぎが里

問 へ(繰り返し) あららぎが里

やーえん たんと吹く風に きまん神通の角生えて

三万四千のにきぎようし 眼を見給へば りゅうりゅう

うのヒサギをえつてはめたに異ならず 鼻を見給へば

大石の如し 口を見給へばものせん神の岩屋にくりへ

んじ しばさいに異ならず 両のはぎの菌がみ違へ

たは 剣を抜き違へたに異ならず その身を見ればし

ゆむせんなり 早く名乗らせ給へ 遅く名乗らせ給ふ

は 山の荒七郎殿の神通の白杖を以て 打擲と道をあ

たへんなり あたへんなり

問 へ吹く風に 簾吹き上げて 見てませば

鬼 簾の内なる 君ぞ見たす

へ(繰り返し) 君ぞ見たす

やーえん第一 みようじんの变化にて 七つの峯七つの

谷にうち吹いたは きんぎようがことなり けしん

今朝 浅倉山に昼寝して 一つほんならず 二つほん

ならず ばくじの柴を盗み取られて無念さや 早や早

や取つて帰らん 取つて戻らん 早や早や黄金のぞう

かを引き給へ

問 早や早や黄金のぞうかに乗り移され給へ

天無くしては雨降らず 地無くして そう無ければ草生

えず 父無くしては種をれず きようじつのふて本無け

れば読まれ申さず承つて候よ 扱てこれより きへの

方に当たる いとうけ無き雲ひとむらにみつる彼の雲の

四方へさーと分かれたて 東をば東天と申す 南をば

南天と申す 西をば西天と申す 北をば北天と申す承

つて候よ 扱て それせいのせきじと言ふ賊は きん

ぎよう 喜ばざるによつて 日月とわきばさみ 天照

大神の天の岩戸に閉じ籠らせ給へば 天が下は暗やみの

如くなり給ふ いんや是れにては 叶ふまじとて神集

ひに集ひ神議りに議らせ給ふ その時 天の香具山の

五百津真神の枝を求め 上の枝には珠をかけ中の枝に

は鏡をかけ 下の枝には幣帛をかけ並べて祈り出さん

とす その時集まらせ給ふ神々は誰々ぞ 奥津彦命

奥津姫命 豊岩彦命 櫛岩彦命 玉祖命 伊志許利留命

天津兄屋根命 太玉命 総じて命は八神なり 待つた

天の宇豆売命は手にちまきの鉾を持ちて 天の岩戸の前

に立たせ給ふ 巧みに技をし神がかりす この時 天照

大神の閑食してのたまはく 吾れ このごろ岩屋に籠る

に 思ふに天が下は必ず暗闇なるらむ おかんぞ宇豆売

命はかく笑らざるや やあら面白やと思召し 天の岩

戸を細戸に開かせ給ふ その時手力男御神と申す御神こ

そ 大力の御神に坐しませば 住吉を力と召し 戸隠の

明神と御手を添へ はだい へいはくと前へ引き出し給

ふ その時 天の下は初めて明らかにこそ成り給ふ こ

の時よりこの神楽と申すこと始まつたる御事なり。

〔舞歌〕へ御神楽を

東にとつて逃げんとすれば 青き幣帛を立てかざし

南にとつて逃げんとすれば 赤き幣帛を立てかざし

西にとつて逃げんとすれば 白き幣帛を立てかざし

北にとつて逃げんとすれば 黒き幣帛を立てかざし

天にとつて逃げんとすれば 天にはてんがいまくはし

地にとつて逃げんとすれば 地にはらつかい

こばんのぶたいを敷いたりけり

エー あの山をあの山を いつとき離れて

さようは千年 世は末代と存する

この米は この米は 神の前では饌米なるが

我らの為には作の世に 作して作とる 作祭りする

4 平舞(扇舞)

千早振る 神の御前に扇立てて 前ばぞ開く 天の岩屋戸

*「六由来・信仰」以降は123頁。

かみとうかくら
あおかたじんじや
上五島神楽「青方神社」

久保田裕道

一 名称

上五島神楽

二 伝承地

長崎県南松浦郡新上五島町の旧上五島町・旧新魚目町の青方神社・政彦神社・榎津神社・祖父君神社・小串神社と、各兼務社のある地域

* 以下に平成二十二年度現地調査を実施した青方神社例祭における上五島神楽を報告する。

三 期日・場所

期日 青方神社例祭 十一月二日（前夜祭）・三日（例大祭）

* 平成二十二年度も同日

場所 青方神社（青方郷）
あおかたこう



青方神社



拝殿は幅

五間、奥

行き三間

半。その神

前側中央部

に奥行き一

間弱の一段

上がった板

の間があ

り、そこか

ら神前側に二

段上がったと

ころ

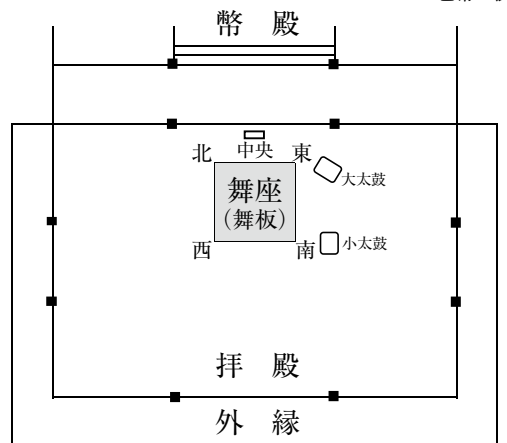
に幅二間、奥

行き二間の幣

殿がある。太



五色幣の俵



青方神社「舞座図」

殿の間の板の間の両側に置かれ、その内側に太鼓役が座る。それ以外の神職は幣殿両側に向かい合って着座。また舞座となるのは、拝殿の神前側から半間手前の一問四方で板の間となっている。また拝殿四隅と神前側には五色の幣が掲げられている。青方神社では、秋の例大祭の他に旧暦一月一日の春祭と、七月十五・十六日の八坂神社祭礼とに神楽を奉納するが、春祭の時だけはこの五色幣が小さな俵に挿した御幣に代わる。

四 伝承組織

95 頁参照

五 行事（芸能）内容

（一）次第・日程

1 十一月二日（神輿渡御・前夜祭）

一五時三〇分、御霊移しの後、神輿が青方神社を出発。行列は次の通り。



神幸



神幸（御輿）



神幸（巫女）

獅子・天狗 ― 巫女（潮桶） ― 御賽銭 ― 猿田彦 ― 神職 ― 旗
 ― 榊 ― 金幣 ― 神職 ― 神輿（台車） ― 太鼓・笛 ― 旗
 ― 榊 ― 金幣 ― 神職 ― 神輿 ― 旗 ― 金幣 ― 宮司 ―
 神輿 ― 太鼓・笛 ― 氏子

階段を下りてから神社前の三叉路を北に進み、地域交流センターや青方氏居館跡の前を通って集落の中を南西に港の方に進む。港の手前から北西方向に向きを変え、集落内の道を進み途中から西方向に集落のはずれまで行き、港に面した広い道路に出て道なりに東南方向に戻る。港が終わるところで、国道に平行する商店街の道をまっすぐに北東方向に進むと、やがて青方神社前に戻ってくる。そこで道路を三周回り、神社へと上がる。そのまま幣殿奥に上げて、見えないように幕を張って御霊移し。一六時四〇分、神幸が終了となった。

一九時前になると社務所に宮司、神職、社人が揃い、社殿へと向かう。一九時より前夜祭の式典開始。最初に修祓をおこない、開扉、献饌、玉串奉奠へと移る。一九時四〇分、神楽の開始となる。この日の演目は次の通り。

- ①座祓（子供） ②佐男舞（巫女） ③露払 ④荒塩（子供）
- ⑤潔戒 ⑥鈴舞（巫女） ⑦折敷（子供） ⑧山の太郎
- ⑨平舞 ⑩六將軍 ⑪山賀 ⑫山の進 ⑬



獅子舞

神幣
 ⑭四剣 ⑮四天 ⑯獅子舞

二〇時になったところで、白衣に紋付き羽織を着て頭に手ぬぐいで頬被りした男性が、手桶と提灯を持って社殿前に現れ、車に乗り込んだ。これは未明におこなわれる「御膳部祭」の準備のため「若水取り」に出かけたもの。「二年総代」一名と「一年総代」二名とが、決められた山から水を汲んでくるのである。

神楽の方は獅子舞で終了となる。獅子舞は、最初は天狗と獅子とが二組で舞っているが、最後に突如としてさらに三匹の獅子が乱入してくるため、拝殿内は騒然となる。それもようやく静まって二時五二分に神楽終了。すぐに撤饌・開扉となつて、二二時三分、宮司より挨拶があつて祭典が終了となった。

2 御膳部祭

御膳部祭は、例大祭の十一月三日未明と、元日未明にのみおこなわれる神事。まず前夜に「若水取り」に四キロほど離れた山に向かい、注連縄の張られた場所まで水を汲む。かつては歩いて行つたが、現在は自動車を使う。途中で人に会つてはならないとされ、頬被りをしてゆく。もし人に会つた場合には、一旦社務所に戻らねばならないとされる。またかつては零時に汲んで深夜四時頃に祭りをおこなつたが、現在は先に汲んでおき、零時から祭典をおこなう。

御膳部祭の準備をするのは、社務所広間。三十畳の広さの部屋が敷居で上座と下座に分けられるが、上座に入ることが許されるのは、宮司と氏子総代のみである。上座には長机が二脚一組で左右に二ヶ所並べられている。このうち向かつて左が御膳用、向かつて右が串作りの調理用に使われる。右長机の手前には大型の火鉢が二基並べられる。一年総代の火起こし担



若水取り



串つくり

当者は、一二時頃に火力が最大になるように炭火を調整しておく。

一方、二年総代は「お椀お膳拭き」をおこなう。板膳箱から紙箱を取り出し、そこから膳椀を一つずつ取り出して紙で磨いてゆく。一二時頃になると、総代長がご飯の釜を向かって右の火鉢に載せる。



串をほぐす

一二時一五分頃、串づくりが始まる。ここで使用される水は、すべて若水を用いる。またまな板・包丁は毎年新調しなければならぬ。こんにゃく・高野豆腐・人参・揚げ豆腐・昆布・里芋・蒲鉾の七品を一センチのサイコロ状に切り、こんにゃくから順に串に刺してゆく。これを十五本以上作る。刺し終わると、串に刺さなかった食材と一緒に鍋に入れ、醤油をおたま三杯入れて、向かって左の火鉢にかける。



器への盛りつけ

二三時三〇分頃、釜と鍋を長机の上に載せる。総代長と副総代長はご飯を器にしゃもじで盛る。別の総代二人は、まず鍋の串をほぐし、七品揃ったものを器に盛りつけ、次いで三品を箸でとって器に盛りつけ、そして汁を器に盛りつける。また別の総代が、なますを盛りつけ。これで熟饌は完成し、総代一行は左長机周囲に座って待つ。



熟饌の完成

二三時五〇分頃、太鼓の音を合図に神職を先頭に、一人一つずつ御膳を捧げ持って社殿へと向かい、神前に供える。ここで御膳部祭の祭典がおこなわれる。

十分ほどで祭典が終了すると、御膳を再び社務所広間に戻す。宮司が中身を鍋釜に戻すと、お膳拭きをしてからお下がりを頂く。この時、零時五〇分であった。



神前の供奉

3 例大祭（十一月三日）

一〇時、総代らが拝殿に集まり、祭典の開始。修祓の後、献饌・開扉、祝詞奏上、玉串奉奠と続く。一〇時三〇分になると、拝殿に乳児を連れた親子が並び、氏子入りの初参り。

それに続けて七五三の祈祷もおこなわれ、金幣での祓いを受ける。

一一時一〇分、この日の神楽が始まった。演目は次の通り。

- ①座祓（子供） ②佐男舞（巫女） ③荒塩（子供） ④鈴の舞（巫女） ⑤折敷（子供） ⑥平舞（巫女） ⑦神幣（子供） ⑧四天（巫女） ⑨獅子舞

一二時一五分、神楽が終了。撤饌・閉扉の後、宮司から総代らに挨拶して、一二時三〇分、祭典も終了となる。なおこの頃、社殿に向かって右側には土俵が作られており、子供たちの相撲の取り組みが始まる。

（二）演目・芸態

以降に舞の所作等について、演目毎に挙げてゆく。記述の前提については政彦神社同様である。舞台の方角については、網上の客人神社と同様に、向かって右奥が東、左奥が北、右手前が南、左手前が西となる。それ以外については、仮に本殿方向を一二時とし、その反対を六時といったように表す。

1 座祓（5分）

白衣・白袴姿。政彦神社では二人で舞ったが、青方では本来の一人舞となった。



相撲



氏子入り

- ① 二本の幣を両手で持って舞座手前にしゃがみ、笛とともに立って神前に進む。
- ② 左右左に採り物を振る。左に振るときは左足を下げ、右に振るときは右足を下げる。
- ③ 左手は幣、右手は腰で順方向に巡り、二周目の九時の位置にきたところで両足の屈伸をして順方向に一回りしながら三時の位置へ。その時、幣を右手に持ち替えて左手は腰にあてて「順巡りの基本」。
- ④ 三時の位置から、逆方向に二周巡り、再び三時の位置で両足の屈伸をしてから逆方向に一回りして中央へ片膝をつく「逆巡りの基本」。
- ⑤ 片膝について両手に一本ずつ持った幣をぐるぐると大きく三回まわす。すると右手の幣を水平にして十字を作る。
- ⑥ 「順巡りの基本」で最後は中央に片膝をつく。
- ⑦ ④同様に両手を三回まわすと、左手の幣を水平に十字を作る。
- ⑧ 「逆巡りの基本」で最後は中央に片膝をつく。
- ⑨ ④同様に両手を三回まわすと、一本ずつ幣を持った両手を横に開く。
- ⑩ 「順巡りの基本」で最後は神前へ。
- ⑪ 幣を持った両手を前に伸ばしてタチゴト。
- ⑫ ②同様に採り物を左右左に振る。
- ⑬ 左手で二本の幣を真横に持ち、右手は腰で「順巡りの基本」で三時の位置へ。
- ⑭ 二本の幣を右手に持ち替え、真横に伸ばして持ちながら「逆巡りの基本」。
- ⑮ 最後は中央へ片膝をつく。
- ⑯ ④同様に両手を三回まわすと、左手の幣は真横に、右手の幣は腹の前に持つ。
- ⑰ 「順巡りの基本」で最後は中央へ片膝をつく。
- ⑱ ④同様に両手を三回まわすと、⑭と逆に右手の幣は真横に伸ばし、左手の幣は腹の前に持つ。



- ⑱ 「逆巡りの基本」で最後は中央に片膝をつく。
 - ⑲ ④同様に両手を三回まわすと、右手の幣は右肩に、左手の幣は左肩に、御幣を担ぐように持つ。
 - ⑳ 「順巡りの基本」で最後は神前に出て御幣を置く。その後、正座をして拝礼。
- 2 露払つゆはらい（6分30秒）
- 烏帽子をつけ、白衣・白袴に格衣姿。先払いの舞とされ、五方の神に四季と土用の守護を祈る。
- ① 舞手二人、両手に幣扇を一本ずつ持ち、舞座手前にしゃがみ、笛とともに立って向き合う。
 - ② 順方向に巡り、六時と一二時の位置で「ヤーサン、ヤーサン、ヤーサン」の声にあわせてステップを踏む。そこから回り込んで互いの位置を入れ替え、逆巡りの方向を向く。
 - ③ 逆方向に巡り、三時と九時の位置で「ヤーサン、ヤーサン、ヤーサン」の声にあわせてステップを踏む。そこから回り込んで互いの位置を入れ替え、逆巡りの方向を向く。
 - ④ ②同様に順巡りとステップを踏み、最後は回り込んで神前に並ぶ。
 - ⑤ タチゴト。
 - ⑥ 順方向に巡って六時と一二時の位置で「ヤーサンハーハイ、ヤーサン」でステップを踏み、回り込んで西隅に東方を向いて並び「ヤーサンハーハイ、ヤーサン」で両手の閉扇を左右上下に振る。その後、順方向に巡りながら「東方の」を唱える。
 - ⑦ ⑥同様に北隅で南方を向く。最後は「南方の」を唱える。
 - ⑧ ⑥同様に東隅で西方を向く。最後は「西方の」



を唱える。

⑨⑥同様にして南隅で北方を向く。最後は「北方の」を唱える。

⑩⑥同様にして舞座手前で神前を向く。最後は「中央の」を唱える。

⑪順方向に巡って東西の位置で向かい合い、両手の扇を左右左に振って、さらに右から外へ大きく、そして戻るときにそのまま回り込み、南北へ。

⑫⑪同様に順方向に巡って南北の位置で向かい合い、両手の扇を左右左に振って、さらに右から外へ大きく、そして戻るときにそのまま回り込み、東西へ。

⑬順方向に巡り、二周目の三時と九時の位置で両足屈伸して順方向に回って神前に並び、座して扇を置き、拝礼。

3 潔戒（10分30秒）

白衣・白袴姿。五方それぞれに、守護する神を招き、魔を払う舞とされる。

①左手に太刀（鞘入り）、右手に鈴を持って舞座手前にしゃがみ、笛と共に立つて神前へ。

②左右左に採り物を引く。

③左手で太刀を掲げて順方向に巡り、二周目の九時の方向で両足屈伸をして順方向に回って神前へ（「順巡りの基本」）。一旦鈴を置いて刀をぬき、鈴を取って再び（「順巡りの基本」）で、南隅へ。

④逆方向に巡ってゆき、北隅から南方を向いて立つ。南方に向かって左手の刀を伸ばし、右手の鈴をそれに向けて振る。次いで両足屈伸して外側に向けて採り物を振り、戻る際に逆方向に回って東隅へ。

⑤（「順巡りの基本」）同様に巡り、九時の位置から順方向に回って南隅へ。

⑥④同様に逆方向に巡ってゆき、南隅から北方を向いて立つ。北方に向かって左手の刀を伸ばし、右手の鈴をそれに向けて振る。次いで両足屈伸して外側に向けて採り物を振り、戻る際に逆方向に回って西隅に行く。



⑦⑤同様に南隅へ。

⑧④同様に逆方向に巡ってゆき、舞座手前から神前（中央）を向いて立つ。神前に向かって左手の刀を伸ばし、右手の鈴をそれに向けて振る。次いで両足屈伸して外側に向けて採り物を振り、戻る際に逆方向に回って北隅に行く。

⑨⑤同様に巡って最後は西隅へ。

⑩西隅より東方へ向き、タチゴト「これより東方殿に向かつて」。タチゴト終わって鈴を振りつつ中央へ踏み出し片膝をつき、立って刀を肩に担ぎ東隅に回り中央を向いて身体を反らせ、戻って中央から東方を向いて身体を反らせ、再び東隅に回り中央を向いて身体を反らせる。そこから回って北隅に移動。

⑪⑩同様に北隅から南方への所作。最後は東隅へ。

⑫⑩同様に東隅から西方への所作。最後は南隅へ。

⑬⑩同様に南隅から北方への所作。最後は舞座手前中央へ。

⑭⑩同様に舞座手前から神前（中央）への所作。最後は東隅へ。

⑮舞座手前から神前（中央）へ向かい「東方南方西方北方に悪あり」「悪なし」「魔あり」「魔なし」といった唱え言が交わされ、左右左右左に刀を払う。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつく。終わると「中央に悪あり」「悪なし」「魔あり」「魔なし」の唱え言があってもう一度同じ左右左右左への所作があって神前へ。

⑯神前で片膝をついて鈴を置き、懐紙で刀を拭くと、切っ先を下に向けて刃の部分を持って順方向に巡る。

⑰順方向に巡って九時の位置から順方向に回って西隅へ行き、逆方向へ巡る。

⑱一周して西隅から中央に入り、東方に向かって片膝をつき、まず左へ刀を振った後に剣先を持って二回大きく振る。

⑲両手で刀を押し頂き、順方向に回って舞座手前に戻り、逆方向へ巡る。

⑳⑱同様に北隅から中央に入り、南方に向かって片膝をつき、まず左へ刀を振った後に剣先を持って二回大きく振る。



- ①⑨ 同様に両手で刀を押し頂き、順方向に回って南隅に移り、逆方向へ巡る。
- ①⑧ 同様に舞座手前から中央に入り、神前に向かって片膝をつき、まず左へ刀を振った後に剣先を持って二回大きく振る。
- ①⑨ 同様に両手で刀を押し頂き、順方向に回って東隅に移り、逆方向へ巡る。一周して三時の方向から逆方向に回って神前に向かい座し、刀を懷紙で拭く。その後、鞘に収めて終了。

4 鈴舞すずまい（6分）

巫女の二人舞。岩戸神楽三番の一つで、本来は一人舞。

- ① 巫女二人、左手に閉扇、右手に鈴を持って舞座手前にしゃがみ、笛と共に立つて神前へ。
- ② 左右左に採り物を振る。
- ③ 両手を上に挙げて順方向に巡り、二周目の三時と九時の位置で両足屈伸をして逆方向に回りながら互いの場を入れ替える。続いて逆方向に巡り、同様に二周目の三時と九時の位置で両足屈伸をして逆方向に回りながら互いの場を入れ替える。そこから再び順方向に巡り、二周目の三時と九時の位置から順方向に回って神前へ。

④ 扇を開きタチゴト。

⑤ 左右左に採り物を振る。

- ⑥ 右手の鈴を掲げて順方向に巡り、二周目の東西で両足屈伸をして順方向に半回転。今度は左手の開扇を掲げて逆方向に巡り、二周目の東西の位置で向かい合い、両足屈伸をして鈴を振り、もう一度大きく屈伸をして外に振り、内側に戻る際に逆方向に回転し、その場に片膝。

⑦⑥ 同様のことを南北の位置でおこなう。

⑧ 右手の鈴を掲げて順方向に巡り、二周目の東西で両



足屈伸をして順方向に半回転。今度は左手の開扇を掲げて逆方向に巡り、二周目の東西の位置で向かい合い、両足屈伸をして左右左右左へ採り物を振る。最初の左右は立って、続く左右左は片膝をつく。その後、外に振り、内側に戻る際に逆方向に回転し、その場に片膝。

⑨⑧ 同様のことを南北でもおこなう。

⑩ 右手の鈴を掲げて順方向に巡り、東西の位置で順方向に回って片膝をつき、左手の開扇を掲げて逆方向に巡って三時と九時の位置から逆方向に回り込んで神前へ。座して扇を置き、拝礼。

5 山の太郎やまのたろう（7分）

白衣に陣羽織とたつつけ袴。陣笠を持って登場し、途中でつける。武人の出立と言われる。

① 二人、左手に陣笠と幣、右手に鈴を持って舞座手前に並びしゃがむ。案に続いて歌が始まってから立ち上がって順方向に対峙するように巡る。

② 順方向に巡って東西隅で向き合って立つ。歌が終わると、両足屈伸して順方向に回転してから順方向に巡る。

③ 順方向に巡って東西隅で両足屈伸して、それから身体を反らして採り物を両手で上に奉じ、逆方向に半回転して逆方向に巡る。

④ 逆方向に一周巡って東西の位置で両足屈伸して中央に向けて鈴を振り、もう一度大きく屈伸して、外に向けて採り物を振り、内側に戻りながら逆方向に回って東隅から南隅へ、西隅から北隅へと移る。

⑤③ と同様に南北でおこなう。

⑥④ と同様に南北でおこなう。

⑦③ と同様に東西でおこなう。

⑧ 逆方向に一周回って東西の位置で両足屈伸して、逆方向に一回転して外向きにしゃがみ、陣笠を被る。幣は床に置き、左手に弓、右手には鈴を持つ。立つてその場で順方向に一回転して順方向に巡る。

⑨③ と同様に東西でおこなう。

⑩ 逆方向に一周巡って東西の位置で両足屈伸してから弓を上に掲げて弦を弾く。

⑪ ③と同様に南北でおこなう。

⑫ ⑩同様に逆方向に一周巡って南北の位置で両足屈伸してから弓を上に掲げて弦を弾く。



⑬ ③と同様に東西でおこなう。

⑭ 逆方向に一周巡って東西の位置で両足屈伸してから逆方向に半回転。

⑮ 東西の位置で向かい合ってタチゴト。袴に差した扇を出して開き、タチゴトにあわせて右手で大きく振る。左手は弓と鈴。タチゴトが終わるとしゃがんで扇を置き、左手に弓、右手に鈴。その場で順方向に半回転してから順方向に巡る。

⑯ ③と同様に東西でおこなう。

⑰ 逆方向に一周巡って東西の位置で逆方向に一回りしてから、採り物を外に振り、次いで内に向かつて小さく跳び、互いの位置を入れ替える。そこから逆回転で東隅から南隅へ、西隅から北隅へ移動。

⑱ ③と同様に南北でおこなう。

⑲ ⑰と同様に南北でおこなう。

⑳ ③と同様に東西でおこなう。

逆方向に一周巡って三時と九時の位置で両足屈伸して、逆方向に回って神前に向かい座して採り物を置き、拝礼。

6 山の進やまのしん (8分)

冠に狩衣姿。山の神に幣帛を奉り、山仕事の安全を祈る舞とされる。幣を五方に置き、再び回収する。

① 幣六本（緑・赤・白・青・黄・白）を持って舞座手前にしゃがみ、笛と共に神前へ。

② 左右左に幣を引く。

③ 左手で幣を束ね持って順方向に巡り、二周目の九時の方向で両足屈伸をして順方向に回って九時の方向に。「順巡りの基本」

④ 右手で幣を束ね持って逆方向に巡り、二周目の三時の方向から逆方向に回って西隅へ。

⑤ 左手で幣を束ね持って「順巡りの基本」で最後は中央へ。

⑥ 歌が入って、左右左右と幣を振る。最初の左右は小さく後方へ、続く左右左は大きく横へ振る。最後の左への振りのまま逆方向に回って東隅に向かい、右手で緑色の幣を東隅に置く。それから残りの幣束を右手に持ち替え、右左に払う。左への振りのまま逆方向に回り、六時の位置に立つ。

⑦ 同様に南隅へ赤幣を置く。

⑧ 同様に西隅へ白幣を置く。

⑨ 同様に北隅へ青幣を置く。

⑩ 同様に神前へ黄幣を置く。

⑪ 「順巡りの基本」で最後は南隅へ。

⑫ 南隅から逆方向に巡って西隅から東へ踏み込んで緑幣を取る。両足屈伸をすると採り物を外に振り、戻しながら逆方向に回って西隅へ。

⑬ 「順巡りの基本」で最後は南隅へ。

⑭ 南隅から逆方向に巡って北隅から南へ踏み込んで赤幣を取る。両足屈伸をすると採り物を外に振り、戻しながら逆方向に回って西隅へ。

⑮ 「順巡りの基本」で最後は南隅へ。

⑯ 南隅から逆方向に巡って二周目の東隅から西へ踏み込んで白幣を取る。両足屈伸をすると採り物を外に振り、戻しながら逆方向に回って西隅へ。

⑰ 「順巡りの基本」で最後は南隅へ。

⑱ 南隅から逆方向に一周巡って南隅から北へ踏み込んで青幣を取る。両足屈伸をすると採り物を外に振り、戻しな



がら逆方向に回って西隅へ。

⑮「順巡りの基本」で最後は南隅へ。

⑯南隅から逆方向に巡って舞座手前から神前へ踏み込んで黄幣を取る。両足屈伸をすると採り物を外に振り、戻しながら逆方向に回って西隅へ。

〔順巡りの基本〕で最後は神前へ。座して幣を置き拝礼。

7 四剣よつぎ（10分30秒）

白衣にたつつけ袴。赤い櫛を持って舞い、それをつけた後に、短剣四本を持って舞う。

①左手に赤櫛、右手に鈴を持って舞座手前にしゃがみ、笛と共に立ち上がって両手を挙げつつ順方向に回り込んで東隅へ。

②逆方向に巡って、一周して三時の方向から逆方向に回って南隅へ。

③順方向に巡って九時の方向から順方向に回って神前へ。

④タチゴト。

⑤逆方向に回って下がり、鈴を前に出して振りつつ順に巡って二周目の九時の方向から順方向に回って南隅へ。次いで櫛を前に出して逆方向に巡って二周目の東隅で逆方向に半回転し、再び順方向に巡る。二周して九時方向から順に回って中央へ。

⑥赤櫛を持って左右左へ振る。

⑦順逆に回りつつ、櫛を結んでいく。

⑧櫛ができあがると、逆方向に巡って北隅から後ろでんぐりがえしで櫛をつける。

⑨神前で短剣を左右の手に二本ずつ持ち、左右左へ振る。

⑩順方向に巡って九時の位置から順方向に回り、西隅に片膝をつく。逆方向に一周して西隅から中央に入って東向きに立ち右・左と剣を持った手を挙げ、続けて激しく交互に上下させる。続いて左右左に膝をつき



つつ後方へ振る。さらに前方に振り、戻りつつ逆方向の回転で東隅へ。

⑪⑩同様に南、西、北、中央（神前）に繰り返す。

⑫順方向に巡って九時の方向で両足屈伸をして、順方向に回り込んで神前へ。座して採り物を置き、拝礼。

8 四天してん（6分30秒）

巫女舞。翁・嫗・男神・女神面を着ける。青方の「四天」は、政彦神社での伝承（100頁）と異なり「五方」の所作が混入している。立串も同様である。小串も混在していたが、現在は別々になった。有川神楽でも上五島神楽から取り入れた「四天」が「五方」と混在して伝承されている。

①向かって左から緑幣の翁面（神の父）、青幣の女面（御幣もち）、黄幣の嫗面（神の母）、赤幣の男面（みくまもち）の順で、舞座手前に並ぶ。手には、各々の色の幣を二本持つ。楽が始まって順方向に巡って行き、東隅に緑幣、南隅に赤幣、西隅に黄幣、北隅に青幣が立つ。

②緑幣、両手の幣で左右に円を描くように回しながら中央へ踏み出し、中央で反転してもとの位置に戻り、中央を向く。これを南西北に繰り返す。

③中央に向き合って両手の幣を三回まわし、全員その場で東方を向き、「ヤーサンハーハイ」のリズムで左右に幣を振る。次いで「東方の、東方の…」の歌にあわせて幣を振りつつ順方向に一周巡る。次いで中を向いて、東西の巫女が入れ替わり、南北の巫女が入れ替わる。さらにもう一度、東西、南北が入れ替わって元の配置に戻る。これを南西北中央に繰り返す。ただし、南方・北方・中央は入れ替わりがない。

④幣を左右に振りつつ跳びながら順方向に一周巡る。その場で順方向に一回りする神前に向かい、幣を置いて下がつて座し拝礼。



(三) 詞章

*平成十四年刊『上五島神楽本』(宮田紀久編 上五島神楽保存会発行) から引用。

凡例

一、アラビア数字は、今回上演された演目の順番による。
一、ルビは引用原典に基づき、適宜施した。

1 露弘

〔立言〕

榊柴に木綿紙垂付けて エー 誰が世にか 神の御前に
祝ひそめけむ エーエ

〔舞歌〕

そもそも舞といふは 岩戸の前にて 宇受売命の 笹葉
を水草に結びて 真折の葛をたすきに召され 舞そめた

ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ

ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ

東方の 久久能智神は 春三月 守護し給へば

いかなる悪魔も 来たるまじ

ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ

ヤーサンハーハイ、ヤーサンハ

(以下、繰り返し)

南方の 迦具土神は 夏三月 守護し給へば

いかなる悪魔も 来たるまじ

西方の 金山神は 秋三月 守護し給へば

いかなる悪魔も 来たるまじ

北方の 水波売神は 冬三月 守護し給へば

いかなる悪魔も 来たるまじ

中央の 波邇夜須神は 四季の土用を守護し給へば

いかなる悪魔も 来たるまじ

2 潔戒(潔開)

これより東方殿に向かつて方を申せば 方は是れ
甲乙の方なり これに坐します御神の御名を申せば
久久能智命と申し奉る

*これによって こんにちはただ今
へ四方世界 請じ奉る ヤーア 一方に
しどころもどろの

ヤーア しどころもどろの 風は吹くとも

風は吹くとも

(以下、*へ繰り返し)

これより南方殿に向かつて方を申せば 方は是れ
丙丁の方なり これに坐します御神の御名を申せば
迦具土命と申し奉る

(*へ繰り返し)

これより西方殿に向かつて方を申せば 方は是れ
庚辛の方なり これに坐します御神の御名を申せば
金山彦命と申し奉る

(*へ繰り返し)

これより北方殿に向かつて方を申せば 方は是れ
壬癸の方なり これに坐します御神の御名を申せば
水波売命と申し奉る

(*へ繰り返し)

これより中央殿に向かつて方を申せば 方は是れ
戊己の方なり これに坐します御神の御名を申せば
埴安姫命と申し奉る

(*へ繰り返し)

東方 南方 西方 北方に悪あり(悪なし)
魔あり(魔なし)

あり柴 おりから うったる太刀を持って

切りつけたり 三向三地に切りつけたり

中央に悪あり(悪なし) 魔あり(魔なし)

あり柴 おりから うったる太刀を持って

切りつけたり 三向三地に切りつけたり

中央に悪あり(悪なし) 魔あり(魔なし)

あり柴 おりから うったる太刀を持って

切りつけたり 黄金の大地に切りつけたり

善もなし悪もなし

3 鈴舞

千早振る 神の御前に鈴振りて
前ばぞ聞く 天の岩屋戸

4 山の太郎

〔舞歌〕

鎧をめす 鎧をめす 東国までお供申さんや
笠よ笠 あしの元なる笠持ちて 笠持ちながら
時雨にぞ立つ

〔立言〕

さてこれより 天地神三才の理を申せば 天地は陰陽の
道理なり
天には天神 地には八百萬神と申し奉る これによって
山の太郎殿の御入りの道

5 山の進(山の神)

一、あの山は 斎主ある山か斎主なくば ハイヤ
斎主なくば 山守り添えてわが山にせんよ 斎主な
くば

二、あの神棚を 見のぞみ拝めば神くだる ハイヤ

神くだる いかん氏人尊とかならん 神棚を

三、あの三日月の この間を回る三日月の ハイヤ

三日月の 響き渡る神楽音より 三日月の

四、あの榊柴に 木綿紙垂付けて 誰が世にか ハイヤ

誰が世にか 神の御前に祝ひ初めけん 榊柴に

五、あの立津さばの 生まれる国はいづくなる ハイヤ

いづくなる 小田のこおりの柳葉のさと いづくなる

6 四剣

音に聞く 鬼の剣を抜いて見た

身は白銀で 造らせしもの

(以下は、折敷舞に同じ)

六 由来・信仰

通常、単に「神楽」と言った場合には、祈祷時におこなう「神楽詞」や「神楽歌」を指す。初宮参りや病氣平癒祈願、自動車安全祈願などの祈祷では、いずれも「神楽を上げる」といって、神楽歌を三番程度唱える。

神楽に用いる面は、現在は専門店などで買い求めている。特に古い面は残っていない。神楽に限らず神社に関わる道具や飾りなどは、厄年や還暦、あるいは米寿などの年祝いに奉納する習慣がある。数えてその年になった者は、正月の三〇五日の間に、そうしたものを奉納する。厄年は女の三十三、男の四十一、そして六十一、八十八歳で、その際には神楽（舞のないもの）を上げて祈祷を受ける。奉納する以外に、銭撒きなどもかつては盛大におこなわれていた。なお、女の三十三歳の厄年は夜明けの早い時期がよいと言われるが、これは晴着を持たない者が他人に見られないように夜明け前に行ったという習慣の名残ともいわれている。なお、神楽を演じる際の信仰的な制約は特にないが、かつては神楽のために集まった神職は、まず温い風呂に入ったものだという。潔斎をおこなう意味であったと考えられる。

この他、祭祀については神社によって様々な特色がある。例えば客人神社（網走）では、獅子・天狗による祓いは、ギオン（祇園）と呼ばれる七月の八坂神社（客人神社境内）の祭祀にもおこなわれる。この時は、八坂神社の神輿が出て一日目に公民館まで渡御し、一日安置して翌日神社へ戻る。八坂神社前には土俵が作られ、相撲をおこなう。また麦わら舟を作って供物を流す風習もある。ただ、この時には神楽は舞われない。

青方神社（青方）では、祭祀時に神幸行列の先頭をゆく巫女は、シオフリと称する。その日の朝、氏子総代が沖まで船を出して汲んできた海水を使うという。海水は「潮桶」とよばれる小桶に入れられ、道々それを撒いて清める。祭祀に限らず、こうした海水による清めは、神社参拝や家を清める際にはおこなわれてきたという。撒く際には神などの小枝に海水をつけて振り撒くが、青方では古くから社叢に生えるオガタマの木を用いたという。そのためこのオガタマは「しおふりの木」と呼ばれ、御神木とされている。

七 変遷

神楽を演じるのは各地区から集まった神職・社人となる。現在でこそ自家用車で移動するため一ヶ所が終わるとすぐに帰ることができるが、かつて自動車がなかった頃には、泊まり歩くしかなかった。祭りの日程が連続しているのは、そのためでもある。泊まると、夜には神楽の練習もおこなった。なお、訪れる地区毎に特有のご馳走があって、それを楽しみにしたという。鯛茶漬や鰹の炊き込みご飯、おはぎなど、それらは現在でも続いている。

こうした日程は、かつては旧暦でおこなっていた。特に小串や曾根は昭和三十年代までは旧暦を使っていた。これは潮の満ち引きが重要な漁業従事者が多かったためでもある。舞については古くから伝わってきたものだが、中には中絶していたために、他の神楽などを参考に復活させたものもある。

下五島と比較した際に特徴的なことは、巫女の舞がないことである。富江の神女舞のような単純な巫女舞がなく、代わりに「五方」「四天」という五人舞・四人舞の巫女舞が演じられる。吉村政徳宮司によれば、この両舞の起源は不明ながら江戸末期の国学興隆期に創作されたとも、さらに新しく大正期の創作とも推察されている。大正五年の舞本には「八乙女舞」という少女の舞は記載があるが、五方と四天については記載がないことから考えると、大正期なのかもしれない。

こうした詳細な由来が判らない舞も含め、現在上五島神楽では三十演目を上五島神楽三十番として整えて伝承している。その中には「箕舞」「恵比須」のように、伝承されていたのは確かながら芸態が判らなくなっていたものもあったが、古老の記憶や有川神楽なども参考にして創作復活といった形で上演するようになった。

中でも「岩戸神楽」について、どのようなものか不明であったが、「平舞」「鈴舞」「神幣」を「岩戸神楽三番」と位置付けるようになった。そしてその三演目が終わったところで「岩戸開き」として幣殿の幕を開け、神楽歌五首が歌われるという構成である。

また上五島神楽三十番の中には含まれないが、「浦安の舞」もいつから導入

されたのか不明ながら、先代が先々代宮司の時代からとされるため、あるいは紀元二六〇〇年（昭和十年）に浦安の舞ができてすぐに取り入れたのかもしれない。この浦安の舞を習得するには、最初の一ヶ月は週二回練習すればほぼ覚えるという。二ヶ月目は、覚えた部分の形を修正してゆく。「五方」などの場合には、先に詞章を覚えさせるという。

さて、上五島神楽は、もともとは各集落の祭礼に演じられるものであったが、平成十二年には「神楽大祭」が創始された。これは三十番の神楽を一挙に、七時間ほどかけて演じるというもので、第一回は浦桑の祖父君神社で開催され、好評を得た。平成十四年には念願の国選択無形民俗文化財（平成十三年度）となるとともに、大著『五島神楽の研究』（上五島神楽保存会編）が刊行される。国選択は五島の神楽全体に対するものであり、『五島神楽の研究』でもまた、五島各々の神楽すべてが吉村宮司によって丹念に調査されている。

そうした動きから、上五島神楽が提唱して翌平成十五年より、五島神楽保存会連絡協議会において合同研修会を開いている。これは五島列島に伝わるいくつもの神楽が一堂に会し、テーマを決めて各々の舞を披露するというもので、それまで交流のなかった神楽同士が互いを知るよい機会となった。福江五島神楽が途中で脱退したものの、五島列島全体で神楽伝承を継続させるため、また伝承者相互の交流を図るため、現在なお二年に一度続けられている。

八 所見

上五島神楽は、五島の神楽の中でもいち早く保存会組織を立ち上げた神楽でもある。昭和五十四年には山田吉麿氏を会長として保存会が立ち上がり、二年後の昭和五十六年には長崎県の無形民俗文化財に指定されている。長崎県ふるさと民俗芸能大会をはじめ、県の内外のイベントにも出演するなど活躍の場を広げ、また平成十二年には神楽大祭を創始し、地域での活発化も怠っていない。こうした努力もあって、平成十四年には国選択の無形民俗文化財（平成十三年度）となった。

こうした内外での活躍の様子は、そのまま神楽自体の活性化にもつながって

いる。現在伝承される五島の神楽の中でも、最も活発な活動をおこなっている神楽とも言えよう。これは、神楽の組織にも要因があると考えられる。他の神楽が、ある特定の神社の神職と社人で組織されるのに対し、上五島ではいくつもの神社の神職が、助勤として他地域の神社にまで出向いて神楽を演じるというスタイルをとっている。そのため、伝承者組織も享受する地域も広域に及び、そのことが神楽自体の伝承規模を大きくさせているのである。もちろん、そのことは様々な負担を呼び、伝承維持に逆効果に働く場合もある。しかし上五島神楽の場合には、伝承者組織がうまく機能し、結果として神楽の活性化に結びついているのである。

その要因を考えると、一つには祭りが活性化されていることが挙げられる。各地区で秋におこなわれる祭礼には、老若男女が揃って参加し、神楽のときには拝殿内が満員状態となっていることが多い。祭りの露店などは見られないが、その分祭りそのものを楽しみに集まってきた感がある。特に祭典の中の玉串奉奠など、代表者だけでなく子供に至るまでおこなうことも、地域の一体感を高める要因なのかもしれない。祭りをおこなう地域の子供から巫女が選ばれることや、祭りの準備、神幸行列への参加など、子供自身が祭りの中に占める位置があることは、地域文化の継承の上で重要なことである。もちろん、それには小学校や保育施設の協力も欠かすことができない。

そしてもう一つは、神楽大祭や五島神楽の連絡協議会を始めるなど対外的な上演を増やし伝承内容の質の向上を図っていることが挙げられる。観光客に対する上演もその一つと言える。芸能の観光化には賛否両論あることながら、基礎となる地域での伝承自体を疎かにしていないことを考えれば、外部の目に多く触れさせることは質の向上に結びつくことは確かであろう。

ただ、上五島神楽は、五島全体の神楽として見た場合には、細かな部分の伝承に欠ける点がある。たとえば、タチゴトという言い方以外に、詞章を示す言葉がない点、アイダチが見られない点等である。上五島神楽は、下五島の富江藩領だったこともあって富江神楽系統だと言われているものの、現在の富江神楽とは相違点が多く、むしろ系統が違うはずの有川神楽との共通点が多い。



榎津神社（榎津）



丸尾神社（丸尾）



正彦神社（曾根）



乙宮神社（立串）



本山神社（津和崎）



小串神社（小串）



祖父君神社（浦桑）



熊野神社（阿瀬津）



鯛之浦神社（鯛ノ浦）

やはり近代以降、隣接した地域の中での影響の方が強いのであろう。
そして演目の中には、既に芸態がわからなくなっているものもあって、いくつかは近年に創作復活させている。また神楽三十番という形で一つの定型化を見せている。このことは、上五島神楽を確固たる伝承として確立させる上では効果的であるが、伝統の維持という点では、旧態が判らなくなってしまう恐れがあることは否めない。したがって、いつ何をどのように変えたのかということとを明確に記録しておく必要はあろう。

第三章

「五島神楽」

の伝承状況

「五島神楽」の現状

吉村政徳

一 神楽の伝播

五島列島の神楽には宇久島を除くと六つの系統の神楽があるが、それぞれの神楽が列島の全域に伝播しているかといえどもない（別表1）。下五島にある福江、岐宿、富江、玉之浦の四つの神楽の何れも伝播していない地域に五島市の三井楽町と奈留町がある。ただし三井楽町には正月の風物詩にもなっている獅子舞があるが、五島神楽の舞神楽は全く伝わっていない。奈留町は四十数年前まで旧福江市内の神主や社人が祭典の助勢をしていた経緯から、福江五島神楽が奏せられたことがあったというのが神楽が根付くまでには至っていない。

上五島地区では旧五か町（新魚目、有川、若松、上五島、奈良尾）の中で旧若松町と旧奈良尾町では、もともと神楽は伝承されていない地区である。だから同地区の住民にとって、五島神楽は近くにあつて遠い存在の芸能なのである。

有川神楽は旧有川町全域に伝播しているが、鯛ノ浦郷と阿瀬津郷だけは、旧奈良尾町岩瀬浦郷の志自岐羽黒神社掛りという歴史的経緯から神楽が奏される地区ではなかった。しかし現在は、上五島神楽伝承者の宮司受持ちになっている関係から、上五島神楽伝承の地区となっている。

その上五島神楽も旧新魚目町と旧上五島町のほぼ全域に伝承されていると云つていいのだが、旧平戸藩領に属していた浜ノ浦地区（統浜ノ浦・道土井・飯ノ瀬戸の各郷）と今里郷、三日ノ浦郷の七か郷には平戸神楽も伝わっていない。しかし、浜ノ浦地区では鯛ノ浦郷・阿瀬津郷と同様に上五島神楽伝承の宮司が受持つようになつて（昭和四十五年）から同神楽が奏されるようになり、現在では獅子舞を地区の中学生が演じて伝統として定着しつつある。

宇久の神楽については項を別にして詳述する（134頁）。

行政区分		伝承地域（神楽名）		非伝承地域	
五島市	旧福江市（福江五島神楽）	旧上五島町の浜ノ浦地区・今里郷・三日ノ浦郷、旧若松町、旧奈良尾町		三井楽町 奈留町	
	富江町、玉之浦町の荒川、幾久山、丹奈（富江神楽）				
	岐宿町（岐宿神楽）				
	玉之浦町（玉之浦神楽）				
新上五島町	旧有川町（有川神楽）				
	旧新魚目町、旧上五島町、旧有川町の鯛ノ浦郷阿瀬津郷（上五島神楽）				
佐世保市 宇久町	平、野方、太田江、寺島（神島神社神楽）				
	神浦、本飯良、大久保、木場、飯良、小浜（宇久島神社神楽）				

別表 1. 五島神楽の伝承地域

二 神楽の系統

五島の神楽を細かく区分（別表2）すれば、下五島地区には福江五島神楽、岐宿神楽、富江神楽、玉之浦神楽の四つの系統があり、上五島地区には有川神楽と上五島神楽があり、さらに宇久島に神島神社神楽と宇久島神社神楽の二つの流れがある。

下五島の四つの神楽の中で、岐宿と福江は各神社に残る史料からも芸態から同一の系統にくくつてよい。富江は歴史上、五島本藩と江戸前期（一六六一）に分藩したこと、史料の上では福江・岐宿の流れをくんでいることを確認しつつも独自の芸能に発展している。玉之浦も同様に独自の発展をみせている。上五島地区は有川と上五島の両神楽ともよく似た芸態を持つ。しかし両者は藩が異なるので五島藩の有川神楽は五島藩の流れを汲んでいると思われるが、太鼓や笛の音色を注意して聞けば、ほぼ上五島神楽と同じ音曲である。舞の所作もよく似たものが多い。したがって芸態から区分すれば有川神楽は富江藩系に入るといってよい。宇久島の神楽は、五島藩領の平地区と富江藩領

の神浦地区に分かれており、両神楽は全く芸態が違う。それゆえ両者間の相互交流や互に影響し合って発展したという痕跡は認められない。

五島神楽					
宇久島		上五島	下五島		
富江藩系	五島藩系	富江藩系	富江藩系	五島藩系	
宇久島神社神楽	神島神社神楽	上五島神楽	有川神楽（藩は五島藩）	富江神楽	玉之浦神楽（白鳥神社神楽）
					岐宿神楽（厳立神社神楽）
					福江五島神楽

別表 2. 五島神楽の系統

三 伝承組織とその変遷

宇久島を含む五島の八系統の神楽組織は、いずれも共通した機構によって出来ている。それは各宮司に従属する神人たちにより神楽集団が形成され機能しているということである。神人のことを五島では社人あるいは社方という。この社人社方と神主によって神楽が伝えられて来た。神楽は社人たちによって宮司受持ちの神社で奏され、また他の宮司奉仕の神社にも彼らが出かけて相互助勢し合いながら保存伝承されて来た。一部を除けば現在もその基本的機構は変わらない。

そもそも神楽の伝承の中心は神主であり、神主が軸になって社人を指導し育成してきた。したがって五島の神主は、祭典奉仕の仕方（祭式作法）はもちろんのこと、舞神楽の笛・太鼓・舞の三つ全てを修得しておかねば一人前の神主とはならない。さらに笛太鼓舞の技術指導だけではなく、それぞれの舞神楽の意味や歴史、その精神をも熟知して社人を指導しなければならない。五島の神主、特に宮司にはこのことが課せられている。

社人は近世期には身分の一つであった。神社周辺の宮司所有の土地をそれぞれに宮司から分与され、そこで生活し神楽を世襲してきた。富江神社では

二十数戸もの社人集落が形成されていた時代もあったと聞く。伝統的社人の家柄には、富江神楽の庄司家、近藤家、岐宿神楽の比留木家、比留沢家、川畑家、柳田家、福江五島神楽の月川家などが代表的世襲社人として現在も続いている。

しかし、この伝統的世襲社人システムが崩れ出し、現在も進行中で、昭和五十年以降その現象が著しい。原因は多岐に亘るが、核家族化が進み戦後の家族制度の崩壊も一因であり、それによる都会地への人口流出で、島は過疎化に拍車がかかった。世襲してきた社人の家も次第に減少し、その歯止めは今もかかっていない。

この状態をいち早く解決したのが上五島神楽集団である。上五島神楽も昭和三十年代までは他地区と同様、それぞれの宮司（当時九人の宮司がいた）に従属する社人たちが数人ずついて苦勞なく神楽が演じられていた。しかし、この頃を境に神主も社人も減少し出し、地区内の神楽を奉納する神社は人数不足に陥っていた。そこで関係者は保存会を結成し、従来の世襲社人の枠を広げて一般島民にも会員加入を勧奨してその拡充をはかった。その努力と活動は昭和五十四年、「上五島神楽保存会」の誕生という形で実を結ぶ。上五島神楽は翌々年、長崎県の無形民俗文化財となるが、文化財になる為の保存会立ち上げということも一つの要因ではあったようである。

この時点で他の七つの神楽集団には、未だ保存会設立の機運はなかったが、福江の神楽団体は地区青年団などに呼びかけて神楽への勧奨努力をしている。

かくして平成十四年二月、宇久島を除く五島の六系統の全ての神楽が「国選無形民俗文化財」（平成十三年度）の認定を受けた。そしてその後、上五島神楽保存会は各神楽団体に対し、あらゆる機関からの問合せなどの受け皿として運営組織体の必要性を提唱し、それぞれの神楽集団に保存会設立を呼びかけた。結果、別表3のような保存伝承機構ができあがった。さらに平成十五年、各保存会の有機的連携を展開するため「五島神楽保存会連絡協議会」が設立された。この会の結成により、宇久を除く五島列島の全神楽伝承者たちは有史以来初めて、相互の神楽を観賞するという体験をし、そして自分たちの神楽の源流や舞の所作を研究研修するきっかけに発展した。

新たな展開は、協議会設立に相前後して上五島神楽保存会の『五島神楽の研究』、岐宿神楽保存会の『五島岐宿神楽の継承』、そして福江五島神楽保存協会の『福江五島神楽本』が次々と編まれ、各保存会にとって国の文化財という自覚とさらなる研鑽の誘引ともなったようである。また、会員増の対策も図られ、有川神楽保存会は八人の一般会員の加入があり、上五島も町民向けに「神楽を楽しむ会（神楽教室）」を教育委員会の生涯学習講座に開設して会員拡大がはかられている。

神楽団体名	宮司数	宮司以外の 神職数	社人数	上記以外の会員 (除、神子)
福江五島神楽 保存協会	四人	一人	五人	無
岐宿神楽保存会	一人	無	七人	八人
富江神楽保存会	二人	無	富江神社社人會	四人
			乙神社社人會	
			保尾神社社人會	
			七嶽神楽保存会	
白鳥神社神楽保存会	一人	無	無	十五人
有川神楽保存会	一人	二人	七人	八人
上五島神楽保存会	五人	九人	九人	三人
宇久島神社神楽	一人	一人	一人	
神島神社神楽	一人	無	二人	

別表 3. 各神楽団体の組織機構と構成員（平成 22 年 12 月現在）

四 五島神楽全体の研修

連絡協議会はさらに、社人を中心とした各保存会の会員同士の研修の機会を提供した。それは全ての五島神楽の伝承状況の相互確認や休眠状態の舞を掘り起こし、復活のきっかけにするなど、各保存会が欲しているあらゆる内容を吸い上げ、平成十五年二月、五島市下大津の八幡神社で「第一回五島神楽合同研修会」を実施している。以下、研修会のテーマを記しその詳細を別表 4 に示した。

・平成十五年

第一回研修テーマ 「五島神楽の歴史と特徴」

特別講師・立平 進（長崎国際大学教授）

・平成十六年

第二回研修テーマ 「五島神楽の源流・同種同名の舞比較研究Ⅰ」

特別講師・渡辺伸夫（昭和女子大学教授）

・平成十七年

第三回研修テーマ 「同種同名の舞比較研究Ⅱ」

指導講師・吉村政徳（政彦神社宮司）

・平成二十年

第四回研修テーマ 「舞の技術向上をめざして」

指導講師・吉村政徳（政彦神社宮司）

・平成二十二年

第五回研修テーマ 「観光神楽への対応と研究」

指導講師・吉村政徳（政彦神社宮司）

・平成二十四年（予定）

第六回を岐宿町巖立神社で予定

第1回合同研修(平成15年2月、五島市八幡神社、96名参加)
研修テーマ:五島神楽の歴史と特徴

別表 4. 五島神楽合同研修会

	出演神楽	研修の舞	研修のポイント
1	講演「五島神楽概説」	立平進長崎国際大学教授	五島神楽の歴史と特徴
2	岐宿神楽	座付、宇受売舞、市舞	五島神楽の祖形は何か？
3	富江五島神楽	神囃、山之太郎	六神楽共通の舞、その源流は？
4	玉之浦神楽	四剣、出来舞	理想的「合立」を見学。完成度の高い出来舞
5	特別参加	平戸神楽、壱岐神楽	県内の神楽拝観
6	有川神楽	四天王、折敷	有川独特の舞「四天王」を観る。
7	富江神楽	新潮、蒙古裏	完成度の高い新潮舞、富江独特の蒙古裏
8	上五島神楽	六將軍、神相撲	平戸の影響を受けた舞2番
9	岐宿神楽・上五島神楽	「遠呂知舞」「獅子舞」	同種の「獅子舞」比較研究

第2回合同研修(平成16年2月、新上五島町青方神社、86名参加)
研修テーマ:五島神楽の源流、同種同名の舞比較研究I

	出演神楽	研修の舞	研修のポイント
1	講演「五島神楽の源流」	渡辺伸夫昭和女子大学教授	①五島神楽に共通する同名称の舞の比較研究「荒平」「二剣」「柴取」「山太郎と山賀」 ②独特の舞「天大流鎗」「末広舞」「注連舞」を観る
2	富江五島神楽	山之下・山之荒平、二剣	
3	岐宿神楽	天大流鎗、山太郎	
4	富江神楽	荒平、柴取	
5	玉之浦神楽	荒平、二剣	
6	有川神楽	二本剣、末広舞	
7	上五島神楽	山賀、柴取、注連舞	

第3回合同研修(平成17年2月、富江町富江神社、58名参加)
研修テーマ:同種同名の舞比較研究II

	出演神楽	研修の舞	研修のポイント
1	岐宿、富江、玉之浦、有川	佐男舞(左男舞)	下五島での舞の基本と云われるこの舞の類似点と差異及び比較研究
2	有川、富江、玉之浦	潮桶舞、御潮舞	この舞の原型を探る。
3	有川、上五島	山の真、山の進	富江・岐宿の「山名付」と有川・上五島の「山の真」の類似点と名称の相違を探る。
4	上五島、岐宿、玉之浦、富江	山の太郎、山構、山賀	各「山の太郎」舞の比較研究と富江の「山構」と上五島の「山賀」の類似点及び名称の違いを探る。また、同じ「山の太郎」という舞でも翁姥面の舞と武人舞の分化の原因は何かを探る。
5	玉之浦	入鹿高松	特徴的な舞の披露

第4回合同研修(平成20年2月、玉之浦町玉之浦公民館、65名参加、地区住民見学者多数)
研修テーマ:舞の技術(わざ)向上をめざして

	出演神楽	研修の舞	研修のポイント
1	玉之浦	しがき	「しがき」の意味理解
2	岐宿、玉之浦、富江、有川	三剣(御剣)	舞い方の高度な技術習得
3	岐宿、玉之浦、富江、上五島	神囃(神通)	言句の言い回し(抑揚)習得と研究 基本所作の習得
4	玉之浦、岐宿、上五島	獅子舞	舞比較と技術の向上

第5回合同研修(平成22年3月、新上五島町有川神社、47名参加)
研修テーマ:観光神楽への対応と研究

	出演神楽	研修の舞	研修のポイント
1	玉之浦	出来舞、獅子舞、二剣	観光客向けの神楽披露研修
2	岐宿	山之太郎、宝剣舞	①プログラムと所要時間の工夫
3	上五島	六將軍、平舞、山賀	②解説の効果と演出研究
4	有川	折敷、獅子舞	③ステージ公演の工夫

五 休眠神楽舞の復活

五島神楽六系統の舞神楽の数を単純に一つずつ足して合計すれば二三二番となる。これらの舞の中で筆者が平成十一年に調査したとき舞われなくなっている舞が合計九十六番あり、実に半数弱の舞が休眠状態、あるいは消滅して復活不可能となっていることを確認した。

その後、平成十三年度に五島の全ての神楽が国の選択文化財になったのをきっかけに、すでに設立されていた上五島神楽各保存会を除く各神楽団体が保存会を結成し、さらに五島神楽保存会連絡協議会も作られ、相互情報交換や合同研修を通してそれぞれに復活舞の実現に努力している。特に、平成十四年度と十五年度の二か年にわたる文化庁のふるさと文化再興事業「地域伝統文化伝承事業」に基づく国の支援を受けたのが大きな成果に繋がっている。それは文化庁の事業の三本の柱が「伝承者の育成」「用具等の整備」「映像記録等の作成」の実現にあったからである。各保存会の計画書により文化庁から合計二〇〇万円余の支援を受け、その支援金で舞道具の修復や新調を実現したことにより、今まで舞えなかった舞が復活したものも少なくない。以下、国の文化財選択後に復活した舞と、逆に休眠入りした舞を別表5で示した。

神楽名	復活した舞	休眠入りした舞
福江五島神楽	露弘・島求・荒平・戸隠	
岐宿神楽	天大流鏑 (衣装がなく舞えなかった舞)	戸隠、願解舞、幣帛舞
玉之浦神楽	三剣・二剣	神図
有川神楽	恵比須舞、二本剣、小幣、御塩井舞、剣舞、末広舞、四剣舞、火神舞	山之太郎(消滅)

別表5. 平成13年度国の無形民俗文化財選択後に復活した舞・休眠入りした舞

また、本調査における悉皆調査により、平成十四年当時と比較して、舞演目の上演演目にいくつか変化があったので「五島神楽」演目一覧表として、第四章巻末に付した。

六 所見(今後の課題と問題点)

後継者問題

五島のすべての神楽を俯瞰して言えることは、上五島地区の有川・上五島の両神楽の後継者育成状況は理想的とは言えないまでも、今のところ今後の憂いは無いといつてよい。会員数もギリギリの状態ではあるが拡大対策も怠り無く展開しているので今以上に好転する可能性は高い。問題なのは下五島の特に福江、岐宿、富江の各保存会である。第二章の所見の項で担当執筆者がそれぞれに述べている通り、社人の高齢化に加え急激な会員の減少に歯止めがかかっていない。後継者育成も富江にかすかな希望を認めるものの岐宿・富江には成す術が無いといった状態にある。

岐宿は、単体組織であるから会員拡大が図られれば後継者難は解消されるが、過疎化が進んでいる現状ではそう簡単なものではない。会員の世襲中心の社人システムから一般市民へ枠を拡げて地道な会員増の努力が急がれることは理解しても、長い伝統感覚が無意識に改革行動を鈍らせることも否めない現実である。

富江は、富江、乙、保尾、七嶽の四社にそれぞれ社人会の組織があるものの、この四つの会が一つに纏まりにくい。例大祭時の上五島神楽保存会のような相互助勢システム実現までには未だ道遠しの感がある。原因は各社人会間に、舞の微妙な所作の違いに因ることや、相互助勤の場合、謝金にかかる神社側の財力の問題など、いろいろ複雑なものがあるようで、四十数人という五島随一の社人会員を要しながら大同連携は一朝一夕には実現できない原因と現状がある。

いづく・たちごと
言句・立言・合立の省略問題

休眠舞の復活の項で述べたとおり、各保存会の努力により多くの舞が復活したことは喜ばしい限りであるが、つぶさに調査を進めると、特に下五島の神楽に共通した言句・立言の詞章の省略や合立の軽視傾向が顕著になっていることがある。この立言や言句、あるいは合立等は、他にあまり類例を見ない五島神楽特有の芸態であることを理解され、出来得る限り軽視省略しない努力が必要と思われる。但し、関係者には実演時間に制約のある祭礼行事の中での神楽奉奏ゆえに省略も止むなしとしていることも解らない訳ではない。

その解決策のヒントとして、上五島神楽保存会が平成十一年に創始した新しい祭り「神楽大祭」を紹介しておきたい。この大祭は神楽のみを演ずる神楽単体の祭りで、毎年四月最終日曜日の正午、当番神社で伝承の三十番全神楽を七時間かけて一挙に舞いきる大祭である。行事次第は、神事後、神楽詞・神楽歌（四季歌もすべて）を唱える「お神楽（しがく）」から始まり、舞の所作も詞章も省略することなく正式に舞うことを堅く守りながら実施している。このことは、祭礼時の時間制約で舞の部分省略があっても、神楽大祭によって基礎基本をしっかりと保持保存して伝えていくという基盤を有している。同じ長崎県内の平戸神楽も壱岐神楽も一日で総ての伝承神楽を実演する行事を持っている。その点、有川神楽と下五島の四神楽には永劫に亘って現行の舞をきちつと伝えていく仕組みに欠けていると言わざるを得ない。保存と伝承のための知恵を出してほしいと願う。

中断、廃絶している「五島神楽」調査報告

吉村政徳

前項でみたように、宇久島（佐世保市宇久町）の神島神社、宇久島神社の二神社が神楽を伝承しており、五島神楽系統の神楽「宇久の神楽」とした。

この神楽を奏する行事が四月開催で現地調査が出来なかったため、両神社の関係者の協力を得て、平成二十二年十二月五日（日）に聞き取り調査を実施した。両神社の神楽において、神島神社神楽の伝承舞は数番のみの状態で、宇久島神社神楽に関しては既に中断期間が長く廃絶の危機に瀕しているため、この項を特に設けて聞き取り調査における現状報告をする。

宇久の神楽〔神島神社〕

一 名称

神島神社神楽

二 伝承地

佐世保市宇久町平

三 期日・場所

四月最終の日曜日の祈年祭（通称・地祭り）のほか秋の例祭、夏の祇園祭に奏される。神楽を奏する場所は現在、神社幣殿であるが、以前は野外に神楽施設を設け、椎の柴を神籬にして神楽を奏したという。その後、神島神社境内に「お仮屋」を立て神楽実演されたこともあったが現在は神社幣殿で舞われている。

舞の施設は、幣殿が舞所となりその中央の一間四方が舞座となる。舞座の中

央天井には三尺四方の錦蓋が吊るされ月形日形の絵や七柱の神名の紙が貼られ、幣殿四隅には棚が設けられ鳥居や社殿などの絵が貼られていた。しかし、今は錦蓋も吊るされず四隅の絵も貼られることはなく、その伝統継承はすでに絶えてしまった。



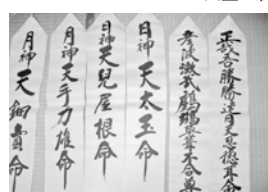
神島神社殿内



月形日形



天蓋の紙



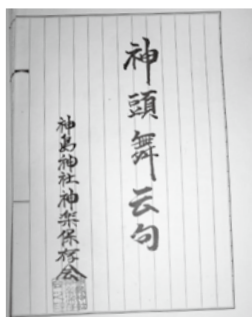
七方神

四 伝承状況

神島神社の神楽調査は、神楽を奏する行事が四月開催で実見できなかったため、関係者（宮司と社方）二人への聞き取り調査となった。以下はその内容である。

舞神楽は現在、神主一人および三人の社方とよばれる人たち四人によって伝承されているが、全員奉仕の神楽も「地祭り」ぐらいという。史料では二十番を数える神楽数も、現在舞われている舞は、「神舞」「平舞」「荒平」「こうべ」「えびす舞」の五番だけとなり、筆者が平成十一年に調査したときの「注連舞」「荒塩」「おしき」「みつるぎ」はすでに絶えてしまった。

舞の唱え言葉のことを「云句」「立言」というのは下五島と同様であるが、宇久島では舞ながら唱える「舞歌」というのがある。歌は舞人か太鼓を打つ人かが今ではわからない。下五島という座中の言句とも解されるが今となっては解明できない。舞衣装は、社方は「千早」とよぶ白布衣を着用するのが基本衣装である。面舞



神頭舞云句本

は「神頭」と「荒平」の二番しかなく裁着袴もこの面舞のときに着けた。

史料に「あいだち」という役目が記録されているが、下五島の「合立」とは多少異なり、神頭舞のとき鬼神と「じよら面」とよぶ宇受売面の連舞があるのだが、その詞章で「鬼神」と「じよら」が問答しているとところをみれば、「じよら」を「あいだち」役としているようでもある。その昔「じよら」は少女が演じたというから舞の補助役の「あいだち」であったかも知れない。

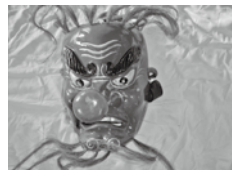
何れにしても、現在の伝承状況のままでは消えゆく神楽と言わざるを得ない。



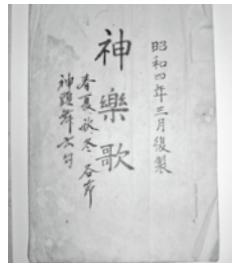
鬼神面



じよら面



神島・荒平面



宇久神楽本

宇久の神楽〔宇久島神社〕

一 名称

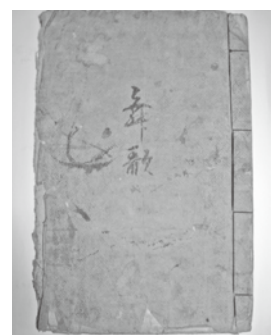
宇久島神社神楽

二 伝承地

佐世保市宇久町神浦

三 伝承状況

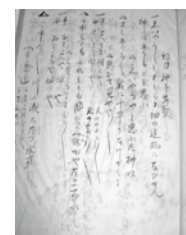
昭和五十年前後に一切の舞神楽が途絶え、実見は今や不可能である。原因は社方がいなくなったことに因る。現在の宮司は、父である前宮司が笛の名手であったため、主に太鼓を叩くことが多かった関係から笛の奏し方に多少不案内



宇久島神社舞本



天蓋用方角神



舞歌

わない。したがって復活は極めて困難と言わざるを得ない状況にある。しかし、幸い宮司の子息が後継者として禰宜に就任しているので、先代宮司が残してくれた笛録音のレコードが利用できれば数番の舞を宮司が舞うことが可能なので、社方の掘り起しと併せて神楽復活に望みを繋ぎたい。

現地調査の折、神社所有の舞道具の中に「岩戸開」に使用された江戸末期の女神用の天冠と剣が残されていたことは、同種の舞がある富江と上五島の神楽には大変参考となる史料であることを記しておきたい。



じじばば面



荒平面



無久利面



岩戸開・天照大神天冠

なお今回、宇久島神社月川徹宮司より昭和四十一年当時の例大祭での番組表を提供いただいた。この表には演目名と舞人の名前、衣装道具等が記してあるので参考に付する。内容は表の表記に従ったが、一部筆者による注記を（）内に示し、ルビを付した箇所がある。

【宇久島神社神楽番組表】

昭和四十一年四月二十四日

一、直舞

二、露拂

三、無久利

田ノ上 赤着物、帆かけ（大口袴）、鬼ノ千早、片ぎん（肩衣）、角面、棒、柴

照夫 千早、えぼし、羽矢

四、ぼん

五、荒平

徹 赤着物、パッチ（股引）、角なし面、御幣、扇子
片ぎん（肩衣）、刀、柴

六、長刀

七、切目

徹 帆かけ（大口袴）、赤着物、鬼ノ千早、狩衣、片ぎん（肩衣）、角なし面、バチ、扇子、御幣

邦子

八、獅子

照夫（獅子と天狗の二名）

また、同宮司より、以前に神楽で使用していた道具等の写真も提供いただいたので参考に掲載する。



獅子頭



衣裳・道具類



太鼓



獅子舞の天狗面



面・採り物



笛

第四章

「五島神楽」

悉皆調査目録

【「五島神楽」悉皆調査実施要項】

1. 調査の目的

国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている「五島神楽」（平成十三年度選択）が、五島列島内において保存・伝承されている、または伝承していたとされるその所在及び現状等を悉皆的に調査し、悉皆目録を作成する。

2. 事業主体 「五島神楽」調査報告書作成委員会（事務局（社）全日本郷土芸能協会）

3. 調査期間 平成二十二年度

4. 調査地域及び調査対象

（1）調査地域 五島列島の五島市（福江島）、佐世保市宇久町（宇久島）、新上五島町（中通島）を対象とする。

（2）調査対象 右記地域内で「五島神楽」が奉納されている、または奉納されていたと思われる二十二の本務社並びに兼務社

5. 調査方法

（1）右記対象神社の宮司宛に悉皆調査票を送付する。

（2）悉皆調査票には、平成十四年発行『五島神楽の研究』（吉村政徳著）の神楽演目一覧表を吉村氏の了解を得て添付し、加除訂正の上返送してもらい、それを平成二十二年度悉皆調査回答と併せた「五島神楽」演目一覧表として本書に収載する。

（3）調査結果を受け、調査報告書作成委員会が掲載項目を選出し、目録を作成して本書に収載する。

6. 悉皆調査目録について

（1）回答のあった十八の本務社の中から、「五島神楽」の伝承が認められた十六本務社と各兼務社の調査結果を悉皆調査目録として掲載した。

（2）調査結果は調査報告書作成委員会事務局にてまとめ、その中で特に重要な項目を悉皆目録として作成した。従って、本目録の記載

内容は回答結果全てを反映したものではない。

（3）目録内の記載内容は、本悉皆調査の回答に従った。

7. 悉皆調査目録項目について

（ア）神楽名称は調査報告書作成委員会で定めたが、悉皆調査の回答で別称が認められたもののみ（一）内に示した。

（イ）地図番号は、悉皆調査で判明した、五島神楽が奉納される神社（本務社、兼務社）の所在地を地図上に示した番号である。数字のないものは、現在は奉納されていない神社、または所在地が不特定のものである。なお神楽が奉納されている神社の神職が主として奉仕する神社が本務社であり、その神職が他の神社を兼務する場合、その社を兼務社という。

（ウ）神楽が奉納される神社名と、（一）内にその所在地（番地不記載）を示した。なお、太字は本務社を示し、その兼務社を左に列記した。

（エ）伝承組織、伝承団体の名称を示した。なお、同じ団体名称の神楽でも奉職する社人が異なる場合（一）内にその組織名を示した。

（オ）伝承組織の構成人数とその内訳を示した。職名は調査回答に従った。

（カ）神楽が上演公開される神社例祭等の期日を新暦で示した。旧暦の場合は（旧）で示した。

（キ）公開期日に神楽が上演される主な場所を付記した。

（ク）平成二十二年度悉皆調査時現在での上演可能な演目数を付記した。但し舞神楽に先立つ神楽歌は演目数に含めていない。神楽演目名は別途「五島神楽」演目一覧表（147頁）参照のこと。

（ケ）舞神楽で使用する主な楽器を記した。

（コ）神楽が舞われる舞座の施設を示した。項目①は神楽が舞われる舞座の広さ、②舞座の特別な名称がある場合のその名称、③舞座の形態、④舞座内の、神楽に関係した特別な装飾や設備を示した。

（サ）調査回答による特記事項記載があった場合は表記した。なお、本

務社・兼務社の調査票に重複する事項があった場合、本務社の欄にのみ記した。また、現地調査を行い、第二章で特に報告記載のある神社の神楽についてはその頁数を記した。

8. 「五島神楽」分布図

五島神楽が伝承されている福江島（五島市）・宇久島（佐世保市宇久町）・中通島（新上五島町）の地図上に、調査回答があった神社（本務社・兼務社）を記した。なお、整理分類のため、旧市町名及び旧市町の行政区分も併記した。

9. 「五島神楽」演目一覧表

平成十四年発行『五島神楽の研究』による上演演目と、平成二十二年度
悉皆調査時の上演演目を一覧表で示した。

■ 悉皆調査の回答があった神社（順不同、本務社のみ、宮司等名称は平成
二十二年度調査当時）

*印は回答があったが神楽の伝承が認められなかったため目録不記載

「五島市」

五社神社（月川敬身宮司）、八幡神社（平田一實宮司）、天満神社（森彪宮司）、
住吉神社（片山貴史宮司）、巖立神社（阿比留正宮司）、白鳥神社（宗邦治宮
司）、富江神社（月川八榮宮司）、七嶽神社（月川貞教宮司）、*奈留神社（月
川司宮司）

「新上五島町」

有川神社（江口一二三宮司）、榎津神社（宮田恒雄宮司）、祖父君神社（宮田
紀久宮司）、政彦神社（吉村政徳宮司）、青方神社（前田哲嘉宮司）、小串神社（神
崎信智宮司）、*若松神社（近藤忠博権禰宜）

「佐世保市宇久町」

神島神社（平田邦彦宮司）、宇久島神社（月川徹宮司）

※悉皆調査票に記載できなかった事柄等があれば別紙に記入の上添付して下さい。
 ※悉皆調査票の記入欄に書ききれない場合も別紙に記入の上添付して下さい。
 ※特徴的な写真及び参考資料等があれば添付して下さい。(写真はキャプションをつけて下さい)
 ※整理番号は「五島神楽」調査報告書作成委員会事務局にて記入します。

**平成22年度文化庁事業「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」における
「五島神楽」悉皆調査票**

					整理番号		
1	名 称	ふ り が な 称 神 楽 名 称			別 名		
2	伝 承 地	ふ り が な 称 神 社 名 称					
		氏名・連絡先	職名	氏名	TEL		
			住所 〒		FAX		
3	伝承組織(伝承団体)	ふ り が な 称 名 称					
		代表者名・連絡先	職名	氏名	TEL		
			住所 〒		FAX		
		所 属 人 数	計 名 (男性 名 女性 名)				
		年 齢 構 成	20歳未満 名	20～29歳 名	30～39歳 名	40～49歳 名	
			50～59歳 名	60～69歳 名	70～79歳 名	80歳以上 名	
		役 職 別 構 成	宮 司 名	社人(社方・神人) 名	社人(巫子・神子) 名	保存会員 名	
一般人 名	他(あれば役職名と人数)						
4	神 楽 の 由 来 (歴 史 等)	※文書記録等の有無(あれば写しを添付)					
5	公開場所(所在地、神社名)公開期日(例祭日等)	毎年開催	<公開場所>		<公開期日>		
		隔年開催	<公開場所>		<公開期日>		
		三年に一度開催	<公開場所>		<公開期日>		
		五年に一度開催	<公開場所>		<公開期日>		
		七年に一度開催	<公開場所>		<公開期日>		
		その他	<公開場所>		<公開期日>		

		神楽演目 (現行・復活可 能不可能の別 ／神楽演目名 ／舞人人数／ 合立の有無／ 立言の有無／ 着面／舞道具 ／衣裳)	ここに、平成14年発行『五島神楽の研究』(吉村政徳著)神楽演目一覧表を添付		
6	神楽演目・楽器・舞の施 設・神楽歌(神歌・立歌な ど)	楽器 (太鼓の形及び 曲／笛の形及 び曲 等)			
		舞の施設 (舞座、錦蓋等)			
		神楽歌※歌本 の有無 (ある場合は写 しを添付)			
7	中断・廃絶している 神楽について	中断・廃絶	中断・廃絶の 時期と理由、 現状		
8	文献資料・映像記録資料 等				
9	備 考				
調 査 年 月 日		平成 年 月 日	記 入 者 名		

※本調査に関わって記入された個人情報には本業務にのみ使用し、一般に公表することはありません。

「五島神楽」 悉皆調査目録

※記載内容は、平成二十二年度悉皆調査回答に従った。

福江五島神楽															神楽名称 (別称)
⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	一	地図番号
山祇神社 (五島市龍洞町)	戸岐神社 (五島市戸岐町)	住吉神社 (五島市上大津町)	長手神社 (五島市長手町)	白浜神社 (五島市向町)	天満神社 (五島市下大津町)	和布崎神社 (五島市奥浦町)	天満神社 (五島市平蔵町)	平蔵神社 (五島市平蔵町)	八幡神社 (五島市下大津町)	水神社 (五島市高田町)	諏訪神社 (五島市堤町)	塩津神社 (五島市上崎山町)	五社神社 (五島市上大津町)	五社神社・八幡神社 天満神社・住吉神社	奉納神社(所在地) ※太字は本務社
同右	同右	福江五島神楽保存協会 ----- 福江神楽保存会	同右	同右	福江五島神楽保存協会	同右	同右	同右	福江五島神楽保存協会	同右	同右	同右	福江五島神楽保存協会	福江五島神楽保存協会	伝承組織・伝承団体
同右	同右	38名(住吉神社宮司1、社人1、巫女・神子21、保存会員4、一般人11)	同右	同右	5名(天満神社宮司1、社人2、他)	同右	同右	同右	5名(八幡神社宮司1、社人1、保存会員3)	同右	同右	同右	4名(五社神社宮司1、社人2、巫女・神子1)	10名(宮司4、社人5、他1)	組織構成
10月下旬 (7年に一度)	1月第2日曜	4月29日、11月23日	(旧)9月24日	2月2日	1月25日	(旧)9月12日	(旧)9月15日	(旧)9月18日	1月15日、(旧)5月3日、 (旧)8月15日、(旧)9月9日、 11月23日	6月12日	(旧)2月1日、 5月6日、9月20日	1月15日、9月15日	(旧)1月28日、 5月5日、11月23日	毎年2月 五島椿まつり	公開期日(例祭等)
神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社舞殿	五島市武家屋敷ふるさと館	公開場所
同右	同右	24	同右	同右	24	同右	同右	同右	24	同右	同右	同右	24	24	現行の舞数
同右	同右	胴長太鼓、締太鼓、龍笛、拍子木	同右	同右	胴長太鼓2、締太鼓、龍笛	同右	同右	同右	胴長太鼓2、締太鼓、龍笛	同右	同右	同右	胴長太鼓2、締太鼓、尺八、龍笛		楽 器
		①方間 ②舞座 ③畳			①方間 ②舞舞台 ③板張り、畳		①方間 ②舞舞台 ③板張り		①方間 ②舞舞台 ③板張り、畳				錦蓋 ①方間 ②舞舞台 ③板張り、畳 ④	①方間 ②舞舞台 ③板張り、畳 両方有 ④錦蓋	舞の施設 ①舞座の広さ ②舞座の名称 ③舞座の形態 ④舞施設の設備等
		福江五島神楽保存協会とは別に、昭和55年に住吉神社の神職、社人氏子を中心に「福江神楽保存会」を設立し、活動している。また、保存会が核となり「福江神楽」とも教室」を開催している。					〔現地調査報告 69頁〕		中断廃絶演目については、長老社人の減少による。				中断廃絶演目については、長老社人の減少による。		特記事項 上記4神社の祭礼や兼務社の祭礼における神楽奉納は福江五島神楽保存協会員の助勤制度で行うため、神楽演目は同一

玉之浦神楽 (白鳥神社神楽)			岐宿神楽 (厳立神社神楽・ 五島岐宿神楽)													福江五島神楽
◇9	◇8	◇7	一	一	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
保食神社 (五島市玉之浦町小川)	保食神社 (五島市玉之浦町中須)	白鳥神社 (五島市玉之浦町玉之浦)	*大山祇神社 (五島市岐宿町土岐之宮)	*大曽根神社 (五島市岐宿町唐船浦)	大山祇神社 (五島市岐宿町二本楠)	金刀比羅神社 (五島市岐宿町中岳坂の上)	城神社 (五島市岐宿町中岳城)	大山祇神社 (五島市岐宿町松山寺脇)	松山神社 (五島市岐宿町松山)	大山祇神社 (五島市岐宿町楠原中楠原)	神崎神社 (五島市岐宿町川原小川原)	天満神社 (五島市岐宿町川原大川原)	河務神社 (五島市岐宿町河務)	八坂神社 (五島市岐宿町川原白石)	厳立神社 (五島市岐宿町岐宿)	山祇神社 (五島市大荒町)
同右	同右	白鳥神社神楽保存会 (白鳥神社宮司1、巫女1、保存会員15)	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	五島岐宿神楽保存会 (五島岐宿神社宮司1、社人8)	同右
同右	同右	17名 (白鳥神社宮司1、巫女1、保存会員15)	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	20名 (厳立神社宮司1、社人8、方々、神子2、保存会員8)	同右
(旧) 9月20日	(旧) 9月19日	9月第3土日	(旧) 9月15日(舞はなし)	(旧) 9月16日(舞はなし)	(旧) 9月23日 (7年に一度)	(旧) 10月10日 (7年に一度)	(旧) 10月15日 (7年に一度)	(旧) 9月28日 (7年に一度)	(旧) 10月23日 (7年に一度)	(旧) 10月23日 (7年に一度)	(旧) 9月24日 (7年に一度)	(旧) 10月25日 (7年に一度)	(旧) 9月11日	(旧) 6月15日	9月の秋分の日を含む 3連休の中の2日間(不定)	3月下旬 (7年に一度)
小川生活館	中須生活館	お旅所(玉之浦町体育館)	同右	同右	同右	同右	同右	同右	神社拝殿	神社から離れた公民館	神社から離れた空地の仮殿	神社近くの空地の仮殿	民館	同右	神社拝殿	神社拝殿
同右	同右	23	中断	中断	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	20	同右
同右	太鼓2、笛	胴長太鼓2、 笛	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	胴長太鼓1、 横笛、鈴	同右
同右	①方間 ②舞座 ③畳	①方間 ②舞座 ③畳 ④錦蓋	—	—	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	①方間 ②舞い舞台 ③板張り ④錦蓋、 五色御幣を並べた祭壇	①方間 ②舞い舞台 ③板張り ④錦蓋、 五色御幣を並べた祭壇
		〔聞き取り調査報告 27頁〕	現在神楽の奉納なし	現在神楽の奉納なし (祝詞と太鼓等のみ)											〔現地調査報告 38頁〕	

富江神楽														玉之浦神楽 (白鳥神社神楽)				神楽名称 (別称)
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	地図番号	
七嶽神社 (五島市玉之浦町荒川)	保尾神社 (五島市富江町長峰 九子地区)	乙神社 (五島市富江町田尾)	事代主神社 (五島市富江町)	大山祇神社 (五島市富江町特立)	八幡神社 (五島市富江町松尾)	大山祇神社 (五島市富江町山手)	琴平神社 (五島市富江町黒瀬)	大山祇神社 (五島市富江町山下)	大宰府神社 (五島市富江町岳)	靈神社 (五島市富江町松尾)	事代主神社「鯉子神社」 (五島市富江町舟手町)	富江神社 (五島市富江町松尾)	言代主神社 (五島市玉之浦町大宝)	言代主神社 (五島市玉之浦町玉之浦)	大山祇神社 (五島市玉之浦町上平)	大山祇神社 (五島市玉之浦町上平)	奉納神社 (所在地) ※太字は本務社	
七嶽神楽保存会	富江神楽保存会 (保尾神社社人会)	富江神楽保存会 (乙神社社人会)	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	富江神楽保存会 (富江神社社人会)	大宝青年会	同右	同右	同右	伝承組織・伝承団体	
25名 (七嶽神社宮司1、社人2、神子2、保存会員22)	7名 (富江神社宮司1、社人6)	9名 (富江神社宮司1、社人3、神子1、一般人4)	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	6名 (富江神社宮司1、社人4、神子1)	13名 (白鳥神社宮司1、巫女1、保存会員13)	同右	同右	同右	組織構成	
神楽の奉納なし	(旧) 9月10日	11月15日	(旧) 8月15日 (隔年)	10月23日 (3年に一度)	(旧) 8月14日 (3年に一度)	(旧) 9月23日 (5年に一度)	(旧) 10月10日	11月初旬 (5年に一度)	1月25日	11月22日	10月15日	10月14日	(旧) 9月28日	小祭	小祭	小祭	公開期日 (例祭等)	
—	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	渡御御神輿 の仮宮	神社拝殿	神社社殿	同右	同右	神社社殿	公開場所	
—	18	12	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	23	19	同右	同右	同右	現行の舞数	
—	竹笛	胴長太鼓、 竹笛	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	胴長太鼓、 龍笛	太鼓2、 笛	同右	同右	太鼓1、 笛1	楽 器	
—	なし	なし	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	なし	①方間 ②舞座 ③畳 ④錦盞	同右	同右	①方間 ②舞座 ③畳	舞の施設 ①舞座の広さ ②舞座の名称 ③舞座の形態 ④舞施設の設備等	
明治11年富江神社から分家のため、富江神楽を伝承する。特に富江九子地区(保尾神社系)舞集団の指導があった。												〔現地調査報告 52頁〕	(旧) 9月29日例大祭にて特殊神事の「大宝の砂打ち」(国指定)が行われる。前日宵祭で神楽が舞われる。	同右	同右	上演舞数は市舞、村直、佐男舞の3番程度	特記事項	

上五島神楽							有川神楽							富江神楽 (七嶽神楽)	
61	60	59	58	57	56	一	55	54	53	52	51	50	49	48	47
熊野神社 (新上五島町阿瀬津郷)	事代主神社 (新上五島町似首郷)	祖父君神社 (新上五島町浦桑郷)	乙宮神社 (新上五島町立串郷)	客人神社 (新上五島町網上郷)	政彦神社 (新上五島町奈摩郷)	祖父君神社、青方神社、 政彦神社、板津神社	志自岐羽黒神社 (新上五島町太田郷)	潮目天満神社 (新上五島町七日郷)	江ノ濱神社 (新上五島町江ノ浜郷)	八坂神社 (新上五島町友住郷)	孕神社 (新上五島町赤尾郷)	乙宮神社 (新上五島町小河原郷)	有川神社 (新上五島町有川郷)	大山祇神社 (五島市玉之浦町幾久山)	龍神社 (五島市玉之浦町荒川)
同右	同右	上五島神楽保存会	同右	同右	上五島神楽保存会	上五島神楽保存会	同右	同右	同右	同右	同右	同右	有川神楽保存会	同右	同右
同右	同右	26名 (宮司5、社人9、 一般保存 会員3、神職9)	同右	同右	26名 (宮司5、社人9、 一般保存 会員3、神職9)	26名 (宮司5、社人9、 一般保存 会員3、神職9)	同右	同右	同右	同右	同右	同右	25名 (有川神社宮司1、社人7、 神子7、一般保存会員8、神 職2)	同右	同右
(旧)10月17・18日	10月第3土・日曜日	11月12・13日	11月9・10日	10月28・29日	10月27・28日	4月最後の日曜日 神楽大祭	10月31、11日1日	10月8・9日	10月14・15日	11月2・3日	10月10・11日	10月23・24日	7月第4金・土曜日 祇園祭 10月1・2日	9月23日	(旧)2月2日、 (旧)9月11日
御旅所(集会 場・公民館等) を利用	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	各神社拝殿	神社幣殿	御旅所(七日 コミュニティセ ンター)	神社幣殿	神社幣殿	神社幣殿	神社幣殿	御旅所(うど んの里)		
同右	同右	30	同右	同右	30	30	同右	同右	同右	同右	同右	同右	24	同右	16
同右	同右	胴長太鼓2、 篠笛、スリ鉦	同右	同右	胴長太鼓2、 篠笛、スリ鉦	胴長太鼓2、 篠笛、スリ鉦	同右	同右	同右	同右	同右	同右	胴長太鼓2、 篠笛	同右	太鼓、笛
①方一間 ②舞座 ③舞板なし ②畳分 のスペースで舞う	同右	①方一間 ②舞板 ③板張り(常設) ④五方に五色御幣、錦蓋なし	同右	同右	①方一間 ②舞板 ③板張り(常設) ④五方に五色御幣、錦蓋なし	①方一間 ②舞板 ③板張り(常設) ④五方に五色御幣、錦蓋なし	①方一間 ②舞座 ③板張り ④幣殿天 井近くの四方と中央で交差した注連縄を 張り、交差部分に白御幣を挟む	①方一間(コミュニティセンター)内に畳20畳 ほどを敷き中央の2畳) ②舞座 ③畳 ④飾りなし	同右	同右	同右	①方一間 ②舞座 ③畳 ④飾りなし	①方一間 ②舞座 ③板張り ④五方に 五色御幣		
				〔現地調査報告 108頁〕	〔現地調査報告 94頁〕	上記4神社の当番制(小串・乙宮神 社は特別時に当番となる)	〔現地調査報告 80頁〕						「神國舞」等長時間の番組は、祭 典時間に制限があるので敬遠され る。また、氏子に人気の舞が優先 されるため演目が硬直化する。		

宇久の神楽		上五島神楽											神楽名称（別称）
▲4	▲5	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	地図番号
宇久島神社 （佐世保市宇久町神浦）	神島神社 （佐世保市宇久町平）	正彦神社 （新上五島町曾根郷）	山神社 （新上五島町船崎郷）	姫神社 （新上五島町相河郷）	八坂神社 （新上五島町青方郷）	青方神社 （新上五島町青方郷）	丸尾神社 （新上五島町丸尾郷）	榎津神社 （新上五島町榎津郷）	本山神社 （新上五島町津和崎郷）	小串神社 （新上五島町小串郷）	奥浦神社 （新上五島町奥浦郷）	鯛之浦神社 （新上五島町鯛ノ浦郷）	奉納神社（所在地） ※太字は本務社
宇久島神社氏子	—	同右	同右	同右	同右	上五島神楽保存会	同右	上五島神楽保存会	同右	上五島神楽保存会	同右	上五島神楽保存会	伝承組織・伝承団体
1、神職 3名 （宇久島神社宮司1、社方 1、神職）	4名 （神島神社宮司1、社方3）	同右	26名 （宮司5、社人9、般保存 会員3、神職9）	同右	同右	26名 （宮司5、社人9、般保存 会員3、神職9）	同右	26名 （宮司5、社人9、般保存 会員3、神職9）	同右	26名 （宮司5、社人9、般保存 会員3、神職9）	同右	26名 （宮司5、社人9、般保存 会員3、神職9）	組織構成
10月24・25日	4月最終日曜日、 秋の例祭、夏の祇園祭	（旧）9月8・9日	7月19日、10月30・31日	7月18日、10月29・30日	7月16・17日	（旧）1月1日、11月2・3日	10月第4土・日曜日	11月24・25日	（旧）9月18・19日	10月24・25日	（旧）10月17日	（旧）10月18・19日	公開期日（例祭等）
	神社幣殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	祇園祭御旅所 （青方郷港広場）	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	神社拝殿	御旅所（集会所・公民館等） を利用	公開場所
中断	5	同右	同右	同右	同右	30	同右	30	同右	30	同右	30	現行の舞数
		同右	同右	同右	同右	胴長太鼓2、 篠笛、スリ鉦	同右	胴長太鼓2、 篠笛、スリ鉦	同右	胴長太鼓2、 篠笛、スリ鉦	同右	胴長太鼓2、 篠笛、スリ鉦	楽 器
	①方間 ②－ ③－ ④錦蓋（廃絶）	同右	同右	同右	同右	④五方に五色御幣、錦蓋なし ①方間 ②舞板 ③板張り（常設）	同右	④五方に五色御幣、錦蓋なし ①方間 ②舞板 ③板張り（常設）	同右	④五方に五色御幣、錦蓋なし ①方間 ②舞板 ③板張り（常設）	同右	④五方に五色御幣、錦蓋なし ①方間 ②舞座 ③舞板なし（2畳分のスペースで舞う）	舞の施設 ①舞座の広さ ②舞座の名称 ③舞座の形態 ④舞施設の設備等
現在中断中	〔聞き取り調査報告 135頁〕					〔現地調査報告 114頁〕							特記事項

「五島神楽」演目一覧表

福江五島神楽		岐宿神楽		玉之浦神楽		富江神楽		有川神楽		上五島神楽		宇久の神楽		
演目名	平成14	平成22	演目名	平成14	平成22	演目名	平成14	平成22	演目名	平成14	平成22	演目名	平成14	平成22
神歌	御神楽(四歌句・四楽)	御神楽	神楽志賀文	お神楽(がく)	御神楽	御神楽	御神楽	御神楽	御神楽	御神楽	御神楽	御神楽	御神楽	御神楽
1	市舞	天宇受売舞	市舞	神女舞	座祓	座祓	座祓	座祓	座祓	座祓	座祓	座祓	座祓	座祓
2	佐男舞	伊智舞	左男舞	左男舞	露祓	露祓	露祓	露祓	露祓	露祓	露祓	露祓	露祓	露祓
3	荒塩舞	左男舞	露祓	新潮	小幣	小幣	小幣	小幣	小幣	小幣	小幣	小幣	小幣	小幣
4	荒塩舞	太玉籤舞	三刻	注連	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶	御潮井桶
5	三劍舞(三劍)	木綿志手舞	祓(座祓)	三劍	長刀舞	長刀舞	長刀舞	長刀舞	長刀舞	長刀舞	長刀舞	長刀舞	長刀舞	長刀舞
6	三劍舞(三劍)	新塩舞	小弓	注連	一本剣	一本剣	一本剣	一本剣	一本剣	一本剣	一本剣	一本剣	一本剣	一本剣
7	舞人外道切	三劍舞	折敷	神通	御幣	御幣	御幣	御幣	御幣	御幣	御幣	御幣	御幣	御幣
8	感應舞	注連舞	荒平	柳舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
9	折敷舞	注連舞	荒平	小幣	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
10	注連舞(注連)	注連舞	折敷	大神通	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
11	篠波	注連舞	荒平	柳舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
12	小弓	地舞	御潮舞	大神通	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
13	烏丸	戸隠舞	四劍	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
14	管麻	舞台相伝舞	小幣	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
15	劍舞(二劍)	八千熊舞	注連	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
16	木綿四手	管麻舞	一劍	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
17	八千熊	折敷舞	柴取	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
18	天神舞	恵比須舞	長刀	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
19	恵比須舞	折敷舞	入鹿高松	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
20	神圖舞(神図)	天大流鎗舞	長刀舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
21	小幣	花舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
22	四劍	地舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
23	八雲舞	懸神舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
24	將軍舞	二劍舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
25	將軍の狂言	天神舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
26	得銭子	鶴求舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
27	篠曳・獅子舞	平舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
28	座祓	平舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
29	寶鏡舞(宝鏡)	平舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
30	舞台相傳	篠曳舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
31	山構	遠呂知舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
32	山名付	寶鏡舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
33	山入	笹連舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
34	山之太郎	得銭子舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
35	山之狂言	小幣舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
36	山之下・山之荒平	神圖舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
37	比羅舞	山入舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
38	長刀舞	山名附舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
39	願之神	山構舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
40	地舞	山狂言舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
41	荒平舞(荒平)	山太郎舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
42	太玉串	山下舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
43	天大流鎗馬	山荒平舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
44	乙子瀬	將軍舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
45	地舞・戸隠舞(戸隠)	乙子瀬舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
46	掛神	狂言舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞
47	御幣	願解舞	山名太郎	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞	折敷舞

【凡例】

神楽名称、伝承組織名称、演目名は平成22年度悉皆調査回答に従った。

平成14年・平成14年発行『五島神楽の研究』による

平成22年・平成22年度悉皆調査回答による

なお、平成22年度悉皆調査で明らかになった伝承組織の上演演目も併せて記した。

*記号について

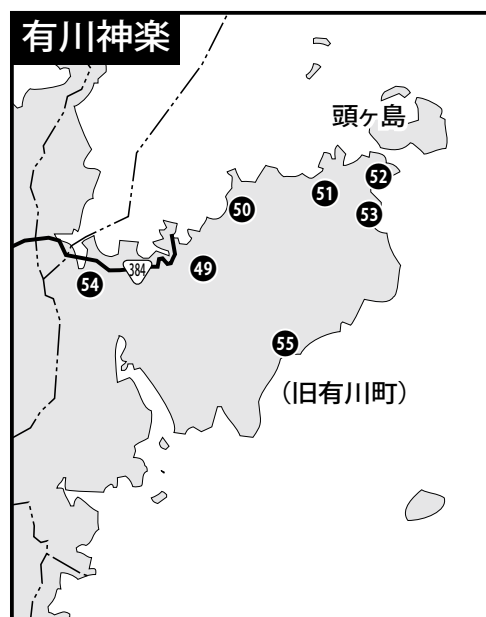
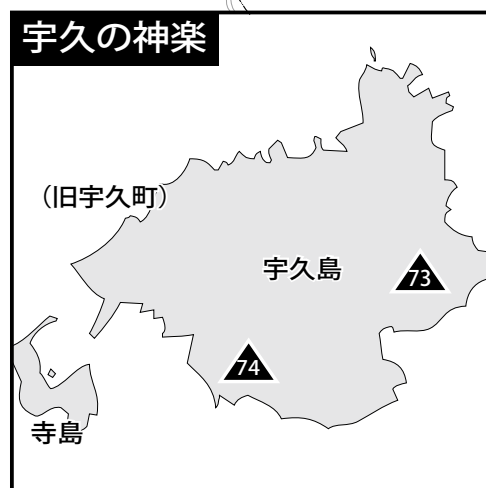
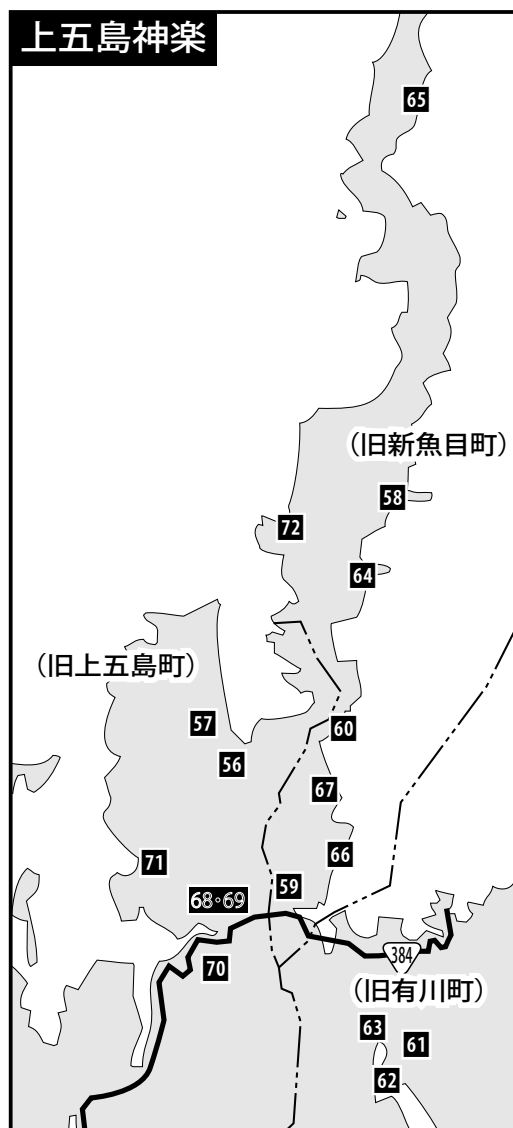
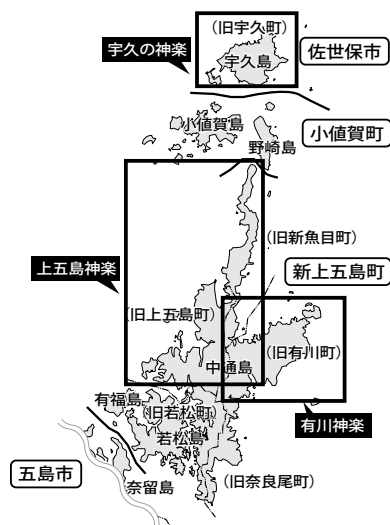
○ 現行の舞 ◎ 復活の舞 △ 休眠中で復活可能な舞

■ 消滅して復活不可能の舞 無印は変化なし

【凡例】
 神楽名称・伝承組織名称・演目名は平成22年度悉皆調査回答に従った。
 平成14年・平成14年発行『五島神楽の研究』による
 平成22年・平成22年度悉皆調査回答による
 なお、平成22年度悉皆調査で明らかになった伝承組織の上演演目
 も併せて記した。

*記号について
 ○ 現行の舞 ◎ 復活の舞 △ 休眠中で復活可能な舞
 ■ 消滅して復活不可能の舞 無印は変化なし

「五島神楽」分布図



凡例

地図上の番号は平成 22 年度悉皆調査において回答のあった五島神楽が奉納される神社を示し、悉皆調査目録の地図番号の項目と対応する。

- は市町名
- () は旧市町名
- は行政区分
- - - は旧市町の行政区分

神社所在地：

福江五島神楽 ①～⑮

岐宿神楽 ⑮～⑳

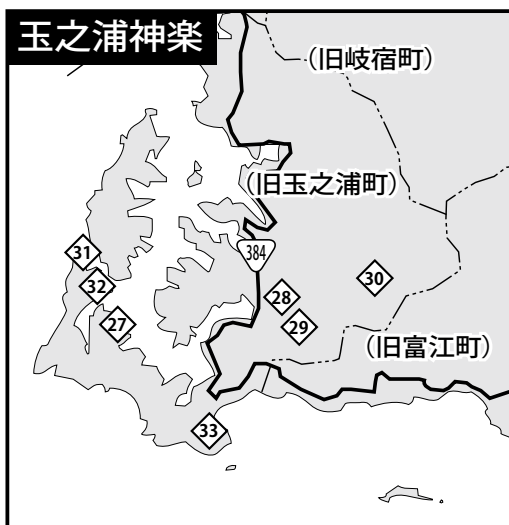
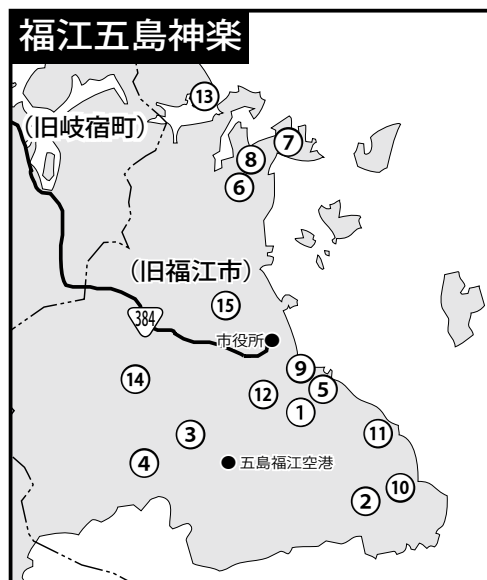
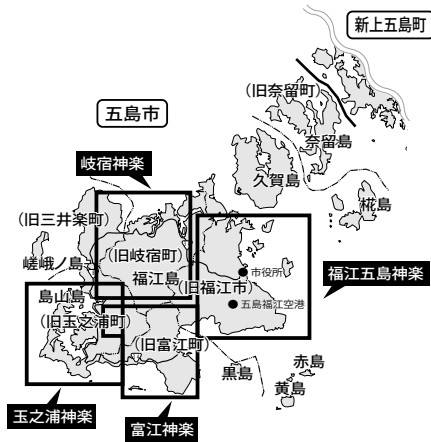
玉之浦神楽 ㊦～㊩

富江神楽・七嶽神楽 ㊫～㊭

有川神楽 ㊯～㊱

上五島神楽 ㊳～㊵

宇久の神楽 ㊶・㊷



第五章

「五島神楽」

関係資料

文献資料

	書名	編著者・発行者	発行	備考等
福江五島神楽	『福江五島神楽本』	福江五島神楽保存協会 森彪・福江五島神楽保存協会	平成十五年	五社神社所蔵『五社神社神楽本』〔明和三年（七六六）写、昭和六年再写〕・天満神社所蔵『五島四十八番舞神楽本』〔寛政三年（二七九）写、明治二十年（一八八九）再写〕をもとに編纂
岐宿神楽	『長崎県五島神楽資料（一）』 『五島岐宿神楽（厳立神楽）の継承』	渡辺伸夫・早稲田大学演劇博物館発行 松山勇・五島岐宿神楽保存会	昭和六十三年 平成十六年	『演劇研究』第十二号所載 厳立神社所蔵『厳立神社祭典仕様書』〔年代不明〕、 『厳立神社舞由來記』〔昭和四年写〕、 『厳立神社舞番附』〔年代不明〕をもとに編纂
玉之浦神楽	『神楽舞方之本』 『長崎県五島神楽資料（二）』	白鳥神社所蔵 渡辺伸夫・早稲田大学演劇博物館発行	弘化二年 昭和六十三年	神楽本 筆書き 和綴じ 『演劇研究』第十二号所載
富江神楽	『神楽歌詞集』 『有川町郷土誌』	富江神社所蔵 有川町	年不詳 平成六年	神楽本 筆書き 和綴じ
上五島神楽	『上五島町郷土誌』 『新魚目町郷土誌』 『上五島神楽本』	上五島町 新魚目町・新魚目町教育委員会 宮田紀久・上五島神楽保存会	昭和六十一年 昭和六十一年 平成十四年	神楽本 和綴じ
宇久の神楽	『国選択無形民俗文化財』上五島神楽 『舞歌』 『西日本諸神楽の研究』	宇久島神社所蔵 石塚尊俊・慶友社	平成十八年 明治二十七年 昭和五十四年	『五島神楽の研究』（平成十四年発行）を再編集したもの
総合的なもの	『長崎県文化財報告書第120集 長崎県の民俗芸能―長崎県民俗芸能緊急調査報告書―』 『五島神楽の研究』 『国立劇場第二〇回民俗芸能公演長崎五島列島の芸能』	長崎県教育委員会 吉村政徳・上五島神楽保存会 国立劇場・独立行政法人日本芸術文化振興会	平成七年 平成十四年 平成二十年	詳細調査「厳立神楽」（80頁82頁）「上五島神楽」（84頁85頁）「玉之浦神楽」（209頁）「大宝の砂打ち」玉之浦神楽（222頁）「玉之浦白鳥神社神楽」（223頁）「岐宿厳立神楽」（226頁）「上五島神楽」（233頁） 五島神楽全般 平成二十年六月二十八日公演パンフレット 『有川神楽』『玉之浦神楽』『上五島神楽』 出演は各演目の説明や「立言」など収載

五島神楽 調査報告書作成委員会

調査報告書作成委員会

委員長

※職名は平成二十二年度当時

星 野 絃 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員

久保田 裕 道 國學院大學兼任講師

吉 村 政 徳 新上五島町政彦神社宮司

城 井 智 子 (社) 全日本郷土芸能協会専務理事

笹 生 昭 (社) 全日本郷土芸能協会常務理事

森 下 春 夫 (社) 全日本郷土芸能協会常務理事

事務局

小 岩 秀太郎 (社) 全日本郷土芸能協会職員

調査報告書作成委員会開催日 (会場 (社) 全日本郷土芸能協会事務所)

第一回 平成二十二年 五月二十八日 (金)
第二回 平成二十二年 八月 十九日 (木)
第三回 平成二十二年 十月 四日 (月)
第四回 平成二十二年 十二月 六日 (月)
第五回 平成二十三年 一月三十一日 (月)

執筆者 (敬称略) ※職名は平成二十二年度当時

第一章 渡 辺 伸 夫 昭和女子大学教授

第二章 久保田 裕 道

第二章 星 野 絃

第二章、第三章 吉 村 政 徳

現地調査実施日・調査班

第一班

調査員 星 野 絃

記録員 小 岩 秀太郎

玉之浦神楽〔白鳥神社〕〈長崎県五島市玉之浦町〉

平成二十二年九月十八日 (土)、十九日 (日)、二十日 (祝)

岐宿神楽〔巖立神社〕〈長崎県五島市岐宿町〉

平成二十二年九月十九日 (日)、二十日 (祝)

第二班

調査員 久保田 裕 道

記録員 森 下 春 夫

富江神楽〔富江神社〕〈長崎県五島市富江町〉

平成二十二年十月十四日 (木)、十五日 (金)、十六日 (土)、十七日 (日)

第三班

調査員 吉 村 政 徳

記録員 中 村 大 地 (五島市教育委員会)

福江五島神楽〔樫ノ浦 天満神社〕〈長崎県五島市平蔵町〉

平成二十二年十月二十一日 (木)

第四班

調査員 久保田 裕 道

記録員 小 岩 秀太郎

上五島神楽〔政彦神社〕〔長崎県南松浦郡新上五島町奈摩郷〕

平成二十二年十月二十七日（水）、二十八日（木）

上五島神楽〔客人神社〕〔長崎県南松浦郡新上五島町網上郷〕

平成二十二年十月二十八日（木）、二十九日（金）

有川神楽〔志自岐羽黒神社〕〔長崎県南松浦郡新上五島町太田郷〕

平成二十二年十月三十一日（日）、十一月一日（月）

上五島神楽〔青方神社〕〔長崎県南松浦郡新上五島町青方郷〕

平成二十二年十一月二日（火）、十一月三日（祝）

聞き取り調査

調査員 吉 村 政 徳

宇久の神楽〔神島神社〕〔長崎県佐世保市宇久町平〕

宇久の神楽〔宇久島神社〕〔長崎県佐世保市宇久町神浦〕

平成二十二年十二月五日（日）

協力者・協力機関等（敬称略、順不同）

協力機関等

長崎県教育庁

五島市教育委員会

佐世保市教育委員会

宇久地区生涯学習センター

新上五島町教育委員会

※肩書職名は平成二十二年度当時

協力者

福江五島神楽

平 田 一 實（八幡神社宮司）

月 川 敬 身（五社神社宮司）

森 彪 （天満神社宮司）

片 山 貴 史（住吉神社宮司）

福江五島神楽保存協会

岐宿神楽

阿比留 正（巖立神社宮司）

五島岐宿神楽保存会

玉之浦神楽

宗 邦 治（白鳥神社宮司）

白鳥神社神楽保存会

富江神楽

月 川 八 榮（富江神社宮司）

富江神楽保存会

七嶽神社神楽

月 川 貞 教（七嶽神社宮司）

有川神楽

江 口 一二三（有川神社宮司）

有川神楽保存会

上五島神楽

宮田恒雄（榎津神社宮司）

宮田紀久（祖父君神社宮司）

吉村政徳（政彦神社宮司）

前田哲嘉（青方神社宮司）

神崎信智（小串神社宮司）

上五島神楽保存会

神島神社神楽

平田邦彦（神島神社宮司）

宇久島神社神楽

月川徹（宇久島神社宮司）

悉皆調査

月川司（奈留神社宮司）

近藤忠博（若松神社権禰宜）

松原剛（元日本大学芸術学部教授 新上五島町出身）

永治克行（株式会社五島新報新聞社）

本調査にあたり、各神楽団体、各神社氏子の方々並びに各地区の方々には多大なるご協力を賜りました。ここに御礼を申し上げます。

【本書添付】

平成二十二年現地調査を実施した神楽の芸態に関する映像記録（DVD）

平成二十二年文化庁

変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業

五島神楽調査報告書 芸態記録DVD目録

1. 岐宿神楽〔巖立神社〕〈長崎県五島市岐宿町〉
『伊智舞』 2分17秒
2. 上五島神楽〔青方神社〕〈長崎県南松浦郡新上五島町青方郷〉
『座祓』 4分49秒
3. 富江神楽〔富江神社〕〈長崎県五島市富江町〉
『左男舞』 3分09秒
4. 福江五島神楽〔檜ノ浦天満神社〕〈長崎県五島市平蔵町〉
『剣舞（二剣）』 16分23秒
5. 玉之浦神楽〔白鳥神社〕〈長崎県五島市玉之浦町〉
『入鹿高松』 5分31秒
6. 上五島神楽〔政彦神社〕〈長崎県南松浦郡新上五島町奈摩郷〉
『將軍舞』 6分28秒
7. 有川神楽〔志自岐羽黒神社〕〈長崎県南松浦郡新上五島町太田郷〉
『獅子舞』 12分39秒

発行…文化庁文化財部伝統文化課 制作…社団法人全日本郷土芸能協会

平成二十二年度

文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」
五島神楽 調査報告書

発行日 平成二十三年二月十五日

発行 文化庁文化財部伝統文化課

〒一〇〇・八九五九 東京都千代田区霞が関三・二・二

制作 社団法人全日本郷土芸能協会

〒一〇七・〇〇五二 東京都港区赤坂六・七・十四・一〇二

印刷 江戸クリエート株式会社